第20回高大連携教育フォーラム　報告集

2020年代を通じて実現すべき高大連携

―生徒・学生が『持続可能な社会の創り手』となるために―

京都高大連携研究協議会
京都府教育委員会／京都市教育委員会／京都府私立中学高等学校連合会
京都商工会議所／公益財団法人 大学コンソーシアム京都

第20回高大連携教育フォーラム　報告集

2020年代を通じて実現すべき高大連携

―生徒・学生が『持続可能な社会の創り手』となるために―

京都高大連携研究協議会
京都府教育委員会／京都市教育委員会／京都府私立中学高等学校連合会
京都商工会議所／公益財団法人 大学コンソーシアム京都

目　次

開会挨拶 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

黒坂　　光（京都高大連携研究協議会 会長／大学コンソーシアム京都 理事長）

趣旨説明 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

長谷川　豊（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長／京都府立大学 公共政策学部 准教授）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

記念講演 1 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

高等学校教育には何が求められているか
～「令和の日本型学校教育」答申の描くもの～

荒瀬　克己（独立行政法人教職員支援機構 理事長）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

記念講演 2 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

トランジション実現のための影響の大きな高校・大学での学びを理論的、実証的に示す

溝上　慎一（学校法人桐蔭学園 理事長／桐蔭横浜大学 教授）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49

パネルディスカッション ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53

どうすれば「持続可能な社会の創り手」を育成できるのか

コメンテーター　荒瀬　克己・溝上　慎一

事例報告者　伊藤　恵哉（京都府教育委員会 高校教育課 指導主事）
滝本　順之（京都市教育委員会 学校指導課 指導主事）
酒井　淳平（立命館宇治中学校・高等学校 教諭）

コーディネーター　杉岡　秀紀（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室コーディネーター／
福知山公立大学 地域経営学部 准教授）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81

第 1 分科会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99

高大連携を継続・発展させる意義と工夫
～夏期実習「地球環境と海の生態系」を通して～

鈴木　啓太（京都大学 フィールド科学教育研究センター 助教）
本藤　聡仁（京都府立西舞鶴高等学校 理数探究科 教諭）
井上　　実（京都府教育委員会 高校教育課 指導主事）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 102

第２分科会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113

高校の探究学習は、キャリア発達にどのように影響しているのか

古田　悠馬（京都大学大学院 理学研究科 博士後期課程 １年）
三添　りん（大阪教育大学 教育学部 １年）
岩間　智哉（京都府立大学 文学部 １年）
乾　　明紀（京都橘大学 経済学部 准教授）
加藤　　健（京都市教育委員会 学校指導課 指導主事）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 116

第３分科会 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131

『大学の学び』を展望する高校での学びと体験
～生徒の主体的・多面的な参加～

大山口　暁（京都産業大学附属高等学校 探究科主任）
佐藤　賢一（京都産業大学 生命科学部 教授）
塩田　明信（京都産業大学附属高等学校 副教頭）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 133

特別分科会①【高大接続】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 147

持続可能な社会の創り手の育成につながる高大接続
～国際比較から見える可能性～

花井　　渉（九州大学 人間環境学研究院 教育学部門 准教授）
細尾　萌子（立命館大学 文学部 准教授）
山本以和子（京都工芸繊維大学 工芸科学部 教授）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 149

特別分科会②【高大社連携キャリア教育】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 157

高大社連携フューチャーセッション成果報告
～生徒・学生実行委員会によるサードステージを振り返る～

2022 年度高大社連携フューチャーセッション実行委員
杉岡　秀紀（福知山公立大学 地域経営学部 准教授）
乾　　明紀（京都橘大学 経済学部 准教授）
滋野　哲秀（元 龍谷大学 文学部 教授）

発表資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 159

参加者アンケート結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 169

2022 年度京都高大連携研究協議会役員・委員一覧 ・・・・・・・・・・・・・ 177

※各登壇者の職名は 2022 年 12 月 3 日時点のものです。

開会挨拶

黒坂　光（京都高大連携研究協議会 会長／大学コンソーシアム京都 理事長）

皆さま、おはようございます。ただいま、ご紹介にあずかりました、京都高大連携研究協議会会長、また公益財団法人大学コンソーシアム京都理事長の黒坂と申します。本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

本日のフォーラムは第 20 回であり、本年はこれを主催します京都高大連携研究協議会の発足 20 周年になります。この協議会でございますが、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会、京都商工会議所、大学コンソーシアム京都という、京都ならではの産官学の組織が連携し、それにより次世代の人材を育成しようという非常に大きな目的を持った協議会でございます。この組織が 2003 年 5 月に発足して、今年で 20 周年になります。

記念すべきこのフォーラムを、このように対面でも実施することができましたが、今日においても、新型コロナウィルス感染症はいまだ終息しておりません。私も大学に所属しておりますが、大学の活動も、コロナでさまざまな影響を受けております。コロナへの対応等を通じて、私も多くのことを学びました。私は、日本はデジタル先進国だと思っていましたが、思いのほか、デジタル化は進んでおらず、日本のデジタル化が立ち遅れていることに気付きました。また、日本の産業も至るところで立ち後れてきておりまして、分野によっては近隣のアジアの国々に比べても遅れをとっています。その一方で、大学、また高校においてもそうでしょうが、科学技術が高度に専門化して、より専門的な教育が求められております。

このような社会の中で、日本がいきいきと輝いていくために、次の社会の担い手を育成していくことがより強く求められています。社会の担い手とは、それがすなわち本日のフォーラムのサブタイトルにもあります「社会の創り手」です。これをどのように育成していくかが高等教育の課題です。社会は、高校生や大学生に次の社会を担う人材となることを期待しているのではないでしょうか。すなわち、高校生や大学生を育成することが、社会の期待や要望に応えることになるのです。この社会からの強い要望に対して、本日は、このように高校・大学の教職員の皆さまが一堂に会して、情報共有、事例報告等を行うことで、教育の改善につなげる非常によい機会になるのではないかと思っております。

ご出席の皆さまには、本日のフォーラムの内容をお持ち帰りいただきまして、それぞれの高

校・大学教育に結び付けていただきたいと思います。それも一般論ではなく、それぞれの学校の教室の中で、授業現場の教育の改善につなげていただくことが重要であり、そうなって初めて、この協議会の目的である人材育成を達成できるものと考えております。

司会の山本先生からもお話がありましたが、本日はハイブリッド開催となっております。これは初めての試みでありますので、何かと不手際が生じる可能性がありますが、ご理解いただければと思います。また会場にご参加の皆さまも、第８波の到来ということでありますので、感染予防対策にご協力いただきまして、本日のフォーラムが実りあるものとなりますことを祈念しております。

本日は、どうぞよろしくお願いいたします。

趣旨説明

2020 年代を通じて実現すべき高大連携
―生徒・学生が『持続可能な社会の創り手』となるために―

長谷川　豊（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長／京都府立大学 公共政策学部 准教授）

（スライド１）皆さん、こんにちは。今、黒坂先生から京都高大連携研究協議会の話をしていただきましたが、その下で高大連携推進室の室長を仰せつかっています、長谷川です。今回、「2020 年代を通じて実現すべき高大連携」というタイトルで、記念講演、パネルディスカッションを行わせていただきます。第 20 回でなぜこのテーマで行うのかという趣旨説明をさせていただきます。

（スライド２）既に、ご案内の中で趣旨は述べていますが、昨年１月に「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」という答申が中央教育審議会でございました。詳細は、この後、荒瀬先生からご講演いただけると思いますが、その中では「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」に焦点が当てられています。高校、大学の双方においても「教育の質、多様性や包摂性を高め、誰一人取り残すことのない教育を展開する」、このために高校と大学はどのような連携・接続が求められるのかを考えたいということです。20 回目のフォーラムですので、本協議会としての 20 年の歩みを振り返りながら、当初は「これまでとこれから」というストレートなタイトルも検討していましたが、「これから」を意識して先ほど紹介したテーマで進めさせていただくことにしました。

（スライド３）中央教育審議会答申では「持続可能な社会の創り手」を育てていくことの必要性が述べられています。既に 2022 年ですが、2030 年に向けて 2020 年代を通じて、どのような「令和の日本型学校教育」を目指すのかが答申の中で述べられています。とりわけ高校では「社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力や、社会の形成に主体的に参画するための資質・能力が育まれている」と。こうした高等学校教育を踏まえて、高校と大学とどのような連携や協働がこれから必要なのかが、より重要になってきます。後ほど触れますが、現在諮問されている、新たな第４期の教育振興基本計画の中でも、より強調されている内容です。

（スライド４）本フォーラムを主催する「京都高大連携研究協議会」は、黒坂先生のお話にもありましたように「産・官・学」という京都ならではの人材育成を目指して、2003 年５月に発足しました。その歴史を簡単に振り返らせていただきます。現在、このような体制で高大連携事業を進めていますが、ここに至るまでにさまざまな取り組みがありました。

（スライド５）20 年の歩みを振り返りますと、キャンパスプラザ京都ができる前から「京都・大学センター」が発足して、その後「大学コンソーシアム京都」という名称に変わり、95 年に第１回のＦＤフォーラムが行われました。もう少し後の 2000 年代に入ってから、第９回ＦＤフォーラムで、最初の高大連携教育フォーラムが開催されました。高大連携事業は 2002 年に始まり、2003 年５月に本協議会が発足しました。その背景には、90 年代の終わりに、大学に関わる大学審議会の答申、そして中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」、この大きな２つの答申があったことは言うまでもありません。

（スライド６、７）この 20 年の歩みである、本フォーラムのメインテーマをずらっと並べてみました。それぞれの詳細は省きますが、このようなテーマでフォーラムを行ってきたのは、国の教育改革の動向、とりわけ高校や大学の改革動向をよく踏まえる必要があったからです。大学の中で、あるいは高校の中で求められているもの、とりわけ学習指導要領が改訂されれば、それに関わる議論、また大学入試が変わるのであれば、そこに焦点を当てて取り組んできました。

（スライド８）とりわけ 2012 年に文部科学大臣からの諮問があり、14 年に中央教育審議会答申、15 年に「高大接続改革実行プラン」が出され、その後「最終報告」があったように、三位一体改革と呼ばれている「高大接続改革」が 2010 年代から急速に進められてきました。

（スライド９）高校の先生方にとっては、学習指導要領の大きな改訂がございました。高大接続改革とほぼ軌を一にして、14 年に文部科学大臣からの諮問、16 年に中央教育審議会答申、18 年に高校の学習指導要領の改訂があり、今年度から年次進行で改訂に基づく授業が行われ、24 年度の終わりには、それに対応した入試があります。このような流れがあり、「高校教育については」という説明の中で、大学入学者選抜に関わって「高大接続改革を進める」と明記される点は注目しておく必要があります。

（スライド 10）本協議会が取り組んでいる高大連携事業は、このフォーラムだけではありません。高校生、大学生、そして社会をつなぐ「高大社連携フューチャーセッション」。そして、高校の先生方の交流会。公立・私立を問わず、枠を超えて交流をする場ですが、今後は大学教職員を含めた「京都高校・大学教職員交流会」という形で展開していく予定です。

2010 年代までは、高校と大学の先生方によって、新たなプログラムを開発して教育を行うという実践的な取り組み、また大学の取り組みを京都外に広げていく取り組みも行ってきました。キャリア教育やキャリア形成にも意識しながら、京都府北部地域や女子生徒を対象とした事業にも取り組んできました。

（スライド 11）第 16 回以降では、とりわけ入試で大きな変更があり、大学入学共通テスト実施に至るまでにもいろいろございました。

（スライド 12）大学では既に 2040 年というターゲットイヤーが設定されており、どのような大学像をそれぞれ設けて進んでいくのかという動きがございます。そのため、大学教育と高校教育との連携・接続部分だけではなく、大学そのものが今後どのように展開していくのかということが問われています。高校生の進路としての大学が、このような流れがある中で、高校とどのようにつなげていくのか・つながっていくべきなのか、今日の大きな議題になると思っております。

（スライド 13）先ほど申し上げました教育振興基本計画は、今年度が第３期の最終年度です。教育振興基本計画は５年ごとに設けられ、2030 年にどのような社会像であるかを描き教育政策の重要事項を掲げていました。この間のコロナ禍やウクライナ危機という中で、第３期では、十分に解決できなかった課題が残されて

いると指摘し、現在、第４期計画が策定中です。

（スライド 14）次期第４期計画に向けた諮問では「超スマート社会（Society 5.0）」、第３期にもこの言葉は出ていましたが、今回は「ウェルビーイング」という言葉がより強調されています。ＤＸとの関係の中で、デジタルとリアルをどのように最適な組み合わせにしていくのかが議論の焦点になってきています。これは、高校でも大学でも言えることで、高大連携の「これから」を考えていくときには、この部分を押さえておく必要があると考えます。

（スライド 15）以上の状況を踏まえて「2020年代を通じて実現すべき高大連携」のあり方としては、「持続可能な社会の創り手」をどのように育てていくのかが、大きな課題になります。

（スライド 16）今日は、午前と午後、記念講演では京都に大変縁のある荒瀬先生と溝上先生、続くパネルディスカッションでは伊藤先生、滝本先生、酒井先生にご登壇いただきます。先生方、どうぞよろしくお願いいたします。大変楽しみにしております。

（スライド 17）以上、趣旨説明をさせていただきました。ありがとうございました。

スライド１

第20回 高大連携教育フォーラム
【京都高大連携研究協議会発足20年記念】

2020年代を通じて実現すべき高大連携
―生徒・学生が『持続可能な社会の創り手』となるために―

趣旨説明

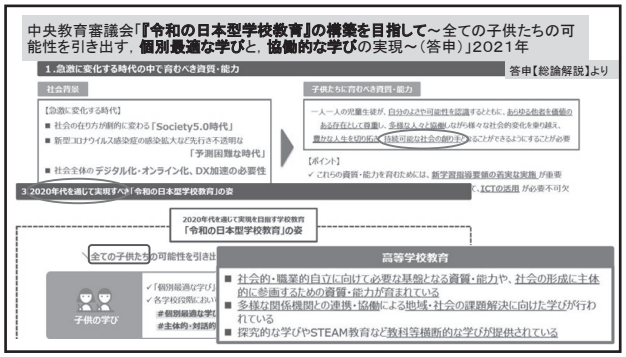
大学コンソーシアム京都 高大連携推進室
長谷川　豊（京都府立大学）

スライド２

本フォーラム趣旨

- 急激に変化する社会の中、「**持続可能な社会の創り手**」となる子どもたちの資質・能力を育むため、中央教育審議会は、2021年1月、「**『令和の日本型学校教育』の構築を目指して**」を答申した。
- 答申は、「**全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現**」に焦点をあてている。高等学校・大学双方が**教育の質、多様性や包摂性を高め、誰一人取り残すことのない教育**を展開する上で、今、**両者の連携・接続には何が求められ、どう考えて実践すべきなのだろうか**。

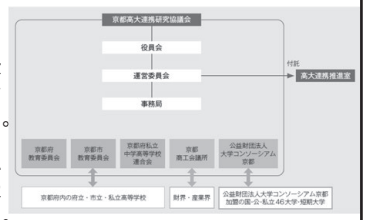
スライド３



スライド４

本フォーラム趣旨

- **京都高大連携研究協議会**は、学校間競争や個別の利害関係を乗り越え、**「産・官・学」という京都ならではの人材育成**を目指し、**2003年5月**に発足した。以降、本フォーラムを主軸とした**様々な高大連携事業**を展開し、**2022年度は協議会発足20年目**となる。



（出典）『リクルート カレッジマネジメント』No.234、2022年10月、p.87

スライド５

京都の高大連携・接続の20年の歩み

- 1994年3月　**京都・大学センター**、発足
  →1998年3月　財団法人**大学コンソーシアム京都**、名称変更
- 1995年12月　**第1回FDフォーラム**開催
- 2002年4月　**高大連携事業**開始
  京都の大学「学び」フォーラム東京・大阪会場開催（～2007年度）
- 2003年5月　**京都高大連携協議会**発足
  京都の大学「学び」フォーラム京都会場開催（～2015年度）
- 2004年2月　**第1回高大連携教育フォーラム**開催
  第9回FDフォーラム（2003年度）**京都高大連携研究協議会発足記念**
  テーマ　**生徒が学生に成長するために**
  第4分科会　連携例に見る高大連携の可能性
  ―京都の高大連携を中心に―

「21世紀の大学像と今後の改善について」（大学審答申1998年）、「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」（中教審答申1999年）

スライド６

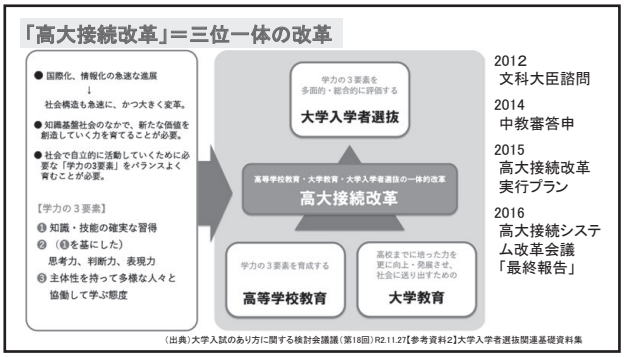
高大連携教育フォーラム　メインテーマの変遷

第1回（2003年度）　**連携例に見る高大連携の可能性**
―京都の高大連携を中心に―
第2回（2004年度）　**学びの接続を実現するために**
第3回（2005年度）　**新局面を迎えた高大連携**
第4回（2006年度）　**学力構造の変化と高大連携の可能性**
―新局面を迎えた高大連携Ⅱ―
第5回（2007年度）　**高大連携のあり方を検証する**
第6回（2008年度）　**高校新教育課程と接続教育の課題**
第7回（2009年度）　**高大連携から接続教育への視座**
～高大で考える『生きる力』の育成～
第8回（2010年度）　**新しい時代に求められる能力をどう育成するか**
～高大接続テストの持つ意味～

スライド7

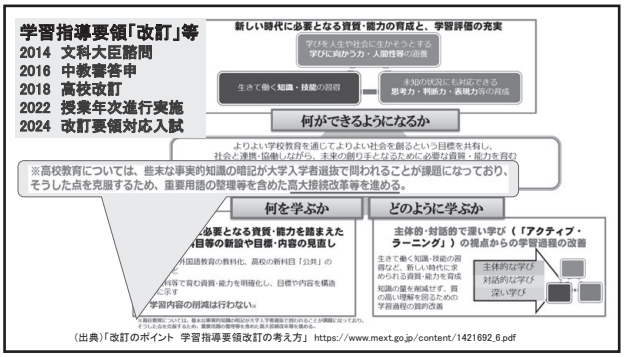
第9回（2011年度） **新学習指導要領が求める学力とは**
第10回（2012年度） **これからの時代に求められる学力・能力とは？**
－教育の目標を明確化するために－
第11回（2013年度） **新しい時代を拓く高大接続の「学び」とは**
―京都からの発信―
第12回（2014年度） **高大接続と学力形成**
－達成度テスト（仮称）について考える－
第13回（2015年度） **アクティブ・ラーニングへの模索**
～「教える」と「学ぶ」とのリンクを考える～
第14回（2016年度） **いま、なぜ入試改革か？**
～教育改革のゆくえを探る～
第15回（2017年度） **いま育成すべき力は何かをともに考える**
―高等学校・大学の役割―

スライド8



（出典）大学入試のあり方に関する検討会議議（第18回）R2.11.27【参考資料2】大学入学者選抜関連基礎資料集

スライド9



（出典）「改訂のポイント 学習指導要領改訂の考え方」 https://www.mext.go.jp/content/1421692_6.pdf

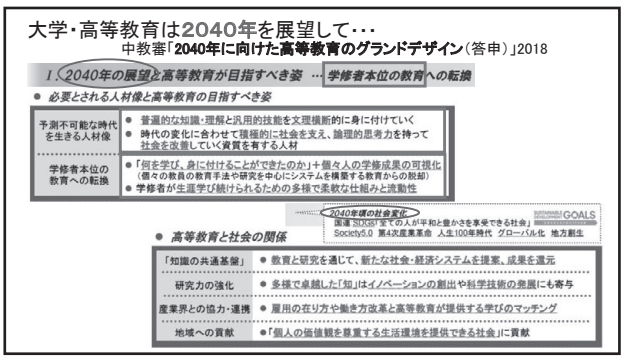
スライド10

（出典）『リクルート カレッジマネジメント』No.234、2022年10月、p.88

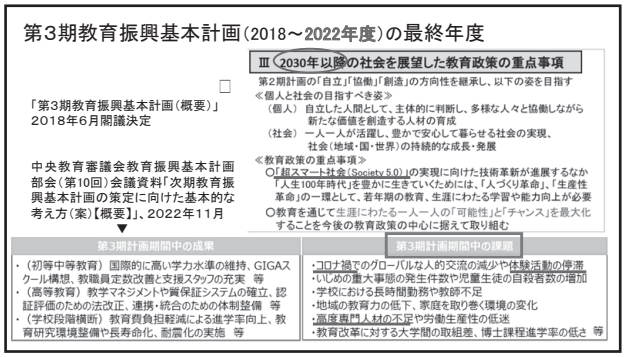
スライド11

第16回（2018年度） **いま育成すべき力は何かをともに考えるII**
―高等学校・大学の役割―
～次期高等学校学習指導要領と高大接続の本質～
第17回（2019年度） **「教育の接続」としての入試改革**～高校までの資質・能力の育成を大学でどう評価するか～
第18回（2020年度） **「教育の接続」としての入試改革 II**
～高校教育の指導と評価が変わる
―高校・大学は入試と教育にどう向き合うか～
第19回（2021年度） **探究的な学びから研究へ**
―教育改革のジャンピングボードとなるためには―
第20回（2022年度） **2020年代を通じて実現すべき高大連携**
―生徒・学生が『持続可能な社会の創り手』となるために―

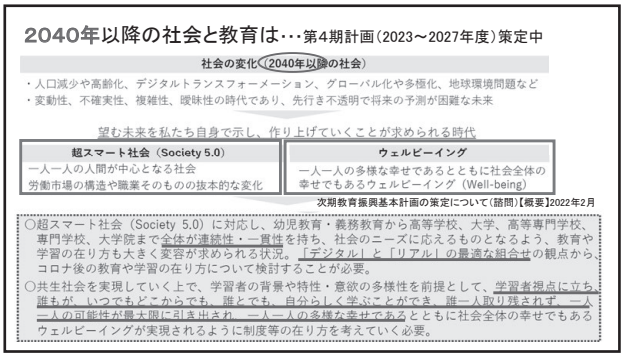
スライド12



スライド 13



スライド 14



スライド 15

本フォーラム趣旨

・20回目となる本フォーラムでは、高大連携・接続の歩みを振り返るとともに、**「持続可能な社会の創り手」を育てる高大連携教育の実現**について、当事者が同じ場で共有し、考える機会とする。

《第20回　メインテーマ》
2020年代を通じて実現すべき高大連携―生徒・学生が『持続可能な社会の創り手』となるために―

スライド 16

第20回 高大連携教育フォーラム
《第1部》　【京都高大連携研究協議会発足20年記念】

・**記念講演1　高等学校教育には何が求められているか～「令和の日本型学校教育」答申の描くもの～**
荒瀬 克己 氏（独立行政法人教職員支援機構 理事長）

・**記念講演2 トランジション実現のための影響の大きな高校・大学での学びを理論的、実証的に示す**
溝上 慎一 氏（学校法人桐蔭学園 理事長／桐蔭横浜大学 教授）

・**パネルディスカッション**
どうすれば「持続可能な社会の創り手」を育成できるのか
コメンテーター　荒瀬 克己 氏、溝上 慎一 氏
事例報告者
伊藤 恵哉 氏（京都府教育委員会 高校教育課 指導主事）
滝本 順之 氏（京都市教育委員会 学校指導課 指導主事）
酒井 淳平 氏（立命館宇治中学校・高等学校 教諭）

スライド 17

本日は、第１部、第２部とも、対面、オンラインのハイブリッド式で開催いたします。

最後まで、ぜひご参加ください。

ご一緒に有意義な議論ができますことを心より願っております。

記念講演１

高等学校教育には何が求められているか
～「令和の日本型学校教育」答申の描くもの～

［講　師］　荒瀬　克己（独立行政法人教職員支援機構 理事長）

（スライド１）皆さん、おはようございます。教職員支援機構の荒瀬と申しますが、ここでは教職員支援機構の荒瀬と申しますというよりも、長らく京都におりまして、今も結構京都にいるわけでありますが、皆さんにはさまざまな形でお世話になりまして、本当にありがとうございます。今日は、非常に懐かしい皆さんの前でお話ができるということで、緊張度が極めて高まっておりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

登壇する際はマスクを外してよいとおっしゃっていただいたのですが、最近の習慣で、マスクを付けないと話せなくなっている私がおりまして、大変申し訳ありませんが、このままで話を続けさせていただきます。

先にお断りしておかなければならないのですが、実は資料の枚数が非常にたくさんありまして、45 分で間違いなく、全てをお話しすることはできません。資料として、お暇なときに見ていただくということでお示ししていますので、いずれまたご活用願えればと思っています。

さらに、この資料は文字だらけでありまして、同じようなことが何回も出てまいります。また、使っている用語が、例えば「子ども」と書くときに、国は「子供」を使い、こども庁などの議論のときには、全て平仮名で書いたり、使い方がまちまちでありますが、資料もそのようになっておりまして、統一しておりません。申し訳ありません。

（スライド２）さて、長谷川先生からご説明がありましたとおり、今年はこのフォーラムにとって 20 回の節目で、以前なら成人ということでありますが、本年４月に成年年齢が引き下げられまして、高等学校の３年生はもう大人になる。これまでは、イメージとして私たちも「大きな子どもでなく、小さなおとなに育てなければならないのだ」ということを言ってきましたが、本当に大人になるわけです。高校の先生方は、いかがでしょうか。この大人になるということの準備は、どれくらいなさっていたでしょうか。あるいは、急に 18 歳になるわけではありませんので、中学校のときはどうなのか、小学校ではどうなのか。このようなことも踏まえて考えると、本気で初等中等教育で、18 歳への「成年年齢の引き下げ」をどう捉えるのかというのは、これから歩きながらになるのかもしれませんが、しっかりと考えていく必要があるだろうと思っています。

大人になることはどういうことかというのは、いろいろな考え方はあると思うのですが、

私自身は、自分で考え、自分で判断して、自分で具体的に行動していく、ないしはそれをしていこうとする意思を持つことが、非常に大事だろうと思っています。さりながら、コロナの関係もありまして、生徒たちの人間関係も含め、非常に難しい状態でもあります。こういった中でキャリア教育が非常に重要になってくると思うのですが、ここでもお示しして、また後ほどもキャリア教育については申し上げますが、残念ながら、わが国の学校教育の中では「キャリア教育」という言葉が定まりません。非常に揺れの大きな言葉ではないかと思っています。

例えば、先日も、ある中学校の先生とお話をしていまして「うちは、キャリア教育はばっちりです」とおっしゃるのです。「どんなことをなさっているのですか」と聞くと「今、コロナの状況であっても、5日間の職場体験はきちんとしています」とおっしゃるわけです。それ自体は非常に大事なことであると思うのですが、職場体験をしているからキャリア教育をしていますということが、本当に言い切れるのかどうかということは、考える必要があります。「職業教育」と「キャリア教育」は、2011年の中央教育審議会答申の定義でありますが、この定義が今も生きていますので、改めてお示ししています。

職業教育というのは、非常に明快です。「一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育」で、なるほどと思えるわけです。ところがキャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てること」と切れれば、分からないまでも、なんとなくそうかと思えるのですが、続きがありまして「育てることを通して、キャリア発達を促す教育」というわけです。もし「10字程度で、キャリア教育について説明しなさい」と言われれば「キャリア発達を促す教育」というように答えるのが正解になるだろうと思われるのです。

ここに「キャリア」の定義が示されていまして「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」という、今日は一息で読めましたが、読めても分かりにくい日本語が使われています。はっきりと言える1つの特徴は「キャリア」という言葉の定義の中に「職業」という言葉が使われていないということです。もちろん、職業がどうでもよいというわけではなく、職業は非常に重要ですが、職業教育を含めてキャリア教育があるという認識が非常に大事であると考えます。

キャリアというのは、世間一般的に言うと職業的経歴です。あるいは、今後、積んでいく職業の自分なりの在り方、予定のような感じです。例えば、私も「あなたのキャリアは？」と聞かれれば「長らく高校の教員をしていました」と答えて、これで全く会話は途切れなく、普通に話ができるわけです。ただ、キャリア教育を考えたときのキャリアというのは、そうではないということです。学校教育でいうキャリアは、いわば生きてきて、いろいろな体験をして、そこでさまざまなものを得たり、考えたりする中で、自分のものの見方や考え方ができていくわけですが、それらの集積をキャリアと呼ぶのではないかということであります。

よって、今回、4月から高校の新しい学習指導要領がスタートいたしましたが、それに向けた中央教育審議会の答申は「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」を「キャリア発達」としていると示し、いろいろな役割を果たしながら自分らしく生きていくこと、ここが大事なのだと言っています。古い話ですが、高度経済成長期においては、こういう言葉が頭の中に出てこなかったと思うのです。あのときは、社会としての目的がはっきりあって、そこに向けてみんなで邁進するというところがあったと思うのですが、今はそうではなく、これから一人一人がどう自

分らしく生きていくのか。しかも、それは孤立して一人で生きていくのではなく、社会の中で自分の役割を果たしながら、よってその役割は何かを考えなければならないことになってきていると思うのです。

私は、この後の溝上先生のお話を大変楽しみにしているのですが、そういう意味で高校から大学や社会へのトランジションをどうするのか、大学から社会へのトランジションをどうするのかということをしっかりと考える必要があるのです。高校で、すぐに社会に出る人のことを考えれば、高等学校はその意味では本当にキャリア教育に丁寧に取り組まなければならないのですが、どうもキャリア教育にはやや誤解があるように思っている次第です。よく「○○教育」とありますね。法教育、あるいは性教育や人権教育など、なんとか教育といろいろありますが、実はそれら全ての教育は、キャリア教育につながっていて、教科の学びを通して得られる知識や思考・判断・表現や、ものの見方や考え方も、全て自分のキャリア発達に生かせるのですから、その意味で、学校教育とはキャリア教育なのだと言ってもよいのではないかと思っております。

（スライド３）令和答申（「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」（答申））の話を少しだけいたしますが、令和答申に向けた特別部会は、非常にユニークな会議でありました。スタートいたしましたときは、大きな会場に委員がみんな集まって議論するという形で始まったのですが、途中でコロナ禍に見舞われまして、しばらくの間、会議ができない状態が続きました。そこで文部科学省の事務局がいろいろと苦心惨憺なさって、当初 Zoom の導入があって、今では、もう当たり前になっているのですが、事務局の若手の職員の皆さんが Zoom の勉強から始めて、当然、接続状態が良くない委員もおられますし、大変な困難を乗り越えていくわけです。その経験は、まさに子どもたちや先生方の経験でもあったはずだということであります。

あの状況の中で、子どもたちの学びはどうだったかというときに、こういう意見がよく言われました。コロナ禍以前から学校教育がしっかりと行われている学校においては、学びは止まらなかったということです。それまでの学びの取り組みがどうだったか。例えば、子ども一人一人への丁寧な対応であったり、家庭との連携であったり、地域の中で子どもを育てたりというようなことを行っている学校は、コロナ禍に置いてもあまり影響を受けないで、スムーズに移行できたという話ですが、それはどういうことかという問いがまた湧き上がってきます。

子ども一人一人がどういう状況であっても、自らの力で学べるようになっていることが大事なのだということでしょう。もちろん、発達段階、あるいは個性がありますので、よって周りが支えることは非常に大事なわけですが、それ以上に、やはり一人一人の子どもが「自立した学習者」としてそこにいる、そのための学びが展開していく必要がある。そのため「個に応じた指導」という言葉を使ってきましたし、これをやめるわけでは決してないし、個に応じた指導は令和答申の中でも何度も出てくるのですが、個に応じた指導を構造化して考えてみようということをこの会議の中で行ったのです。

そうしていくと、個に応じた指導というのは、１つはっきり言えることは、指導でありますから、学習者側の視点ではなく、指導者側の視点の言葉であるということです。学習者側の視点でいうと、それは学びになるわけです。では、どのような学びなのかというと、個に応じた指導というものを直接的に考えると、個別最適な学びとなるのですが、これは、後ほど、また申し上げます。

（スライド４）要は、これも同じことで、自分で考え、自分で判断し、行動できる人に育てるのだが、その過程においては、単にその子に

合わせたスピードや教材、場だけではなく、もう少し考える必要があるのではないか。

（スライド５）少し話が変わりますが、この答申の前に学習指導要領の改訂が行われていました。これは、学習指導要領に向けた 2016 年 12 月の中央教育審議会答申でありますが、この中に「主体的・対話的で深い学び」が示されています。これは、元々はアクティブ・ラーニングと呼ばれていました。ところが、アクティブ・ラーニングというと意味があいまいになってしまう面や、さらに言うとカタカナでなく、という意見もあって、アクティブ・ラーニングとは何かという議論が起きました。結果的に議論が深まったのですから、そういう意味では、英語から入るのも大事なのかもしれません。

先ほど、長谷川先生から、今度の教育振興基本計画では「ウェルビーイング」が言われているという話がありましたが、ウェルビーイングは最上位概念です。なぜ「豊かな人生」や「豊かな生き方」ではないのかと、実のところ私は少し疑問に思っております。ただし、日本発のウェルビーイングという言葉も出ておりまして、おそらく、そういうことが教育振興基本計画に盛り込まれることになると思いますが、ウェルビーイングとは何かを考える点では、この言葉がよいのかもしれないと思います。

それはさておき、アクティブ・ラーニングとは何かという問いが立ち上がって、考えたわけです。そうすると、３つの視点があるのではないかということで「主体的」「対話的」「深い学び」という３つの視点が提示されました。これはその説明です。そもそも、なぜこのような「主体的・対話的で深い学び」が重要かというと、まさに令和答申につながる発想ですが、この時点で、一人一人の子どもが、自分で学び、自分で考え、自分で判断し、行動することが大事なのだということが検討されていたわけであります。従いまして、この３つの学びにつながる前段の部分には「生涯にわたって能動的に学び続けるようにすることが求められている」と書かれています。生きることは能動的に学び続けることなのだという前提を置いて、ならば、そのための方法、学び方を経験する必要があると考えて、３つの視点、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」を示したということです。

これは学習指導要領解説に出ていますので、多くの学校の先生方はご覧になっているのですが、見慣れた、聞き慣れた、非常になじみのある言葉が並んでいるので、ついすっと読んでしまいがちです。例えば、主体的な学びでいうと「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」という、この長い修飾語は、おそらく、よどみなく頭の中に入ってきて、よどみなくそうかと思える。では、実際にどうするのかというときには、よどみがたくさんある状態になるのではないかと思います。

そもそもが「学ぶことに興味や関心を持ち」という冒頭の部分からして、この子は学ぶことに興味や関心を持っているのかというケースはたくさんあるわけです。あるいは、何に興味や関心を持っているのか、何には持たないのか、どうすれば持つべきものに持ってもらえるようになるのだろうか、そもそも持つべきものというのは何なのかと、いろいろと考えていくと、この最初の 10 字くらいで立ち止まってしまわざるを得なくなってきます。

あるいは「自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら」とありますが、冒頭、申し上げたように「キャリア形成の方向性」は、すっと頭の中に入るのですが、キャリアという言葉の揺れは大変大きいし「キャリア形成」も、なんとなく将来のことを考えて行うことなのだというように、それは間違っていないわけですが、さらに厳密に、その子の状況に応じて考える必要があるし、時代の流れや複雑な社会の中でどうしていくのかということも考える必要があ

ると思うのですが、そこもなんとなく飛ばしてしまいそうな、聞き慣れた言葉です。

次には「見通しをもって粘り強く取り組み」です。これは観点別評価の主体的な学習に取り組む態度の評価にも関わる言葉ですが、単に粘り強く取り組みではなく「見通しを持って粘り強く取り組む」というのは、どういうことを指しているのか、これもしっかりと考える必要がある。あるいは「自己の学習活動を振り返って次につなげる」と言うが、これは言うのは簡単ですが、大人になってもそう簡単にはできないわけです。

こういったことがしっかりと全部できるかどうかは別として、それぞれが今よりも少しでも伸びている、今よりも時間をかけてできるようになっている、あるいは認識されているというようなことがあって初めて主体的な学びと言えるのではないか。単に自分で勉強していますよという話ではなく、そこはさらにきちんと考える必要があるのではないか。そのための、いわば考えるための手がかりの言葉が幾つも並べられているというように読むこともできると思います。

そういう意味でいうと「対話的な学び」が最も簡単かもしれません。これは、簡単であるが故に、また誤解が生じる話が出てきます。とにかく話し合えばよいのだとなるわけですが、対話的な学びも、ポイントは「自己の考えを広げ深める」という部分です。対話をした結果、考えが広がったり、深まったりしましたかということです。そうなると、何もリアルに対話しているだけではなく、オンラインも含めて、実際に対話しているかどうかではなく、ここにありますように「先哲の考え方を手掛かりに考える」ということも対話になるわけです。「先哲」と呼ばれる方々は、おそらく、もう生きていらっしゃらないので、そういう意味では本を読むことも対話だというわけです。さらに言うと、自己内対話というものがあります。考えるということもあるわけです。そういったことを考えていくと、この対話的な学びを主体的な学びと重ね合わせて、どのように学習の過程に入れていくのかが大事になってきます。

最後の「深い学び」は、なかなか分かりづらいですね。「深い」というと、難しいことをしていたり、分厚い本を読んでいたり、とにかく複雑なことを行っているというイメージが付きまといます。どうでしょうか。「習得・活用・探究という学びの過程の中で」と書いてあると、学びの過程が「習得・活用・探究」というように動いていくように見えてしまいます。本当は、習得・活用・探究、習得・探究・活用、活用・習得・探究、活用・探究・習得、探究・習得・活用、探究・活用・習得という組み合わせを全て並べておく必要があるわけで、これは、必ずしも順番どおりにはいきません。要は、習得・活用・探究の順番がどうなるかは分からないが、しかし、学びにはこういった要素が入っていると考えていくと、その過程の中で「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりする」ことが「各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら」行われていくということなのでしょうが、話が少しずれるかもしれないのですけれども、高校の先生方、教科としての「見方・考え方」とは何でしょうか。私は長らく国語の教師をしていましたが、国語の見

方・考え方とは、なかなか難しい気がいたします。日本語を使ってという方法は示されているわけですが、国語の見方・考え方と、数学の見方・考え方は根本的に違うのだということになるのでしょうか。

「見方・考え方」とは、結局、汎用能力のようなもので、入り口はいろいろ違うのだが、その違った入り口から入って、その人の中でつくられる、その人自身のまさしく「観」といったようなものがどう働くかということではないかと思います。学ぶ対象や方法は教科によって異なりますが、それらが価値観であったり人生観であったり、「観」といったようなものに揺さぶりをかける、あるいは観を形成していく。つまり、それぞれの人の「見方・考え方」をつくっていくために多様な教科の学びがあるというわけです。「見方・考え方」は、もちろん、小さな子どもも持っています。そういったものが徐々に幅を持つようになる、あるいは深まりを持つようになる。見方・考え方を働かせることがキャリア発達につながるのではないかと私は思うのです。

さて「知識を相互に関連付けてより深く理解する」。「情報を精査して考えを形成する」。「問題を見いだして解決策を考え」る。これらは非常に難しいと思いますが、教科におけるそういった学びを通して「見方・考え方」が養われる、深まる、ということではないでしょうか。

ところで、これまではどのような教育を行っていたかというと、練りに練って、非常に丁寧に問いをつくって、それを生徒に提示し、生徒はそれに対して、できるだけ正確に、できるだけ短時間で答える、そういった学びを大事にしてきた面があったと思うのです。しかし、これからは、自分で問いを立てることができるようになる必要があるのではないか。例えば、それが、高校を卒業して社会に出る場合でも、大学等の高等教育機関に行く場合でも、具体的に必要になってくるのではないかということであります。そういったことをできるような「深い学び」が実現できているかということが問われています。

（スライド６）「主体的・対話的で深い学び」というのは、もちろん、学び方の話であります。あくまでも学び方を身に付けるのは、手段を手にすることですが、この手段が手に入っていない段階においては、この手段を身に付けることが目標になります。その際、何が有効かと考えたときに、先生が知識伝達型の授業をずっと行っていて、生徒は一生懸命ノートを取っているだけでよいだろうかということです。もちろん、その中でも考えるわけですが、そういった方法に合わせて、さらに生徒自身が自分で問いを立てる練習をする。変だと思ったことを変だなで忘れてしまわないで、記録しておいて、それについてああだこうだといろいろな角度から考える。このような力が大事になってくる。それを「探究」と呼ぼうということで、今回の学習指導要領改訂は、この探究に力を入れていこうとなっているわけです。今日、このことについて多くは申し上げませんが、学習指導要領に出ている教科・科目の探究と、総合的な探究の時間の探究とは、同じ探究という言葉を使っていても、少し意味が違っているのではないかと思っています。国語の古典探究と総合的な探究の時間の探究は全く同じ質かというと、そうではなさそうです。素材が与えられているか、自分で考えるかということで、つまり何に対して問いを立てるかということですが、そのあたりも注意深く見ながら行っていく必要があると思います。

（スライド７、８）昨年１月に令和答申が出たのですが、高等学校の部分に関しては「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ」でずっと議論していた内容が盛り込まれています。2020 年 11 月に「審議まとめ」が出ていますが、そこでスクール・ポリシーや新しい普通科の在り方などが提唱されています。

この審議まとめの中で「生徒を主語にした」高等学校教育を展開するのだということが述べられ、それを受けて、令和答申では「子供を主語にする」学校教育を実現するのだとされています。

（スライド９）子どもを主語にする学校教育、生徒を主語にする高校教育というのは「子ども自身が学び、学び合う学校」です。自分で考え、自分で判断して、自分でそれを表現していく、あるいはしようとしているような学校をつくっていこうということです。では、どうすればつくれるのかというと、非常に明快でありまして、まずは「教職員が学び、学び合う学校」をつくらないとならないだろうということであります。そのためには「教職員の新しい学び」も考えていく必要があります。

（スライド 10）今日は、この話は中心ではありませんが、要は「学びの循環」を大事にしていく必要があるのではないかと思います。私も長らく高等学校にいまして、生徒自身から学んだことは本当にたくさんあります。教員というのは、大学であれ、高校であれ、中学校であれ、小学校であれ、特別支援学校であれ、生徒自身から学ぶことは非常にたくさんあると思うのです。それはこちらの働きかけに対する生徒の対応であり、変容であり、成長であり、そこからの学びを大事にしながら、そこで得たものをプロである教師が、どうすれば還元できるのかと考え、子どもたちに返していく。また、そういった学びを得た子どもたちがどのような変容をするのかということから、また教師が学んでいく。そういう学びの循環が大事だろうと思っています。

（スライド 11）これは仕事の宣伝になりますが、教職員支援機構・ＮＩＴＳが、今、新たな戦略を立てておりまして、全国の教育委員会、あるいは大学研究者の皆さんと一緒になって、この「子供の学び」と「教師の学び」の両方を変えていきたいと思っています。子供の学びと教師の学びは「相似形」としています。もちろん、全く同じではないわけですが「主体的・対話的で深い学び」が大事であることは全く同じであるので、そういった学びの場を模索していきたいと思っています。

（スライド 12）令和答申に戻ります。目次の「３.2020 年代を通じて実現すべき『令和の日本型学校教育』の姿」については、後ほどお話しします。

（スライド 13～16）目次にあるように多岐にわたって議論が行われました。

（スライド 17）先ほど、赤でお示ししていた「2023 年代を通じて実現すべき『令和の日本型学校教育』の姿」です。あくまでも令和答申は、学習指導要領の基本的な考え方をしっかりと踏まえているというのは、ここで見て取れます。

黄色でお示ししたところは「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し」と続いていって「持続可能な社会の創り手となる」とまで書いてあります。これは、ご承知のように、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、幼稚園の教育要領もほぼ同じですが、全ての学習指導要領、教育要領の前文に描かれた、大変素敵で重要な文章です。

（スライド 18～20）学習指導要領の前文には、教育基本法第１条、第２条が引用されていて、次の部分が、先ほど、令和答申でご紹介した部分で「教育課程」についての叙述です。このままでは見づらいので、切りますと、このようになります。

（スライド 21）今、申しました「自分のよさや可能性を認識する」「あらゆる他者を価値のある存在として」「多様な人々と」「豊かな人生を」。ここで「豊かな人生を」が使われていますから、将来的には「ウェルビーイング」という言葉になるかもしれません。私は「豊かな人生」で続けてほしいと思っていますが、それは

それとして、最後に「持続可能な社会の創り手となる」と。生きていくためには、持続可能な社会をつくらないとどうにもならないので、それが書かれていて、こういったことができるようにするために、各学校において組織的かつ計画的に組み立てたのが「教育課程」だと書いてあります。これは、教育課程の定義ではありません。教育課程とは、こうあってほしいという願いが込められている、教育課程の役割だというように読めるのではないかと思っています。

その最初に書いてあるのは「自分のよさや可能性を認識する」ことです。日本の高校生について、必ずしも自己肯定感が高くないことが、外国との比較を使ってよく言われることであります。

（スライド 22～24）この「自己肯定感」の低さが、もし事実としてあるとすると、なんとかしなければならないと思うわけです。これは私の考えですが、自己肯定感というのは「自分は、たいせつなひとりだ」という認識があって、その大切な自分は、ずっと今のままではない、学ぶと人は成長できるのだ、自分も成長できるのだと、体験的に知っている。また、今、見ている世界が世界の全てではない。よい場合もありますが、非常につらい場合であっても、このつらい状態がずっと続くわけではなく、誰かに声をかけて、助けを求めれば変わる可能性があると信じられるかどうか。

（スライド 25）「正解主義」に陥っている面がなかったかということが書かれています。教師たちが「子どもたちの思考を深める発問」を大事にしてきたのはよいとあるのですが、先ほどの話に戻すと、そういったことと同時に子どもたち自身が、自ら疑問に思ったことを問いに立て、そしてそれに対して取り組むことも大事ですということが示されています。また、どうしても「同調圧力」がありますよね。これは、大人の社会でもあると述べられています。「誰一人取り残すことのない」と言われますが、どうすればよいのでしょうか。それは、まさに「多様性と包摂性」なのですが、どうすれば実現できるのでしょうか。

（スライド 26～28）そういったことを述べ、今、飛ばしたところにもありましたが「個に応じた指導」ということがたくさん出てくるのです。否定しているわけではなくて、個に応じた指導が大事だと述べられています。

（スライド 29～31）先ほど申しましたように、コロナのときに学びが止まらなかったかということは、それは「自立した学習者」、まさに自分で考え、判断して、行動できる、あるいはしようとする思いを持っている人になっているかということですね、そうなっているかと書かれていて、それは、先ほど、ご紹介した「深い学び」のところに、非常に深く関わっていると思うわけです。「個に応じた指導」の在り方をより具体的に示すとこうなるということで、この本文の中で２つの学びが出てきます。

（スライド 32）１つは「指導の個別化」です。その子の学習状況に応じて、教材や時間や場所を含め、その子にふさわしい学び方を提供するというのが指導の個別化です。これは、個に応じた指導の、そのままの直接のイメージで、すっと分かりやすい。

（スライド 33、34）もう一つ書いてあって、それは「学習の個性化」という言葉で示されています。読みますと「基礎的・基本的な知識・技能等や、言語能力、情報活用能力、問題発見・

解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として」。これもすっと読んでしまわないで、この土台はどうすれば付けられるのだろうかと考える必要があるのですが、「幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、探究において課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現を行う等、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで」。ここまでが条件の部分です。「子供自身が、学習が最適となるよう調整する」。自己調整という言葉がよく使われますが、子どもの自己調整能力が非常に大事になってくる。個に応じた指導という言葉を使っている間は、その部分が見えづらい。個別最適な学びと視点を変えることによって、先生が子ども自身の学びに応じて対応することによって、子ども自身が学びの主体になれるようにしていく。子ども自身が調整能力を身に付けて、自分の学びを自分に最もふさわしいように、まさに社会の中でさまざまな役割を果たしながら、自分らしく生きていくというところにつながるように、どうすれば「学習の個性化」ができるかということです。

（スライド35～38）したがって「個別最適な学び」が、ＩＣＴを使うということだけになっても、また、ＩＣＴの利用によって、孤立した学びのようになってしまってもなりません。もちろん、一人で学ぶことも大切です。協働的な学びについて言うならば、せっかく授業中は一人で考えたり勉強したりできたのに、やたらとグループ学習が多くなって、授業が本当につらいという生徒も出てきているのも事実だそうです。そのようなことを含めて、どうすれば個別最適な学び、協働的な学びが、本当の意味でその子の学びを深めることになるのかということを考えていく必要があります。

（スライド39、40）ＩＣＴは道具ですから、道具であるということは、使い慣れて初めて道具になります。使い始められないと道具ではないですよね。私は、つい先日、この新しいiPhone に変えたばかりですが、これに変えたときには、ここが違う、ああそうですかといったように理解できました。しかし、以前は機種変更すると、1週間くらい音信不通になるというか、迷子のようになるということがありました。ただし、この道具は、使っているのはごく一部の機能だけですからあまりよい例でもありませんが、使い慣れることが大事なので、まずは、とにかく使ってみましょうということですね。ともかく気軽に使うということが重要です。

１年半くらい前に、京都市教育委員会の教育長とお話をしたときのことです。「家に持って帰らせていますか？」と聞くと「まだ持って帰らせていないけれども、秋から持って帰らせたい」とおっしゃっていました。「それだと、いろいろトラブルが起きますよね」と言いますと「起きるでしょうね」「困りませんか？」「困ります。でも、仕方がないですよね。そういうものですから」。そのようなものなのですよね。もちろん致命的なトラブルは困りますが、一切、トラブルが起きないようにすることで、学びがどう進むのかということでしょう。

（スライド41、42）幼児教育や義務教育、あるいは高等学校教育や特別支援教育についての記述ですが、マーカーを付けている文末をご覧ください。幼児教育は「全ての幼児が健やかに育つことができる」。小学校教育は「その意欲を高めやりたいことを深められる学びが提供されている」。できている状態が書いてあるのです。それは、2020 年代を通じて実現する姿として書かれているからです。高等学校教育は「初等中等教育段階最後の教育機関として、高等教育機関や実社会との接続機能を果たしている」。これがもし実現しているのであれば、この後の溝上先生のお話は要らなくなるのかもしれません。しかし、まだできていないです。

現状はそうなってはいないけれども、ぜひとも行っていこうということを呼びかけています。

（スライド 43～45）この答申のこの部分は、こうしようという呼びかけになっていると受けとれます。「高い学習意欲を持って学びに向かっている」「教科等横断的な学びが提供されている」。こういった言葉がずらっと書いてある。

（スライド 46）これは特別部会でも申し上げたのですが、後に凶弾に倒れる Martin Luther King Jr. キング牧師が、1963 年にワシントンの大行進の演説で「I have a dream」と言った、あれではないかと私は思っています。今回の令和答申は「I have a dream」が並べられている。１番上を見ていただいくと「I have a dream that my four little children」という、４人の小さな子どもたちが、肌の色ではなく、本人の性格であったり能力であったりで評価を受けるという時代が来ることを「I have a dream」と言っているのです。

これは、そうなればよいなあというような悠長な話かというと、決してそうではないですよね。Martin Luther King Jr.は、必ずそういう時代が来るようにするぞという固い決意を込めて「I have a dream」と言ったはずです。その意味では、この令和答申の「何々できている」「こうなっている」というのは、全て 2020 年代で本当に解決するかどうか分からないが、とつい私は思ってしまうのですが、そうかもしれないけれども、それでもぜひこうなるようにしていきましょう、と述べているということであります。

（スライド 47～53）高等学校教育についても、これは各論ですが、具体的にこのようなことが書いてありますということをお示ししておりますので、どうぞお読みいただきたいと思います。

（スライド 54～74）スクール・ポリシーの話についても、各論の中で述べられています。先ほどもご紹介した 2020 年 11 月に出た「高等学校教育の在り方ワーキンググループ」の審議まとめでは詳しく述べていますので、またご覧いただきたいと思います。ただし、この答申でもかなり詳しく書いてあります。その中で１つ、今後、考えていく上で非常に重要な点を申し上げたいと思います。

（スライド 75、76）今、中央教育審議会の初等中等教育分科会の下に「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方に関する特別部会」が設置されています。最初に「教科書・教材・ソフトウェアの在り方ワーキンググループ」をつくることだけを決めたのですが、集まった委員に、一言ずつ話をしてもらいました。いろいろなご意見があったのですが、私が信頼する記者の方が何と書かれたかというと「集まったけれども、何をするか分からない集まりだった」とあって、全くそのとおりだと、私は一人同感しておりました。ただし、そのときには既に考えはありました。

まず申し上げたいのは、このＩＣＴ関連のワーキンググループを走らせることは、急ぐということです。なぜかというと、ＧＩＧＡスクール構想が現実に進んでいく中で、先ほども言ったように、道具としての活動がまだ十分ではなかったですから、それを進めていく上で議論してもらうことが必要でした。

ただ、もちろんのこと、義務教育はどうあるべきなのか、高等学校教育はどうあるべきなのかということを考える中でこそ、意味のある議論になりますし、自己肯定感、学習意欲、不登校など、さまざまな課題に対して日本の学校教育の在り方を見直す必要があります。それで、10 月になって義務教育と高等学校教育についてのワーキンググループを立ち上げました。

（スライド 77）まだ２回しか会議を行っていませんが「共通性」と「多様性」についての議論を基に、高等学校教育の在り方を多角的に考えていきたいと思っています。ぜひご注目い

ただきたいですし、ご意見もお寄せください。

これまで共通性と多様性の両方をきちんと確保するのだと言われてきましたが、果たして共通性とは何なのかということです。私は共通性というのは、非常にはっきりしていると思っています。まず「義務教育段階の学びの着実な定着」。それに加えて、かつて議論した市民性や、社会への移行に必要な力。

多様性への対応ということで言えば、学習指導要領にありますし、学校教育法にも書かれていますが、高等学校教育の目標に基づき、高等学校が、令和答申でも述べた、まさにスクール・ポリシーに応じてどのような教育をしていくのかをこれから各学校が示していく、そして実際にそれを行っていく、生徒と一緒につくっていく。そういったことが、これから非常に重要になっていくのではないかと思っている次第です。

（スライド78〜100）あとの資料は参考資料です。またご覧いただければと思います。

（スライド101）これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

スライド1

第20回高大連携教育フォーラム

高等学校には何が求められているか

「令和の日本型学校教育」答申の描くもの

20221203
独立行政法人教職員支援機構
荒瀬 克己

スライド2

成年年齢の引き下げ ……初等中等教育の最終段階は成人教育
大きな子どもでなく、小さなおとなに育てることが求められる。
自分で考え、判断し、行動して、幸福に生きることができるよう。
（社会の変化、コロナ禍による「体験」の減少・変容……）

キャリア教育の一層の充実

「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」中央教育審議会答申 2011（平成23）年1月31日

職業教育：一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育

キャリア教育：一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

キャリア：人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね

2016年12月中教審答申

社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程を、キャリア発達としている。

スライド3

○ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大による臨時休業の長期化により，多様な子供一人一人が自立した学習者として学び続けていけるようになっているか，という点が改めて焦点化されたところであり，これからの学校教育においては，子供が ICT も活用しながら自ら学習を調整しながら学んでいくことができるよう，「個に応じた指導」を充実することが必要である。

（「令和答申」第１部総論「３」から）

スライド4

○ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大による臨時休業の長期化により，多様な子供一人一人が自立した学習者として学び続けていけるようになっているか，という点が改めて焦点化されたところであり，これからの学校教育においては，子供が ICT も活用しながら自ら学習を調整しながら学んでいくことができるよう，「個に応じた指導」を充実することが必要である。

（「令和答申」第１部総論「３」から）

自分で考えて、判断して、行動できる力

スライド5

高等学校学習指導要領解説総則編　第４章 教育課程の実施と学習評価
第１節 教育課程の実施と学習評価　１ 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善
（1）主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善（第１章総則第３款１（1））

……生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることが求められている。

① 学ぶことに興味や関心を持ち，自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら，見通しをもって粘り強く取り組み，自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。

② 子供同士の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ，自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。

③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で，各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら，知識を相互に関連付けてより深く理解したり，情報を精査して考えを形成したり，問題を見いだして解決策を考えたり，思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

スライド6

主体的・対話的で深い学び

学び方を身に付け、
自ら学び続けることのできる人に。
自ら考え、判断して、行動できる人に。
「自立した学習者」に。

スライド7

新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（審議まとめ）
2020年11月13日

「はじめに」から

本審議まとめは、我が国の高等学校教育の有する意義や役割について改めて整理した上で、「非連続的」とも言えるほどに急激に変化する社会経済の中で、生徒一人一人が自分の価値を認識するとともに、相手の価値を尊重し、多様な人々と協働しながら、豊かな人生を切りひらき、持続可能な社会の創り手となることを後押しするために、「生徒を主語にした」高等学校教育を実現するべく、全ての高等学校における特色・魅力あ る教育の実現に向けた方向性を示すものである。

スライド8

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申） 中央教育審議会2021年1月26日

「はじめに」から抜粋

ここでは，ICTの活用と少人数によるきめ細かな指導体制の整備により，「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念である 「個別最適な学び」と，これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた，「協働的な学び」とを一体的に充実することを目指している。さらに，これを踏まえ，各学校段階における子供の学びの姿や教職員の姿，それを支える環境について，「こうあってほしい」という願いを込め，新学習指導要領に基づいて，一人一人の子供を主語にする学校教育の目指すべき姿を具体的に描いている。

スライド9

児童生徒が学び、学び合う学校

↑

教職員が学び、学び合う学校

↓

教職員の新しい学び（研修）の在り方

一人ひとりの教職員にとって、

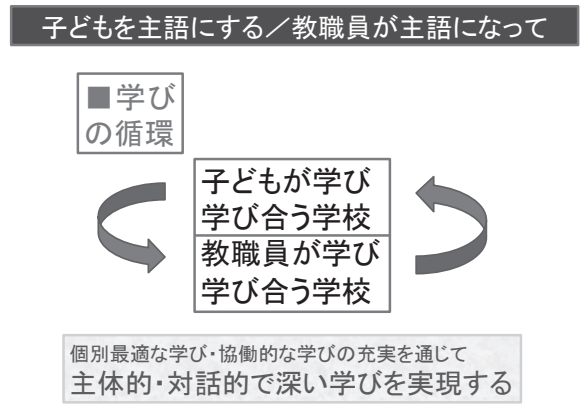
〇個別最適な学び・協働的な学び

〇主体的・対話的で深い学び

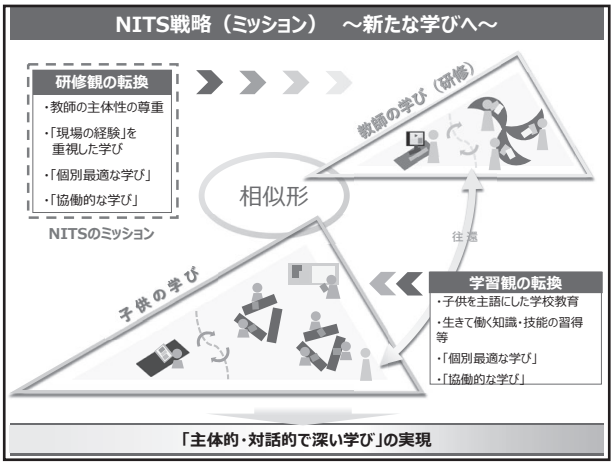
〇体系的・計画的（即応も）

〇多様性・振り返りが重要

スライド10



スライド11



スライド12

第Ⅰ部 総論

1．急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力

2．日本型学校教育の成り立ちと成果，直面する課題と新たな動きについて

（1）日本型学校教育の成り立ちと成果

（2）新型コロナウイルス感染症の感染拡大を通じて再認識された学校の役割

（3）変化する社会の中で我が国の学校教育が直面している課題

（4）新たな動き

3．2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

（1）子供の学び

（2）教職員の姿

（3）子供の学びや教職員を支える環境

4．「令和の日本型学校教育」の構築に向けた今後の方向性

（1）学校教育の質と多様性，包摂性を高め，教育の機会均等を実現する

（2）連携・分担による学校マネジメントを実現する

（3）これまでの実践とICTとの最適な組合せを実現する

（4）履修主義・修得主義等を適切に組み合わせる

（5）感染症や災害の発生等を乗り越えて学びを保障する

（6）社会構造の変化の中で，持続的で魅力ある学校教育を実現する

スライド 13

第Ⅱ部 各論

（【】内には第Ⅰ部 総論4. の今後の方向性に主に関連がある番号を記載）

1. 幼児教育の質の向上について【(1), (2), (5)】

(1)基本的な考え方

(2)幼児教育の内容・方法の改善・充実

(3)幼児教育を担う人材の確保・資質及び専門性の向上

(4)幼児教育の質の評価の促進

(5)家庭・地域における幼児教育の支援

(6)幼児教育を推進するための体制の構築等

(7)新型コロナウイルス感染症への対応

2. 9年間を見通した新時代の義務教育の在り方について【(1), (2), (3), (4)】

(1)基本的な考え方

(2)教育課程の在り方

(3)義務教育9年間を見通した教科担任制の在り方

(4)義務教育を全ての児童生徒等に実質的に保障するための方策

(5)生涯を通じて心身ともに健康な生活を送るための資質・能力を育成するための方策

(6)いじめの重大事態，虐待事案等に適切に対応するための方策

スライド 14

3. 新時代に対応した高等学校教育の在り方について【(1), (2), (3), (4)】

(1)基本的な考え方

(2)高校生の学習意欲を喚起し，能力を最大限に伸長するための各高等学校の特色化・魅力化

(3)定時制・通信制課程における多様な学習ニーズへの対応と質保証

(4)STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成

4. 新時代の特別支援教育の在り方について【(1), (2)】

(1)基本的な考え方

(2)障害のある子供の学びの場の整備・連携強化

(3)特別支援教育を担う教師の専門性向上

(4)関係機関の連携強化による切れ目ない支援の充実

5. 増加する外国人児童生徒等への教育の在り方について【(1), (2)】

(1)基本的な考え方

(2)指導体制の確保・充実

(3)教師等の指導力の向上，支援環境の改善

(4)就学状況の把握，就学促進

(5)中学生・高校生の進学・キャリア支援の充実

(6)異文化理解，母語・母文化支援，幼児に対する支援

スライド 15

6. 遠隔・オンライン教育を含むICTを活用した学びの在り方について【(1), (2), (3), (4), (5)】

(1)基本的な考え方

(2)ICTの活用や，対面指導と遠隔・オンライン教育とのハイブリッド化による指導の充実

(3)特例的な措置や実証的な取組等

7. 新時代の学びを支える環境整備について【(3), (5)】

(1)基本的な考え方

(2)新時代の学びを支える教室環境等の整備

(3)新時代の学びを支える指導体制等の計画的な整備

(4)学校健康診断の電子化と生涯にわたる健康の保持増進への活用

8. 人口動態等を踏まえた学校運営や学校施設の在り方について【(2), (3), (6)】

(1)基本的な考え方

(2)児童生徒の減少による学校規模の小規模化を踏まえた学校運営

(3)地域の実態に応じた公的ストックの最適化の観点からの施設整備の促進

スライド 16

9. Society5.0時代における教師及び教員組織の在り方について【(1), (2), (3), (6)】

(1)基本的な考え方

(2)教師のICT活用指導力の向上方策

(3)多様な知識・経験を有する外部人材による教員組織の構成等

(4)教員免許更新制の実質化について

(5)教師の人材確保

スライド 17

第1部 総論

3. 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

＜抜粋＞

○（略）2(3)で挙げた子供たちの多様化，教師の長時間勤務による疲弊，情報化の加速度的な進展，少子高齢化・人口減少，感染症等の直面する課題を乗り越え，1で述べたように，Society5.0時代を見据え，一人一人の児童生徒が，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるよう，その資質・能力を育成することが求められている。

○ このためには「我が国の学校教育の在り方を根本から見直さなければならないのか」という疑問が生まれ得るが，そうではない。むしろ，2(1)で述べてきた明治から続く我が国の学校教育の蓄積である「日本型学校教育」の良さを受け継ぎながら更に発展させ，学校における働き方改革とGIGAスクール構想を強力に推進しながら，新学習指導要領を着実に実施することが必要である。

○ その際，従来の社会構造の中で行われてきた「正解主義」や「同調圧力」への偏りから脱却し，本来の日本型学校教育の持つ，授業において子供たちの思考を深める「発問」を重視してきたことや，子供たち一人一人の多様性と向き合いながら一つのチーム（目標を共有し活動をともに行う集団）としての学びに高めていく，という強みを最大限に生かしていくことが重要である。

スライド 18

高等学校学習指導要領 前文

教育は，教育基本法第1条に定めるとおり，人格の完成を目指し，平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期すという目的のもと，同法第2条に掲げる次の目標を達成するよう行われなければならない。

スライド 19

1 幅広い知識と教養を身に付け，真理を求める態度を養い，豊かな情操と道徳心を培うとともに，健やかな身体を養うこと。

2 個人の価値を尊重して，その能力を伸ばし，創造性を培い，自主及び自律の精神を養うとともに，職業及び生活との関連を重視し，勤労を重んずる態度を養うこと。

3 正義と責任，男女の平等，自他の敬愛と協力を重んずるとともに，公共の精神に基づき，主体的に社会の形成に参画し，その発展に寄与する態度を養うこと。

4 生命を尊び，自然を大切にし，環境の保全に寄与する態度を養うこと。

5 伝統と文化を尊重し，それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに，他国を尊重し，国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。

スライド 20

これからの学校には，こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ，一人一人の生徒が，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。このために必要な教育の在り方を具体化するのが，各学校において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。

スライド 21

教育課程　　一人一人の ＜生徒／児童＞が
＜幼児が、将来、＞

〇自分のよさや可能性を認識する
〇あらゆる他者を価値のある存在として尊重する
〇多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越える
〇豊かな人生を切り拓く
〇持続可能な社会の創り手となる
ことができるようにするため、各学校において組織的かつ計画的に組み立てたもの

スライド 22

自己肯定感
〇自分は、たいせつなひとりだ。
〇いまの自分が自分のすべてではない。
人間は学ぶことを通して成長する。
〇目の前の世界が世界のすべてではない。
少し動けば世界は変わる。

自己肯定感を養える教育課程、評価になっているか？

スライド 23

第1部 総論
3. 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

＜抜粋＞

〇（略）2（3）で挙げた子供たちの多様化，教師の長時間勤務による疲弊，情報化の加速度的な進展，少子高齢化・人口減少，感染症等の直面する課題を乗り越え，1で述べたように，Society5.0時代を見据え，一人一人の児童生徒が，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるよう，その資質・能力を育成することが求められている。

〇 このためには「我が国の学校教育の在り方を根本から見直さなければならないのか」という疑問が生まれ得るが，そうではない。むしろ，2（1）で述べてきた明治から続く我が国の学校教育の蓄積である「日本型学校教育」の良さを受け継ぎながら更に発展させ，学校における働き方改革とGIGAスクール構想を強力に推進しながら，新学習指導要領を着実に実施することが必要である。

〇 その際，従来の社会構造の中で行われてきた「正解主義」や「同調圧力」への偏りから脱却し，本来の日本型学校教育の持つ，授業において子供たちの思考を深める「発問」を重視してきたことや，子供たち一人一人の多様性と向き合いながら一つのチーム（目標を共有し活動をともに行う集団）としての学びに高めていく，という強みを最大限に生かしていくことが重要である。

スライド 24

〇 誰一人取り残すことのない，持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現に向け，学習指導要領前文において「持続可能な社会の創り手」を求める我が国を含めた世界全体で，SDGs（持続可能な開発目標）に取り組んでいる中で，ツールとしての ICT を基盤としつつ，日本型学校教育を発展させ，2020年代を通じて実現を目指す学校教育を「令和の日本型学校教育」と名付け，まずその姿を以下のとおり描くことで，目指すべき方向性を社会と共有することとしたい。

（1）子供の学び

〇 我が国ではこれまでも，学習指導要領において，児童生徒の興味・関心を生かした自主的，主体的な学習が促されるよう工夫することを求めるなど，「個に応じた指導」が重視されてきた。

〇 平成 28 年答申においては，子供たちの現状を踏まえれば，子供一人一人の興味や関心，発達や学習の課題等を踏まえ，それぞれの個性に応じた学びを引き出し，一人一人の資質・能力を高めていくことが重要であり，各学校が行う進路指導や生徒指導，学習指導等についても，子供一人一人の発達を支え，資質・能力を育成するという観点からその意義を捉え直し，充実を図っていくことが必要であるとされている。また，特に新学習指導要領では，「個に応じた指導」を一層重視する必要があるとされている。

スライド 25

〇正解主義
〇子供たちの思考を深める発問
〇同調圧力
〇誰一人取り残すことのない
〇多様性と包摂性

スライド 26

〇 誰一人取り残すことのない，持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現に向け，学習指導要領前文において「持続可能な社会の創り手」を求める我が国を含めた世界全体で，SDGs（持続可能な開発目標）に取り組んでいる中で，ツールとしての ICT を基盤としつつ，日本型学校教育を発展させ，2020年代を通じて実現を目指す学校教育を「令和の日本型学校教育」と名付け，まずその姿を以下のとおり描くことで，目指すべき方向性を社会と共有することとしたい。

（1）子供の学び

〇 我が国ではこれまでも，学習指導要領において，児童生徒の興味・関心を生かした自主的，主体的な学習が促されるよう工夫することを求めるなど，「個に応じた指導」が重視されてきた。

〇 平成 28 年答申においては，子供たちの現状を踏まえれば，子供一人一人の興味や関心，発達や学習の課題等を踏まえ，それぞれの個性に応じた学びを引き出し，一人一人の資質・能力を高めていくことが重要であり，各学校が行う進路指導や生徒指導，学習指導等についても，子供一人一人の発達を支え，資質・能力を育成するという観点からその意義を捉え直し，充実を図っていくことが必要であるとされている。また，特に新学習指導要領では，「個に応じた指導」を一層重視する必要があるとされている。

スライド 27

〇 同答申を踏まえて改訂された学習指導要領の総則「第4 児童（生徒）の発達の支援」の中では，児童生徒が，基礎的・基本的な知識及び技能の習得も含め，学習内容を確実に身に付けることができるよう，児童生徒や学校の実態に応じ，個別学習やグループ別学習，繰り返し学習，学習内容の習熟の程度に応じた学習，児童生徒の興味・関心等に応じた課題学習，補充的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れることや，教師間の協力による指導体制を確保することなど，指導方法や指導体制の工夫改善により，「個に応じた指導」の充実を図ることについて示された。また，その際，各学校において，コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え，これらを適切に活用した学習活動の充実を図ることについても示された。

〇 現在，GIGA スクール構想により学校の ICT 環境が急速に整備されており，今後はこの新たな ICT 環境を活用するとともに，少人数によるきめ細かな指導体制の整備を進め，「個に応じた指導」を充実していくことが重要である。

スライド 28

〇 その際，平成 28 年答申において示されているとおり，基礎的・基本的な知識・技能の習得が重要であることは言うまでもないが，思考力・判断力・表現力等や学びに向かう力等こそ，家庭の経済事情など，子供を取り巻く環境を背景とした差が生まれやすい能力であるとの指摘もあることに留意が必要である。「主体的・対話的で深い学び」を実現し，学びの動機付けや幅広い資質・能力の育成に向けた効果的な取組を展開していくことによって，学校教育が個々の家庭の経済事情等に左右されることなく，子供たちに必要な力を育んでいくことが求められる。

同答申を踏まえて改訂された学習指導要領の総則「第3 教育課程の実施と学習評価」の中で，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について示された。

〇 新型コロナウイルス感染症の感染拡大による臨時休業の長期化により，多様な子供一人一人が自立した学習者として学び続けていけるようになっているか，という点が改めて焦点化されたところであり，これからの学校教育においては，子供が ICT も活用しながら自ら学習を調整しながら学んでいくことができるよう，「個に応じた指導」を充実することが必要である。この「個に応じた指導」の在り方を，より具体的に示すと以下のとおりである。

〇 全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ，思考力・判断力・表現力等や，自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには，教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや，子供一人一人の特性や学習進度，学習到達度等に応じ，指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。

スライド 29

多様な子供
一人一人が自立した学習者として学び続けていけるようになっているか

自分で考えて、
自分で判断して、
自分で行動できる、しようとする
意思、能力

スライド 30

習得・活用・探究という学びの過程の中で、
各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、
知識を相互に関連付けてより深く理解したり、
情報を精査して考えを形成したり、
問題を見いだして解決策を考えたり、
思いや考えを基に創造したりすることに向かう
「深い学び」

学習指導要領解説総則編
「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」

スライド 31

○ その際，平成 28 年答申において示されているとおり，基礎的・基本的な知識・技能の習得が重要であることは言うまでもないが，思考力・判断力・表現力等や学びに向かう力等こそ，家庭の経済事情など，子供を取り巻く環境を背景とした差が生まれやすい能力であるとの指摘もあることに留意が必要である。「主体的・対話的で深い学び」を実現し，学びの動機付けや幅広い資質・能力の育成に向けた効果的な取組を展開していくことによって，学校教育が個々の家庭の経済事情等に左右されることなく，子供たちに必要な力を育んでいくことが求められる。

同答申を踏まえて改訂された学習指導要領の総則「第3 教育課程の実施と学習評価」の中で，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について示された。

○ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大による臨時休業の長期化により，多様な子供一人一人が自立した学習者として学び続けていけるようになっているか，という点が改めて焦点化されたところであり，これからの学校教育においては，子供が ICT も活用しながら自ら学習を調整しながら学んでいくことができるよう，「個に応じた指導」を充実することが必要である。この「個に応じた指導」の在り方を，より具体的に示すと以下のとおりである。

○ 全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ，思考力・判断力・表現力等や，自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには，教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや，子供一人一人の特性や学習進度，学習到達度等に応じ，指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。

スライド 32

○ 全ての子供に基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ，思考力・判断力・表現力等や，自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するためには，
教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うことなどで効果的な指導を実現することや，
子供一人一人の特性や学習進度，学習到達度等に応じ，指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」が必要である。

スライド 33

○ 基礎的・基本的な知識・技能等や，言語能力，情報活用能力，問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として，幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ，探究において課題の設定，情報の収集，整理・分析，まとめ・表現を行う等，教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで，子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。

○ 以上の「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり，この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。

○ これからの学校においては，子供が「個別最適な学び」を進められるよう，教師が専門職としての知見を活用し，子供の実態に応じて，学習内容の確実な定着を図る観点や，その理解を深め，広げる学習を充実させる観点から，カリキュラム・マネジメントの充実・強化を図るとともに，これまで以上に子供の成長やつまずき，悩みなどの理解に努め，個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや，子供が自らの学習の状況を把握し，主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる。

○ その際，ICT の活用により，学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ，健康診断情報等を蓄積・分析・利活用することや，教師の負担を軽減することが重要である。また，データの取扱いに関し，配慮すべき事項等を含めて専門的な検討を進めていくことも必要である。

スライド 34

○ 基礎的・基本的な知識・技能等や，言語能力，情報活用能力，問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として，
幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ，探究において課題の設定，情報の収集，整理・分析，まとめ・表現を行う等，
教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで，
子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。

スライド 35

個別最適な学び

○指導の個別化
○学習の個性化

スライド 36

○ 基礎的・基本的な知識・技能等や，言語能力，情報活用能力，問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として，幼児期からの様々な場を通じての体験活動から得た子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ，探究において課題の設定，情報の収集，整理・分析，まとめ・表現を行う等，教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで，子供自身が学習が最適となるよう調整する「学習の個性化」も必要である。

○ 以上の「指導の個別化」と「学習の個性化」を教師視点から整理した概念が「個に応じた指導」であり，この「個に応じた指導」を学習者視点から整理した概念が「個別最適な学び」である。

○ これからの学校においては，子供が「個別最適な学び」を進められるよう，教師が専門職としての知見を活用し，子供の実態に応じて，学習内容の確実な定着を図る観点や，その理解を深め，広げる学習を充実させる観点から，カリキュラム・マネジメントの充実・強化を図るとともに，これまで以上に子供の成長やつまずき，悩みなどの理解に努め，個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや，子供が自らの学習の状況を把握し，主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる。

○ その際，ICT の活用により，学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ，健康診断情報等を蓄積・分析・利活用することや，教師の負担を軽減することが重要である。また，データの取扱いに関し，配慮すべき事項等を含めて専門的な検討を進めていくことも必要である。

スライド 37

○ 子供が ICT を日常的に活用することにより，自ら見通しを立てたり，学習の状況を把握し，新たな学習方法を見いだしたり，自ら学び直しや発展的な学習を行いやすくなったりする等の効果が生まれることが期待される。国においては，このような学習者や ICT 活用の視点を盛り込んだ「個別最適な学び」に関する指導事例を収集し，周知することが必要である。

○ さらに，「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう，これまでも「日本型学校教育」において重視されてきた，探究的な学習や体験活動などを通じ，子供同士で，あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，様々な社会的な変化を乗り越え，持続可能な社会の創り手となることができるよう，必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。

○ 「協働的な学び」においては，集団の中で個が埋没してしまうことがないよう，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげ，子供一人一人のよい点や可能性を生かすことで，異なる考え方が組み合わさり，よりよい学びを生み出していくようにすることが大切である。「協働的な学び」において，同じ空間で時間を共にすることで，お互いの感性や考え方等に触れ刺激し合うことの重要性について改めて認識する必要がある。人間同士のリアルな関係づくりは社会を形成していく上で不可欠であり，知・徳・体を一体的に育むためには，教師と子供の関わり合いや子供同士の関わり合い，自分の感覚や行為を通して理解する実習・実験，地域社会での体験活動，専門家との交流など，様々な場面でリアルな体験を通じて学ぶことの重要性が，AI 技術が高度に発達する Society5.0 時代にこそ一層高まるものである。

スライド 38

○ また，「協働的な学び」は，同一学年・学級はもとより，異学年間の学びや他の学校の子供との学び合いなども含むものである。知・徳・体を一体で育む「日本型学校教育」のよさを生かし，学校行事や児童会（生徒会）活動等を含め学校における様々な活動の中で異学年間の交流の機会を充実することで，子供が自らのこれまでの成長を振り返り，将来への展望を培うとともに，自己肯定感を育むなどの取組も大切である。

○ さらに，ICT の活用により，子供一人一人が自分のペースを大事にしながら共同で作成・編集等を行う活動や，多様な意見を共有しつつ合意形成を図る活動など，「協働的な学び」もまた発展させることができる。ICT を利用して空間的・時間的制約を緩和することによって，遠隔地の専門家とつないだ授業や他の学校・地域や海外との交流など，今までできなかった学習活動も可能となることから，その新たな可能性を「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に生かしていくことが求められる。

○ 学校における授業づくりに当たっては，「個別最適な学び」と「協働的な学び」の要素が組み合わさって実現されていくことが多いと考えられる。各学校においては，教科等の特質に応じ，地域・学校や児童生徒の実情を踏まえながら，授業の中で「個別最適な学び」の成果を「協働的な学び」に生かし，更にその成果を「個別最適な学び」に還元するなど，「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要である。その際，家庭や地域の協力も得ながら人的・物的な体制を整え，教育活動を展開していくことも重要である。

国においては，このような「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実の重要性について，関係者の理解を広げていくことが大切である。

スライド 39

○ICTの活用……使い慣れることでの可能性

○「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう「協働的な学び」のを充実

○「協働的な学び」においては，集団の中で個が埋没してしまうことがないよう

（「同調圧力」「重圧」「閉塞感」）

スライド 40

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し，
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていく

スライド 41

○ したがって，目指すべき「令和の日本型学校教育」の姿を「全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現」とする。

○ 以上のことを踏まえ，各学校段階において以下のような学びの姿が実現することを目指す。

①幼児教育

○ 幼稚園等の幼児教育が行われる場において，小学校教育との円滑な接続や特別な配慮を必要とする幼児への個別支援，質の評価を通じた PDCA サイクルの構築が図られるなど，質の高い教育が提供され，良好な環境の下，身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で達成感を味わいながら，全ての幼児が健やかに育つことができる。

②義務教育

○ 児童生徒一人一人の資質・能力を伸ばすという観点から，新たな ICT 環境や先端技術を最大限活用することなどにより，基礎的・基本的な知識・技能や言語能力，情報活用能力，問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力の確実な育成が行われるとともに，多様な児童生徒一人一人の興味・関心等に応じ，その意欲を高めやりたいことを深められる学びが提供されている。

○ 個々の児童生徒の学習状況を教師が一元的に把握できる中で，それに基づき特別な支援が必要な者に対する個別支援が充実され，多様な児童生徒がお互いを理解しながら共に学び，特定分野に特異な才能のある児童生徒が，その才能を存分に伸ばせる高度な学びの機会にアクセスすることができる。

スライド 42

○ 学校ならではの児童生徒同士の学び合いや，多様な他者と協働して主体的に課題を解決しようとする探究的な学び，様々な体験活動，地域の資源を活用した教育活動などを通じ，身近な地域の魅力や課題などを知り，地域の構成員の一人としての意識が育まれている。また，家庭や地域と連携・協働しながら，社会への関心を高めるなど児童生徒に主権者としての意識が育まれている。

○ 生涯を通じて心身ともに健康な生活を送るために必要な資質・能力を育成するとともに，児童生徒の生活や学びにわたる課題（貧困，虐待等）が早期に発見され，外国人児童生徒等の社会的少数者としての課題を有する者を含めた全ての児童生徒が安全・安心に学ぶことができる。

③高等学校教育

○ 各高等学校においては，選挙権年齢や成年年齢が 18 歳に引き下げられるなど，生徒が高等学校在学中に，主権者の一人としての自覚を深めることを含め，自立した「大人」として振る舞えるようになることが期待されていることから，学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力や，地域の課題等についての認識を深め，その解決を社会の構成員の一人として担う等，社会の形成に主体的に参画するために必要な資質・能力を身に付けられるよう，初等中等教育段階最後の教育機関として，高等教育機関や実社会との接続機能を果たしている。

スライド 43

○ そのなかで，各高等学校においては，多様な生徒の興味・関心や特性，背景を踏まえて，特色・魅力ある教育活動が行われるとともに，特別な支援が必要な生徒に対する個別支援が充実しており，また，地方公共団体，企業，高等教育機関，国際機関，NPO 等と連携・協働することによって地域・社会の抱える課題の解決に向けた学びが学校内外で行われ，生徒が自立した学習者として自己の将来のイメージを持ち，高い学習意欲を持って学びに向かっている。

○ 学校と社会とが連携・協働することにより，多様な生徒一人一人に応じた探究的な学びが実現されるとともに，STEAM 教育などの実社会での課題解決に生かしていくための教科等横断的な学びが提供されている。

④特別支援教育

○ 幼児教育，義務教育，高等学校教育の全ての教育段階において，障害者の権利に関する条約に基づくインクルーシブ教育システムの理念を構築することを旨として行われ，また，障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）や，今般の高齢者，障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律（バリアフリー法）の改正も踏まえ，全ての子供たちが適切な教育を受けられる環境を整備することが重要である。

○ こうした重要性に鑑み，障害のある子供と障害のない子供が可能な限り共に教育を受けられる条件整備が行われており，また，障害のある子供の自立と社会参加を見据え，一人一人の教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できるよう，通常の学級，通級による指導，特別支援学級，特別支援学校といった，連続性のある多様な学びの場の一層の充実・整備がなされている。

スライド 44

⑤各学校段階を通じた学び

○ 幼児教育から小学校，中学校，高等学校，大学・社会といった段階を通じ，一貫して，自らの将来を見通し，社会の変化を踏まえながら，自己のキャリア形成と関連付けて学び続けている。

（2）教職員の姿

○ 教師が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め，教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け，子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている。

その際，子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている。

○ 教員養成，採用，免許制度も含めた方策を通じ，多様な人材の教育界内外からの確保や教師の資質・能力の向上により，質の高い教職員集団が実現されるとともに，教師と，総務・財務等に通じる専門職である事務職員，それぞれの分野や組織運営等に専門性を有する多様な外部人材や専門スタッフ等とがチームとなり，個々の教職員がチームの一員として組織的・協働的に取り組む力を発揮しつつ，校長のリーダーシップの下，家庭や地域社会と連携しながら，共通の学校教育目標に向かって学校が運営されている。

○ さらに，学校における働き方改革の実現や教職の魅力発信，新時代の学びを支える環境整備により，教師が創造的で魅力ある仕事であることが再認識され，教師を目指そうとする者が増加し，教師自身も志気を高め，誇りを持って働くことができている。

スライド 45

（3）子供の学びや教職員を支える環境

○ 小学校，中学校，高等学校段階における1人1台端末環境の実現や端末の持ち帰り，学校内の通信ネットワーク環境の整備，デジタル教科書・教材等の先端技術や教育データを効果的に活用できる環境の整備，統合型校務支援システムの導入などにより，全国津々浦々の学校において指導・支援の充実，校務の効率化，教育政策の改善・充実等がなされている。また，ICT 環境の整備に当たり，地方公共団体が整備する教育情報セキュリティポリシーに基づき，情報システムの迅速な整備等が期待されるクラウドサービスの導入や運用・活用が進められている。なお，特に高等学校段階においては，個人端末の持ち込み（Bring Your Own Device：BYOD）が進んでいることに留意しつつ，実態を踏まえて整備を進めていく必要がある。

○ 全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けて，また，平常時はもとより，災害や感染症の発生等による学校の臨時休業等の緊急時においても，不安なく学習を継続できる安全・安心な教育環境の確保に向けて，ICT の活用環境と少人数によるきめ細かな指導体制の整備，老朽化対策やバリアフリー化，トイレの乾式化・洋式化，空調設備の設置等の学校施設の整備等により，新しい時代の学びを支える学校教育の環境が整備されている。

○ 人口減少が加速する地域においても，小学校と中学校との連携，学校施設の複合化・共用化等の促進などを通じて，魅力的な教育環境が実現されている。

スライド 46

I have a dream that my four little children will one day live in a nation where they will not be judged by the color of their skin but by the content of their character.

I have a dream today!

I have a dream that one day, down in Alabama, with its vicious racists, with its governor having his lips dripping with the words of “interposition” and “nullification” — one day right there in Alabama little black boys and black girls will be able to join hands with little white boys and white girls as sisters and brothers.

I have a dream today! （8文の文頭）

Martin Luther King Jr.
1963年8月28日、職と自由を求めた
「ワシントン大行進」の一環として
25万人近い人々がワシントンDCに集結し、
ワシントン記念塔からリンカーン記念堂まで行進。

スライド 47

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」
（中教審答申　2021年1月）

第Ⅰ部総論
3. 2020 年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿
（1）子供の学び　③高等学校教育

○ 各高等学校においては，選挙権年齢や成年年齢が18歳に引き下げられるなど，生徒が高等学校在学中に，主権者の一人としての自覚を深めることを含め，自立した「大人」として振る舞えるようになることが期待されていることから，学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら，社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力や，地域の課題等についての認識を深め，その解決を社会の構成員の一人として担う等，社会の形成に主体的に参画するために必要な資質・能力を身に付けられるよう，初等中等教育段階最後の教育機関として，高等教育機関や実社会との接続機能を果たしている。

スライド 48

○ そのなかで，各高等学校においては，多様な生徒の興味・関心や特性，背景を踏まえて，特色・魅力ある教育活動が行われるとともに，特別な支援が必要な生徒に対する個別支援が充実しており，また，地方公共団体，企業，高等教育機関，国際機関，NPO 等と連携・協働することによって地域・社会の抱える課題の解決に向けた学びが学校内外で行われ，生徒が自立した学習者として自己の将来のイメージを持ち，高い学習意欲を持って学びに向かっている。

○ 学校と社会とが連携・協働することにより，多様な生徒一人一人に応じた探究的な学びが実現されるとともに，STEAM教育などの実社会での課題解決に生かしていくための教科等横断的な学びが提供されている。

スライド 49

第Ⅱ部各論
3. 新時代に対応した高等学校教育等の在り方について
（1）基本的な考え方

○ 高等学校は，義務教育機関ではないものの，既に進学率が約99%に達し，今日では中学校を卒業したほぼ全ての生徒が進学する教育機関となっている。それゆえ，高等学校には多様な入学動機や進路希望，学習経験，言語環境など，様々な背景を持つ生徒が在籍していることから，義務教育において育成された資質・能力を更に発展させながら，生徒の多様な能力・適性，興味・関心等に応じた学びを実現することが必要である。

○ また，高校生の現状の一つとして，学校生活への満足度や学習意欲が中学校段階に比べて低下しており，高等学校における教育活動を，高校生を中心に据えることを改めて確認し，その学習意欲を喚起し，可能性及び能力を最大限に伸長するためのものへと転換することが急務である。

スライド 50

○ さらに，高校教育を取り巻く状況をみると，産業構造や社会システムが「非連続的」とも言えるほどに急激に変化しており，少子化の進行によって，高等学校としての教育的機能の維持が困難となっている地域・学校も生じているなど社会経済の有り様を踏まえた高等学校の在り方の検討が必要である。高等学校は初等中等教育段階最後の教育機関として，高等教育機関や実社会との接続機能を果たすことが求められており，また，選挙権年齢や成年年齢が18 歳に引き下げられることなどを踏まえ，生徒が高等学校在学中に主権者の一人としての自覚を深めていくための学びが求められている。このため，高等学校においては，社会経済の変化を踏まえながら，自己のキャリア形成と関連付けて生涯にわたって学び続けていけるよう，2.（2）①で述べた義務教育段階での取組をより発展させる形で，学びに向かう力の育成やキャリア教育の充実を図ることが必要である。

スライド 51

○ 高等学校の在り方の検討に当たっては，令和4（2022）年度から新しい高等学校学習指導要領が年次進行で実施されることを見据えて，現在在籍している生徒及び今後入学してくる生徒の可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びが実現されるよう検討を進める必要がある。

○ また，新型コロナウイルス感染症対応においては，緊急時においても生徒の学びを保障するために，遠隔・オンライン教育の活用を含めた柔軟な取組が行われたところである。こうした中，感染拡大を通じて再認識された高等学校の福祉的機能（安全・安心な居場所の提供）や社会的機能（社会性・人間性の育成）といった役割や価値も踏まえ，遠隔・オンラインか対面・オフラインかという二元論に陥ることなく，高等学校の役割を最大限に果たすために，その最適な組合せを探ることが必要である。

○ なお，後期中等教育機関としては高等学校の他にも，専修学校高等課程（以下「高等専修学校」という。）や特別支援学校高等部等があり，高等学校と同様に重要な役割を担っている。（以下、その充実について）

スライド 52

（2）高校生の学習意欲を喚起し，可能性及び能力を最大限に伸長するための各高等学校の特色化・魅力化

①各高等学校の存在意義・社会的役割等の明確化
（スクール・ミッションの再定義）

○ 高等学校は，義務教育を修了した生徒が入学者選抜を経て入学するものであることから，各高等学校が育成を目指す資質・能力を明確にするために，各学校の設置者が，各学校や所在する地方公共団体等の関係者と連携しつつ，在籍する生徒の状況や意向，期待に加え，学校の歴史や伝統，現在の社会や地域の実情を踏まえて，また，20 年後・30 年後の社会像・地域像を見据えて，各学校の存在意義や各学校に期待されている社会的役割，目指すべき学校像を明確化する形で再定義することが必要である。

スライド 53

○ 上記の各高等学校の存在意義や社会的役割等（いわゆる「スクール・ミッション」）は，在籍する生徒はもとより，高等学校に関わる保護者，地域住民，地方公共団体や地元産業界等に対して分かりやすく学校の役割や理念を示すとともに，学校内の教職員にとっても様々な教育活動を実施する上でその基礎をなす理念として共有されるものであるという観点から検討される必要がある。その際，大学受験のみを意識したものや，学校間の学力差を固定化・強化する方向で検討するべきではないことに留意が必要である。

○ 私立高等学校においては建学の精神等に基づく教育が行われているところであり，創設時の建学の精神等の意義を再確認したり，それらに新たな解釈を加えたり，それらを基盤としながらも，現代社会の有り様や在学する生徒の状況等も踏まえて検討していくことが重要である。

スライド 54

②各高等学校の入口から出口までの教育活動の指針の策定
（スクール・ポリシーの策定）

○ 各高等学校の存在意義や社会的役割等に基づき，各学校において育成を目指す資質・能力を明確化・具体化するとともに，学校全体の教育活動の組織的・計画的な改善に結実させることが不可欠である。その際，高等学校教育の入口から出口までの教育活動を一貫した体系的なものに再構成するとともに，教育活動の継続性を担保するため，育成を目指す資質・能力に関する方針，教育課程の編成及び実施に関する方針，入学者の受入れに関する方針（これら3つの方針を総称して「スクール・ポリシー」と称する。）を各高等学校において策定・公表し，特色・魅力ある教育の実現に向けた整合性のある指針とする必要がある。

スライド 55

○ スクール・ポリシーの策定に当たっては，校長がリーダーシップを発揮しながら，全教職員が当事者意識を持って参画し，組織的かつ主体的に策定を進めるというプロセスが重要である。また，「社会に開かれた教育課程」の実現のためにも，各学校や地域の実情等を踏まえて，在籍する生徒をはじめとして，保護者，地域住民等，地域や産業界，関係団体等の関係者が参画して検討を進めることも重要である。

○ 各高等学校においては，スクール・ポリシーを起点としたカリキュラム・マネジメントを適切に行い，教育課程や個々の授業，入学者選抜の在り方等について組織的かつ計画的に実施するとともに，PDCAサイクルを通じて不断の改善を図る必要がある。

また，授業改善のための組織的な体制整備や設置者による指導助言・支援も必要となる。

スライド 56

③「普通教育を主とする学科」の弾力化・大綱化（普通科改革）

○ 現行法令上，「普通教育を主とする学科」は普通科のみとされているが，約7割の高校生が通う学科を「普通科」として一括りに議論するのではなく，「普通教育を主とする学科」を置く各高等学校がそれぞれの特色化・魅力化に取り組むことを推進する観点から，各学校の取組を可視化し，情報発信を強化するため，各設置者の判断により，当該学科の特色・魅力ある教育内容を表現する名称を学科名とすることを可能とするための制度的な措置が求められる。

○ どのような学科を設置するかについては，各設置者が現在の国際社会，国家，地域社会を取り巻く環境や，高校生の多様な実態を踏まえて検討されるものであるが，例えば，以下のものが考えられる。

スライド 57

③「普通教育を主とする学科」の弾力化・大綱化（普通科改革）

○ 現行法令上，「普通教育を主とする学科」は普通科のみとされているが，約7割の高校生が通う学科を「普通科」として一括りに議論するのではなく，「普通教育を主とする学科」を置く各高等学校がそれぞれの特色化・魅力化に取り組むことを推進する観点から，各学校の取組を可視化し，情報発信を強化するため，各設置者の判断により，当該学科の特色・魅力ある教育内容を表現する名称を学科名とすることを可能とするための制度的な措置が求められる。

○ どのような学科を設置するかについては，各設置者が現在の国際社会，国家，地域社会を取り巻く環境や，高校生の多様な実態を踏まえて検討されるものであるが，例えば，以下のものが考えられる。

スライド 58

・現代的な諸課題のうち，SDGsの実現やSociety5.0の到来に伴う諸課題に対応するために，学際的・複合的な学問分野や新たな学問領域に即した最先端の特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科

・現代的な諸課題のうち，高等学校が立地する地元市町村を中心とする地域社会が抱える諸課題に対応し，地域や社会の将来を担う人材の育成を図るために，現在及び将来の地域社会が有する課題や魅力に着目した実践的な学びに重点的に取り組む学科

・その他普通教育として求められる教育内容であって当該高等学校の存在意義・社会的役割等に基づく特色・魅力ある学びに重点的に取り組む学科

○ 新たな学科における教育課程については，高等学校学習指導要領に定める必履修教科・科目などの各教科・科目の学びを基盤に置きつつ，学校設定教科・科目を活用して各学科において育成を目指す資質・能力に対応する学びに取り組むとともに，学校設定教科・科目や総合的な探究の時間を各年次にわたって体系的に開設することが求められる。

スライド 59

○ また，現代的な諸課題という生きた事象を取り扱うに当たっては，教室内の学びだけでなく，実際の現場に赴いて諸課題の現状を目の当たりにしたり，最前線で課題解決に取り組む社会人の姿に学んだりすることが非常に重要である。このため，各学科の特質に応じて，国内外の高等教育機関や国際機関，国の機関，研究機関，地元市町村，企業・経済団体等の関係機関との連携・協働体制の構築が求められる。こうした連携・協働体制を構築するに当たっては，高等学校と関係機関とのコーディネート機能を担うコーディネーターを配置することも求められる。

スライド 60

④産業界と一体となって地域産業界を支える革新的職業人材の育成（専門学科改革）

○ 職業教育を主とする学科を置く高等学校（以下「専門高校」という。）においては，技術革新・産業構造の変化，グローバル化等，社会の急激な変化に伴い，修得が期待される資質・能力も変わってきており，今後とも大きく変わることが考えられる中，地域の持続的な成長を支える最先端の職業人育成を担っていくには，加速度的な変化の最前線にある地域の産業界で直接的に学ぶことができるよう，産業界と高等学校と一体となった，社会に開かれた教育課程の推進が重要である。

○ 具体的には，これまでの企業等の外部講師の招へいやインターンシップ等の連携から更に進化し，経済団体等の産業界を核として，地域の産官学の関係者が一体となり，将来の地域産業界の在り方を検討し，その検討の中で，専門高校段階での人材育成の在り方を整理し，それに基づく教育課程の開発・実践を行うことが必要である。

スライド 61

○ こうした最先端の職業教育を行う上では，企業と一体となった教育課程とともに，教師の資質・能力の向上と施設・設備の充実が絶えず図られなければならない。施設・設備の充実には，教育委員会等の学校の設置者による計画的な整備，そしてそれを支える国や地方公共団体における財政的措置の充実が重要である。

○ また，専門高校を卒業後に大学や専門学校等に進学する生徒も少なくないことから，高等教育機関等と連携し，先取り履修等の取組の推進も考えられる。また，地域の産業界，行政が一体となって考える地域の将来構想においては，専攻科制度の活用や高等専門学校への改編も視野に入れた，必ずしも3年間に限らない教育課程の開発・実施や，高等教育機関と連携した一貫した教育課程の開発・実施の検討も考えられる。

スライド 62

⑤新しい時代にこそ求められる総合学科における学びの推進

○ 近年の技術革新に伴い，産業界で必要な専門知識や技術が日々変化している現代においては，特定の専門分野のみならず様々な分野に関する知識・技術が求められる。

多くの開設科目から主体的な選択履修が可能であるという特徴を有する総合学科においては，自分とは異なる興味・関心を持つ生徒と共に多様な科目を履修することで，自らの進路を見つめ直しつつ，多様な分野に関する知識及び技能や異分野と協働する姿勢といった，これからの時代に求められる資質・能力を育成することが期待されている。

○ 多様な開設科目という総合学科の特徴を生かした教育活動を展開するためには，授業を通じて生徒の目的意識や将来への自覚を高める必要があり，そのために，「産業社会と人間」を核として，他教科・科目等とのつながり及び2年次以降の学びとの接続を意識したカリキュラム・マネジメントを行うことが必要である。また，自校では開設できない科目について，ICT の活用を伴った各高等学校のネットワーク化によって他の高等学校の科目を履修して単位認定する仕組みの活用や，外部人材や地域資源の活用を推進することも求められる。

スライド 63

⑥高等教育機関や地域社会等の関係機関と連携・協働した高度な学びの提供

○ 各高等学校が掲げるスクール・ミッションや各学校の実情等に基づき，特色・魅力ある教育活動を展開するための方策として，地域社会や高等教育機関，企業等の関係機関と連携・協働することが求められる。もとより，子供たちの資質・能力は学校だけで育まれるものではないことから，一つの学校で全てを完結させるという「自前主義」から脱却し，学校内外の教育資源を最大限活用して，関係機関にも開かれた教育活動が行われる必要がある。

○ 関係機関との連携・協働に当たっては，校長をはじめとする管理職やミドルリーダーがリーダーシップを発揮し，設置者である教育委員会等による積極的な支援・関与も得ながら，人材配置も含め複数の機関との連携・協働をコーディネートする体制を構築し，各学校や地域の実情に応じてコンソーシアムという「組織対組織」の形でのつながりを作ることが必要である。

○ また，関係機関との連携・協働に加えて，複数の高等学校が連携・協働して高度かつ多様な学習プログラムを開発・共有し，全国の高校生がこうした学習プログラムに参加することを可能とする取組を進めることが必要である。

スライド 64

⑥高等教育機関や地域社会等の関係機関と連携・協働した高度な学びの提供

○ 各高等学校が掲げるスクール・ミッションや各学校の実情等に基づき，特色・魅力ある教育活動を展開するための方策として，地域社会や高等教育機関，企業等の関係機関と連携・協働することが求められる。もとより，子供たちの資質・能力は学校だけで育まれるものではないことから，一つの学校で全てを完結させるという「自前主義」から脱却し，学校内外の教育資源を最大限活用して，関係機関にも開かれた教育活動が行われる必要がある。

○ 関係機関との連携・協働に当たっては，校長をはじめとする管理職やミドルリーダーがリーダーシップを発揮し，設置者である教育委員会等による積極的な支援・関与も得ながら，人材配置も含め複数の機関との連携・協働をコーディネートする体制を構築し，各学校や地域の実情に応じてコンソーシアムという「組織対組織」の形でのつながりを作ることが必要である。

○ また，関係機関との連携・協働に加えて，複数の高等学校が連携・協働して高度かつ多様な学習プログラムを開発・共有し，全国の高校生がこうした学習プログラムに参加することを可能とする取組を進めることが必要である。

スライド 65

（3）定時制・通信制課程における多様な学習ニーズへの対応と質保証

①専門スタッフの充実や関係機関との連携強化，ICT の効果的な活用等によるきめ細かな指導・支援

○ 定時制・通信制課程では，勤労青年のみならず多様な生徒が入学している実態にきめ細かく対応し，個々の生徒の状況に応じた学習活動や日々の生徒指導，教育相談，将来を見通した進路指導など，多様な生徒の学習形態や進路希望に対応した教育活動が行われている。

○ 今後とも生徒一人一人の実態や学習ニーズに応じた教育活動を，家庭・地域等と連携しながらより一層推進していくことが期待されるものであり，スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー，特別支援教育支援員，日本語指導補助者等の専門スタッフの充実や，大学，専門学校等の高等教育機関や企業，ハローワーク等との連携促進，学び直しなど補習等の支援や外部との連携・協働を行うための職員の配置促進等を更に図っていくことが望ましいものと考えられる。

○ また，多様な学習ニーズに応じてより一層きめ細かく対応していくことができるよう，ICT を効果的に利活用した指導・評価方法の在り方等について検討を行い，必要な方策を講じていくことが考えられる。

スライド 66

○ さらには，高校生が身に付けるべき資質・能力の確実な定着を図り，高校生一人一人の能力を最大限引き出していくことができるよう，生徒一人一人の学習ニーズを的確に踏まえた上で，各学校の特色に応じた学校教育活動の PDCA サイクルを確立させていくことが重要であると考えられる。

②高等学校通信教育の質保証

○ 通信制課程を置く高等学校は，関係法令を当然に順守するとともに，ガイドラインをしっかりと踏まえた上で学校運営や教育活動を実施することが求められるが，未だに不適切な学校運営や教育活動を行っている学校も少なからず見られる。

○ そのため，通信制課程を置く高等学校で学ぶ全ての生徒が適切な教育環境のもとで存分に学ぶことができるよう，高等学校通信教育の質保証を徹底するべく，教育課程の編成・実施の適正化の観点から通信教育実施計画の作成義務化，サテライト施設の教育水準の確保の観点から面接指導等実施施設の教育環境の基準の明確化，多様な生徒にきめ細かく対応するための指導体制の充実の観点から面接指導は少人数を基幹とすべきことの明確化，主体的な学校運営改善の徹底の観点から教育活動等の状況に関する情報公開の義務化といった対応方策が考えられる。

スライド 67

（4）STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進による資質・能力の育成

○ AI や IoT などの急速な技術の進展により社会が激しく変化し，多様な課題が生じている今日においては，これまでの文系・理系といった枠にとらわれず，各教科等の学びを基盤としつつ，様々な情報を活用しながらそれを統合し，課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成が求められている。

○ 教育再生実行会議第 11 次提言において，幅広い分野で新しい価値を提供できる人材を養成することができるよう，新学習指導要領において充実されたプログラミングやデータサイエンスに関する教育，統計教育に加え，STEAM 教育の推進が提言された。高等

学校改革を取り上げた本提言において，STEAM 教育は「各教科での学習を実社会での問題発見・解決にいかしていくための教科横断的な教育」とされている。

○ このSTEAM教育については，国際的に見ても，各国で定義が様々であり，STEM（Science，Technology，Engineering，Mathematics）に加わった A の範囲をデザインや感性などと狭く捉えるものや，芸術，文化，生活，経済，法律，政治，倫理等を含めた広い範囲で定義するものもある。

スライド 68

STEAM教育の目的には，人材育成の側面と，STEAMを構成する各分野が複雑に関係する現代社会に生きる市民の育成の側面がある。各教科等の知識・技能等を活用することを通じた問題解決を行うものであることから，課題の選択や進め方によっては生徒の強力な学ぶ動機付けにもなる。一方で，STEAM教育を推進する上では，多様な生徒の実態を踏まえる必要がある。科学技術分野に特化した人材育成の側面のみに着目して STEAM教育を推進すると，例えば，学習に困難を抱える生徒が在籍する学校においては実施することが難しい場合も考えられ，学校間の格差を拡大する可能性が懸念される。教科等横断的な学習を充実することは学習意欲に課題のある生徒たちにこそ非常に重要であり，生徒の能力や関心に応じた STEAM 教育を推進する必要がある。

このため STEAM の各分野が複雑に関係する現代社会に生きる市民として必要となる資質・能力の育成を志向する STEAM 教育の側面に着目し，STEAMの A の範囲を芸術，文化のみならず，生活，経済，法律，政治，倫理等を含めた広い範囲（Liberal Arts）で定義し，推進することが重要である。

スライド 69

○ 新学習指導要領においては，学習の基盤となる資質・能力や，現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を育成するため，教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ることとされている。

STEAM教育の特性を生かし，実社会につながる課題の解決等を通じた問題発見・解決能力の育成や，レポートや論文，プレゼンテーション等の形式で課題を分析し，論理立てて主張をまとめること等を通じた言語能力の育成，情報手段の基本的な操作の習得，プログラミング的思考，情報モラル等に関する資質・能力等も含む情報活用能力の育成等の学習の基盤となる資質・能力の育成，芸術的な感性も生かし心豊かな生活や社会的な価値を創り出す創造性などの現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の育成について，文理の枠を超えて教科等横断的な視点に立って進めることが重要であり，その実現のためにはカリキュラム・マネジメントを充実する必要がある。

スライド 70

○ STEAM教育は，「社会に開かれた教育課程」の理念の下，産業界等と連携し，各教科等での学習を実社会での問題発見・解決に生かしていく高度な内容となるものであることから，高等学校における教科等横断的な学習の中で重点的に取り組むべきものであるが，その土台として，幼児期からのものづくり体験や科学的な体験の充実，小学校，中学校での各教科等や総合的な学習の時間における教科等横断的な学習や探究的な学習，プログラミング教育などの充実に努めることも重要である。さらに，小学校，中学校においても，児童生徒の学習の状況によっては教科等横断的な学習の中で STEAM教育に取り組むことも考えられる。その際，発達の段階に応じて，児童生徒の興味・関心等を生かし，教師が一人一人に応じた学習活動を課すことで，児童生徒自身が主体的に学習テーマや探究方法等を設定することが重要である。

スライド 71

○ 高等学校においては，新学習指導要領に新たに位置付けられた「総合的な探究の時間」や「理数探究」が，

・実生活，実社会における複雑な文脈の中に存在する事象などを対象として教科等横断的な課題を設定する点

・課題の解決に際して，各教科等で学んだことを統合的に働かせながら，探究のプロセスを展開する点

など STEAM 教育がねらいとするところと多くの共通点があり，各高等学校において，これらの科目等を中心として STEAM教育に取り組むことが期待される。

また，必履修科目として地理歴史科・公民科や数学科，理科，情報科の基礎的な内容等を幅広く位置付けた新学習指導要領の下，教科等横断的な視点で教育課程を編成し，その実施状況を評価して改善を図るとともに，教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制の確保を進め，地域や高等教育機関，行政機関，民間企業等と連携・協働しつつ，各高等学校において生徒や地域の実態にあった探究学習を充実することが重要である。

スライド 72

その際には，これまでのスーパーサイエンスハイスクール（SSH）などでの教育実践の成果を生かしていくことが考えられる。

さらに，教員養成や教員研修の在り方も併せて検討していくことが重要である。

○ STEAM教育の推進に当たっては，探究学習の過程を重視し，その過程で生じた疑問や思考の過程などを生徒に記録させ，自己の成長の過程を認識できるようにするとともに，社会に開かれた教育課程の観点から，STEAM教育に関わる学校内外の関係者による多様な視点を生かし，生徒の良い点や進歩の状況などを積極的に評価し，学習したことの意義や価値を実感できるよう努めることが重要である。

○ また，実社会での問題発見・解決に生かしていく視点から生徒が自らテーマを設定し，学習を進めるためには，生徒が地域や産業界，大学などと多様な接点を持ち，社会的な課題や現在行われている取組などについて学ぶことが必要である。生徒が多様な機会を得ることができるよう，社会全体で取組を進めることが求められる。

スライド 73

このため，国においては産業界や大学等とも連携し，STEAM教育に資する教育コンテンツの整備を進めるとともに，事例の収集や周知などの取組を進める必要がある。

〇 STEAM教育等の教科等横断的な学習の前提として，小学校，中学校，高等学校などの各教科等の学習も重要であることは言うまでもない。各学校において，習得・活用・探究という学びの過程を重視しながら，各教科等において育成を目指す資質・能力を確実に育むとともに，それを横断する学びとしての STEAM教育を行い，更にその成果を各教科に還元するという往還が重要である。

スライド 74

（5）高等専修学校の機能強化

〇 高等専修学校は，中学校卒業者に対して，興味・関心や将来の進路希望等に応じて柔軟なカリキュラムを編成し，職業教育を基盤とした多様な学びを提供している。また，高等専修学校には，不登校や中退を経験した生徒が比較的多く在籍しており，様々な事情を抱えた生徒にとって学びのセーフティネットとしての役割も果たしている。

〇 こうした役割は引き続き重要であり，国においては，高等教育や就業につながる教育カリキュラムの開発や，高等専修学校と地域・企業等との連携を通じた教育体制の構築を支援するとともに，好事例を収集・分析し，全国の高等専修学校や中学校等へ周知することが重要である。また，各高等専修学校においては，国の委託事業の成果や好事例も参考にしつつ，教育機能の強化に取り組むことが必要である。

スライド 75

中央教育審議会初等中等教育分科会
〇個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた
学校教育の在り方に関する特別部会
〇高等学校教育の在り方ワーキンググループ

1．設置の目的 「令和3年答申」を受 けて、デジタル化などの社会変化が進む次世代の学校教育の在り方について検討する必要があることから、令和4年1月14日に「特別部会」が設置され、

（1）一人一台端末等を円滑に活用した児童生徒への学習指導・生徒指導等の 在り方、

（2）教科書、教材、関連ソフトウェアの在り方、

（3）学校内外の環境整備の在り方について検討することとされた。

このうち、教科書、教材、関連ソフトウェアの在り方については、令和4年2月7日 に特別部会の下に「教科書・教材・ソフトウェアの在り方ワーキンググループ」を設置 し、議論が行われているところである。

スライド 76

高等学校は，既に進学率が約 99%に達し、今日では中学校を卒業したほぼ全ての生徒が進学する教育機関となっているが、高等学校は義務教育機関ではなく、多様な入学動機や進路希望、学習経験など、様々な背景を持つ生徒が在籍しており、高等学校の実態も多様化している。高等学校教育を取り巻く状況を見ると、産業構造や社会システムの「非連続的」とも言えるほどの急激な変化、選挙権年齢や成年年齢の18歳への引下げ、義務教育段階における不登校経験を有する生徒の増大などの変化が生じており、今後、更なる少子化の進行によって、高等学校の維持が困難となる地域・学校が全国的に更に多く発生することも見込まれる。こうした点を踏まえつつ、これからの高等学校の在り方を検討し、高等学校において「令和の日本型学校教育」を構築していくことが必要である。

このため、特別部会の下に、
「高等学校教育の在り方ワーキンググループ」を設置する。
（すでに「教科書・教材・ソフトウェアの在り方ワーキンググループ」
同時に「義務教育の在り方ワーキンググループ」）

スライド 77

2．主な検討事項

（1）高等学校教育の在り方について
（「共通性」と「多様性」の観点からの検討）

（2）高等学校制度の望ましい在り方について
（全日制・定時制・通信制の在り方、少子化が加速する地域における高等学校教育の在り方等）

（3）「スクールミッション」「スクールポリシー」を体現し、
「社会に開かれた教育課程」「探究的な学び」を実現するための校内外の体制について

（4）文理横断的な教育、
産業界と一体となった実践的な教育の推進について

（5）その他

スライド 78

大きな子どもではなく、小さなおとなへ

自己決定

（コロナ禍もあり）「体験」の減少・変容

スライド 79

キャリア教育

自立に向かう一人の市民に

スライド 80

「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」中央教育審議会答申

2011（平成23）年1月31日

職業教育：一定又は特定の職業に従事するために必要な知識、技能、能力や態度を育てる教育

キャリア教育：一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育

スライド 81

キャリア：人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね

2011（平成23）年1月中教審答申
「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」

2016年12月中教審答申

社会の中で自分の役割を果たしながら、
自分らしい生き方を実現していく過程を、
キャリア発達としている。

平成23年に中央教育審議会において取りまとめられた答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」に関する一層の理解と取組の充実が求められる。

スライド 82

目標－現状＝課題

目標は現状の裏返し。現状は変容する。
よって、目標は見直され、課題も変わる。

生徒の現状・学校の現状を把握して、
目標を設定する。

その際、仮説を立てて、段取りを組む。

言語化（文字化）して共有し、
振り返りつつ取り組む。

スライド 83

先生は懸命に教える。
生徒は何を学んでいるか？

スライド 84

○生徒が考えることをしなくなってきているとしたら、「与えられる教育」を受ける中で、考える必要がないことを学んだからではないか。

○基礎をしっかり身につけさせて、そのあとは自分で考えさせる。そうすることで、生徒の自立に向けての成長を支えることになるのではないか。

○知識は重要。知識が、思考や課題解決を支える。すなわち、得た知識を活用することが極めて重要だ。探究するためには、知識を活用すること、活用するための知識を獲得することが必要になる。それらの知識が、問題に気づくことや、課題を解決するための方策を考えるために生かされる。学びが深まり、広がっていく。

○探究を軸にして、教師が「単に教える」から、生徒が「深く学ぶ」へ転換することが必要ではないか。

スライド 85

住宅ローンの金利や期間の比較なども行い、迎えた授業の終盤。先生は、住宅を借りる場合と購入する場合で比較して考えたことをワークシートに記入するよう求めた。

「自分や家族のライフスタイルや将来設計を考えて選択することが必要」

「将来は国外をまわりたいと思っているので賃貸が現実的だが、家を建てて人に貸す方法もある。計画的にお金をためる必要性を感じた」

スライド 86

各自が授業で考えたことを書き込む中、生徒からは「難しいですね」との声も。そんな声に、先生は「みなさんの人生、こういう難しい選択はいっぱいあります」と続ける。「家庭科の授業で『これが正解』というものは教えてあげられない。教えてあげられるのは、いろんな見方があるということ」。先生が生徒に語りかけると、ちょうど授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。

「そこからみんなが何を大事にして判断していくか。それも一生涯で変わっていくと思う。なので、常に情報をアップデートしながら、豊かな人生を送ってほしいと思います」。

スライド 87

＜略＞

いまの若い世代は、将来へのそこはかとない不安があるように思います。人生には自分ではどうにもならないこともあるけれど、目標を持って計画することで準備できることもある。物事のメリット・デメリットを知り、自分で意思決定をしていく力を培ってほしいと思います。（談）

スライド 88

宮崎東高等学校定時制夜間部

生徒が生きがいを感じるための探究活動

毎週火曜日の「総合的な探究の時間」でこのプログラムを行う。

多種多様な感性を持っているために、小中学校不登校の経験があったり、人前で話すことや多人数でいることが苦手な生徒が多いのだと捉え、既存教科の枠を超えた探究活動を利用すれば克服できる（目の色が変わる）可能性があるとし、以下のような内容で行う。

1. 新入年次：思考ツールや哲学対話を通し、自分の好きなところを見つけ探究活動のテーマを設定して、まとめる。
2. 在校年次：各自のテーマに沿って実際に探究活動を行い、まとめる。
3. 卒業年次：今まで行ってきた探究活動の視点から実際の進路実現につなげ、その過程をまとめる。

スライド 89

各年次ごとに①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現を意識しながら最後の発表会につなげていく。併せて総合的な学習の時間の学習指導要領の目標にある「探究の見方・考え方を働かせ、横断的な学習を行い、自己の在り方生き方を考えながら、より良く課題を発見し解決していく」ことを達成していく。

また、少しでも他者との関わり合いを多くし、知見を広めるため、一般社団法人Glocal Academyの岡本尚也代表理事、東京大学の梶谷真司教授、宮崎大学の田阪真之介特別教授などの外部の方と積極的に接する機会を設ける。

三菱みらい育成財団HP

スライド 90

幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）平成28（2016）年12月21日中央教育審議会

＜抜粋＞

第2部 各学校段階、各教科等における改訂の具体的な方向性

第2章 各教科・科目等の内容の見直し

5. 高等学校における数学・理科にわたる探究的科目 p.151～154

（1）現行学習指導要領の成果と課題を踏まえた教科等目標の在り方

スライド91

①新科目の設置の背景

○ 探究的な学習は、学習に対する興味・関心・意欲の向上をはじめ、知識・技能の着実な習得や思考力・判断力・表現力等の育成に有効であると考えられ、高等学校の数学及び理科の分野における探究的な学習を中核に据えた科目として、「数学活用」及び「理科課題研究」が設定されているが、大学入学者選抜における評価がほとんど行われないことや、指導のノウハウが教員間に共有されていないことなどもあって、高等学校における科目の開設率が極めて低くなっている。

スライド92

○ 現在、我が国は様々な課題に直面しており、これらの解決手段としてイノベーションに大きな期待が寄せられているが、研究者には、深い知的好奇心や自発的な研究態度、自ら課題を発見したり未知のものに挑戦したりする態度が求められている。また、革新的な価値は、多様な学問分野の知の統合により生まれることが多く、従来の慣習や常識にとらわれない柔軟な思考と斬新な発想によってもたらされるものである。

スライド93

②新科目の基本原理

○ このような方向性を踏まえつつ、アイディアの創発、挑戦性、総合性や融合性等の視点を重視しつつ新科目の基本原理については、以下のとおり整理することができる。

・ 様々な事象に対して知的好奇心を持つとともに、教科・科目の枠にとらわれない多角的、複合的な視点で事象を捉え、

・「数学的な見方・考え方」や「理科の見方・考え方」を豊かな発想で活用したり、組み合わせたりしながら、

・ 探究的な学習を行うことを通じて、

・ 新たな価値の創造に向けて粘り強く挑戦する力の基礎を培う。

（2）新科目の概要

①基本的な構成

○ SSHにおける実践の状況等も踏まえ、新科目においては、生徒が探究の過程全体を自ら遂行できるようになることを目指し、その基礎を学ぶ段階（「理数探究基礎」）と、それを活用しつつ実際に探究を進める段階（「理数探究」）の2段階で構成することが適当である。

スライド94

○「基礎を学ぶ段階」では、探究の過程全体を自ら遂行するための進め方等に関する基礎的な知識・技能、新たな価値の創造に向けて挑戦することについての意義の理解、主体的に探究に取り組む態度等を育成することが重要である。

○「探究を進める段階」においては、基礎で身に付けた資質・能力を活用して探究の過程全体を自ら遂行し、結果を取りまとめ、発表するものとする。その際、探究の成果としての新たな知見の有無や価値よりむしろ、探究の過程における生徒の思考や態度を重視し、主体的に探究の過程全体をやり遂げることに指導の重点を置くべきである。

スライド95

②指導に当たって留意すべき点

○ 常に知的好奇心を持って様々な視点から自然事象や社会事象を観察し、その中で得た様々な気付きから疑問を形成させるようにすることが必要である。

○ 探究の課題の設定に当たっては、生徒の主体性を尊重しつつ、数学や理科における手法により探究が可能な課題となるよう適切な示唆を与えることが必要である。その際、生徒が既に身に付けている手法を前提に、これを適用できる課題を探すような順序とならないよう留意しつつ指導することが求められる。

スライド96

③新科目の評価の在り方について

○「理数探究」の評価に当たっては、探究の成果における新たな知見の有無や価値よりも、探究の過程において資質・能力をどの程度身に付けることができたかや、探究の過程全体を俯瞰的に捉え、自らがどの位置にいるか、どこで間違ったのかなどが説明できるようになっているかという点を重視すべきである。

スライド 97

○ 探究の過程における観察・実験の内容やその中で生じた疑問、それに対する自らの思考の過程などを「探究ノート」等に記録させ、自己の成長の過程を認識できるようにするとともに、評価の場面でも用いることが重要である。
また、「探究ノート」等を通じて生徒の独創的な思考や探究の過程における態度を評価するほか、報告書や発表の内容、発表会における生徒による相互評価や自己評価を取り入れるなど、多様な評価方法を用いるとともに、複数の教員による複合的な視点で評価することが必要である。

スライド 98

④教育環境の充実等

（校内体制）

○ 数学及び理科の教員を中心に全校的な指導体制を整えることが必要。「理数探究」の指導に当たっては、1クラスの生徒に対して複数の教員が指導。

（教材の提供等）

○ 探究の進め方等に関する基礎的な知識・技能、新たな価値の創造に向けて挑戦することについての意義の理解、研究倫理に関する基本的な理解など、「理数探究基礎」における学習内容を適切に指導。

（教員の養成・採用）（施設・設備等の充実）
（大学、研究機関、企業等との連携）

スライド 99

幼稚園教育要領　2017（平成29）年3月　前文

幼児の自発的な活動としての遊びを生み出すために必要な環境を整え，一人一人の資質・能力を育んでいくことは，教職員をはじめとする幼稚園関係者はもとより，家庭や地域の人々も含め，様々な立場から幼児や幼稚園に関わる全ての大人に期待される役割である。家庭との緊密な連携の下，小学校以降の教育や生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら，幼児の自発的な活動としての遊びを通しての総合的な指導をする際に広く活用されるものとなることを期待して，ここに幼稚園教育要領を定める。

スライド 100

教師の満足度と生徒の幸福度

「顧客」の満足を生むのは「従業員」の満足であるという。
品物を提供する職業もそうだろうが、
学びを提供する教師ならばなおさらであろう。
生徒や保護者の満足は、
教師の満足なしには生まれない。
もとよりこれは自己満足ということではない。
たとえば、探究心のない先生に出会うことで、
生徒の興味関心が引き出されるだろうか。
教育という仕事を面白いと思わない先生と一緒にいて、
生徒は幸せだろうか。

スライド 101

記念講演２

トランジション実現のための影響の大きな高校・大学での学びを理論的、実証的に示す

［講　師］　溝上　慎一（学校法人桐蔭学園 理事長／桐蔭横浜大学 教授）

（スライド１）皆さま、こんにちは、溝上でございます。荒瀬先生のお話を受けて、今、特に資質・能力が文部科学省の大きな柱・テーマになっておりますが、それと探究、この２つから高大接続、トランジションを議論したいと思います。私は、学術的なベースでデータや理論を取りながらお話しをするようにしていますが、先ほど、荒瀬先生が最後に言った、共有知識や共通の基盤とは意味が違いますが、政府の文書、言葉は非常に大事ですので、できるだけ皆さんとチャンネルを合わせて、両面でいろいろなお話しをしたいと思います。荒瀬先生のお話を聞いていると、私は我流のようで、合わせているのも無理やりなところがありますが、荒瀬先生の話を受けて、私が考えているところをお話しする時間とさせてください。

（スライド２）今日は、河合塾の方も来られていますが、10 月 1 日に 10 年トランジション調査の最終成果報告会がありまして、データから、高校・大学・社会と、どういうところがポイントになって、課題になるかということをお話しします。参加されていた方もかなりいらっしゃいますが、改めて確認してくだされればと思います。かなり込み入っていますので、何回も聞いてほしいと思います。データの結論や考察を聞くだけではなく、いろいろな施策、実践につなげていくことが大事ですので、そういったところを意識しながらお話しするのが前半のパートです。

（スライド３）後半は、高校・大学の接続課題はたくさんあるのですが「探究」はキーワードというか中核課題になっていると、この１年、考えております。ただ探究だけではなく「教養」です。ほとんどの高校の先生方は、教養という言葉で考えられていないと思いますが、大学から下ろして考えると、非常に教養的なのです。後ほど言いますが、大学教育の中で「教養教育」は尻すぼみでありまして、どうしようかという状況ですが、全く違う角度から探究が大学につないでいっている。そのように見えておりますので、その根拠になるところをお話ししたいと思います。

（スライド４）まずは「10 年トランジション調査」です。これは 2013 年に全国の約 400 校の高校、45,000 人の高校生が参加して、約 10 年間を追いかけるという調査でした。６～７割以上の生徒が大学に進学する学校を抽出して、お願いして、ランダム抽出ではありませんが、全国の多くの学校にご協力いただいた。高校から大学のところでごそっと抜けたりしますの

で、河合塾の方々には大変頑張っていただき、10 年近くたって、最後は 1,500 人とかなり残りました。非常に大きなデータになっていると思います。

今日は、そこからお話しするのですが、そもそも、なぜ、このような調査を行おうと思ったのかという前文脈は非常に大事です。それは、高大接続、トランジションが最初にあったわけではない。私は、大学教育の改善・改革を 30 年くらい行ってきているのですが、大学では、いわゆる教授がぼそぼそと古いノートを読み上げる講義で、一方通行といったところから、学生が学び成長する学習者本位や、荒瀬先生の言葉を借りれば「生徒を主語にする」という教育観が世界的に急速に進む中で、大学教育が変わってくる。こうした中で、データもいろいろと蓄積されて分かってきたのが、たとえ大学が学習者本位で、いろいろな改善・改革が進んだとしても、初期値が非常に重いということです。

大学に入ってきた１年生のときの状態が４年生を既定するというのは、経験的にも分かっていたし、限られたデータでしたが、ＧＰＡでも４年間、変わらず、動かない。さらに分析をすれば、大学１年生のときにＧＰＡが低かった学生が上がっていったり、高かった学生が下がっていったり、山になったりすることが想定されたわけですが、そういった結果は出てこないのです。これは、いくら分析を行っても出てきません。それはＧＰＡだけの話なのか。今日のテーマになっていて、私にとっても非常に大事なテーマですが、キャリア教育、キャリア意識というところを見ても、やはり大学１年生でよいと思えば、４年生でもよいのです。１年生のときに「厳しいな。なぜ、この学生は高校までに、ここをもう少し鍛えてもらわなかったのだろう」と思う学生は、そのまま行ってしまうケースが多い。こういったことをさらにデータで明らかにしたいというところから、調査を始めました。

2013 年に始めていますが、その当時は、政府では審議があったのですが、世の中的にはまだ高大接続という言葉は一般化されていなくて、この後、合流していきます。高大接続を見据えて、この調査が始まったわけではなく、大学で学び育てるために、高校にきちんと接続してもらいたい。高校の先生方が「大学受験が一番大事」「いろいろ我慢しても、大学にとにかく入れ」「大学に入ったら好きなことをして」と言うことが駄目だという話を実証的に示すために、この調査を始めたわけです。たくさん我慢して大学生になっても、それまでにしてこなかったことは大学生になってもできない。大学でいろいろと育てようと思っても、学生自身にその意欲がないのです。そういうマインドセットは、高校までにしっかりと出来上がっていて、キャリア意識も大きいです。自分が成長しようと端から思っていない。そういう学生たちには、授業も、アクティブラーニングも、キャリアも何もないということが大学のいろいろなところで出てくるわけです。このようなところから、この調査が始まり、高大接続改革が合流し、現在に至る。こういうことを少し頭に入れておいてください。

10 月１日に報告した資料をそのまま使いますが、今、本にまとめていまして、来年の春くらいに出てきますので、また皆さんにご案内したいと思います。今日は報告だけですが、聞いてください。

（スライド５）大きく２点、ご紹介いたします。１つは、資質・能力のアセスメントの測定にはいろいろな方法があって、必ずこれが素晴らしいという方法ではないのですが、自己評定で幾つか項目を与えて、因子分析をしながら得点化していく。自己評定は駄目だとよく言いますが、そのようなことはなくて、非常に極端に付ける人は上にも下にもいますが、全体的には、やはり、自分の能力評定は心理・社会的なものですから、自己評定で行ってもおよその人は自分がどのくらいの位置なのか分かっているというのは、統計的に見るとよく分かります。例えば、河合塾のＰＲＯＧテスト・学びみらいＰＡＳＳで相関を取っても、点４や点５が出てきます。統計的な指標としては、それくらいでよいのではないですか。そういう意味で、中身は細かくお話ししませんが、資質・能力の「他者理解力」「計画実行力」「コミュニケーション・リーダーシップ力」「社会文化探究心」という４つの得点を取って、自分が前年にどのように答えたかは分からない形で、高校生、大学生、社会人と、毎年、とにかく、そのときに思う形で付けていく。そのように点数を取っていく。そして、潜在クラス成長分析という統計的な縦断研究プロセスを扱う手法を使っているのですが、統計的に解析すると、こういう結果になる。

なぜ、社会人で落ちているのかは分かりません。リアリティショックとも言われていますし、よい意味でも、悪い意味でも大学生までの肥大化した自己肯定感からの落ち込みともよく言われます。この調査からでは分かりませんが、ポイントになるのは、高クラス、中クラス、低クラスという非常に簡単な線、交差しないクラス、これしか抽出されないということです。これを３本ではなく５本にすることは可能です。間をもう少し取って、最適解を増やすことはできます。しかし、それは中の上が増えたり、中の下ができたりして、話が複雑になるだけで、やはり、クロスはしないのです。後ほど、クロスするものもお見せしますが、この資質・能力の観点でいうと、想定を全て裏切ってくれた人は、それほど多くはなく、クラス移動するほどには大きく変化をせずに、年を経ていく。

これは後ほどまとめますが、人は変わらないから教育は要らないという話ではないのです。このグラフから読み取って、実践につなげることは２点ある。１つは人の発達とは生まれたときから、心理学的に言うと胎児のときから、遺伝に影響を受けながら、そして小さいときから人や社会との相互作用の中で徐々に育って、蓄積されていくものですから、18 歳や 20 歳になって、いきなりゼロベースで上がったり下がったりするとおかしいです。逆に言えば、発達を踏まえれば、この結果は非常に妥当で、ここが複雑に重なるようであれば、人の発達とは何だという、大きな課題が出てきたところです。

もう一つは、これは社会人まで行い、縦の幅を狭めているので分かりにくいですが、大学生までのところで見ると少し上がっていたのです。こういう分析には傾きという指標があって、高校２年生から大学４年生までのグラフの右肩上がりの傾きが有意で出てくる。つまり、大きくはないが、得点は上がっていました。高群、中群は、全体の８割の人たちのサンプルになります。低群は少し落ちたり平行であったりするのですが、高群、中群の８割の人たちは得点が上がっていて、これも先行研究とかなり合致しています。私たちとは違うところで行っている、いろいろな指標・調査等で、大学１年生から４年生の資質・能力は全国平均では上がっていく。なぜ上がっているかは置いておいても、大学生は４年間でかなり成長するという研究知見はあります。それにも合致しているので、なるほどと。クラス移動するほど大きく変化はしないが、それぞれのクラスの中で得点が上がって、大学生は成長している。これは、後ほど発達と成長という言葉を分けてまとめていますので、

今はここだけ聞いておいてください。

（スライド６）お見せしたい大きな結果の２つ目ですが、この数値を見てもなかなか難しいので、私の話を分かるところだけ聞いてください。この図の中に、パス解析で、同じ人の高校２年生、大学１年生、３年生、社会人３年目の４地点を取っています。実は、間も取っているのですが、あまり取り過ぎて分析を複雑にしても分かりにくいので、４地点に絞っています。変数も、さらにたくさん取っているのですが、学びと成長に資する学習キャリア変数はおよそ分かってきまして、10 年前とは全く状況が違い、ずっと取ってはいるが、使うのはこの辺だけでよいかという知見の蓄積の上で、このパスモデルがつくられています。トランジションモデルと呼びます。

まず１つは、この扱った投入変数に、社会経済的地位、いわゆる社会階層と呼ばれるものは入ってきません。私たちのプロジェクトチームには社会学の人たちにも入ってもらい、親の学歴や年収をかなり見ました。あるいは、地方からの移動といったものが、このトランジションモデルには効いてこないので、外している。なぜ効いてこないかというのは、まだ考察が必要ですが、ただ、よく言われてきたのは、小学校や中学校のときの学力は社会階層が非常に大きく効いてきます。しかし、大学進学者層に絞っていくと、社会階層差が消えていくというのは、世界で報告があって、おそらく、日本でも。そこがプロジェクトの１つのポイントになるところだと言われています。

２つ目に、このように高校生からの時点を取って、一括で構造分析しているわけです。これは「組織社会化」という変数。特に初期キャリアです。就職して３年から５年くらいの社会人に取っていくアセスメントですが、職場に適応しているか。つまり与えられた課題にしっかり取り組み、職場の上司・同僚、あるいは営業など外の人たちとの関係をうまく行って、与えられた職務をきちんとこなしているかという社会適応です。その職場での社会適応を「組織社会化」と言いますが、こういう得点が１つ。それから「能力向上」です。これは、さらに年を取っていってもそうですが、自分が一歩でも二歩でも上を目指して頑張っていくような、能力向上得点。それから、先ほど、問題にした「資質能力」というように、大きく得点化しています。

この高校２年生のときのある状態がバシッと効いてくるという結果になっていれば、大学はあまり関係なく、高校の間でかなり決まりますという話になります。しかしながら、いろいろな分析を行っても効いてきません。実は、細い線でつながっているものがあって、全く効いていないことはないのですが、取り上げるほどの大きな影響は出てきません。どこから出てくるのかというと、ここで言う「ＡＬ外化」。つまり、アクティブラーニングをきちんと行えて、それが自分の手応えになる。ただしているのではなく、議論や発表を通して自分の勉強になっていたり、世界観が広がっていたりという得点が残ってくる。私たちは、ずっと高校生から大学生を見ていて、あるいは経験的に見ていて、もう少しキャリアが効いてくると思っていたのですが、これだけ変数を投入して、統制というのですが、互いの影響力を全て捨象して、何が残ってくるかという分析をすると、残ってきたのはアクティブラーニング。全く狙っていないのですが、そういう結果になっている。大学４年生も取っているのですが、ここでは大学３年生でモデル化していて、特に大学３年生のアクティブラーニングが効いてくるということです。

ただ、この社会人３年目に効いてくるのが、その手前の大学から仕事・社会への移行のところではあるのですが、こちらを見てもらうと、これはこれで線が通っていますよね。これは、どういうことを意味するかというと、高校２年

生のところで縦の線を引いています。そして、大学３年生のところでも縦の線を引いています。高校２年生から大学１年生への移行が、まず１つあるのです。ここで効く・効かないというのが、少し分かりにくいですが、特に「勉学タイプ」というのは、いわゆる進学校に多い生徒のタイプです。勉強もするし、クラブ活動もする。勉学タイプと付けているのは、家庭学習をかなりする生徒たちだからです。学びと成長で言えば、家庭学習をする・しないだけで高校生はかなり分かりやすく分かれます。

「二つのライフ」と呼ばれるのは、キャリア意識です。二つのライフはフューチャーライフとプレゼントライフの組み合わせで、将来のことを思い描き、それを実現するために日々頑張るという、将来表象（時間表象）と日常のリアルな空間をつないでいく。これは、いろいろな意味でかなり効いてくる変数で、ただ将来のことを思えばよいかというと、そうではないですね。日常の生活・行動でも頑張らないといけない。主体的な学習や、もちろん、授業外学習時間にもかなり効いている。

そこから、もし大学３年生や社会人３年目に直接パスが通っていれば、高校生のときに家庭学習をし、クラブを両立し、自己肯定感が高く、行事なども中心で頑張っていた人が将来を決めるという話になるのですが、ならない。そのような結果は出てこない。つまり、高校生の間は、それは非常に大事で、大学１年生でつないでいくところでも、かなり効いている。しかし、大学に入ると、仕切り直して、これまでに培ってきたそういう態度や意識を持って、大学バージョンとして発展させていく。そのため、高校２年生から大学１年生のステージが１つ。大学生に入って１年生から２、３、４年生と進んでいく、大学生の期間で２つ。それから、大学から社会に大きく環境を変えて、大学までに培ってきた資質・能力や意識・態度をつなげて、社会人として頑張る３つ目のステージ。これらが、それぞればらばらに組み合わさって、積み重ねで、人はトランジションしていくのです。

こういったものを学術的には間接効果と言います。つまり、先ほども言ったように、直接効果は出てこない。しかし、間接的にはつながっています。そのため、勉学タイプはこの「二つのライフ」や「主体的な学習態度」が、高校から大学にかなりつながりますが、つながった後、大学生を１から３年生につないでいくこの太いパスに入れていますが、ここに行くかどうかは分かりません。しかし、仕切り直して、つないでいけば、いろいろとつながっていく。ずっとつないでいけるとよいというのが、２つ目のお話です。

それから、３つ目は、大学１年生と３年生の間に太いパスがあります。やはり大学１年生から３年生にかけて、この変数はほとんど変わらないです。一番変わらないのは、この結果でいうと「主体的な学習態度」です。これは、例えば、このように聞いているときに、ただぼうっと聞いているのではなく、自分なりにメモを取ったり、考えたりしながら聞いているという主体的な課題への関わりや、あるいは、レポートを出すときでも、ただ字を埋めて出せばよいではなく、自分でいろいろ吟味して、頑張って書いたと言えるレポートを書こうとする。発表のときでも、ただ与えられたスライドを読み上げ、聞いている人の時間の無駄のような発表ではなく、みんなに聞いてもらいたいと思うようなものを、自分でいろいろブラッシュアップして、元気よく発表していく。そういった態度を取っています。これは尺度で「.56」です。このパス解析で「.56」という数字はなかなか出てこないくらい大きいです。あとは、成績で「.54」です。ＧＰＡが変化しないのも、ここできれいに表われています。

他方で、動かない話として、冒頭でも言いましたし、私もいろいろなところで言ってきたのですが、こうして分析してみると、１番上の「二

つのライフ」、キャリア意識として使っている変数ですが「.37」。つまり、変わりにくいが、変わらないわけではないという考え方が、ここから出てきます。そのまま行ってしまう人が半分いるが、半分は動く。したがって、ここに教育の可能性はある。もう一つが「ＡＬ外化」です。先ほど、これが社会に効いてくると言いましたが、これも「.39」です。１年生のときにできているからといって、３年生でできるとは限らないですし、逆もしかりです。１年生のときにできていなくても、３年生でできるようになる人もいます。あとは「授業外学習時間」です。このようにして、変わりにくいと言われているものの中でも、変わりやすい部分が見えてきたのが、今回の最終成果の１つのポイントになります。

（スライド７）先ほど、アクティブラーニングは変わりやすい、数字でいうと「.39」と言いましたが、どのような話かというと、大学４年生のときの調査報告書で使った図をそのまま持ってきていますが、このようなものです。つまり、アクティブラーニングの得点が、大学１年生、２年生、３年生、４年生とあって、先ほどの資質・能力の４つのところで見せた、潜在クラス成長分析で分析を行っています。どれくらいの最適解があるか。このように分析をすると、先ほどの資質・能力と違って、ずっと動かない高・中・低というクラスがやはり出てきます。横にパーセントを書いていて、見えにくいと思うのですが、およそ 70%から 75%で高・中・低が成り立っています。つまり、70%の人は、アクティブラーニングといえども、そのまま行くということです。しかし、統計的に、低から高に上がっている人、低から中に上がっている人、もちろん落ちている人、この３つが出てきます。これで 25%です。この辺りが、大学生の大きく変わっていくと言われる、可変性の部分。つまり、先ほどの「.39」ですが、変わりやすいと言われても、これくらいです。大学生はなかなか変わらないというのは、１つ言えると思います。これは最後の私のまとめにつながってくるところですが、やはり、義務教育をはじめ高校以前で、きちんと育て、リレーしていくことが大事になるということが最終成果で見えてきたと言えます。

（スライド８）よく受ける質問を３つ取り上げ、このトランジションプロジェクトの深掘りをしたいと思います。「大学の偏差値が高ければトランジションは成功するか？」。皆さんの資料では「No」と単純に書き過ぎてしまったので、少し直しました。「Yes&No」としておきます。「Yes&No」というのは「Yes」でもあり「No」でもあるが、基本的には「No」です。つまり、このトランジションモデルの右側の、先ほどから申し上げている「組織社会化」「能力向上」「資質能力」といった、いわゆる仕事をしていく社会人としての能力、態度に、大学の偏差値は統計的には効いてきません。どのように行っても、偏差値はあまり関係を持ちません。そのため、基本的には「No」です。ところが、先ほど言った、高校２年生のときの勉学タイプですが、家庭学習をして、クラブ活動もして、自己肯定感が高く、行事にも参加する、非常によい生徒たち、進学校に多い人たち、進学校に多い結果が、高校２年生で出ているのです。やはり学歴や受験偏差値などと関係がありますので「Yes」を加えました。ただ、そこが良ければその後も続くというわけではないのは、先ほど言った、間接効果の話としてご理解いただいて「Yes」の部分は小さいということです。

（スライド９）２つ目は、先ほどの荒瀬先生のお話の中で出てきた「キャリア意識」。私も、これはずっと非常に大事だと言ってきました。ただ、先ほどのモデルの中では、アクティブラーニング外化が最後にバシッと効いてきたが、キャリア意識の直接的な影響は、このモデルでは示されませんでした。どのように解釈したらよいのか。１つは、同じ学年の中で、ここに示

している５つの変数は、かなり相関が高いです。つまり、どれも違ったアスペクトを扱っていて、その中でどれかというと「ＡＬ外化」が効いてはきたが、ほかは要らないのかというと、そのようなことはなく、例えば「成績」。やはり成績は高いほうがよいです。与えられたものをしっかりこなしているという意味で、トランジションには効いてはこないかもしれないが、実は残り４つはかなり効いてくるのです。それらと同じように、キャリア意識というのは、同じ年度だけで見ていくと、この「二つのライフ」ではかなり効きます。先ほどの、高校２年生の勉学タイプも、大学生までかもしれないが、どのような大学に行ったらよいか、将来このようなことをしたいなど、将来の意識がかなり出てきます。つまり、キャリアと学習にはかなり相関はあるのです。これが１つ。つまり、ＡＬ外化が効いていたか、これだけでよいということではなく、いろいろなものが連関して人の学びや日常生活、大学生活は成り立っているということです。これが１つ。

もう一つは、このモデルは大学卒業後、社会人３年目までのいわゆる初期キャリアまでのトランジションモデルです。初期キャリアというのは、皆さん、ご存じのように、22 歳から 25 歳くらいですから、職場に行って、与えられた課題を一生懸命こなし、職場の同僚・上司といろいろうまく仕事していきましょうという、いわゆる適応のプロセスです。そこでキャリア意識が効いてこないのも、分からなくはないです。むしろ、きちんとこなせて、人とやりとりし、議論ができるというように、アクティブラーニングが効いてくるのは妥当な結果とも言えます。しかし、20 代後半、30 代、40 代と、いろいろなプロジェクトベースで、特に主任や課長にポジションが上がって、この会社は何のためにあるのか、この商品はお客さんにとってどういう意味があるのか、自分は何のために仕事をしているかなど、いろいろと考えることが非常に大事になる。大学生でも、自分はなぜ勉強しているか、将来何になりたいかがなければ、勉強しないですよね。勉強だけが大好きなんて、京都大学の学生でもそれほどいなかったです。やはり、将来のことがどこかにあって学んでいた。それはみんなが共通するわけです。このトランジションモデルの社会人の年齢をさらに上げていくと、キャリアの意味がさらに上がってくる。そして人生 100 年時代、このようなところまで行くと、非常に大事になると私は考えています。ここは考察です。

（スライド 10）３つ目の質問ですが、先ほどの図でも「高校生、大学生が発達的に仕上がっていても、教育しても仕方がない」と、必ず言われてきました。そのようなことはありません。クラス移動するほどには変わらないが、大学生の中では変わっていっていると言えます。先ほど、傾きの話をしましたので、この図だけからでもそれは言えます。

（スライド 11）ただ、もう少し肉付けをするという意味で、皆さんにはこういうデータをお示しします。これは何かというと、別の調査ですが、大学３、４年生を対象に「あなたは、入学してから自分は成長したと思いますか」と直球で尋ねています。７割の人が多かれ、少なかれ、成長したと答えています。これでよいではないですか。

ここはもう少し理論的考察が必要で、今、示せるのはここまでなのですが、それでも 10 月１日よりもアップデートしています。小さいときからの「発達」は成熟の問題です。人が大人になるという発達。これらは matured や maturation という言葉を使っていて「成熟的発達」を「matured development」と置いてみる。私たちが「成長」は何と呼ぶかというと、growth などがあるが、英語的には development なのです。development は「成長」と重なるので、psychological や subjective と付けてもよいのではないか。つまり、大きなクラス移動

はしないが、自分が一歩でも二歩でも上に向かって、主観的にできるようになってくる。ここでは「psychological」と書いていますが、最近は「subjective」がよいと思っているのです。そのように理論的に考えなければならないというのは、今後の課題なのです。ただ、maturedではない発達の一般的な形は、ここに書いたように「生じること」「単純から複雑へ進歩すること」「あるテーマをつくりあげること」「開くこと」「より発展した状態に移行すること」。クラス移動を伴わないとしても、これらがあれば発達、成長と言えるという議論があるのです。それで十分ではないですか。私たちが年老いても、これがあれば成長しているというと、十分通ってきます。今は、ここまでですが、こういうところまで来ているということです。

（スライド12）残りの時間で、探究が高大につないでいく中核的なところと私が申し上げた、その話をしたいと思います。

（スライド13）まず、先ほど、荒瀬先生から、政府の施行、共通理解のお話がありましたが、そこがかなり絡んできます。ただ、私は「主体的・対話的で深い学び」とは書いていないので、高校の方はうまく翻訳しながら聞いてください。大学には、主体的・対話的で深い学びはありません。大学では、まだ「アクティブラーニング」を使っていますので、かっこしてアクティブラーニングでつなぐ。私はそれくらいでよいと思っています。

まず、アクティブラーニングがどういうところから出てきたかというと、このような講義です。教師から生徒・学生への一方通行的な知識を伝達するようなものを乗り越える形で、学習者本位に。政府の言葉で言うと、学習者が「何を教えるか」「何ができるようになるか」、あるいは「何を学び、何ができるようになったか」。それを見ていきましょうというところから。講義一辺倒から学生の活動を通して、学生の認知プロセス。頭の中で何が働いて、それを外化し、自分が学んだことを紙に書き出したり、他者に伝えたりする中で、自分の頭の中の学びをより構造化していく、あるいは、整理していく、次第に知識を追加していく。そこがアセスメントのポイントだということは、どのように言っても、いろいろな立場があっても、アクティブラーニングという言葉を使うときのポイントになります。

（スライド14）ただ、アクティブラーニングは「学習パラダイム」と呼ばれる代表として、広く一般的に出てきた言葉です。「教授パラダイム」への対応は、意外と議論がずさんでして、私もそういう言い方をしてきたのですが、teachingからlearningへ。あるいは政府の言葉で言うと、ここに書いてありますが「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」という、〇〇から〇〇への転換を言っています。先ほどの荒瀬先生のお話でもあったのですが、教えることも学ぶことも大事で、学校教育で教授パラダイムを否定すると終わってしまいますので、その理論的整理が必要だ。そういうときに、アメリカでジョン・タグという、学習パラダイムで有名な論者の先生が、後期の本の中で、これは私が書き直していますが、このような図を使って説明しているところがあります。つまり、学習パラダイムというのは、確かに、学習者中心の何を学んだかですが「教授パラダイムの枠」を踏まえて、そこを超えた空間に学生たち、子どもたちを移動させることだ。つまり、私たちは授業である以上、この枠のところで共通する学習目標を立てているわけです。これだけの知識は学ばせたい、これだけの態度や議論はみんな共通に到達させたい。これは学習目標ですので、そこは全員到達を目指す。しかし、リフレクションなど自分で書いたり、あるいは他者と議論したり、グループでいろいろ議論したりしていくと、生徒・学生の生活・経験世界が広がる、あるいはこれまでの既有知識、世界の疑問が出ます。教師が予定した話を軽く

超えていくものであって、私はそれが大事だと思います。自分の考えが出てくるくらい、この枠を超えるくらいのペアワーク、グループワーク、発表を、年間のどこかで時々入れていくことができればよい。そのようにできなければ、言葉遊びをしたいわけではないですので、アクティブラーニングや主体的・対話的な深い学びといっても仕方がないです。そういうところにタグ先生の１つの見方があって、さすがだと思っているわけです。つまり、教授パラダイムの枠を踏まえながら、学習パラダイムも発展させる。

（スライド 15）それを政府の図式で当てはめていくと、これも荒瀬先生が先ほど示されましたが「習得・活用・探究」。非常によくできた考え方だと私は思います。つまり「習得」は普通の教科で、どちらかというと教えることが多い、教科書中心の授業。それは、もちろん、教授パラダイムが多くの割合を占めるが、多少の振り返りや、あるいはペアワーク、グループワークを少し入れて、２～３割の活動時間を入れていく学習パラダイムがある。「活用」は飛ばします。総合的な探究の時間を１つ念頭に置きますが「探究」でも、生徒が自分で課題を発見して、情報収集するだけではないですよね。課題のセットの仕方、問いの立て方、情報の集め方、分析の仕方はきちんと教えていますよね。そのため、多少は教授パラダイムがある。しかし、学習パラダイムのウエイトが大きい。このように考えれば、習得・活用・探究というのは、先ほど、荒瀬先生が全ての組み合わせをおっしゃっていて、すごいと思いましたが、くるくる回しながら、あるいは飛ばしてもよいのです。行ったり来たりしながら、学びの過程として総合的に捉えていくものである。これがゆとり教育を脱却して、現在、基礎・基本をしっかり踏まえながらも、生徒の共通知識を基盤にしながらも、個性化を目指していく１つのポイントになっている。

それは、伝統芸能の「守破離」という考え方にも共通していて、本当に、いろいろなところの考えがここに集約してくる。例えば、伝統芸能も能や歌舞伎をイメージしてもらうとよいと思いますが、やはり、現代に合わせた個性的な舞台や劇をつくっていかないといけないです。しかし、何百年の歴史や先達がつくってきたいろいろな技芸がありますので、それをしっかりと学んでいくことが「守」の部分です。基礎・基本の部分は、非常に大事。しかし、これだけのいろいろなエンターテイメントにあふれた私たちの現代社会において、それだけをしていても、能や歌舞伎を見ても面白いとは言わないですよね。それを面白いと思うためには、いろいろな知識や勉強が必要だ。プロの人たちもそれを学んで、そして、それを破って、離れていく。この守破離というのは、まさに習得・活用・探究と全く同じダイナミズムがあると私は思っています。

（スライド 16）ここは大事だと思って入れていたので、一言だけ。人の発達から見ると「時間」と「空間」、特に空間から人の発達は始まっていくのです。最初は、お母さん、養育者との関係をつくって、地域やいろいろな友達、知らない人、社会、共同体に広まっていく。そのように生活空間や社会空間を広げていく形で、人の発達はあります。教材もそうですよね。小学生の最初は身近な世界から始まって、徐々に地理的に遠いところに行く。時間的にも、まず

は現在のいろいろな事々を学んでいくわけですが、小学生の終わりになると歴史や古文、地理など。中学生になると、私たちが行ったことがない海外の国のいろいろな状況が出てくる。このように、教材というのは、あるいは教育や人の生活空間、時間というのは、いろいろな形で広がっていくようにデザインされています。発達的にも言えるし、教育もそれに対応させて構造化されている。

ところが、人は小学生の終わりくらいから中学生くらいから自我が芽生えてきて、与えられたように空間を広げたり時間を延ばしたりしなくなります。それは小学生の終わりくらいまでで、あとは自分が分かればどんどんそのようにするし、分からなければ、今のこの世界で十分で、好奇心がないから新しい人と出会う必要もないなど、拒絶していくわけです。私たちが探究や個性というときに、やはり、社会生活や社会空間をさらに広げてくれないと個性は出ないです。今の友達で十分だといえば、新しい人とつながろうともしないし、新しい知識も学ぼうとしない。将来のことに関心を持たせたいが、社会に関心を持たない生徒・学生が、将来のことを考えるはずがない。こういう空間と時間というのは非常に密接に関連していて、学術的には時間と空間はそれほど対応がないのですが、実践的にはこの２つは非常に関係がある。そのため、将来のことを考えさせたいのであれば、社会のことをいろいろと学ばせる。社会のことを学ばせながら、自分がどういう大人になりたいのか、どういう社会人として生きていきたいのかを考える。これが時間と空間の拡張なのです。

（スライド 17）データで見ても、時間と空間の弱い人は、社会でも非常に弱い。

（スライド 18）あまり説明しませんが、右の点数の低い人たちは、時間・空間が弱い人と思ってください。しかし、こつこつと真面目に行う人もいるのです。先生たちが与えた課題を一生懸命こつこつと行って「頑張って大学に行きます。でも、将来のことは分かりません」という人は、この右の２つです。学力、偏差値は関係ありません。人の発達を考えたときの得点です。

（スライド 19）最後です。冒頭で申し上げましたが、探究というのは時間・空間の拡張を目指していく。つまり、社会での、あるいは自然や人など何でもよいが、自分が疑問だと思う世の中の問題を課題として設定し、どうにかしてその根拠を得て、情報収集をする。こういう話ではないですか。時間・空間の話をたくさん行っているわけです。探究や総合学習は、学校教育の流れの中で出てきたと思うかもしれないが、そのように考えるのは、実は、大学では「教養教育」と言っていたものなのです。かつての大学と違って、今の一般的な大学では、ほぼ専門の先生が下りてきて、ミニ専門をしているだけで、知識として一般性はあるかもしれないが、その知識を通して、あなたはどういう大人になりたいか、社会でどういうことを考えていきたいかというところまでなかなか行かない現実があります。

吉田文先生は、早稲田大学の教授で、おそらく、この日本で、一般教育あるいは教養教育を最もよく見ている先生の一人です。私はYouTube のチャンネルを持っていて、いろいろなトップの専門家たちにインタビューをして、皆さんに配信しています。ＱＲコードがありますから、良かったら見ていただければと思います。大学の話は出てくるが、大学以外の話は出てこないのです。そのため、吉田先生が見ていないのは、確認しました。吉田先生が見ていないということは、大学のほとんどの人が見ていません。最近は、ミニ専門はいろいろあるが、社会について考えさせない。昔の先生は、下手な講義だったかもしれないが、よく社会について考えさせることがありました。今の先生たちは、学問にしか関心がありませんので、一般の

学術知しか教えていない。

大学は、それではいけないと思って、大学１年生や２年生の前半期にプロジェクト学習やサービスラーニング、キャリア教育という名の下に、学生たちが調べて行うことを少しは入れています。しかし、私は、高校のほうがすごいと思いますよ。これは、高校の探究や行事を通した探究活動とほぼ同じ。今、大学でしようとしていることを、高校でしているではないかと思ったのです。

（スライド 20）教養として足りないところが１つあると思っていたところに、皆さんも小論文の指導でよく知っているかもしれないが、学研の大堀精一さんからこの本が送られてきたのです。大堀さんが、漫画でもう少し高校生の小論文指導をしたいと思い、つくられたのですが、読み始めると、小論文の書き方の話はほとんど書いていなくて、小論文を読んで出てくる、社会格差やＡＩ、医療、福祉、エネルギー、環境など、世の中にいろいろある小論文テーマ、課題テーマについて、これくらいは知っておかないと、幾ら文章を与えて、自分の考えを述べなさいと言われても書けるわけがないという前提で、11 章あるのです。そのようなテーマ別に知っておかないといけない知識を網羅して、漫画で描いている。皆さん、だまされたと思って、これを読んでみてください。私は、最初、漫画だと思って気を抜いて読んでいたのですが、非常に難しいですよ。分かりやすいのは、ＡＩやデジタルなどを議論するときに、ＧＡＦＡも知らないでものを言えるのか、ＧＡＦＡがあるのだよという話が出てくるわけです。

そのときに、思ったのです。それは、本当は大学が教養教育の時間で教えていたことではないのか。それは網羅的ではないので、つまみ食い程度。小論文の受験は高校生全員がするわけではないですが、20 年以上の歴史があって、教科にはなっていないが、皆さん、小論文はもう高校生に入り込んでいますよね。その１年間の指導のところで、どこか探究の時間を使って、必要なところだけでも読ませて、覚えさせればよい。もう大学の教養は要らないと思いますよ。つまり、知識を大事にしている。小論文の書き方には、もう一つ『小論文 書き方と考え方』という彼の本があるので、それも読んでみるとよいと思います。これは知識の話です。高校生に、多少なりとも知識も大事という話でもって探究の話をしていけば、これは立派な教養教育で、大学をさらに短くして、早く社会に出したほうがよいです。今の大学では駄目だと、ずっと思っているのですが、高校は、頑張っているのではないか。そういうところで高大接続を考えていくのが、私の最近の仕事です。

（スライド 21）これは、紹介だけです。YouTube をいろいろ見てほしいと思います。こういう場で、専門家が基調講演で話をする外のイベントがあるではないですか。しかし、皆さん、いつも参加できるわけではない。こういうところに来ない一般の先生たちにも伝えたいと思い、インタビューをたくさんして、それを YouTube で 20 分くらいにまとめて、あとは本を読んでくださいと言っています。ぜひ、利用してください。私の社会ボランティアです。

これまでは、高校までは完成教育と言っていたのです。小学校、中学校の義務教育があって、義務教育や中等教育の位置付けは、ヨーロッパ、日本、アメリカで違いますが、中等教育段階は、中学・高校をセットとして、高校が終わる 18 歳くらいまでの年齢が、人の社会的な基礎として、基礎的な知識、技能、態度を学んでいく、身に付けていくのに必要な期間。それを近代社会の完成教育機関と言っている。そのため、ヨーロッパでは、18 歳までが最も大事で、そこから先はまさに言葉どおり、高等教育、Higher Education です。Higher ですから上はない、より高いだけです。そういう言葉遣いがヨーロッパにある。安彦忠彦先生とは、日本は、高校くらいまでを完成教育といい、基礎・基本を伝え

ると議論してきたのですが、安彦先生は、この10 年くらいの間に考えが徐々に変わってきた。義務教育は義務教育で、先ほど、荒瀬先生が言った「社会に出ていく基礎を学ぶ期間」として、共通の基盤をしっかり与えていく期間だと。高校は、中等教育の後半期だが、安彦先生は、中等教育以降は「私教育」でよいという言い方をされているのです。私教育とは何かを説明する時間はありませんので、申し訳ありませんが、本を読んでください。

しかし、１つ言えるのは、今、教育のデジタル化は、ＧＩＧＡスクールなどのかわいいレベルではないです。学習コンテンツが急速にデジタルを通し、世界や日本のトップの大学からたくさん出てきて、いつでもそれを見られる状況になっている。大学に行って、専門の最先端の知識を学べるというのは嘘です。学部教育で専門の知識を教えられないというのは、私が京都大学にいたときでもずっと言っていた。そういう大学ではもはやないのです。大学院で狭い知識を教えることはできるが、学部生に専門の最先端を教える時間はないのです。それをどこで教えているかというと、オンラインです。そこが一番多い。そして、本当の最先端も出てくる。学びたい人は外に行けば、もっと学べる。そして、こういう外の場もさらに充実しているのが現代社会です。そのようになってきたときに、大学は学生たちに一体何を伝えていくのか。このような中で、高大接続、探究、教養などの問題があるとご理解ください。

今日は、どうもありがとうございました。

溝上　慎一（学校法人桐蔭学園 理事長／桐蔭横浜大学 教授）

スライド1

第20回高大連携教育フォーラム記念講演2　2022年12月3日

トランジション実現のための影響の大きな
高校・大学での学びを理論的、実証的に示す

溝上　慎一　Shinichi Mizokami, Ph.D.
学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問

http://smizok.net/
E-mail mizokami@toin.ac.jp

ウエブサイト「溝上慎一の教育論」
http://smizok.net/education/
今日の話に出てくる用語や概念の詳細を知りたい方は
お読みください

【略歴】1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、教授を経て、2018年に桐蔭学園へ。2019年同理事長、現在に至る。桐蔭横浜大学学長（2020-2021年）。京都大学博士（教育学）。
＊詳しくはスライドの最後にあるプロフィールをご覧ください

スライド2

本日の内容

① 高校・大学・仕事・社会を繋ぐ10年トランジション調査の結果から
② 高大を接続する探究的な学習ー日本型「教養教育」の色彩を帯びて

TOIN GAKUEN

2

スライド3

本日の内容

① 高校・大学・仕事・社会を繋ぐ10年トランジション調査の結果から
② 高大を接続する探究的な学習ー日本型「教養教育」の色彩を帯びて

TOIN GAKUEN

3

スライド4

学校と社会をつなぐ調査
通称「10年トランジション調査」

- 2013年時 約400校、45,000人の高２生が参加
- 2018年時（大学４年生） 2,742名
  （男性996名、女性1,731名）が継続的に調査参加
- 2021年時（社会人3年） 1,486人名
  - （男性442名、女性1,037名）が最終調査に参加

湯上慎一（責任編集）京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾（編）(2015)．どんな高校生が大学、社会で成長するのか―「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ―　学事出版

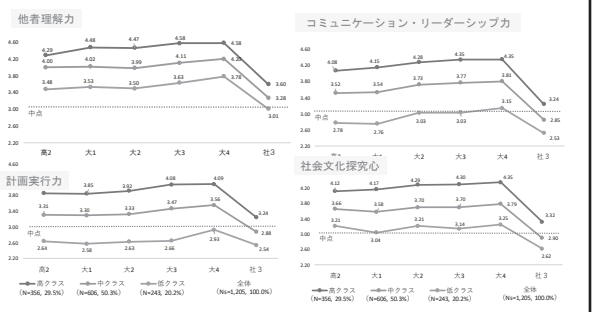
湯上慎一監修　京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾（編）　(2018年2月)
『高大接続の本質―「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題』　学事出版

河合塾グループサイト「学校と社会をつなぐ調査 | 教育研究開発活動」 p. 19に所収

https://www.kawaijuku.jp/jp/research/sch/pdf/2019_TransitionReportT4.pdf

4

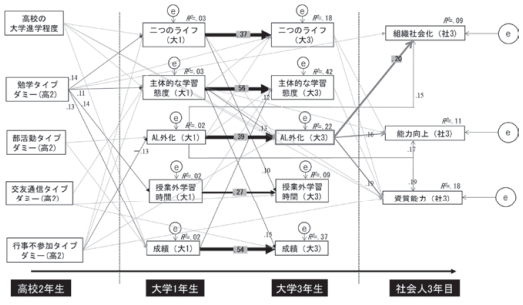
スライド5



図表　資質・能力の変化（高校2年～社会人3年）

5

スライド6

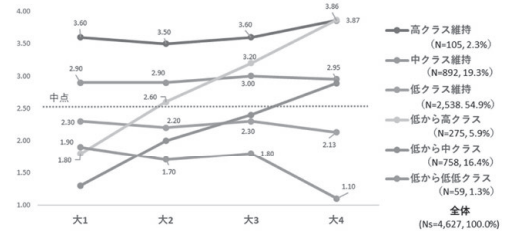


図表　パス解析の結果（高校2年生～社会人3年目）

6

スライド７

アクティブラーニング（外化）する態度や能力の変化

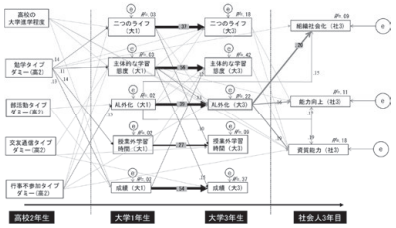


7

スライド８

（問１）大学の偏差値が高ければトランジションは成功するか？

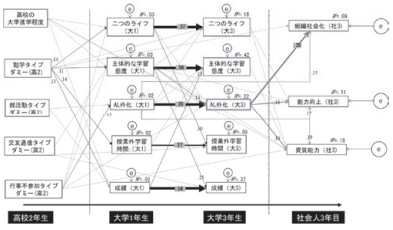
（回答）Yes&No



スライド９

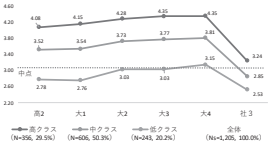
（問２）トランジション成功にキャリア意識は必要か？

（回答）Yes&No



スライド１０

（問３）高校生、大学生はもう発達的に仕上がっていて、成長しないのか？

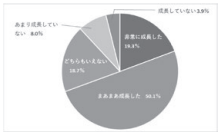


（回答）No

スライド１１

「成熟的発達」と「成長」を分別することが重要！

Q「あなたは大学生になって以降、全体的にどの程度成長したと感じますか。」（大学３・４年生を対象）



① 成熟的発達（matured development）

幼少期からの積み上げ的な心理的発達

② 成長（心理的発達）（psychological development）

- 生じること
- 単純から複雑へ進歩すること
- あるテーマをつくりあげること
- 開くこと
- より発展した状態へと移行すること

11

スライド１２

本日の内容

① 高校・大学・仕事・社会を繋ぐ10年トランジション調査の結果から

② 高大を接続する探究的な学習ー日本型「教養教育」の色彩を帯びて

TOIN GAKUEN

12

スライド 13

アクティブラーニング型授業
講義＋アクティブラーニング（書く・話す・発表する等の「外化」）

大学

中学・高校

Readings 溝上慎一の教育論 http://smizok.net/education/
・（理論）「大学教育におけるアクティブラーニングとは」
・（理論）「初等中等教育における主体的・対話的で深い学び－アクティブ・ラーニングの視点」

13

スライド 14

教授パラダイムから学習パラダイムへの転換

学習パラダイム

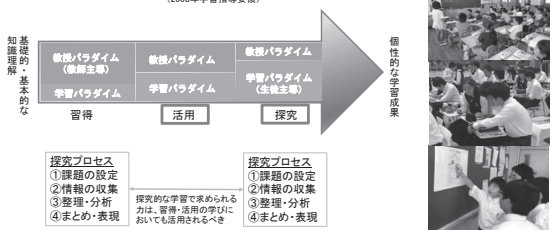
政府の施策との関連
○ 学士課程答申（2008年）、平成28年答申（学習指導要領改訂）（2016年）
「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」
○[高等教育]グランドデザイン答申（2018年）
「何を教えたか」から「何を学び、身に付けることができるのか」への転換

Readings 溝上慎一（2020）. 社会に生きる個性―自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー― 東信堂

14

スライド 15

教授学習パラダイムと習得・活用・探究
（2008年学習指導要領）



探究プロセス
①課題の設定
②情報の収集
③整理・分析
④まとめ・表現

探究的な学習で求められる力は、習得・活用の学びにおいても活用されるべき

探究プロセス
①課題の設定
②情報の収集
③整理・分析
④まとめ・表現

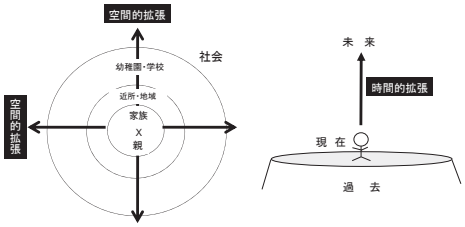
伝統芸能の「守破離」に相当

Readings 溝上慎一の教育論 http://smizok.net/education/
・（理論）教授パラダイムからから学習パラダイムへ
・（用語集）習得・活用・探究

15

スライド 16

時空間の拡張を「資質・能力」「探究」の育成と捉える見方もあっていい

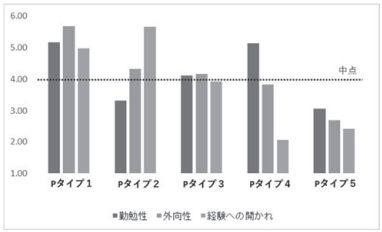


人の発達の成長の原理

16

スライド 17

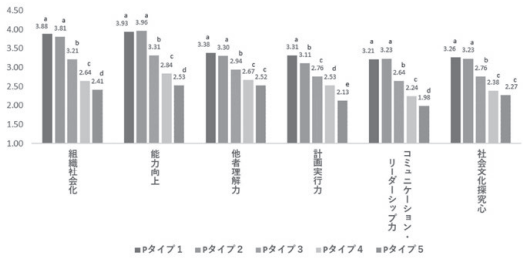
25-29歳の社会人3，000人調査より



Readings 溝上慎一の教育論 http://smizok.net/education/
✓ （データ）パーソナリティ特性（ビッグファイブ論）からみるビジネスパーソンの職場適応や能力

17

スライド 18

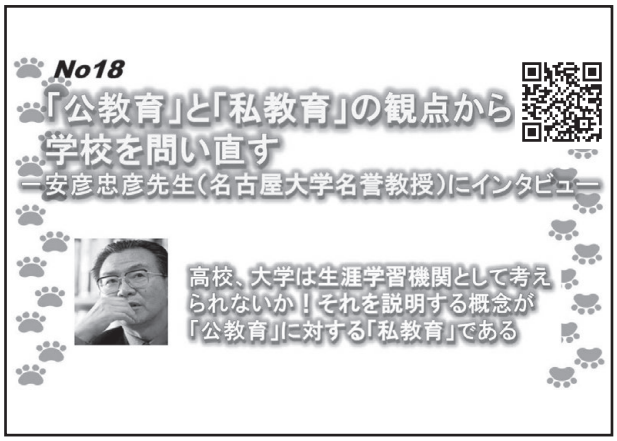


18

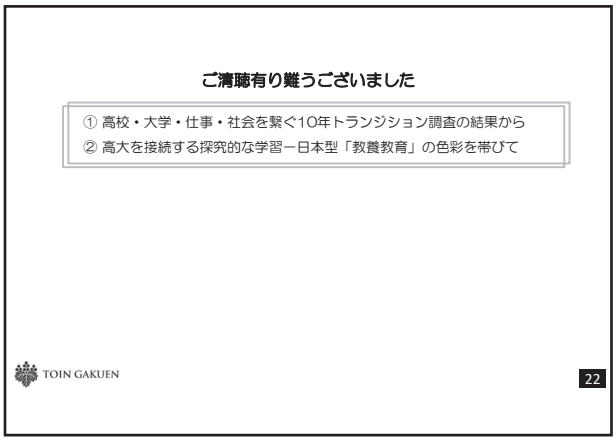
スライド 19

スライド 20

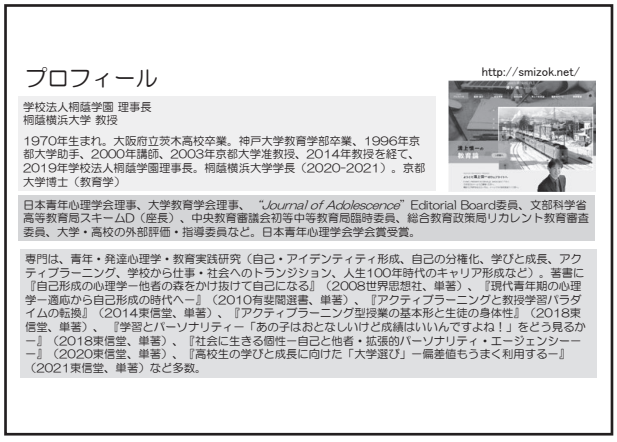
スライド 21



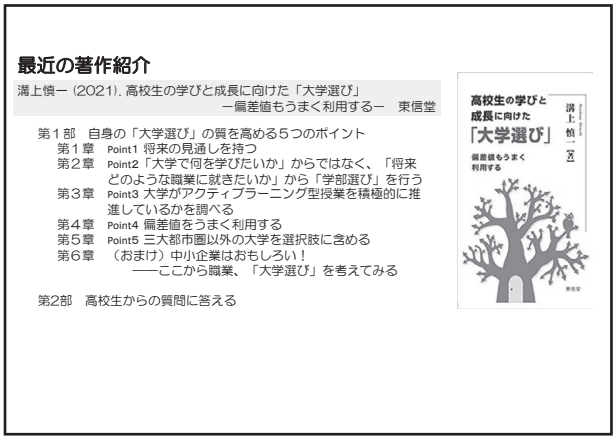
スライド 22



スライド 23



スライド 24



パネルディスカッション

どうすれば「持続可能な社会の創り手」を育成できるのか

［コメンテーター］　荒瀬　克己（独立行政法人教職員支援機構 理事長）
［コメンテーター］　溝上　慎一（学校法人桐蔭学園 理事長／桐蔭横浜大学 教授）
［事例報告者］　伊藤　恵哉（京都府教育委員会 高校教育課 指導主事）
［事例報告者］　滝本　順之（京都市教育委員会 学校指導課 指導主事）
［事例報告者］　酒井　淳平（立命館宇治中学校・高等学校 教諭）
［コーディネーター］　杉岡　秀紀（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室コーディネーター／福知山公立大学 地域経営学部 准教授）

杉岡　皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました、福知山公立大学の杉岡でございます。2017年度からだったと思いますが、高大連携推進室のお手伝いをさせていただいており、今年は6年目になるのではないかと思います。よろしくお願いいたします。

先ほど、荒瀬先生、溝上先生から、日本の今後の高大連携・接続について大きな、そして、あるべき方向性を示していただきました。それを受けまして、今度は、京都でご活躍の高校のお三方から、高大連携の取り組みを皆さまと共有したいと思っております。

報告に先立ちまして、簡単に私の自己紹介だけしておきます。高校との絡みでいいますと、京都府教育委員会のWWL、ワールド・ワイド・ラーニングの略でございますが、こちらのお手伝いをしたり、また、京都府教育委員会の府立高校の在り方ビジョンづくりであったり、それから現場では、京都府立福知山高校や京都府立宮津天橋高校の学校運営協議会や探究の伴走をしております。京都市内では、京都府立鳥羽高校のＳＧＨの取り組みも初期段階からお手伝いしております。その他、単発でいろいろな高校の探究活動の支援をする中で、本日、溝上先生、そして荒瀬先生がおっしゃった、現場の問題意識を大学教員として感じております。

少しだけ京都府北部のご紹介です。本日はここ、京都市内で開催しておりますが、このような高大連携は、地方でも必要だと思っております。今、私どもの大学がある福知山でも呼びかけまして、北近畿高大公連携フォーラムというものをつくりました。今年は、鈴木寛元文部科学副大臣をお呼びし、地元と国や世界の動向を含めた高大連携の勉強会をしたり、去年、このフォーラムにご登壇いただきました、宮津天橋高校の多々納智先生をお招きしたり、あるいは、これは３年前なのですが、荒瀬先生にも福知山にお越しいただき、勉強会をしたり、という活動を展開しております。このように、京都市内だけでなく、京都市内でつながったネットワークやエッセンスを京都府北部や兵庫県北部に広げていこうという取り組みを日々しております。

さて、今日のテーマなのですが「どうすれば『持続可能な社会の創り手』を育成できるのか」という題を設定させていただきました。これは、先ほど、荒瀬先生からご説明いただきましたテーマに「どうすれば」を付けただけなのですが、

それを議論してまいりたいと思っております。荒瀬先生がＩ have a dream のお話の下りで、このようなことをおっしゃっていました。「高校は初等中等教育段階最後の教育機関として、高等教育機関や実社会との接続機能を果たしている？」と。このような状態を 2020 年度代でつくるために、京都ではその取り組みがどこまで進んでいて、今、どのようなことを行っているのか、あるいは今後行おうとしているのか。そして、その中での課題は何なのかということを、まず、お三方からご報告いただきたいと思っております。

事例報告者は、まずは京都府教育委員会指導主事の伊藤先生です。そして、続きまして、京都市教育委員会指導主事の滝本先生。そして、府、市ときまして、今度は私立の立命館宇治中学校・高等学校の酒井先生。この順番で 15 分間ずつ、それぞれの事例を皆さまにお聞きいただきまして、その後、溝上先生と荒瀬先生にもご登壇いただき、５名でパネルディスカッションを進めてまいりたいと思っております。

では、伊藤先生、早速、よろしくお願い申し上げます。

伊藤　（スライド１）皆さん、こんにちは、失礼いたします。京都府教育委員会の伊藤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。早速ですが、われわれ京都府教育委員会が取り組んでおります「ＷＷＬ（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」の中から、高大連携・接続についてご紹介させていただきます。タイトルのとおり、令和２年度から指定を受けておりまして「Society 5.0 の未来社会で活躍できる人材育成」に取り組んでおります。

（スライド２）「ＷＷＬ（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム」は、あまりなじみのないお話かと思いますので、文部科学省の実施要項から一部、抜粋してまいりました。赤字の文字をご覧ください。「世界で活躍できるイノベーティブなグローバル人材を育成するため」「高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等が協働し」「高校生へ高度な学びを提供する仕組み（アドバンスト・ラーニング・ネットワーク）を形成する取り組み」です。今、全国に拠点校がたくさんあります。本日、お越しいただいています立命館宇治高校も拠点校の１つですが、文部科学省の構想では、最終的にその拠点をつなぎまして、ワールド・ワイド・ラーニングコンソーシアム、世界規模の学習共同体を構築する、それを支援する取り組みがこのＷＷＬ事業でございます。

（スライド３）京都府教育委員会の構想は、このように非常に細かくありますが、ポイントとしましては、タイトル右下にあります。われわれは、ＷＷＬ事業でこちらの６つの資質・能力を育成したいと思っております。この６つの資質・能力を育成するために何をしているのか、その方法が「京都戦略」の１、２、３でございます。本日は、この中から２つご紹介させていただきます。真ん中にございますとおり、これはネットワーク事業であり、京都府教育委員会が中心となる管理機関としまして、カリキュラム拠点校は京都府立鳥羽高等学校、共同実施校が京都府立福知山高等学校で、他府県とも連携して取り組んでおります。

（スライド４）京都戦略を拡大しますと、このようになります。本日は、京都戦略１の「き

ょうとＡＰＰ（アドバンスト・プレイスメントプログラム）」。これは、大学教育の先取り履修です。そして、京都戦略２の「府立高校共通履修科目『スマートＡＰ』」、国内外の大学の先生方によるリレー講義をご紹介させていただきます。

（スライド５）まず「スマートＡＰ」からです。

（スライド６）この趣旨ですが、先ほど、申しました６つの資質・能力のうち３つ、下に②、③、⑤とございますが「協働力」「科学的思考力」「課題解決の枠組みをデザインする力」、この３つの力の育成と関連しまして、大学の先生方と高度な学びを提供するプログラムを行っております。さらに、その先では、大学教育の初年次教育と効果的な接続に資するという趣旨でございます。

（スライド７）目的でございます。さまざまなグローバルな社会問題の解決に必要な「リサーチスキル」、簡単に言いますと、探究のスキルを習得させることが１つのメインテーマです。それと共に「論理的・批判的思考力」「多文化協働力」、他者と協働する力の育成を目指しております。

具体的な内容ですが、これは高校２年生のみを対象としております。その高校２年生の希望者に対して、６名の大学の先生方によるリレー講義、ワークショップを主にオンラインで受講します。最終的に、その成果を生かして、京都府の国際会議であります「京都府ＷＷＬ高校生サミット」に参加する。このプログラムが全て終わりますと、取り組みが十分である生徒に対しては、われわれが修了証を発行し、高等学校の単位として認めるという内容でございます。

（スライド８）「カリキュラム開発から実施までの流れ」です。３年間、行ってまいりましたが、令和２年度に、制度設計をいたしました。鳥羽高校がスーパーグローバルハイスクールの指定を受けておりましたので、そこで取り組みました総合的な探究の時間、イノベーション探究の成果を普及させる意味でも、鳥羽高校でお世話になっている先生方に講師を依頼いたしました。また、講師には、オーストラリアのクイーンズランド工科大学の先生も関係しておりますので、オンラインの実証研究も併せて行いました。令和３年度から開始いたしまして、対象校は２校、鳥羽高校と福知山高校のみですが、それぞれの学校に集まり、鳥羽高校、福知山高校、講師の三者をオンラインでつないだプログラムを開始いたしました。今年度は、対象校を６校に拡大いたしました。一人１台端末の利点を生かしまして、自宅から接続可能という方法です。27 名が参加しております。

（スライド９）参加校の位置です。京都府の地図をご覧いただきますと、北は峰山高校から南は南陽高校まで、これらの学校をつなぎました。京都府教育委員会の実施するＷＷＬの理念、目標としまして、時間的制約、距離的制約、地理的制約、そして経済的制約を超えて、在籍校の枠を超え協働できる学びのプログラムを提供したい。これを具現化した内容となっております。

（スライド 10）講師の先生方も非常にさまざまな地域からお越しいただいておりまして、京都、大阪、オーストラリアです。第１回が「リサーチスキル」となります。問いの立て方や情報収集の仕方から始まりまして、リサーチスキルを先ほどのお言葉ですが「習得」する。それを踏まえて、第６回の「チームでプチ課題研究！―研究計画書を作ろう―」で、グループでの研究計画書作成に臨みます。活用します。最後に、京都府ＷＷＬ高校生サミットで全ての学びを活用するという取り組みです。やはり、研究計画書は対面実施のほうがよいと思いまして、対面で２年間計画しておりましたが、残念ながら、行動制限のために２年間ともオンラインで実施しているという状況です。

（スライド 11）細かい話ですが、授業の構

成・時間です。第１回から第７回までは、大学の先生方による大学レベルのリサーチスキルに関する講義を 90 分２回、180 分行っていただいています。その後、各回で生徒がレポートをつくったり、振り返りをしたりするのに 30 分です。京都府WWＬ高校生サミットは、終日行っていますので 280 分。計 1,750 分、高等学校の授業時間数 35 時間相当の１単位に相当しますので、取り組みが十分な生徒には１単位を認定しているということです。

（スライド 12）このスマートＡＰの一番の特徴が、連携しているということです。第１回から第５回まではリサーチスキルの学びですが、それを活用するために第６回では研究計画書をグループでつくる。このグループも、在籍校をわざとばらばらにしています。その後、第７回でつくったものを発表して、プレゼンテーションの講義を受ける。最後は、高校生国際会議で全ての学びの成果を発表する。当初、対面の場合には、さらに細かい研究計画書をつくることを、乾先生と計画しておりましたが、コロナ禍のため、やはりオンラインとなり、かなり入念な打ち合わせを何度も繰り返しまして、かなりシンプルなもので研究計画書をつくることにいたしました。これが高校段階での学びの連動ですが、真の目標は「探究」という高校段階から「研究」という大学段階の橋渡しを目指しております。

これが、オンライン上での協働作業の様子です。本当に心配しましたのは、オンライン上でのグループ作業は、われわれ委員会も初めて体験するものでしたので、不安を解消するために、乾先生とも繰り返し議論しましたが、ふたを開けてみれば、例えば、iPad のメモ機能を活用したり、Word を共有したりしながらできる。なかなか高校生の可能性はすごいものだと、ここで実感したのです。

（スライド 13）ちなみに、サミットとは一体何かというと、これは令和２年度から行っているのですが、府立高校以外にも他府県から参加者を募りまして「持続可能な未来社会」を大きなテーマとして、下にある３つのトピックから１つ選びまして、その選んだトピックごとに生徒をグループ分けします。そして、日本語または英語で議論するのですが、これは全てオンラインで行っております。一人１台端末で、オンラインでつないで議論します。おととしは 100 名規模、今年は 70 名規模で行いました。例えば「文化遺産の戦略的活用」はどういうことかといいますと、ユネスコが提案しています、文化遺産をベースとした観光業についてというテーマで、その課題と解決策をそれぞれ調べて、議論させて、良いものを発表させるということをしております。

（スライド 14）今年度の参加者は、このとおりです。杉岡先生、スティーブン・ハーダー先生にご講評いただきながら、参加者はスマートＡＰ以外にも府立高校生、秋田県立秋田南高校、山形の九里学園高校、沖縄県立那覇国際高校、そして今年は大変うれしいことに、オーストラリアの高校生６名もオンラインで参加してくれました。ただ英語の議論は難しいので、留学生である京都大学大学院生や京都外国語大学の学生に参加してもらっています。彼らの出身国や地域も非常に多岐にわたっていまして、香港、中国、ミャンマー、オーストラリア、カナダ、ブータンから来ています。非常に真の国際会議ができているのはないかと思っています。

（スライド 15）修了生の声です。これは昨年度ですが、三者に共通しているのは、大学というキャリアを見据えたコメントをしております。

（スライド 16）ただ、今年度は少し変わっています。最終アンケートがまだなので途中経過のアンケートですが、この生徒の前提として学校では個人単位の探究学習に取り組んでいます。しかし、スマートＡＰはグループ学習ですので、そこで気付いたことが「班の人たちと共

有することでＲＱ（Research Question）を客観的に考えられて良かった」。また「根本からＲＱが変わったり、精度の高いＲＱができていくのが面白かった」という、この生徒の言葉を見ますと、自分の考えを俯瞰的に見られて、また客観的に分析できるようになっていると思っています。

なぜ、このようなことが起こっているのか、あくまでも推測ですが、在籍校が違う生徒が交わる、地域課題も異なる、学校の文化も異なる、価値観も異なる生徒が議論するわけなので、その中で多様な価値観に触れながら議論が産まれていく。もう一つ大事なことは、フィードバックをする講師が大学の先生方ということです。すなわち、客観的といっても抽象的概念ですので、それがなぜ客観的であるかないか、質の高いフィードバックを大学の先生から受けられる、それが１つの要因かと思っています。

（スライド17）プログラム全体の成果は、このとおりです。趣旨のとおり「大学の初年次教育との接続」、そして「探究学習の指導に生かす」、探究の「作法」を一通り学べるプログラムが開発できたのはないかと思っています。そして、グループワークを通して成果物にまとめて発表する、連携が図れた。いずれにしても、やはり、講師の先生方は高校の探究活動がどのようなものかを非常に熟知されています。そして、われわれ管理機関と幾度となく入念な打ち合わせをしていただきましたので、われわれとの共通理解が生まれている結果かと思っています。

（スライド18）次にまいります。２つ目が、大学教育の先取り履修「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム（ＡＰＰ）」です。

（スライド 19）これが文部科学省から出ました「令和３年度学校教育法施行規則の改正について」です。科目履修生として、高校段階で習得した大学の単位を、入学後はその当該大学の単位として認めるというものです。

（スライド20）この流れも踏みまして、この流れだけではないですが、目的としては高大接続を図るために、京都府立大学と福知山公立大学と委員会の三者で協働して、先取り履修に試行として取り組んでいます。

（スライド21）これが、主な概要です。１つ目、大学生と同じ授業を履修する機会を提供する。２つ目、今、受講方法は、オンデマンド形式のオンライン方法で進めています。令和４年度、５年度の２年間は試行期間です。４つ目、大学の単位ではなく、試行期間ですので、高校の単位として修了者には認めるという流れで動いております。

（スライド22）これまでの流れが３年間ありました。先行事例である、埼玉大学、広島大学、県立広島大学とオンラインで、面談をさせていただいて、課題等を伺いました。その際も、２大学の先生方にも同席していただきまして、三者で協働してこのプログラムをつくってまいりました。今年、令和４年度では、身分は聴講生ではありますが、鳥羽高校と福知山高校から参加者を募って、実施をしております。

（スライド 23）今年度のご提供いただいております開講科目ですが、京都府立大学からは後期３科目、教養科目１科目と専門科目です。福知山公立大学は、全て専門科目になりますが、５科目提供していただいています。

現時点では前期科目が終わった段階ですので、前期科目の状況を踏まえてお話をさせていただきます。

（スライド24）受講状況です。６名全員が修了いたしました。これも事前に入念なオリエンテーションをしていただいた結果だと思います。一方で、課題として、高校生が大学からのメールを確認する習慣がありませんので、連絡が滞ることがありましたし、実際問題として、残念ながら、まとめて受講する生徒もいました。

（スライド25）生徒アンケートです。受講生全員が、科目の内容に満足している。また、内

容理解についても、６名中５名が、非常に、おおむね理解できていた。この残り１名は、一部だけ理解できなかったという結果でした。

受講して良かったことは、８項目用意した中の５つだけをピックアップしていますが、キャリアのことを考えるのに役立つというのが多いですが、注目に値するのは４番かと思います。主体性です。

（スライド 26）４人が答えているのですが、生徒の感想を見たときに、どのような主体性が生まれたかというと、最も分かりやすいのが３番目の生徒です。赤字のところですが、この生徒は最終レポートを 1,600 字で書いて提出するという課題がありました。そのときに、自分で図書館に本を借りに行き、さらに高校で作成した、類似したレポートを見返しました。主体性が生まれるとともに、高校の学びが大学へとつながっていることが伺えるような感想です。

（スライド 27）一方で、課題はあります。やはり、高校生ですので、ＩＣＴスキル。２つ目が、高校と大学のスケジュール感の違いからくる負担感。最後に、ＬＭＳ等の授業支援システムに不慣れな点等があります。

（スライド 28）大学の先生方のご意見です。大学生との能力差、レポートの出来に遜色ないそうです。熱意も非常に良くて、刺激になったとのご意見を頂いています。一方で、やはり対面実施の授業は録画する必要がありますので、負担がある。最後に、これは厳しいご意見ですが「高校生を受け入れることへの大学側のメリットを感じられない」というご意見も頂いています。

（スライド 29）では、今後の方向性ですが、協働大学にとってメリットのある先取り履修は実現可能か。また、本格実施ができ、単位を認めていただけるか。長期的には他大学とも協働できるか。そして、大学間の単位交換制度は実現可能か。このような内容がこれからのわれわれの課題かと思っています。ぜひ、パネリストの先生方も含めて、ご意見を頂ければ幸いです。

以上で、ご報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

杉岡　伊藤先生、どうもありがとうございました。

それでは、続きまして、京都市教育委員会の滝本先生にご報告いただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

滝本　（スライド１）失礼いたします。京都市教育委員会学校指導課の滝本と申します。本日は、これまでの市立高校の改革の軌跡を簡単に振り返り、その後、次年度開校予定の２校、開建高校、美術工芸高校、昨年度、開校いたしました京都奏和高校について、簡単ではございますが、紹介をさせていただきます。

（スライド２）今から 27 年前「京都市立高等学校 21 世紀構想委員会」からの第１次答申が出されました。21 世紀は個の時代である、多様な価値観が尊重され、画一化からの脱却が一層遂行するものと予想される。1995 年の段階でのこの予想は、当然のことだったかもしれませんが、ほぼ確実に的を射ていたことになると思います。この文章より始まるこの「答申」を経て、翌年の第２次答申において堀川高校の改革が提言され、具体化に至ったことは周知のことと思います。堀川高校はパイロット校ですので、ここから京都市立高校の改革がスタートしてまいりました。

（スライド３）その後、21 世紀に入ってすぐの 2003 年、西京商業高校の改変により、西京高校にエンタープライジング科の設置があり、その後も社会の変化を見通しながら各校の改革を着実に進めてまいりました。

（スライド４）今年度より、ついに高校で新学習指導要領が始まりました。平成 30 年ごろから、この図を見ながら、現場の先生方と準備のやりとりをしてまいりました。非常に楽しみ

なときでもあったと思っているのですが、令和の世になって、コロナ禍も加わって、急速な情報化、社会にさらに非常に大きな変化が起こってまいりました。既に午前中に荒瀬先生がお話をしておられましたが「個別最適な学び」と「協働的な学び」という学習指導要領の趣旨を、よりよい実現に向けて、どういった学び方をしていくべきかが示されたことも、今後の学校改革を構想する上で非常に大きいと受け取っております。

（スライド５）この間、高等学校の在り方、存在意義が強く問い直されたと自覚しています。これだけデジタル化が進む社会において、感染の懸念も強く訴えられる中、学校に集まって学ぶことはどういう意味を持つのか、特色化、魅力化をより一層進めること、社会的役割を再定義・再認識すべきであること、京都市教育委員会としても重く受けとめて、準備を進めてまいりました。

（スライド６）政令市には高校の設置義務がありません。存在意義を示す使命を強く自覚し、令和３年に市立高校全体のスクール・ミッションを再定義いたしました。それを前提とし、各校のスクール・ミッションを策定し、その具体である各校の３つのスクール・ポリシーを作成、皆さまにその姿を示すことができるよう、グランドデザインという形で表現をしていただきました。これらは、昨年度まで各校の先生方が努力をされ、完成されて、おおむね各校のホームページにアップされております。

（スライド７）こちらが、京都市立高校全体のスクール・ミッションになります。1000 年の歴史を持つ都市を未来へつなぐこと、京都の魅力を生かして豊かな学びを行うこと、そして、これまでからの京都市の大きな役割であろうと自覚をすることで進めていくべき高校教育の先導、これを行っていくのだという決意でございます。

（スライド８）その全体のスクール・ミッションを受けて、各校がスクール・ミッションを共に策定し、そして３つのポリシーをつくり、それをこのようにグランドデザインという形で表してくださいました。各校、特色ある、魅力ある教育を発進しようという努力の表れでございます。

（スライド９）こういった急速な社会の変化を見通して、昨年度は「京都奏和高校」、そして、次年度は「開建高校」「美術工芸高校」が開校いたします。午前中の荒瀬先生の記念講演で、今後、学校がどうあるべきかというメッセージを強く発信しておられました。本日、私から３校の紹介をさせていただくのは、まさに「市立高校各校の個性や専門性を生かした、多様なアプローチ」により、その目指すべき姿、目標の達成に向けて取り組んでいる様子だとご理解ください。

（スライド 10）まずは、開建高校でございます。現在の塔南高校から移転して、新たな学校として立ち上がります。設置学科名は「ルミノベーション科」。輝く光のルミナスとイノベーションを起こす、革新・改革のイノベーションを合わせた学科名でございます。先ほどの普通科改革における「地域社会に関する学びに重点的に取り組む学科」でございます。教育目標や指導方針は見ていただければと思いますが、まさに「『自分らしく生きていくために必要な、自ら考え自ら学ぶ力』をつける学び」を展開する。先ほどの午前中以来、ずっと話題になって

いるところの、まさに、普通科の学びを変えていくことで実現していきたいという挑戦的な学校でございます。

（スライド 11）教育目標を実現するために、最も力を入れているところが授業であろうかと思います。「『新たな学びの形』の実践」ということで、学びの主体を生徒にシフトし「自ら考え、自ら学ぶ」。この学校では「協創」という言葉を使うのですが「他者とともに創る」。

（スライド 12）こういう姿勢を全授業で貫くということで「問いからはじまる学び」である必要が当然あるというようになっています。その「問い」をベースに、対話・協働することで、新たな価値観が作り出されたり、学びの楽しさを実感したり、また、成長のための目標が個別に設定されて、それに向けて一人一人が頑張る、それを教職員が支援するのが日常の姿になるように準備を進めておられます。

（スライド 13）この話だけが一人歩きすると、学校をつくっている先生方は大変残念がられるのですが、ホームルームが４教室分を１つにしたものになっております。「Ｌ-pod（エルポッド）」と呼んでいるのですが、そこに 80 名の生徒と複数人の担任で学校を運営していこうとしておられます。逆に、ホームルームが４つに分けられるので、このような学びのときにはこのような環境が望ましいという状況を、自由につくれる環境を学校が用意したことになります。

（スライド 14）やはり「総合的な探究の時間」も大きな軸で、３年間を通じて十分な時間を配置し、溝上先生の話にも少しありましたが、そもそも学びのマインドがあまり高まっていない生徒に、まずここから行くべきだろうと、スキルなどいろいろあるのですが、やはり、マインドを高めていくことで「未来の創り手となる志」や「成長のマインドセット」につながるという仮説の下に、まずは折れても立ち直るしなやかな心を育てる「学びのマインド」づくりからスタートするのが、１つの大きな特徴になっています。そして、本物との出会いがあり、教科の学びへの興味・関心が高まり、自分でしてみたいという思いに至るのが、この総合的な探究の時間の大きな工夫になっています。

（スライド 15）開建高校は、生徒が主役の学校づくりを具体的に進めようとしておられます。例えば、現在、新しい学校の校則などのルールづくりも生徒が話し合って行っていると聞きますし、学校の校章も、大人たちからのアドバイスはもらってはいるものの、生徒の力で作り上げておりました。

（スライド 16）そのため、この学校のキャッチフレーズは「やってみたいをやってみる」。この言葉をどれほど実現できるかを、先生方が本当に試行錯誤しながら、現在、準備をしておるところです。

いろいろ話すことはあるのですが、次にまいります。

（スライド 17）続きまして、美術工芸高校になります。こちらは、今、私たちがおります、この建物から駅を挟んで鴨川の西側に、現在、建てられておりまして、ある程度、できてきております。現在の銅駝美術工芸高校が移転して開校いたします。

（スライド 18）教育理念と目標をお示しするのですが、見ていただきたいところは、この教育理念は、本日、午前中に何度も登場した令和、さらに言うならば今後の社会を生きていく生徒にとって必要な言葉がおおむね入ってきていることになりますが、目指す学校像および美工（美術工芸高校）の教育活動の根幹をきちんとお伝えしておく必要がございます。「美で」というところがポイントで、美術「を」学ぶ学校から、美術「で」学ぶ学校への転換を図っております。

（スライド 19）銅駝美術工芸高校で行っている８つの専攻は美工にも引き継がれます。生徒たちは、これまでも作品作りに並々ならぬ情

熱を傾けております。この専攻の学びをいま一度、見直し、日々の教科の学習と連関させ、作品制作に関わる技能のみならず、多様な力を伸ばすことで、先ほどの目標が達成できるのではないかという仮説を学校は立てております。

（スライド 20）その根幹として考えられているのが、やはり教科横断、「steAm」教育の推進です。あらゆる教育活動をＡＲＴでつなぐという方法で、生徒の「感じる心」「考える力」「表現する力」を高めて、最終的には生徒の想像力を最大限に伸ばす。これに向けて、現在、学校は教育課程を構築中です。

（スライド 21）１つの例が示されていますが、現在、銅駝美術工芸高校内で先生方が「ＢＩＫＯ steAm」の実現が可能であろうという、授業の研究を進めておられます。スライドには、染織と理科のクロスが行われている様子を少し紹介させていただいております。ホームページにも、たくさん実践事例が挙がっております。

（スライド 22）高大接続というよりかは、少し違うかなと思うくらいのシームレス感があるのが、お隣に京都市立芸術大学が来ます。生徒たちは自然な流れで、大学生が学ぶ場と高校とを行き来します。この中で生まれるのは、ただの連携というよりも共に学び、共に伸びていく姿であろうかと思っていて、先ほど、高校側が大学側に与えられるメリットというものがありましたが、まさにそれも検討しながら、新たな連携の形を検討しておられます。

（スライド 23）開建高校と同じく、社会との関わりは教育活動の充実には欠かせません。また、美術工芸という専門性を生かし、京都の伝統産業との連携も非常に重要なポイントですので、検討を進めておられます。

（スライド 24）最後に、私もこの銅駝美術工芸高校の学校担当を何度かしておりましたが、最も気になる点の１つが、芸術系の専門高校は、高校でも作品制作へ情熱を傾け、大学入学後にもさらにそういう環境があり…という状況になりがちなのですが、そういった１本の道だけではなく、生徒が高校の多様な学びを振り返り、自身についてより深く知ることで、高校卒業にとどまらない自分の未来を描く、予測不可能な社会を生きる力、未来を切り拓く力を、先ほどの「ＢＩＫＯ steAm」の教育推進と合わせて実行していく。このキャリアプロデュースという大きなカリキュラム・マネジメントの実施にも取り組んでおられます。以上が、美術工芸高校の紹介でございます。

（スライド 25）最後は、京都奏和高校です。この学校の最大の特徴は、不登校経験がある、学びに困りやつまずきがある、人間関係の構築が難しい、もしくは、そのほか、学び直しをしたい生徒たちのための学校であるというところです。そういった生徒たち、一度学校から離れた生徒たちをどのように育んでいくか、この点を最も大切にしています。

（スライド 26）そのためには、一人一人が自分に適した学び方を見つけ、目標に向かって頑張っていけるような学習を始められるような支援。周囲の仲間との人間関係の構築に、もう一度、取り組んで、集団で学んでみたいという思いを高めてもらうための支援。そして、学校内にとどまらない、いろいろな人との出会いを魅力的なものと感じたり、よいものだと思ってもらえたりするような関係をつくっていくための支援や仕掛け。こういったことを大切にしながら、生徒たちが再び安心して学校に通い、自分に合った歩幅で学び、仲間と共に過ごしていくことができるような環境を有する学校づくりを目指しています。

（スライド 27）そして、高校生活を通じて、高校卒業後も自分らしく社会で歩んでいけるよう、６つの力を育むことを目標としております。

（スライド 28）幾つか具体的な仕掛けを、簡単に紹介いたします。多くの生徒が中学校までの学習につまずきを抱えていること。当然、そのつまずきの場所や理由も異なることから、生

徒一人一人が自身の学びのつまずきを見つけ、解消していくことができるよう、年度当初の数カ月を「ランアップ」の期間として、一人一人が学び直しに取り組みます。このランアップは、入学前の段階からプレ・ランアップのノートを生徒に配付し、今の学習状況や、京都奏和高校に入学してからの学習のスタートに、自分の学びがどれほどついていくことができるか、もしくは、ついていくために努力してきかたかが分かるように、事前に生徒たちにどういったものかが配付されております。

（スライド 29）また、集団で学ぶことをより良く進めていくためにもなる、学校独自の教科科目の開発も積極的に行っておられます。1 年生の授業で「ビジテックⅠ・キャリアⅠ」を行っていて、仲間と共に学ぶ、仲間との関わりをどのように持つかという、本当に基礎的なスキルのトレーニングをしたり、実際に手を動かしてものづくりをしたり、それを通じて仲間と対話をする、そういった時間を設定する。そして、そういった学びの延長として、他者と関わる機会もつくる「ビジテックⅡ（総合的な探究の時間）」を、現在、展開しておられます。下のほうに小さく写真がありますが、10 月 19 日のニュースで少し紹介されたのですが、自作のおもちゃを、保育園の子どもたちに説明しながら渡す様が描かれました。

（スライド 30）取り組みの最後になりますが「奏和タイム」という時間も設定しています。ポイントは、自分自身の興味関心を基に、多様な人とのつながりを体験し、幅広く人間関係形成について、実感できる、練習できる貴重な時間が設定されています。部活動から、みんなでヨガをしたり、一般的な教養になるようなもの、ゲーム的なものなどをいろいろな世代の人たちと一緒に取り組むことで、生徒が学校に来る魅力を感じる取り組みの 1 つとなっています。

（スライド 31）特別活動においても、おそらく、中学時代によい思い出がない生徒たちがたくさんいると思われる状況ですが、先生方が生徒たちの困りや特性に寄り添いながら、生徒同士が話し合い、少しずつ学年が増えていく、新しい学校行事が年々続いていく中で、作り上げていく努力を生徒たちが行い、生徒たちが共に過ごす教職員の方々と一緒になって、少しずつ集団で学ぶことを楽しんでいっているように思います。

今、映していますのが、昨日、放映されました、テレビの宣伝です。30 分程度の番組なのですが、入学後、文化祭まで、どのように生徒たちが苦しみながらも、学びの良さや楽しさ、仲間と共に過ごすうれしさを体験する様を、映像にまとめてくださっています。よろしければ、ご覧ください。

（スライド 32）私が紹介しました 3 校は、まさに令和の新しい世の中で高校生たちにどのような力を付けるべきか、どうすればそのような力が付くのかを、各校なりに頭をひねり考えた結果の抜粋でございます。なお、3 校だけではなく、そのほかの市立高校各校も自校の特色を生かした、持続可能な社会の担い手を育成する教育に取り組んでおります。各校、ホームページなどでも積極的に情報を発信しておりますので、ぜひとも見ていただき、さまざまご意見を頂戴できればと思っております。

以上で私の報告を終わります。ありがとうございました。

杉岡　滝本先生、どうもありがとうございました。堀川高校のキーワードも出てきまして、20 周年にふさわしい場になっているなと改めて感じた次第です。

それでは、府立、市立とまいりまして、次は私学の取り組みということで、立命館宇治中学校・高校の酒井先生からご報告いただこうと思います。

酒井先生、どうぞよろしくお願い申し上げます。

酒井　（スライド１）皆さん、こんにちは、立命館宇治中学校・高校からまいりました、酒井と申します。よろしくお願いします。お手元の資料ですが、主なスライドのみを抜粋してあります。幾つか資料のないものもあります。

（スライド２）まず初めに、２点だけお断りさせていただきたく思います。本校、立命館宇治高校はWWL第１期の拠点校として活動してまいりました。全国各地の高校と連携しながら、いろいろな取り組みをしております。ネットワークは今も続いているのですが、本日は一学校の地道な一カリキュラムに焦点を絞ってお話をさせてもらいます。２点目が、１月 20 日、21 日に、本校が研究会をすることになりました。もし、ご興味があれば、来ていただければと思います。

（スライド３）そして、私の自己紹介としていろいろ書いていますが、言いたかったことは１点のみです。略歴の右をご覧ください。私は京都市で育ちまして、市立に小中とお世話になりました。高校は京都府立にお世話になり、大学も京都で学んでいます。採用難の時代でして、拾ってくださったのが立命館でしたので、就職は私学です。つまり、もし、私がこの場で登壇する資格があるとすれば、市と府と私学と全てを経験していることくらいかと思って、この自己紹介を書かせていただきました。

（スライド４）さて、立命館宇治高校の探究ですが、先に結論から言いますと、なぜ探究をするのかについては、ほぼ、ここに尽きるかと思っています。生徒をサービスの受け手である「お客様」から、自ら価値を見出す「生産者」に育てる。私はキャリア教育を行ってきましたので、キャリア教育でも非常に大事にしていたつもりではあるのですが、やはり、ここに尽きるかと思っています。

（スライド５）そして、私なりにですが、今日のテーマについては、実はここではないかと思っています。結局は、生徒がサービスを受ける「お客様」ではなく、社会の創り手である、自ら価値を生み出す「生産者」に育てることができるかどうかが、今日のテーマの答えなのではないかと思っています。ただ、言うのは簡単なのですが、今の社会の風潮や、われわれがよかれと思って行っている指導が、結果的に生徒を依存させているのかもしれませんし、なかなか難しいとは思っています。

（スライド６）さて、本校、立命館宇治高校ですが、1994 年に学校法人立命館と合併をいたしました。その後、キャリア教育事業等も行わせてもらっていたのですが、2018 年度から探究を核としたカリキュラムが始まっています。その議論の経緯ですが、この 2017 年１月のところをご覧ください。実は、次のカリキュラムを考えるカリキュラム委員会で、結局、ここが大事かなということで出た結果が、この探究だったのです。

（スライド７）何かといいますと、そのときのカリキュラム委員会で生徒の状況を議論しました。よく言えば、非常に真面目で素直。しかし、今、非常に受け身な生徒が育っているのではないか。そのような思いを委員のメンバー全員が思っていました。そのような生徒により多くを与えれば、より依存するのではないか。今、必要なことはより多くを与えることではなく、生徒が自ら動き出せるようなマインドやスキルではないか。同時に、われわれ教員も多忙化する中で、横のつながりも薄くなって、コロ

ナでより大変になったのですが、それは置いておきまして、探究の指導を通し、教員が横につながって、われわれも指導力を上げていくことが、実は大事なのではないか。このような構想から生まれたのが探究です。おそらく、これを実現できるのは、当時、学習指導要領で言われていた「総合的な探究の時間」ではないか。そのような仮説からカリキュラムをつくりました。

（スライド８）教員アンケートもしたのですが、全教員が思っていることは全く同じでしたので、安心してカリキュラムをスタートしました。

（スライド９～11）そして、カリキュラムですが、このように高等学校３年間で探究を６サイクルする形でカリキュラムを組みました。このカリキュラムに１点だけ本校らしい特徴があるとすれば、高３最後に山場があるところです。本校は大学を推薦で進学する生徒が多いです。もし私が、一般受験が多い高校にいれば、あと半年から１年、カリキュラムを前倒しするのですが、推薦が多いことを考えて、また高大接続を踏まえ、意図的に後ろ倒しにして高３最後まで行っています。

（スライド 12、13）どのような授業かのみ、紹介させてください。高校１年生では「問いを立てる授業」を実施しています。問いを立てることなのですが、問いはコンテンツがないと立ちませんよね。本校は、そのコンテンツを教員が話をしています。実は、担任団で総合の授業を担当するのですが、各教員が自らの教科を学ぶ意味を生徒に語り、それに対して生徒が問いを立てるという授業を行っています。教員は各クラスを回っていきますので、生徒はいろいろな教科の話を聞くことができるという仕組みになっています。

（スライド 14）高校２年生では、マイテーマの選定です。しかし、マイテーマとの出会いは確率であって、いつ出会うか分からないものなので、大事なのは数だろうということで、論文を書いたり、プロジェクトをしたり、進路探究をしたり、いろいろなことをしながら、どこかで自分のマイテーマに出会ってほしい。これを目標としてカリキュラムを組んでいます。

（スライド 15）そして、高校３年生では、意図的に後ろ倒しにはしているのですが、大学以降の学び方を踏まえ、マイテーマを追究する、そしてそれをポスターで表す。さらに高等学校での自分の学びをストーリーにする。このようなことをしています。

（スライド 16）このストーリーですが、細かなことはお手元の資料で見ていただければと思います。

（スライド 17）このように、生徒が高校生活グラフを書き、高校での成長、今後の課題を書いて、そして大学、そして将来というように自分の学びのストーリーを１枚に表すことをしています。

（スライド 18）次に、課題研究の例です。こちらは野球部の生徒が行ったテーマなのですが、正直、論文としては調べ学習プラスアルファ程度でしたが、この生徒は本当に野球がしたくて本校に入学して、レギュラーになれなかったのです。体が小さい生徒なのですが、なんとか自分でも 140km 出ないかということをテーマにして研究をし、スポーツ健康科学部に進学いたしました。今、大学で大変頑張っていると聞いています。

（スライド 19）このように、結果的にビジネスコンテストで賞を頂いた生徒も出てきたのですが、いろいろな形で学びの集大成をつくっています。

（スライド 20）授業をした結果、生徒はどう成長したのかについてもお伝えさせてください。本音としては、私は教員の変化のほうが大きな成果だと思っています。しかし、本日は生徒のほうに絞らせてください。

（スライド 21）探究の１期生が 2018 年度入

学です。皆さんもご記憶にあるかと思うのですが、大学入試が変わると言われた、あの学年です。つまり、あの学年ということは、まさに、高校３年生に上がるときにコロナが来た学年でした。私は、その当時、学年主任で、探究担当をしていましたので、思ったのです。高３になるときにコロナが来て、今まで探究やコアと言ってきたが、この休校期間に生徒が何もできなければ嘘だったのではないかと。われわれがどうしようもない、この休校期間に生徒がどうするかこそが、実はこれまでの学習の成果かもしれない。しかし、できなければ怖いなと思っていました。ただ、生徒はあの期間を使っていろいろなことを頑張ってくれました。この後、幾つか成果をお伝えしますが、正直、私はここが一番うれしかったと思っています。

（スライド 22、23）結果的に、将来の見通しのない生徒が減った。高３卒業時に将来の見通しがあるか・ないか、そして、あるとすれば行動すべきことを分かっているか・分かっていないか。分かっているとすれば、行っているか・行っていないか。そこまでの４択で質問を取っているのですが、見通しがあって、行動すべきことが分かっている生徒が、手元にデータがあった 2015、2016 年平均と比べても 15％以上、向上していました。

（スライド 24）また、河合塾の「学び未来ＰＡＳＳ」という試験を、探究実施前の学年でも高１と高３で実施していました。高１段階ではほぼ同じ数字でしたので、結果的に比較ができました。

（スライド 25）このグラフのように、コンピテンシー、リテラシー共に探究学年から数値が向上したのは非常にうれしかったところです。

本当は、ここも私が大事にしたいと思っているところです。報告集には載せられない資料なのですが、立命館大学で大学入学生に対してアンケートをされているのです。お恥ずかしい話、高校での授業時間以外の学び時間は、本校の生徒は立命館大学全体の平均と比べて劣っております。ただ、興味を持ったことを掘り下げたり、授業で実社会と学習内容の関連を考えたり、将来の見通しがあったりというところは、立命館大学全体の平均よりも本校の生徒のほうがかなりよい数値を残してくれていました。高校としては、こういったことは非常に大事にしたいと思っています。

（スライド 26～28）そして、最後になります。われわれが生徒を見て、生徒から学んだ成果だけ紹介させてください。それは「探究がつなぐ学びのストーリー」という話です。Ａさんという生徒がいました。この生徒は中学校から本校に入学したのですが、高１の現代社会でＳＤＧｓからアイデアを考えるという授業があり、彼女はマイクロプラスチックに興味があったそうなのです。このような形で、高１の段階で何かできるのではないかと、企業とコラボして何かをつくるということを言っていました。

（スライド 29）２年後、彼女は高３になりました。高校３年生のテーマで、彼女はチームをつくって「うじらぼプロジェクト」と言い、企業とコラボして、オーガニックなマスクスプレーをつくるというプロジェクトを行い、文化祭で販売しました。左が、企業の社長と面談している様子です。

正直に言いますと、急に「先生、社長が来ます。ちょっと面談に同席してもらえませんか」と、担当の教員と生徒から言われて、慌てて教頭に確認し、私が同席したのです。

（スライド 30）そのようなＡさんですが、プロジェクトの報告書を見直すと、このようなことを書いていたのです。細かな字は報告書にするとして、彼女の書いた要点のみ報告させてください。彼女は「現代社会ではアイデアで終わった。探究があったことで具体的なアクションができた」と言っています。

（スライド 31）一方で、各教科も大事なのです。Ａさんいわく、自分でＳＤＧｓについて教

科等で学んでいたことがプロジェクトの力になったと言っています。そして、Ａさんは経営学部に進学したのですが、経営を経験し、これは自分にとっては非常に大きな学びだったと言って、卒業してくれました。本校がようやく気付けたこととしては、総合的な探究の時間があるからこそ、学びをつなぎ、生徒の学びを豊かにできるのではないかということです。

（スライド 32）本校はＩＢＤＰ認定校なのですが、ＩＢはカリキュラムに「コア」となるものがあるのです。「ＴＯＫ」「ＣＡＳ」「ＥＥ」というものです。

（スライド 33）私は、日本の学習カリキュラムでもコアはあると思っています。各教科に扇の扇面の部分があり、扇の要は総合・特活ではないかと考えています。おそらく、日本のこれまでの教育の蓄積からして、（ＩＢのコアは専門ごとにプロがいるのですが）、日本はチームでつくるコアではないか。これが現在の私たちの仮説です。

（スライド 34）これも、結局、われわれ教員次第かと思っています。お客さまから生産者へということを最初にお伝えしました。おそらく教員にも両方いるのではないかと、自戒を込めて思います。私も、両面を持っていると思います。しかし、自分が「教育の創り手」になれるとすれば、それは生産者であるときではないかと考えています。

以上が一学校の取り組み報告でした。ありがとうございました。

杉岡　酒井先生、どうもありがとうございました。

それでは、パネルディスカッションをしてまいりたいと思います。まずは、パネルディスカッションの本題に入る前に、本日、前半でご登壇いただきました、荒瀬先生、溝上先生の順番で、先ほど、話題提供をしていただきました３つの事例報告につきましてコメントを頂くところからスタートしてみたいと思います。

それでは、荒瀬先生、よろしくお願いいたします。

荒瀬　３人の先生方、ありがとうございました。京都の現在の姿が見えて、大変良かったと思っています。お話を承っておりまして、三者三様の語り口と内容と PowerPoint の資料で、僭越ながら、この一体感のなさが、ある意味、京都の活力の元になっているのではないかと思った次第であります。公立の２つ、京都府教育委員会と京都市教育委員会に、ぜひとも、また見せていただきたいと思っていますのは、私は中央教育審議会を代表しているわけではないのですが、中央教育審議会の議論としてたくさん出ますので、つまずいた生徒に対して、今後、どういった取り組みをしていく必要があるのか。私がかつておりました高校もそうですが、どちらかというと目立った生徒に対する対応は一生懸命行っていた面があるのですが、そこでもつまずく生徒がいるのです。あるいは、そういう学校に来ない生徒もいる。京都市は関わりがありますので、あえて申し上げますが、新しい高校をつくられて、そこは不登校の経験をしている生徒が来るということなのですが、不登校の経験をすると、そこにしか行けないというわけではないはずですよね。かつて私がおりました高校は、中学校の成績を一切見ないという選抜方法を採ると、中学校どころか小学校の３年か４年から全く学校に行っていない生徒

が入学できました。やはり、どの生徒にも、将来の自分の意思を具体化するような、夢を叶えるような道が開かれているのが大事で、もちろん、そのようなところも考えていらっしゃると思うのですが、あえて単純な言い方をしますと、堀川高校に入学できるようにはならないのでしょうか。滝本先生は私がよく存じ上げている先生なので、あえてお尋ねしたいと思いました。

それから、立命館宇治高校のお話も非常に面白くて、溝上先生がなさったお話や私が少し申し上げた話にも関わっていると思ったのですが、酒井先生のお話の中で、私がとりわけ面白いと思ったのは、生徒の変化よりも教師の変化のほうが実は大きかったのだという点です。こういう取り組みは本当にそうなると思うのです。それがまた生徒の変化につながっていくと思うのですが、そういう意味で言うと、今後、この取り組みを続けて行かれて、どのような学校になっていくことが、期待する立命館宇治中学校・高等学校像であるのかを教えていただければうれしいと思いながら聞いておりました。必ずしも質問という意味ではなく、そう思いましたということです。また後で時間があれば、直接教えていただければと思います。

杉岡　荒瀬先生、どうもありがとうございました。せっかくの機会でございますので、これは一方通行だと面白くないので、一言ずつ順番にお答えというよりも、コメントに対するコメントを頂ければありがたいと思います。伊藤先生、いかがでしょうか。

伊藤　失礼します。私がお答えできるのは、公立高校でつまずいた生徒にどのような対応をするのかということでしょうか。京都府教育委員会でも京都府立清明高校や京都府立清新高校等、さまざまなニーズに応えられるように生徒を受け入れていますし、さまざまなフレックスな時間帯で勉強できる、修業年度も３年から４年でも可能だというところもあります。このつまずきというのは、おそらく、どの公立高校でも直面しているところだと思いますので、学習指導要領にあるように、適切な支援も行いながらいかないといけない。そのためには、教員の力量のアップも必要です。今、われわれが行っている事業というのはかなりとがったものですが、いかにとがったものから得られた成果を各校に普及させていくのかを考えながら、対応していきたいと思っています。まだ明確な答えはありませんが、これから検討していかなければならないことだと思っています。以上です。

杉岡　伊藤先生、どうもありがとうございました。

１点だけコメントです。現在、朝日新聞が行っている中退予防ネットワークのお手伝いをしているのですが、大学中退と高校中退は違うのです。特に、高校中退の場合は、中退してから違う高校に編入すると、なかなか数字に表れてこない。そして、高校の先生方は、大学に送り込んだ後はあまり関心を持っていただけない部分もあります。従いまして、この部分を誰がフォローするのかが非常に難しいということを日々認識しております。ありがとうございました。

続きまして、滝本先生、いかがでしょうか。

滝本　ありがとうございます。まさに、今、言っていただいた２つにお答えさせていただこうと思っています。まず１つが、今、京都奏和高校自身が大変苦労しているというか、必死になって取り組んでいることが、６つの目標の中にもあったのですが、高校卒業段階で付けるべき基礎的な力を付けるというものがあるのです。先ほど、申し上げたとおり、生徒たちの多くが、中学時代までの学びが、共通項というべき学力があったと思うのですが、その共通性にそもそも課題があるパターンの生徒が非常に

多くなっている状態の中で、学校の授業を楽しく受けられるところから、レベル設定がまだ揺れているというか、難しい状況にあります。そういった意味で、中学段階からの学びを得て、ハードな検査というか試験がある場合は、受けるのが少し難しい部分もあるかもしれないと思いつつ、もう一つの答えとしまして、不登校であったり、個性的な学びや強い特性があったりするが、堀川高校に限らず、市立高校であれば西京高校もありますし、特徴的な学びと、一定の学力が要る生徒が、検査を突破して入学してきている部分があると思います。

現に、私も、前期選抜の試験の段階で、中学校までの評定を一切取り入れていなかった時期も覚えていますし、現在は少しだけ入っているのですが、突出した学力と申しますか、検査でのパフォーマンスがあれば、合格しているケースもあるかと思っています。今は、堀川高校、西京高校をはじめ、市立高校の多くが、そういった特性のある生徒をどのように支え、伸ばすかということに必死になって取り組んでいる状況も、もう一方でございます。そのため、選抜という１つの壁はあるものの、特性があったり、困りがあったりしながらも、堀川高校の探究をしてみたいであったり、西京高校ならではの学びを楽しみたいという生徒がいれば、その高校に入った生徒を、特別支援というスタイルで学校が必死に支えながら、よいところを伸ばしていることもあるとお答えしておきます。答えになっていないかもしれませんが、２点でございました。

杉岡　滝本先生、どうもありがとうございました。それでは、酒井先生、いかがでしょうか。

酒井　あくまでも私見にはなってしまうのですが、生徒を見ていまして、高校の生活の中で、どのような人に出会って、どのような体験をしたのかが、非常に大きく人生を左右すると感じています。つまり、今後、立命館宇治高校が目指すべきものがあるとすれば、本当に多くの人と会え、協働できるチャンスがあるような学校だと思います。立命館大学が「挑戦をもっと自由に」というビジョンワードを掲げていますが、立命館宇治高校自身が、もともと宇治学園と立命館が合併したときから挑戦し続けている学校ですので、これは本校のＤＮＡとも合うと個人的には思っています。

杉岡　荒瀬先生、一言お願いします。

荒瀬　皆さん、真摯にお答えいただきまして、ありがとうございました。中学校からつまずいている、ないしは小学校からつまずいて困っている生徒をどうするのかというのは、本当にいろいろとご苦労いただいていると思いますし、そのご努力については敬意を表します。ただ、私立高校というのは建学の精神があって、立命館の場合はグループがありますが、そこに単体として存在しているので、そこに入るか入らないかという話だと思うのですが、公立の場合はさまざまな学校を用意していて、どれも選択できる。結果的には入れないことはあるかもしれませんが、どれも選択できるところが、公立学校の持っている使命であるというように、私は思っています。

そういう意味でいうと、もし選抜の壁があるのであれば、その選抜の壁は取っ払うべきであるのではないかと考えています。これは、おそらく、今後、全国的にそういう動きが出てくると思います。そのため、いち早く京都から、選抜によって高校選択できない、もちろん、入れるか入れないかは定員がありますから、そこをどうするのかは、また考えないといけないのですが、ぜひ、そういったことも考えていただけるとうれしいと思いました。以上です。

杉岡　荒瀬先生、どうもありがとうございまし

た。選抜の壁を取っ払う。これだけでこのセッションを作れそうな、大きな問題提起を頂いたと思います。ありがとうございます。

それでは、続きまして、溝上先生から、京都の３事例につきましてコメントを頂戴したいと思います。よろしくお願いいたします。

溝上　伊藤先生の取り組みと酒井先生のところで１つ、それから、滝本先生のところで２つ目と、このようにコメントをしたいと思います。取り組みはお三方とも素晴らしいので、皆さんにこういうコメントをして、勉強してほしいということでまとめています。私が伊藤先生の取り組みを聞いて、そのようなことかと思われるかもしれませんが、希望者にスマートＡＰを課した、手を挙げさせて参加させたところが、私は非常に大事な、意図的なポイントだったと思っていて、これを全生徒、全学年には行わないでほしいのです。伊藤先生も書かれていましたが、高大連携をするときに、より高度で、より先進的なというううたい文句がありましたよね。ＳＳＨは分かりやすいですよね。私は、ＳＳＨを否定はしていないので、誤解しないで聞いてほしいのですが、高度な探究を全校に拡げるのは、やり方を間違えると危うい考え方だとよく思います。したい生徒は、そういうところにより一層行きたい、大学の勉強も早く先取りして行いたい。そういう生徒たちには与えたいと思うのですが、高校生にはむしろ素朴な取り組みを、酒井先生がマイテーマと言いましたが、それを取り組ませてあげたいのです。

理由は簡単で、身近な生活世界から問いを基に探究するのは、おそらく、高校が最後です。大学に入って１～２年生で、最近ではプロジェクト学習をよく行いますので、そこにはそういうテーマもありますから、全くないとは言いません。しかし、大学人が、高校で言う探究をテーマ化して行うときにはどうしても「それは研究じゃない」「もっと、先行研究を調べろ」と言って、論文を読ませ、非常に抽象度の高いところからテーマをつくらせるなど、よくさせています。そのため「どこの大学でも」「どこの先生でも」という言い方をしないのですが、大学に行くとそうなるのです。なぜなら、大学の先生はみんな研究者ですから、研究は身近な生活世界・経験世界から立ち上がらないことをよく知っているのです。

酒井先生から、高校生の野球の話がありましたよね。堀川高校のように全国でも探究で有名な学校が、生徒に初めにどういう探究をしたいかをアンケートに書かせたものを読ませてもらったことがあって、非常に素朴でした。先ほど、酒井先生が言ったような「なぜ、うちの野球チームは弱いのか」や「なぜ、俺はもてないのか」というテーマでは、おおよそ研究にはならないのです。しかし、知りたいことといって高校生が上げてくるテーマは、そういうものなのです。ここから、それでは問いにならないと言わないといけません。「君の関心をただ突き詰めるだけでは探究にならない。多くの人たちにとっての一般的課題にしていかないといけない」。そのため、探究としての問いへの上げ方は指導が必要だ。しかし、ぜひ、野球部がなぜ弱いかから、疑問を解決するような探究を行ってほしいのです。そうしなければ、論文や先行研究から、社会の成り立ちや環境問題など。環境問題も、大きなところからではなく、なぜ○○市は緑があまりないのかというようなところから始めてほしいわけです。そのように身近なところで問いを立てることは、高校が最後なのです。

そういう意味では、伊藤先生の話でいうと、希望者が最先端により一層向かっていくが、そこでやめてほしい。酒井先生のマイテーマは、さらに進めてほしい。私は、それでよいと思います。また、文部科学省でいうと、課題を設定し、情報収集するという、探究のプロセスがありますよね。そこは探究基礎として、しっかり

と教えてあげてほしいです。これは全ての高校生に大事なところです。

私は、今、桐蔭学園高校でも指導していて、探究を見せてくださいとよく言われることが多いですが、見ても普通ですよと。桐蔭学園高校で、全ての高校生に課している探究の授業は週１時間で、ほとんどが調べ学習です。アンケートを取ったり、実験を行ったりする生徒もいますが、みんな驚かれるくらい普通のものを２年間行います。しかし、探究の基礎をしっかりと教えることと、自分たちが必ず知りたいことや問いを徹底的に課題化することだけは強くしている。その上で、私たちはアフタースクールというプロジェクトを行っていて、週１時間行っているだけですが、さらに行いたい生徒は、放課後に大学やＳＤＧｓのフィールドワークで地域の人たちとつなげていく。ほとんどの発表は普通なのですが、その発表の中で１割くらいの生徒はコンクールやコンテストで賞を取ってきます。社会で発表しています。大学ともつなげてあげる。英語で発表したり、国際学会で発表したりしている生徒もいます。しかし、それは授業の中ではないです。授業の中は、素朴にいきたい。これが１つです。

私が京都にいるときに、最後に京都市立塔南高校にかなり関わっていたのですが、今日は、滝本先生から３つの新しい市立高校ができるというお話を伺って「すごいな、そうきたか」と。塔南高校に関わっていたときに、新しい取り組みをしていきたいとよく言っていたのです。堀川高校があって、西京高校があって、そして職業系では合併して京都工学院高校になりましたよね。先ほどの話で、改革があったと言っていましたが、銅駝美術工芸高校や堀川音楽高校があって、普通科の真ん中の塔南高校は、普通というよりも特色が弱い。特色が弱いのをどうしていきたいかという話だったのです。私は、それは全国の課題だと。つまり、職業系や専門科、それから上位の進学校はどの県でも、どの地域でも分かりやすくきちんと整備している。しかし、普通科の真ん中くらいの学校は何も特色がない。ただ、偏差値的に上位校の少し下というだけ。生徒たちもそれだけで入ってくる。職業系や専門科のほうが教科学力は低いかもしれないが、非常に面白い。上位の進学校は、面白いかは分からないですが、いろいろとやりがいがある。いくらなんでも失礼でしょうが、真ん中の人たちは、この程度のような感じ。これからの全国の高校改革の大きな課題の１つは、ミドル層の改革だ。ミドルのレベルをどのように捉えていくか。

これは、大学も同じです。偏差値が低いところが開き直って行っているし、上のほうはプライドと伝統で行っていますが、真ん中は集められればよい程度。それでよいのかということがずっとあります。日本がこれから徐々に縮小していく中で、これは、高校と大学で必ず解決しないといけない大きなテーマであり、ずっと塔南高校にも言ってきたのです。私は、今、それを桐蔭学園でも行っていますが、桐蔭学園の話は置いておいて、ぜひ京都奏和高校、開建高校、それから美術工芸高校が独自の特色をもって、栄えて、頑張ってほしいと願います。堀川高校、西京高校に続くことを目指さないでほしい。

ミドル層の問題とは、職業系や専門系でもそうですが、私はこういうことだと思っています。経験や活動に非常に長けていれば、彼らは伸びる力がある。しかし、抽象的な積み上げ的な概

念や体系的な情報操作には弱い。そのため、教科学力は弱い。弱くても真ん中くらいにはいるが、決して強くならない。そのため、ユニークな経験的取り組みをどれほどたくさん頑張っても、堀川高校や西京高校には決して勝てない。勝てないから、３番手、４番手というようには理解しないでほしいという話です。では、例えば、何をすればよいかということです。この生徒たちが西京高校、堀川高校と決定的に違うところは、彼らにない取り組みや活動をさらにつくって行わせていくことです。その中で一生懸命に行って、いろいろと考える世界が膨らんで、それを言葉にして、伝えていって、ここでかなりの力が付いていくわけです。しかし、これを一生懸命しても、教科学力が弱いので、あまりよい大学には入れなく、３番手、４番手という話に落ちつくかもしれない。

しかし、発想を変えてみると、経験を一生懸命に行える生徒は、大学受験では２番手、３番手になるかもしれないが、社会では決して２番手、３番手にはならない。むしろ西京高校、堀川高校よりも活躍することがあるというトランジションを、ぜひ作り上げてほしいのです。そのために、今、私が行っている大学生プロジェクトの一例をお話しすると、活動を一生懸命に行っても、それほど一生懸命に勉強しませんので、その活動自身が非常に大事というのがかなり重要な点です。桐蔭学園には、桐蔭横浜大学があるのですが、その偏差値は下位です。その中で、クラブ活動を一生懸命に行っている学生がいるのです。例えば、サッカーでは、Ｊリーグに多くの学生が入っていて、今年は 11 人がＪリーガーになるのですが、その中で、名前は言いませんが、Ｊリーグのベスト３に入るチームに内定した、非常に上手な学生がいます。チームを引っ張っていくリーダー性も非常に高く、人格的にも他者に優しく、うまくて、強い学生です。チームの学生たちに、サッカーで頑張るのと同じように、社会で生きていく力、社会人基礎力を付けていこうというプロジェクトをしているのです。サッカーでたくさん問題解決をしているわけですから、それをサッカー以外のところで行っていかないかと言って、そのためにアセスメントを行っているわけです。今日、皆さんに見てもらったようなアンケート調査もしています。アクティブ・ラーニングや主体的学習態度は、全国と比べてどれほどかも分かっている。意外と、大学の授業の中ではかなりきちんと行っている。

河合塾に、高校版で「学びみらいＰＡＳＳ」もあるのですが、大学版で「ＰＲＯＧテスト」というものがあります。リテラシーとコンピテンシーという２つが大きくあって、リテラシーというのは、いってみると情報操作を中心に問題が与えられるもの。Ａさん、Ｂさん、Ｃさんがいて、Ａさんがこのように言っていて、Ｂさんがこのように言っているが、どちらが正しいでしょうかというような問題で、経験世界に合致してこないわけです。そこで扱われている情報は、国語の大学入学共通テストのような問題が並んでいるわけです。それを１時間ぐらいで解くが、解けない。

これは偏差値と相関が高く、その解答率は偏差値の上位校と、本学のような偏差値が下のところではきれいに相関の違いが出ます。そこで問題が解けないと、社会基礎力のうちの問題解決力や情報処理能力がレベル１から７のうちの２や３になるわけです。今、紹介したサッカーのＪリーグに行く学生は、レベル２なのです。全国の平均が４くらいなので、社会人ビギナーとしては不十分という結果が返ってきて「君、サッカーが駄目になったら危ないよ」と言ったわけです。そうすると、彼は「それは、俺はばかだということですか」と言うのです。「ばかとは言っていないけれども、このテストで見たら、君は社会人にとって必要なレベル４に達していなくて、しかもレベル３ではなくてレベル２なので、全国の中でも下のほうだよ」と。も

う少しサッカー以外のところに力を付けて卒業させたいという話をしていたのです。

ところが、コンピテンシーといって、対課題や対人、対自己であるセルフコントロールは、レベル１からレベル７のうちレベル７なのです。つまり、全国トップなのです。仕事をしようという気や、あるいは課題に向かって忍耐強く取り組む力は非常にあるのです。しかし、情報処理操作が弱いばかりにリテラシーはレベル２なのです。この学生が、十分な力がないはずはないのです。なぜなら、ディフェンダーのポジションで、チームを引っ張っていく立場で、いろいろな意味で、人格的にも優れていて、よい学生なのです。本当に頭が悪ければ全日本に選ばれることはない。

違いは何かというと、経験値は非常に高いのですが、経験値から離れた抽象的な世界では操作が弱いのです。この間にあるものは何かというと、言葉の力です。サッカーの話を議論させれば、言葉が非常に豊かで、非常によいことをたくさん言う。しかし、サッカー以外のことになると、途端に子どものような話になる。言葉が、経験知の世界では豊かだが、自分が経験していない世界では非常に貧弱だ。そのため、ノートづくりをしてみる。分からない言葉や知らない漢字をスマートフォンで見ていたり、いろいろな資料を見ていると、本当はたくさんあるし、授業の中でも多く出てくるが、みんなスルーしているのです。読めなくても気にしないし、書けなくても気にならない。それを全て気にして、書き出していけ。いろいろなところで出会った言葉を全て書き出していけ。サッカーのことで思ったことも書いていけ。サッカー以外のことも１日１個書け。その添削をしていく。そのような中で、言葉の世界が知識の世界になって、かなりの力が付くのではないかという、１つの仮説を持っているわけです。

実際に企業の仕事をいろいろと見ていてよく思うのですが、決して偏差値の高い人たちだけが活躍する世界ではないです。しかし、なぜ、私たちは偏差値の高いことだけを仕事の成功につなげて考えるのか。これが非常に不思議。おそらく、仕事によるのですが、銀行や商社、コンサルタントでは、かなり抽象度の高い、情報操作の世界で生きている仕事もあるので、一概には言えないが、多くの仕事は目の前の仕事がかなり具体的なのです。その具体的なところできちんと情報処理操作ができれば、偏差値が低くても、リテラシーが弱くても仕事はできる。リテラシーテストはそういうところを扱っているが、仕事に役立つ、その人の情報処理能力を必ずしも扱っていないと私は思っていて、しかし、教科学力も同じです。

京都市の新しい取り組みで、これほど豊かな活動と経験を提供していくわけだから、そこからぜひ言葉の力を、活動においてはもちろんのこと、教科においてもつなげていってほしいです。まさにカリキュラム・マネジメントですね。将来、活動で頑張る人が、情報処理操作だけで強くて頭のよい、偏差値上位校の生徒たちに負けない学校をつくってほしいと期待しています。

日本が、ますます子どもが減って、人口が減って、いろいろと縮小していく中で、ミドル層の開発ができなければ、日本は終わっていくと私は思っていまして、これは大きな課題として皆さんと共有したくてお話ししました。

杉岡　溝上先生、ありがとうございました。

公開コンサルテーションを見せていただいたような時間でございました。滝本先生、一言、リプライを頂ければうれしく思います。

滝本　ありがとうございます。私自身は、開建高校の準備室ではありませんが、頂いたアドバイスは必ずお伝えしようと思っております。はっきり申し上げまして、堀川高校、西京高校に続けということではなく、やはり、社会で活躍、

自分自身が輝いていくために必要な力を付けることに特化した学校をつくっていく、塔南高校でのさまざまな取り組みから発展的に新しいところへ移動して特色化を目指しているということで、まさに溝上先生から言っていただいたような方向に向かって頑張っていっている。その上で、先ほど、言っていただいたような、言葉の力などの重要性は間違いなく必要だと思っておられると思いますので、必ず伝えて、教育活動の中に取り入れてもらえればよいと私も思っております。ありがとうございます。

杉岡　ありがとうございます。おそらく今日の会場にも、またオンラインの向こう側にも、京都市教育委員会や京都市立高校の先生方がいらっしゃると思います。

荒瀬先生、何か一言ございますか。

荒瀬　溝上先生のお話は、今日もまた非常に面白かったです。ありがとうございました。

本当の情報処理能力というのか言葉の力をどう付けていくのかは、おそらく、本当は全ての生徒に必要なのだが、どうも知識技能系で卓越した子どもたちは、そういうものがなくても、なんとなく生きていけるみたいに思っている。そこは揺さぶってあげたほうがよいと思いながら聞いていました。言葉の力というわけではないのですが、どうも、今、私たち大人も単純化してものを考える傾向があるように思います。悪いとばかりは言えませんが、割と明解な考え方や明解な答えを出す気がしています。残念ながら、これは教育の中にもかなりある。

先ほど、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会の皆さんには失礼なことを申し上げたのかもしれないと思いながら、私が申し上げたかったのは、これだけ歴史的にも三者三様であり、しかもそれらの流れが非常にしっかりとある地域というのは、おそらく、全国的にもそれほど多くないと思うのです。京都市が京都府に言われてへなっとしているかというと、そのようなことはないし、京都府がへなっとしているかというと、そのようなことはないし、私学は私学で大変元気でいらっしゃる。お互いに元気で言い合える関係がある中で、旧態依然というと失礼なのですが、選抜制度の壁の中で、どうしようもないと言っているのではなくて、京都からさらに発信できないかと思います。

ご承知のように７割の高校生は普通科の生徒です。国が普通科の改革のために、研究指定しますといって募集をかけたのが、２つのタイプなのです。地域連携をする普通科のタイプと、もう一つは、学際的な研究をするような普通科のタイプの２つです。先ほどご紹介した、2020年11月の審議まとめの中で、あくまでも例であると明記し、説明のときも再三言ってきたのですが、文部科学省がこの２つの類型での研究指定を募集したのです。そうすると、結果的には、それほどたくさん出てこなかったのです。私は、その出てこなかった結果に対して大変安心をしまして、そのような決められた２つだけの類型で、どうですかと言われても出てこないのは当然で、出したところに問題があるというわけではもちろんないのですが、各県の教育委員会の見識がうかがえたのだと思っています。

よって、普通科の新しい形をするのであれば、先ほど、溝上先生が縷々おっしゃった、言語能力や、あるいは情報活用能力といったことをしっかりと行っていくようなスクール・ポリシーを立てて、そのような学校をつくるぞということを、京都であれば、お互いに非常に建設的な意見交換ができて、結果的には京都の高校生にとって非常によいことになることを願っています。

そうなってきたときには、この間から高等学校教育の在り方ワーキンググループでも議論が出ていますし、あるいは通信制高校の会議など、いろいろな場面で話が出るのですが、京都

に住んでいる人しか京都府の公立高校に入れませんと言っていることについても、全国的に見ると、それこそ島根県立隠岐島前高校の島留学を含めて、あちらこちらで生徒に学びの機会を提供するのと、来てもらえばそこにいる生徒の刺激になるので、行っていけばどうかと思います。既にこのようなことを行っている高校が幾つもあって、実は京都も行っているのです。京都市立堀川音楽高校の例もあります。いろいろな学校で全国展開するような学校をつくってもよいと思うのです。

今後、高等学校の在り方を考えていくときに、都道府県の境がなくなる可能性だってあります。京都府北部地域の学校は、杉岡先生は非常によく知っていらっしゃる話で、以前に呼んでいただいて伺ったときも、福知山で会議を行っていたが、兵庫県の先生がたくさん来ていらっしゃいましたよね。都道府県の境でもって、ものを考えるのではなく、日本国内でもって教育をどう考えるのかを展開していく必要がある。繰り返しになりますが、そうなってくると、先ほど、溝上先生がおっしゃったように、情報処理能力や言葉の力といった資質・能力ベースをもってカリキュラム・ポリシーを書ける学校が出てくることが、今後、本当に大事ではないかと思いました。ぜひ、それを京都から行ってもらえるとうれしいと、大きな期待でエールを送りたいと思います。

杉岡　荒瀬先生、どうもありがとうございます。今日も、兵庫県からお越しいただいている先生もおられます。私が、今、住んでおります京都府北部地域では、よい意味で境界線があいまいになりつつあると思っています。われわれは、よく豊岡市や丹波市、丹波篠山市、朝来市などにも入っていくのですが、行政はなかなかこの境界を超えられません。しかし、大学だとすっと入っていけるのです。そういったことから、今、荒瀬先生がおっしゃったように、制度だけではなくて、文化、あるいは風土をつくることですね。これを行っていかなければいけない。それから、北部で言いますと、京都府立海洋高校という高校が宮津にありますが、ここでは宮津出身の生徒はとても少ないのです。本当に全国から海洋学を学びに来る。このように差別化することに、さらに応援してあげるといいますか、それでよいということをきちんと社会が言ってあげることが大事だと思いました。

言葉の力という意味で、今、Kindle で読んでいるのですが、ジャーナリストの方が『教養としての上級語彙』という本を出されました。これは何かというと、著書の宮崎哲弥さんが自分で書きためてきた語彙の意味を徹底的に紹介した本です。言葉は積み重ねが大事で、溝上先生の言葉で言えば、普通科の高校だけではなく、スポーツや音楽、芸術など、いろいろなところで必要だという話が、今日の新たな発見、かつ気付きになったのではないかと思います。

さて、少し話を戻します。溝上先生と荒瀬先生の記念講演でのお言葉の中から、今日のパネルディスカッションで何を取り上げようかとメモをしておりましたが、多過ぎて、収拾がつかなくなりました。本日のこの時間だけではとても紹介できません。来年度以降の本フォーラムの素材とさせていただければと思いますが、１点だけ議論してみたいことは、本日のパネルディスカッションのテーマは「どうすれば『持続可能社会の創り手』を育成できるか」というお題であります。この１点だけ、ぜひ、５名の

先生方でディスカッションをしてみたいと思います。とはいえ、テーマが大きいので、私のほうで因数分解といいますか、絞りたいと思います。京都府内での実践、そして、荒瀬先生から解説していただきました「令和の日本型学校教育」の実現。これについては、2020年代ですので、あと８年、まもなく７年になるのでしょうか。こういった中で「探究」という言葉が５名の先生方の共通のキーワードだったと感じました。その探究というものをキーワードに、高大連携や高大接続をさらに豊かにするためには、何が足りていないのかということを、パネリストの皆さまから一つずつヒントを教えていただきたいと思います。

ちなみに本日、溝上先生の本を３冊持ってきたのですが、特に『高大接続の本質』と『大学生の学び・入門』、そして『活躍する組織人の探究』での問題意識を京都から発信していかなければいけないと思っています。もちろん、京都だけの独占物であってもならないと思っていますが、探究と高大連携・接続の論点は非常に大きいです。ところで、先ほど、お昼を食べながら溝上先生に「先生は理事長として小中高大と見ていらっしゃいます。同じ学園の中で、高大連携はどれだけ豊かに進んでいるんですか」とお尋ねすると「まだ、これからなんだよね」というお話でした。それも含めて、また、府・市・私立の立場からそれぞれ選抜の話もしていただきました。どうすればこういったものを豊かにできるのか、この論点について議論していきたいと思います。

それでは、酒井先生からお願いしてもよろしいでしょうか。どのようなことを話していただいても結構です。

酒井　おそらく、ここで言うべきことは、組織がいるであったり、教員にゆとりをといったことなのかもしれませんが、本音でお話しさせていただきたいと思います。私は私学ですが、立命館も附属校が複数ありますので、教育委員会とまではいかないとしても、学園の中に一貫教育部という組織がありますので、一定、委員会のイメージも湧かなくはないです。２つあるのです。

１つ目が、いろいろな取り組みをどこまで組織に付けるべきなのかという私の問いです。先ほど、溝上先生が、京都府教育委員会の取り組みに対して、希望者に行っていることが大事だと言われていました。本当に良き高大連携をしていこうと思ったときに、最終的には人と人との信頼関係が仕事のコストを最も下げることを、私は学園の中にいても感じるときがあります。組織としてつながらなければならなくなり、そのタスクだけがつながっていったときに、本当に良きものができるのだろうか。さらに思いでつながる仕組みがあることが重要ではないか。ただ、もしかするとＡ高校でうまくいったことが、ある先生がＢ高校に異動されると、Ｂ高校で盛んになるかもしれないというリスクがはらみますので、非常に発言しにくいことではあります。

もう１点が、したいことをすることを許せる学校文化をつくれるかどうか。生徒にはしたいことをしろとわれわれは言うのです。しかし、われわれ教員が、実は、しなければならないことばかりしているのではないかと思うときがあります。それはミスを謝ることから逃げるための仕事です。そこばかりに目が行ってしまっている現状があるのではないかと思います。われわれ教員もしたいことがあって教員になっているわけですし、部活も本来そこから始まっているはずです。本音でお話をして、具体性がないのですが、私の思っていることです。以上です。

杉岡　ありがとうございます。コーディネーターの特権で、１点だけコメントをさせていただきますと、今、私が入っている京都府立福知山

高校では、土曜日に先生方の探究の発表会を10 数年前から行っておられます。生徒に探究と言うだけではなく、学校の先生方自身も探究を行っている姿を見せていく。まさしく、そういったことを行おうという文化をどうつくるかが大事ですね。制度論ではなく風土論が大事ではないかと。

滝本先生、いかがでしょうか。

滝本　私は、この場に京都市教育委員会という形で登壇していますが、私個人の意見をかなり大きく入れながら話をさせていただこうかと思います。京都市教育委員会として、今年から積極的に行っている取り組みとして、各学校の総合的な探究の時間を運営している先生が集まって、研究会を立ち上げています。一人一人の先生方が自校の総合的な探究の時間の取り組みや困り事、課題、アイデアなどを話し合うことを、毎月１回行えるようになっていて、非常に活発な議論が行われている状況が、実は生まれております。私は教育委員会という立ち位置におりながら、各学校の探究の活動の様子を見ていて最も思うのが、グループであれ、個人であれ、生徒一人一人が、自分が知りたいと思うことやしたいと思うことを追究する時間が保証されている状況は非常によい。

そのためにさまざまな教員に大変な負担がかかってしまうとよくないことは非常に分かるのですが、先生と生徒たちがのびのびと自分の知りたいことを追究できる環境がつくれれば、非常に良いのではないか。その知りたいを進めていく中で、高校側の話でいうと、大学の先生方、もしくは大学生、異年齢の方との意見交換をしたり、共にプロジェクトを起こしたりすることで、探究課題の解決に向かっていく流れもよくできていくのかなと思っています。私としては、ぜひとも、コミュニティと、アイデアを出し合う中で得られた時間の確保と、アイデアの共有、その中で異年齢の高校生と大学生が入り交じったようなグループができて、自主的にアフタースクールの時間に探究課題を行っていく形がさらに進んでいけば非常に面白いのではないか。総合的な探究の時間での学びが授業時間内にとどまらずに、外に出ていく。学校では、既に、学生ボランティアやティーチングアシスタントの大学生が出入りされていたりします。そのあたりからつながりができていって、アフタースクールや高大年齢問わずのグループによって、さらに自主的な探究活動が活性化していく。そういう流れを委員会としても支援していければ、非常に面白いと思いながら見ておりました。

私からは、以上でございます。

杉岡　滝本先生、どうもありがとうございます。本当に大事な論点だと思います。先生方が集まれる場は、先ほど、溝上先生からオンラインを活用すればとありましたが、距離を超えて集まれる時代に入っております。そして、先生方の時間をつくるためだけではなく、異年齢から学ぶことです。教えることを通して学ぶ、そして、それをまたさらにつないでいく形としてアフタースクールの話もありました。私も京都府北部で実践しておりますが、教えることを通して学びが完結に向かっていくのだろうと思います。

伊藤先生、同じテーマで、いかがでしょうか。

伊藤　失礼します。理論的にも何もないコメントになってしまいますが、個人的な経験と気持ちだけでお話をすると、ＷＷＬを３年間、担当させていただいて、鳥羽高校や福知山高校の探究の授業をたくさん見せてもらい、発表会もさせてもらいました。少しつながったことがあります。酒井先生のご発表にあったとおり、与え過ぎずに、生徒たちが主体的に考えて動くことは、福知山高校が取り組んでいることに近い。福知山高校も、生徒たちが企業の社長にいきな

り電話をかけて、調査アンケートをさせてくださいと言い、後から校長先生が怒られたというお話も何度か聞いています。しかし、そうすることで地域の課題を身近に感じて、行動できる力が付いているのかと考えが一致しました。

先ほど、お話しした京都府WWL高校生サミットでも、かなり難しいことを高校生に投げているのです。事前の準備資料も送って、当日も完璧にオンラインで、トラブルがないようにしています。当日は4～5人のグループで、そのブレイクアウトルームの空間で3時間くらい話し合わせるのです。誰も助けません。ただ、そのときも、全て共通しているのは、福知山高校でも、立命館宇治高校でも、われわれが取り組んできた中でつながったことは、生徒たちが、安心して、思い切って行動できて、失敗しても大丈夫、別に、それでよいのだという空間をつくって来られたことです。京都府WWL高校生サミットの当日でも、生徒たちが思い切って、非常によい発表をしてくれたのを目にしました。

そのため、おそらく、学校としてしなければならないのは、その空間を提供してあげること。教員がびくびくしながら、もし生徒が「失敗して、何か苦情が来たらどうしよう」というのではなく、教師が思い切って「いいんだよ」と言えるような環境を学校がつくらなければならないし、教育委員会としては、そのような学校を許せる教育委員会をつくっていかないといけないのかなと思います。全て個人的な感情というか経験なので、なにも理論的ではありませんが、思い切って生徒たちが何かできれば、それが行動につながっていけるでしょう。その環境をつくってあげることが大事というのが、今の課題であり、これからしなければならないことだと思いました。ありがとうございました。

杉岡　伊藤先生、どうもありがとうございます。「失敗」と書いて「けいけん」と読むと言った商店街の会長がいましたが、失敗しても許すことが大事ですよね。「聴く」という文字は「ゆるす」とも読めます。聴くということで許してあげる。「親」という漢字も大事ですね。木の上に立って見ると書きますから。我慢して、あえて教えずに、待つ。私も教師の端くれでありますが、これがなかなか難しいわけです。しかし、教師がこれをしっかりと認識し、生徒と向きあっていくことの重要性を強調いただきました。

溝上先生、お願いしてもよろしいでしょうか。大き過ぎて、短くまとめることが難しいと思いますが、よろしくお願いいたします。

溝上　頂いている質問と引っ掛けて、高大というところで、お話を1つしたいと思います。ちなみに、今、私は幼稚園から大学までの学校の理事長をしています。ただ、桐蔭学園では高校と大学の差があり過ぎて、中でつなぐことがなかなか簡単ではなく、どちらかというと、高校は外の大学とつなげていますし、大学も外の高校とつなげている。こういうねじれが起こっているため、先ほど、少し難しいですねというお話をしたのです。

今の子どもたちは、ICTやデジタルコンテンツに慣れていますよね。そういう子どもたちが大きくなっていくと、私たちに影響がありますかという質問を頂いています。私は、ここは非常に大事なところだと思っていて、この場でお話ししたいです。まず1つは、私は、今、文部科学省高等教育局でScheem-Dという、高等教育とDXというテーマで、大学や民間、NPOなどが、デジタルやICT技術、オンライン技術、例えば、先端技術でいうとメタバースやXR、AR、Web3.0などを、どのようにして大学の教育に入れていくかというアイデアを出して、それを商品化していくプロジェクトの委員長をしています。

皆さんは、オンライン授業というと、先生が

左端か右端にいて、真ん中のスライドを見て、話しているというように思っているかもしれませんが、このようなものはこれからさらに淘汰されていく。もはや人が話す必要性はないですよね。もしかすると、格好よいアニメやアバターでもよいし、さらに言うと、平面でなくてもよいですよね。３次元空間でのカメラワークの技術が提案されていて、皆さん『鬼滅の刃』を見たことがありますか。走っているキャラクターをカメラがどこで追いかけて描かれているかというと、ただ走っていても迫力が足りないので、カメラワークが複数あり、あちらこちらに動いたり、途中でカットしてピッと行ったりします。そこに効果音もあります。つまり、カメラワークと音響を工夫して、話す人は格好よい芸能人やすごいアニメにして、話がきちんとしていれば、学生や生徒はそのコンテンツから離れられない。もちろん、内容は大事ですが、内容だけでは聞かないので、面白さを取り入れるオンライン授業の開発がますます提案されるわけです。それが決して遠くない将来に入ってきたときに、私たちは対面で何ができるのかが問われてくる。

デジタルコンテンツは無限の可能性を秘めています。今の大学は学生たちに最先端を見せられるような環境ではなくなってきている。むしろ、研究１つ取っても、大学がいつもすごいわけではなく、企業や研究所のほうが意外と優れていることもあります。あるいは、連携。そういう意味では、大学は非常によいように思っているかもしれませんが、大学からしてみると、今の大学はそれほどすごくないと思っているのです。オンラインコンテンツになれば、最先端の情報が誰でもアクセスフリーです。あるいは、ソーシャルメディアといったほうがよいかもしれません。別にコンテンツだけではなく、さらに情報が流れてきて、あそこへ行けばフェアをしていたり、ここへ行けば大学の先生ではなく企業の研究員が最先端の取り組みを報告していたりする。

子どもたちの慣れもありますが、大変な勢いで進んでいる教育のデジタル化に、私たちはさらに勉強しないといけないと思います。私はデジタルの専門家でもないが、Scheem-Dというプロジェクトはいろいろな理由で座長をしていますが、していて非常に良かったと思い、一生懸命に勉強しています。そこには、EdTechの世界で有名な委員もいます。これがどれくらい入ってくるか分からないが、１％でも入ってくると、私たちは相当崩壊していきます。対面で生徒・学生を満足させられない教師は、おそらく、学校教育を急速に劣化させていきます。

私は、高校向けで言えば、学習指導要領の主体的・対話的で深い学びでよいから、しっかりできるように今のうちにきちんと行っておくべきだと思います。そういうことがしっかりできれば、あとは、ここはデジタルコンテンツに任せて、ここは高大でここまで行ってというように言えるようになります。しかし、人と人とで勝負できない学校になっていくと、これはどうなるのか。相当格差社会というか、できる学校・できる教師とそうではないところの間が非常に開いていく。

私は、先ほど、YouTubeにインタビューしている動画があると紹介しましたが、Scheem-Dのいろいろなピッチイベントの事例を紹介していますので、ぜひ検索して、見て面白くなければ、すぐに止めてもよいので、一度見てみてください。そうすると、今、私がここで言っていることが多少は分かります。情報として知識を得ていく、そして私たちの対面の世界を磨いていく、そういう高大連携、あるいは学校の発展を考えてほしいと思います。

杉岡　どうもありがとうございます。今のお話は、われわれ地方に住み、学んでいる者としても追い風になると思います。少人数教育だから統廃合ということではなく、このいわゆる

EdTech を活用し、できることはたくさんあるのです。今日は時間がないので突っ込んだ議論はできませんが、希望と共に、ここで放っておくと全て奪われていきますよという、われわれ自身の学び直しの必要性ですね。そのようなお話だっただろうと思います。

最後に、荒瀬先生、よろしくお願いいたします。

荒瀬　今、溝上先生がおっしゃったことを受けて、申し上げますと、要は人間関係というか、人が人を教えるというときに、何を教えて、どう引き出すのかという、当たり前の、アナログで古典的な教師像が、これからの人間の教師には大事になってくるということですよね。

溝上　そこに尽きると思います。

荒瀬　愛知県の春日井市立高森台中学校は、ＩＣＴの活用で非常に先進的なところです。なぜ先進的かと聞くと、校長先生が笑いながら「20年もやっていますから」とおっしゃるのです。先ほども少し申しましたが、長く行っていると道具になります。そのような中で、この校長先生が「基本は人間関係です」とおっしゃるのです。つまり、どれほど機械化、ＩＣＴ化したとしても、結局は、人間である教師が人間の子どもを導いたり、教えたり、支えたり、伴走するということが大事なので、そこを基本として忘れてはいけない。

あとは、先生が本当に面白がっているかどうかが、非常に大事になってくると思うのです。先生が面白がってもいないのに、生徒が楽しいはずがない。やはり、先生がわくわくしていたり、探究に興味を持っていなければ、探究に興味を持つ生徒が育たないと思うのです。不思議だな、これがこうなるとよいな、これをこうしてみようというような気持ちを先生方に持っていただけるためにはどうすればよいかというと、やはり時間的な余裕ですよね。

先日、平田オリザさんが単純明快におっしゃっていましたが、先生の数を倍にすればよいですよと。先生の数を倍にすれば、相当な問題が解決しますと。しないのは、問題を解決しようとする気がないのだろうが、だからといって、われわれが関係解決をしないわけではなく、われわれはその中でも一生懸命に考えていかなければならないとおっしゃっていました。そうなってきたときに、やはり先生が何でもかんでもするというのは非常に厳しいので、例えば、生徒にさらに任せる時間や場面をつくってはどうかと思います。先ほど、滝本先生がおっしゃっていた中で、開建高校が「しなやか」という言葉を使っていて、美術工芸高校も「しなやか」という言葉を使っていらっしゃいました。思い出してみると、かつて堀川高校も「しなやかさ」と「したたかさ」と言っていたことがありました。しなやかな生徒はどうすれば育てるのか、育つのかというと「しなやかに育ちなさい」と言っても育たないと思うのです。あちらでぶつかり、こちらでぶつかり、たくさんの経験を積むことを通して、そのようになってくるかと思います。

高等学校の卒業に必要な単位数は 74 単位です。生徒に求めるのは 74 単位にしませんかという提案です。ただし、その分、何をするのかを生徒と一緒に考えるような学校ができていくことが、今日、お話にあった、いろいろなところとつながっていくような気が私はしてお

ります。

最後にすみませんが、今日、ご紹介できなかった、東京都立国際高等学校の家庭科の授業です。家庭科の授業は、かつてから探究を行っていました。朝日新聞のデジタル版で検索できます。もう一つ、宮崎県立宮崎東高等学校の定時制夜間部の探究の取り組みも入れています。不登校経験があったり、学力的にも課題がある。しかし、定時制でなければできない探究があるということで行っていらっしゃいます。「哲学カフェ」の先生は、東京大学の哲学の先生です。「東大の先生が、定時制の？」というように、世間一般はまだ思うと思います。そういう思いからわれわれが自由になることが、生徒の学びの垣根を低くして学校が豊かになっていくのではないかと思います。

以上です。ありがとうございました。

杉岡　荒瀬先生、大胆なご提案をどうもありがとうございます。このパネルディスカッションの終わりの時間が迫ってまいりましたが、たくさんの事例を頂きましたので、この後もわれわれ自身も学びを続けたいと思います。

それでは、お時間が来ておりますので、簡単にまとめをしておしまいにしたいと思います。今、荒瀬先生からありました、そして５人の先生から頂きました、今日のテーマです。いろいろなテーマがありまして、一言でまとめきれませんが、要は高校だけや大学だけではなく、幼・小・中・高・大、そして社会へとトランジションリレーをどう回していくのか。そのヒントを今日５名の先生方から頂きました。そして、ＩＣＴやEdTech 等のお話も頂きながら、今後、人間にしかできないことは何かということも同時に突き付けられている時代に、われわれは生きていることも確認しました。

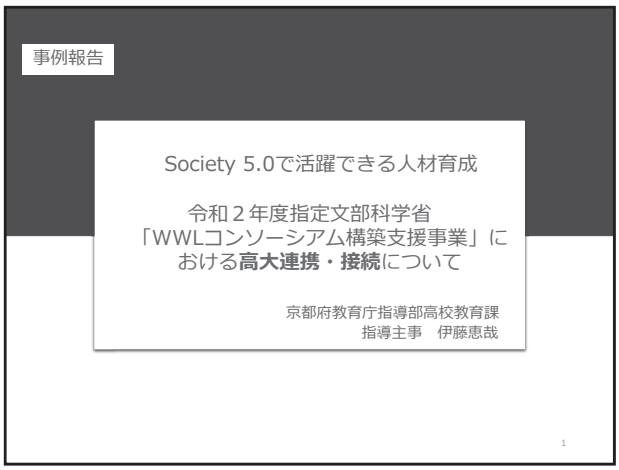
その中で、われわれ人間にしかできないことを考えなければいけません。ソーシャルという言葉があります。これを社会と訳すのではなく「人間交際」と訳すのだと言ったのは福沢諭吉であります。このように、人と人とのつながりが社会のつながりであり、高校の段階から生徒を学校の中に閉じ込めるのではなく、生徒が学校の中から飛び出すお手伝いをし、多様な方々と、公立、私立の学校の枠も超えてつながっていく。そうした中で失敗してもよいという時空間、そして仲間の「間」ですね。この間というものをどうプロデュースできるのか。これがわれわれ教育関係者、あるいは学校関係者に試されているのではなかろうかと思った次第です。今日はアフタースクールの話もありました。また、企業の研究が進んでいるという話もありました。まさしく学校だけで教育を閉じるのではなく、いろいろな人を巻き込みながら、この「間」をつくっていく。そうすると、間に合うわけです。この間が抜けてしまうと、間抜けになってしまうわけです。この間を大事にすることを、今日のまとめにならない「ま」とめといたしまして、今日のセッションを閉じたいと思います。ありがとうございました。

なお、紹介できなかった質問等は、来年度以降も続けてまいります、本フォーラムの議論の素材とさせていただきたいと思います。

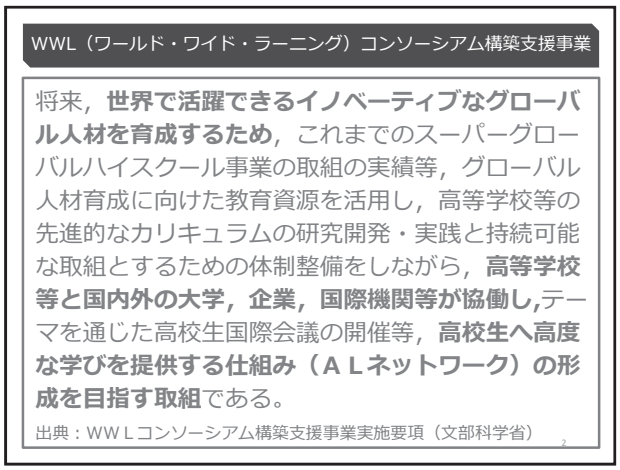
最後に、ご登壇いただきました５名のパネリストの先生方への感謝の拍手でもって閉めたいと思います。どうもありがとうございました。

伊藤　恵哉（京都府教育委員会 高校教育課 指導主事）

スライド１

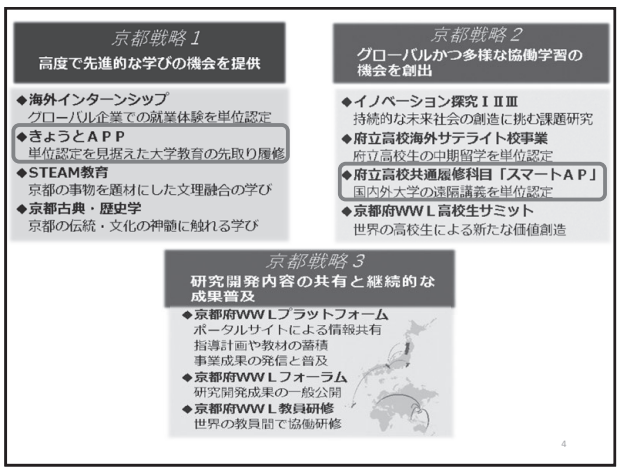


スライド２

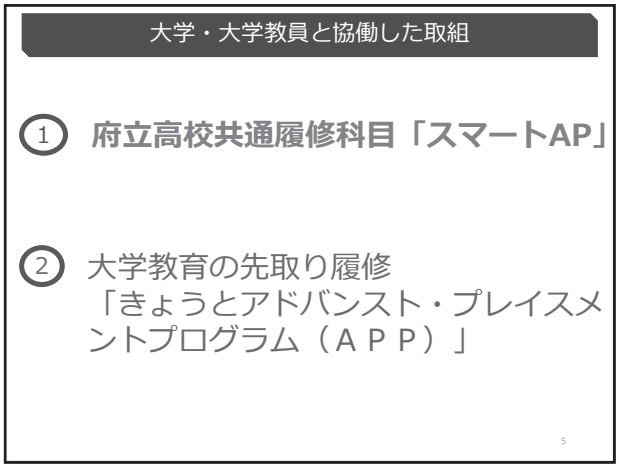


スライド３

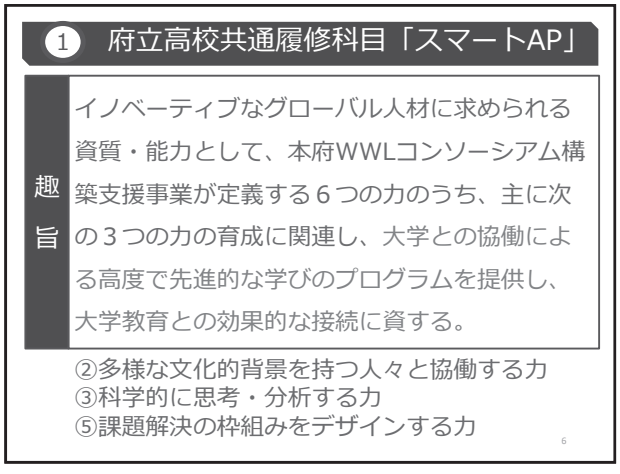
スライド４



スライド５



スライド６



スライド７

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

目的

希望する高校生に、グローバルな社会課題の解決に必要なリサーチスキルを習得させるとともに、イノベーティブなグローバル人材の基盤となる論理的・批判的思考力と多文化協働力を育成

内容

高校２年生を対象に、６名の大学教員によるリレー講義・ワークショップから成るプログラムをオンライン又はオフラインで受講し、その成果を踏まえて京都府WWL高校生サミットに参加

※「取組が十分である」と認められたものには修了証を府教育委員会が発行し、**在籍校の単位**として認める。

7

スライド８

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

カリキュラム開発から実施までの流れ

令和２年度	令和３年度	令和４年度
■制度設計 鳥羽高校ＳＧＨ事業をベース ■講師依頼 ■遠隔実証研究	■対象校 鳥羽（拠点校） 福知山（共同実施校） ■**在籍校から**接続 ■20名参加	■対象校 鳥羽・福知山・洛北 嵯峨野・南陽・峰山 ※ＷＷＬ事業連携校かつBYOD先行校 ■**自宅から**接続 ■27名参加

8

スライド９

参加校

2022 京都府公立高等学校
スクールガイド（一部抜粋）

9

スライド１０

令和４年度実施 プログラム内容

回	日程	テーマ・内容	形式（場所）
第１回	4月16日（土）	導入・リサーチスキル①「課題研究の意義、問いの立て方」 杉岡秀紀氏（福知山公立大学地域経営学部　准教授） 江上直樹氏（大阪大谷大学教育学部　講師）	遠隔
第２回	5月7日（土）	リサーチスキル②「研究テーマの決定－RQの設定と仮説の構築－」 乾明紀氏（京都橘大学経済学部　准教授）	遠隔
第３回	6月4日（土）	リサーチスキル③「研究方法について－量的研究と質的研究－」 神吉紀世子氏（京都大学大学院工学研究科　教授）	遠隔
第４回	7月16日（土）	多文化協働の手法 "Team Work and Collaboration" Rebecca Axelson氏（豪州・クイーンズランド工科大学）	遠隔
第５回	7月30日（土）	論理的・批判的に考える 柿澤寿信氏（大阪大学国際共生大学院学位プログラム推進機構　准教授）	遠隔
第６回	8月20日（土）	リサーチスキル④「チームでプチ課題研究！－研究計画書を作ろう－」 乾明紀氏（京都橘大学経済学部　准教授）	対面（鳥羽高校）
第７回	9月17日（土）	リサーチスキル⑤「プレゼンテーションの技法」・まとめ 杉岡秀紀氏（福知山公立大学地域経営学部　准教授）	遠隔
第８回	10月29日（土）	京都府WWL高校生サミット	遠隔（在籍校）

遠隔実施に変更

10

スライド１１

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

各授業の構成及び時間

第１回～第７回：大学教員による講義・ワークショップ
→　90分×２コマ

生徒によるレポート作成・ふりかえり
→　30分

第８回：京都府WWL高校生サミット
→　280分

計1750分
（高校における授業時間数35時間相当※１授業時間数=50分）

11

スライド１２

講義内容の連携

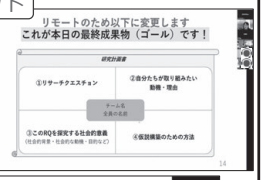
探究から研究へ

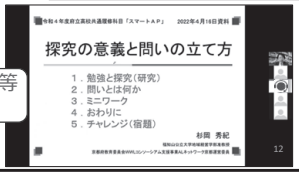
第８回
京都府WWL高校生サミット

第７回
プレゼンテーションの技法

第６回
協働作業による研究計画書作成

第１回～第５回
探究に係るリサーチスキル等の学び





12

スライド 13

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

京都府ＷＷＬ高校生サミット（高校生国際会議）

■府立高校及び他府県連携校から参加者を募り、**「『豊かさ』の価値の再創造による持続的な未来社会の創出」**をテーマに、少人数のグループで、設定したトピックのうち１つについて、オンライン上で**日本語**又は**英語**で議論

トピック

Ⅰ 「文化遺産の戦略的活用による活力ある未来社会の創出」
Ⅱ 「科学技術と自然が調和する豊かな未来社会の創出」
Ⅲ 「多文化共生による平和で安心な未来社会の創出」

13

スライド 14

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

Ｒ４京都府ＷＷＬ高校生サミット

■講評者
杉岡秀紀氏（福知山公立大学）
スティーブン・ハーダー氏（京都ノートルダム女子大学）

■令和４年度参加校（者）

スマートＡＰ受講者、府立高校（７校）、秋田県立秋田南高校、学校法人九里学園高校、沖縄県立那覇国際高校、豪州・Mansfield State High School、留学生（京都府名誉友好大使、京都外国語大学等）

14

スライド 15

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

昨年度の修了者の声

■何よりも大学教授のお話を聴けることが魅力。高校では得がたい知的刺激を得た。

■学んだ探究のプロセスを大学での研究活動に生かしたい。

■自分なりの課題意識から問いを立てるということを大学の卒論でも大事にしたい。

15

スライド 16

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

今年度の参加者の声　※第７回終了時点

■ＲＱ(Research Question)は自分一人で考えるのが、自分の思い通りにでき楽だと思ったこともあったが、班の人たちと共有することで客観的に考えられるとわかった。ＲＱ一つ立てるのにも、考えていくうちに根本からＲＱが変わったり、丁寧にすればするほど精度の高いＲＱができていくのが面白かった。

※メタ認知力の向上

16

スライド 17

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

成　果

■**「大学の初年次教育との接続を図ること」**と**「各校における探究学習の指導に生かすこと」**を意識し、探究の「作法」を一通り学ぶことができるプログラムを研究開発した。
→ **高校の探究活動を熟知されている各講師と目的・目標の共有及び入念な打合せ**

■生徒がグループワークを通して１つのプロジェクトに取組、**成果物にまとめ発表**できるよう各回の講義内容の連携を図った。
→ **各回の講義内容を講師間で共有**

17

スライド 18

大学・大学教員と協働した取組

① 府立高校共通履修科目「スマートAP」

② **大学教育の先取り履修**
「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム（ＡＰＰ）」

18

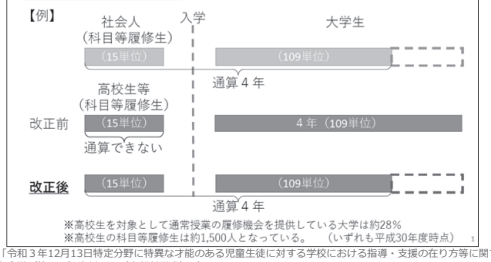
スライド 19

②「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

令和３年度学校教育法施行規則の改正について

令和３年12月13日 特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議（第６回） 資料２

- 科目等履修生として大学で一定の単位を修得した高校生等（大学入学資格を有さない者）が、その後当該大学に入学する場合、当該大学が定めるところにより、修得した単位数、その修得に要した期間等を勘案して修業年限の通算を行うことを可能とした。（令和３年１０月２９日公布・施行）



※高校生を対象として通常授業の履修機会を提供している大学は約28%
※高校生の科目等履修生は約1,500人となっている。（いずれも平成30年度時点）

出典：「令和３年12月13日特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議（第６回）資料２」（文部科学省）（https://www.mext.go.jp/content/202112017-mxt_kyoiku02-000019034-003.pdf）（令和４年10月21日に利用）

19

スライド 20

②「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

目的

本プログラムは、十分な能力と意欲を有する生徒が在学中に高度な学びにアクセスできる機会を保障することにより**高校教育と大学教育の円滑な接続**を図り、京都の知を活かし、持続可能な未来社会の創出に貢献できるイノベーティブなグローバル人材の育成に資することを目的とし、**京都府立大学、福知山公立大学及び京都府教育委員会の協働**により実施するものである。

20

スライド 21

②「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

概要

（１）**生徒に各大学の正規授業の履修機会を提供するため**、各大学と教育委員会の協働により大学教育の先取り履修プログラムを開発する。
（２）受講方法はオンライン配信を基本とし、具体的には各大学において定める。
（３）令和４・５年度の２年間を**試行期間**とする。
（４）プログラムの修了者には大学から修了証を交付し、**在籍校で高校の単位**として認定する。

21

スライド 22

②「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

先行事例の調査から試行開始までの流れ

令和２年度 → **令和３年度** → 令和４年度

令和２年度	令和３年度	令和４年度
■先行事例の調査 埼玉大学	■２大学と協働し、制度設計 ■先行事例の調査 広島県教育委員会 広島大学 県立広島大学	■試行開始 ※身分は聴講生 ■対象 鳥羽・福知山 （全学年）

22

スライド 23

②「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

京都府立大学

後期科目（10名）
- 教養教育センター「現代社会と法」
- 公共政策学部「コミュニティワーク」
- 生命環境学部「森林の科学」

福知山公立大学

前期科目（６名）
- 地域経営学部「経営学入門」「多文化共生論」
- 情報学部「エンタテインメント情報学」

後期科目（６名）
- 地域経営学部「地域協働論」
- 情報学部「ゲーム情報学」

23

スライド 24

②「きょうとアドバンスト・プレイスメントプログラム」

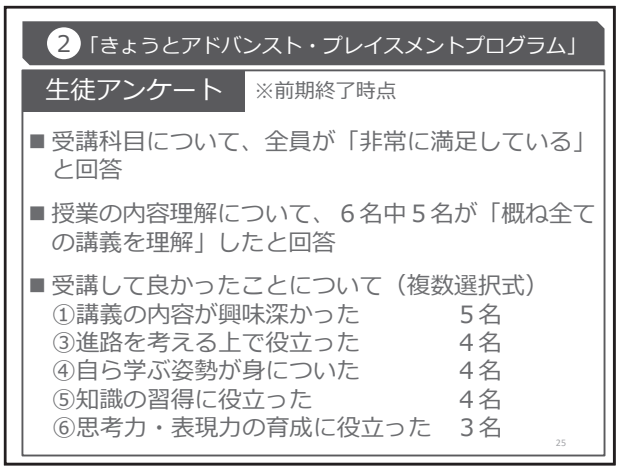
受講状況 ※前期終了時点

○大学が定める要件を満たし、６名全員が修了した。
○大学側のご配慮により事前オリエンテーションを実施していただいたため、自宅からの受講は概ね円滑に行われた。

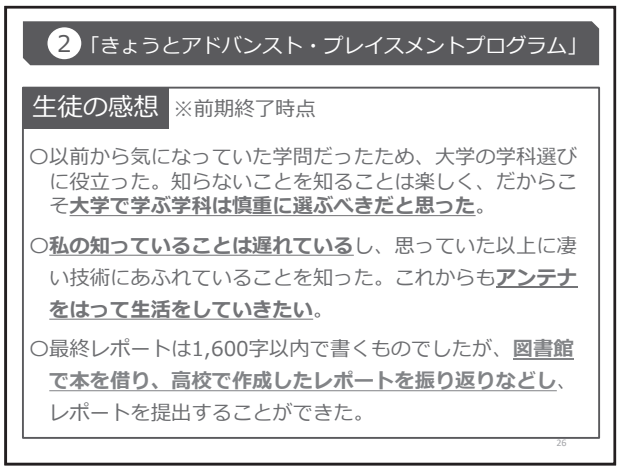
▲大学からのメールによる連絡・指示が伝わらないことがあった。
▲数回分の授業をまとめて視聴し、遅れて授業レポートを提出するケースがみられた。

24

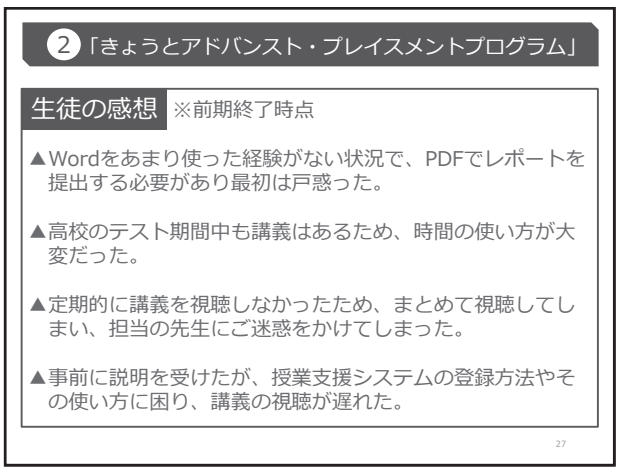
スライド 25



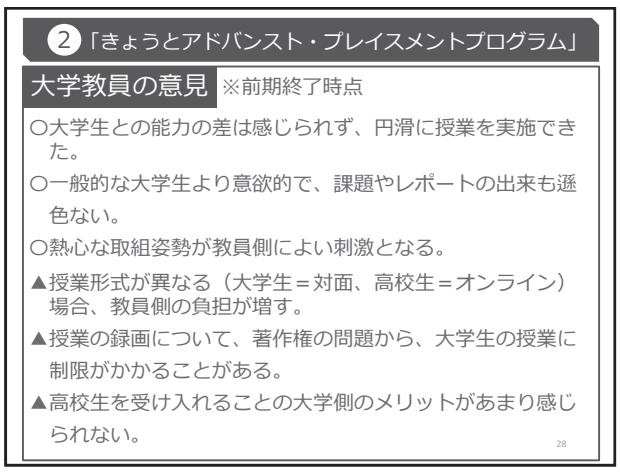
スライド 26



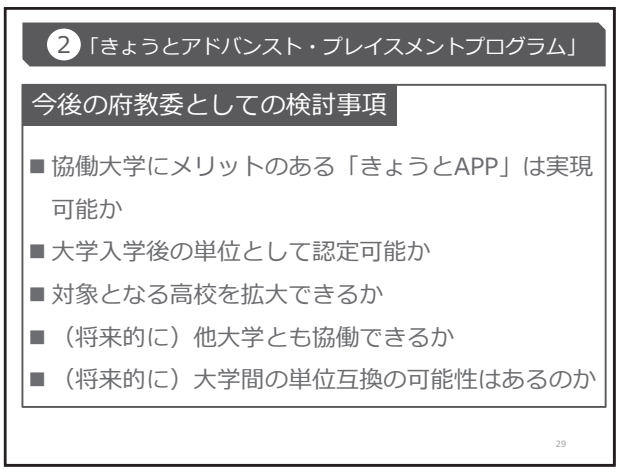
スライド 27



スライド 28



スライド 29



スライド１

第20回高大連携教育フォーラム

京都市立高校の学校改革

令和4年12月3日
京都市教育委員会学校指導課
指導主事　滝本順之

1

スライド２

京都市立高校学校改革の軌跡

平成7年（1995年）
21世紀を目前にして，市立高校の更なる発展と21世紀の時代に生徒に育むべき資質を見据え，次代を展望した魅力ある新しい市立高校の在り方を検討するため，
「京都市立高等学校21世紀構想委員会」を設置

「答申」に基づき，堀川高校をパイロット校として位置付けた新たな普通科系専門学科（＝人間探究科，自然探究科）を創設

2

スライド３

京都市立高校学校改革の軌跡

＜主な市立高校改革の経過＞

＊平成11年(1999年) 堀川高校に人間探究科，自然探究科を設置
＊平成15年(2003年) 西京商業高校を改編し西京高校エンタープライジング科を設置
（翌16年 附属中学校併設）
＊平成19年(2007年) 塔南高校に教育みらい科を設置
＊平成21年(2009年) 日吉ケ丘高校の英語科を国際コミュニケーション科へ改編
＊平成22年(2010年) 音楽高校を城巽の地へ移転し，京都堀川音楽高校に校名変更
＊平成26年(2014年) 京都市・乙訓地域の公立高等学校入学者選抜制度の改革
日吉ケ丘高校を進学型単位制普通科へ移行
紫野高校の普通科第Ⅲ類英文系をアカデミア科へ改編
＊平成28年(2016年) 洛陽工業高校，伏見工業高校の再編・統合により
京都工学院高校を創設

堀川高校改革以降も，社会の変化を見通した新たな教育改革に一早く取り組み，全国に先駆けた教育改革を実現

3

スライド４

令和の世において…

一層急速な社会の変化と生徒のニーズの更なる多様化進む。

スライド５

令和の世において…

新しい時代の高等学校教育の実現に向けた制度改正等について（概要）

○「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）」（令和３年１月26日 中央教育審議会）及び「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ（審議まとめ）」（令和２年11月13日 同ワーキンググループ）等を踏まえて、学校教育法施行規則、高等学校設置基準、高等学校通信教育規程等の一部改正等を行うこととする。

1 各高等学校の特色化・魅力化 【学校教育法施行規則・高等学校設置基準の一部改正、通知事項】

◆各高等学校に期待される社会的役割等の再定義
・高等学校の設置者は、高等学校が下記の「三つの方針」を策定する前提として、各高等学校やその立地する市区町村等と連携しつつ、各高等学校に期待される社会的役割等（いわゆるスクール・ミッション）を再定義することが望まれる。

◆高等学校における「三つの方針」の策定・公表
・高等学校は、当該学校、全日・定時・通信制の課程又は学科ごとに以下の方針（いわゆるスクール・ポリシー）を定め、公表するものとする。
(a)高等学校学習指導要領に定めるところにより育成を目指す資質・能力に関する方針
(b)教育課程の編成及び実施に関する方針
(c)入学者の受け入れに関する方針
（※）令和４年４月１日から施行（令和６年度末まで経過措置）

◆高等学校と関係機関等との連携協力体制の整備
・高等学校は、当該学校における教育活動その他の学校運営を行うに当たり、関係機関等との連携協力体制の整備に努めることとする。
（※）令和４年４月１日から施行

2 普通科改革（高等学校における「普通教育を主とする学科」の弾力化）
【高等学校設置基準・高等学校学習指導要領の一部改正】

・普通教育を主とする学科として、普通科以外の学科を設置可能とする。
・普通科以外の普通教育を主とする学科においては、各学科の特色等に応じた学校設定教科・科目を設け、２単位以上を全ての生徒に履修させるなどして教育課程を編成することとする。
・普通教育を主とする学科のうち、学際領域に関する学科及び地域社会に関する学科については以下のとおりとする。
(a) 学際領域に関する学科については大学等との連携協力体制を整備するものとする。
(b) 地域社会に関する学科については地域の行政機関等との連携協力体制を整備するものとする。
(c) 上記２学科は、関係機関等との連絡調整を行う職員の配置その他の措置を講じるよう努めるものとする。
（※）令和４年４月１日から施行予定

5

スライド６

市には高校設置義務なし。
市立高校は、より一層の特色化・魅力化により、存在意義を示す使命がある。

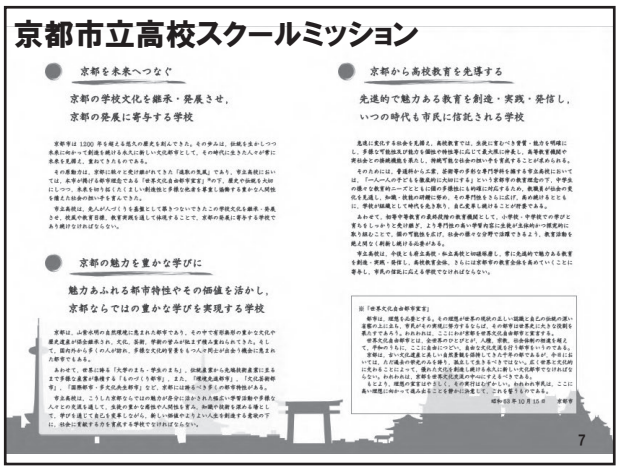
京都市立高校スクールミッション再定義

市立高校スクールミッションを前提として、各校と意見交換しながら、各校スクールミッションを策定

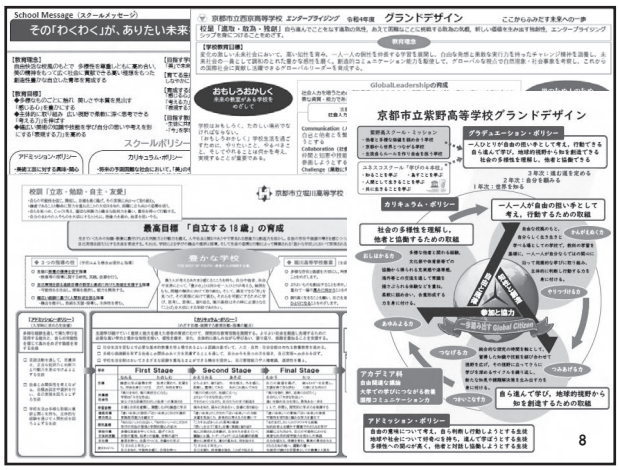
各校が3つのスクールポリシーを作成
自校のグランドデザインを表現

6

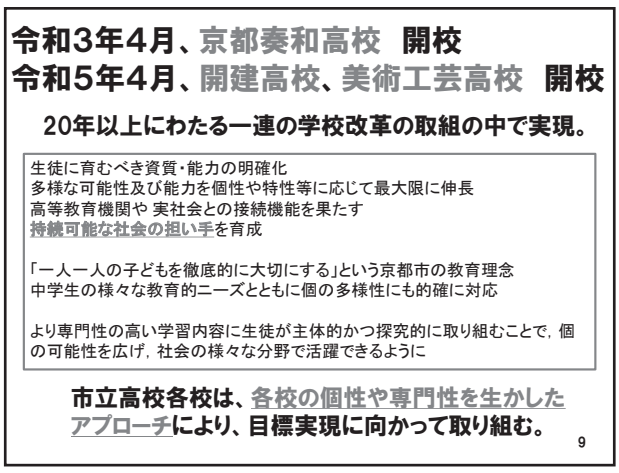
スライド7



スライド8

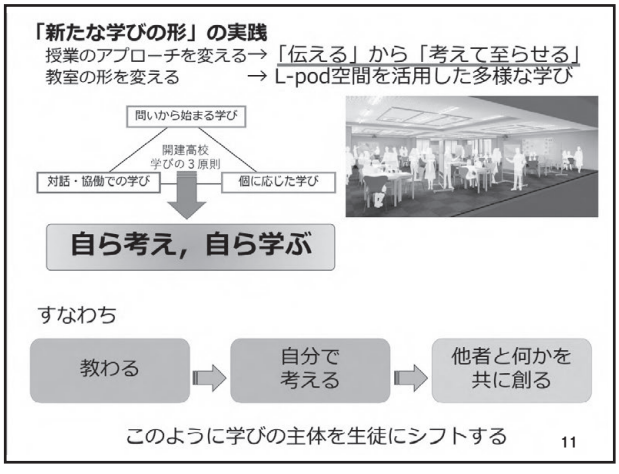


スライド9

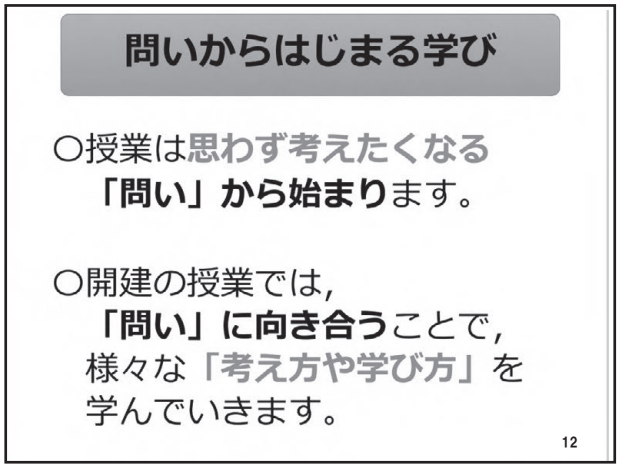


スライド10

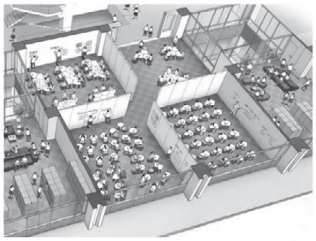
スライド11



スライド12



スライド 13



学習スペース
L-pod（エルポッド）

・４つの普通教室サイズに区切ることも可能
・壁が全てホワイトボード

（内装は予定です）

多様な形態がとれる新しい学習空間で，「生徒の数と同じ数の学びと進路がある」という考えのもと，生徒自身が設定した目標に向かって，自分に適した方法で学ぶスタイルを生徒と教員で創ります。

ホームルーム活動も、生徒８０名と複数の担当教員で行います。この形がスクールライフの基本単位となります。

13

スライド 14

「総合的な探究の時間」を中核とした学び

３年間を通して，教育活動の三本柱に取り組みます。
より良い未来社会の創造を目指して，
探究に必要なスキルや手法の修得
未来の創り手となる志
自己を成長させるマインドを育みます。

特に、あらゆる機会を学びの機会と捉えて、
「成長することが成功だ」という
成長マインドセットにつなげる学びの場面です。

学びのマインド
学びのモチベーション
ホンモノとの出会い
主体的な活動

14

スライド 15

開建高校が目指すもう一つの姿は，

生徒が創る学校

授業も，学校生活のルールも，
しなやかに変化し続ける学校

学校を変化させていく中心は生徒であり、生徒と教師が一緒になって学校を協創していくことを目指します。

スライド 16

京都市立 開　建 高等学校

開建高校のキャッチフレーズ・・・

「　やってみたい を やってみる
～夢中になる学びがここにある～　」

・楽しみながら夢中になって学んでほしい。
・様々な活動に果敢に挑戦してほしい。
・学ぶことの楽しさや喜び，考えることのすばらしさを体験してほしい。

16

スライド 17

京都市立銅駝美術工芸高等学校

2023年春、**京都市立美術工芸高等学校**として移転開校

17

スライド 18

美工の教育理念と目標

教育理念

自由快活な校風のもとで多様性を尊重し共に高め合い美の精神をもって広く社会に貢献できる高い理想をもった創造性豊かな自立した青年を育成する

目指す学校像

「美」で未来への希望を創る学校

育てる生徒像

しなやかに、新たな自分を描く人へ

教育目標

多様なものごとに触れ 美しさや本質を見出す「感じる心」を豊かにする

主体的に取り組み 広い視野で柔軟に深く思考できる「考える力」を伸ばす

幅広い美術の知識や技能を学び 自分の思いや考えを形にする「表現する力」を高める

育成する資質・能力

「感じる心」
…　観察眼・発見力・感性

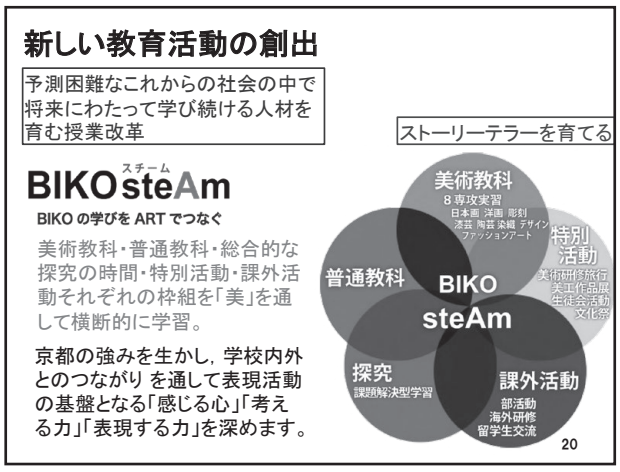
「考える力」
…　論理的思考力・判断力・発想力

「表現する力」
…　ものがたり力・ものづくり力・行動力

18

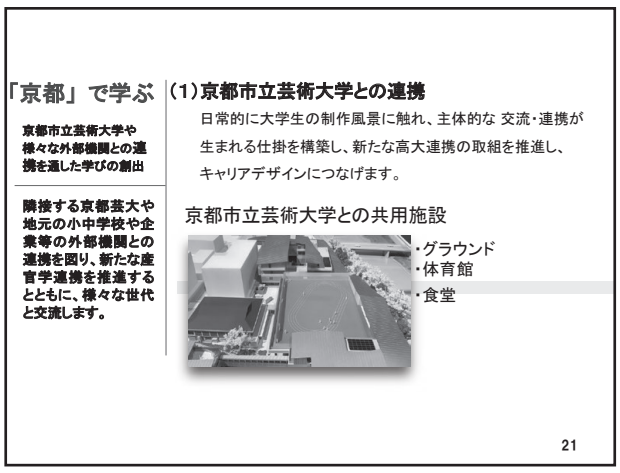
スライド19

スライド20

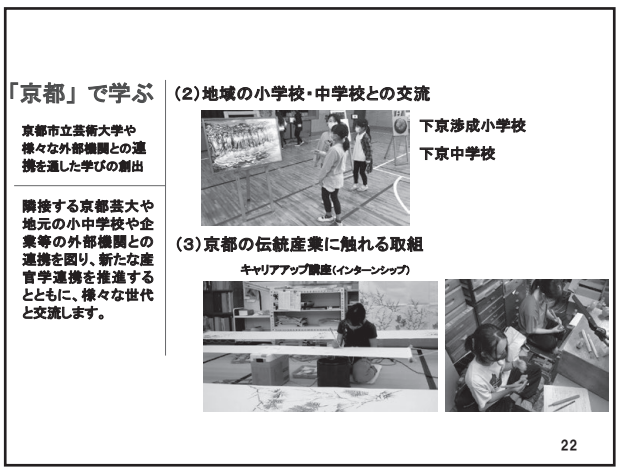


スライド21

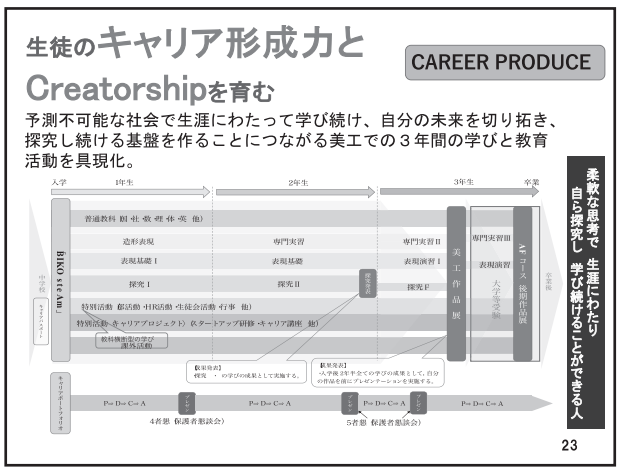
スライド22



スライド23



スライド24



スライド 25

京都市立京都奏和高等学校

課程・学科	定時制課程・普通科（単位制）	通学区域	京都府内全域
規　模	１学年８０名、１クラス２０名程度	修業年限	３年か４年を選択
選抜方式	特別入学者選抜（公立前期選抜と同じ日に行います）		
出願資格	不登校経験のある生徒や、行動や認知の特性による学びに困りがある生徒、その他学び直しを必要とする生徒（中学校長の副申書が必要）		

本校で学んでほしい生徒像

様々な困りがあり、義務教育段階や高校において学びのつまずきを経験しながらも、就職や進学を見据え、学習意欲を持って学習支援や「学び直し」を求めている生徒。

次のような想いを持っている人

- 学習上の困難やつまずきがあるため、学び直しから始めたい。
- 集団の中で学びづらさを感じているが、学校という集団生活の中で学びたい。
- 学校生活に不安を感じているが、上手に人間関係を築きたい。
- 不登校を経験したが、学校に通って学びたい。

次の点を京都奏和の魅力と感じる人

- 新しい環境の中で、リスタートできるので、安心して学べる。
- 学びやすい時間帯が選択できさらに少人数なので安心して学べる。
- 時間割等の枠組みが決まっているほうが安心して学べる。
- サポートがあると力を発揮しやすいので、安心して学べる。

25

スライド 26

京都奏和高校の教育

学校教育目標
自己の理解と自信を深め、自ら考え行動できる力を育む
多様な価値観を認め、他者を尊重する態度を育む
社会の一員としての自覚を高め、豊かに生きる力と態度を育む

大切にしている３つのこと

① 大切にしていること **自分らしく学ぶ**
個に応じた支援・指導を受けることで、自分の未来に向かって一つ一つの学びを積み重ねます。

② 大切にしていること **集団で学ぶ**
相手の気持ちを理解し、お互いに尊重し合える関係性を築くことで、学びを深め、社会生活を送るための土台を築きます。

③ 大切にしていること **様々な人と出会う**
多様な価値観に触れ、様々な人間関係を築くことで、社会とのつながりの大切さを学びます。

03 学校概要（コンセプト・教育課程）

26

スライド 27

育みたい６つの力と目指す姿

自分のペースで「自分らしく学ぶ」、仲間と「集団で学ぶ」、そしてその過程で「様々な人と出会う」。
このような、京都奏和高校ならではの学び方を通じて、右に示した６つの力を育てていきます。
そしてその力をもって、それぞれが、社会の一員として自立し、豊かな社会生活を送れる人に成長していけるように、様々な授業・取り組みによってサポートをします。

目指す姿

自立するための基礎を身に付け、社会の創り手として主体的に行動し、豊かな社会生活を送ることができる

04 学校概要（コンセプト・教育課程）

27

スライド 28

Pick Up 奏和のミリョク

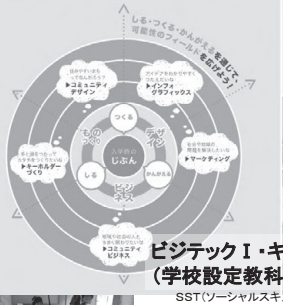
ランアップ

中学校までの学びを確認し、高校での学びにつなげるための「助走（ランアップ）」として、国語・数学・英語の３科目で実施します。サポートのもと、個別に学習目標を設定して取り組みます。

- ４月～６月ごろまでの期間に，中学以前の学び直しの授業を実施。
- 生徒はiPadを活用（全員に貸与）。
- １クラスに教員２名が入り、生徒を見取る。
- 卒業までに定着を目指す「高校での学びの土台となる学力」へつなげる取組。

28

スライド 29



ビジテック

ビジネス（商業）とテクノロジー（工業）を掛け合わせた本校独自の授業です。ものづくりやマーケティングなどを学び、２年次以降は地域や社会と連携した取り組みを行っていきます。

ビジテックⅠ・キャリアⅠ
（学校設定教科「キャリアデザイン」）

SST（ソーシャルスキルトレーニング）
　他の人と関わりながら生きていくために欠かせないスキルを身に付ける訓練
ものづくり・まちづくり
　工業科の教員が担当し、キーホルダーや住宅模型作りに挑戦
ビジネス・デザイン
　商業科の教員が担当し、ビジネスマナーについてペアワーク、
　グループワークや自分の特性を示した名刺作りを通じて自己表現を経験

ビジテックⅡ（総合的な探究の時間）で学びを深める

10/19（水）NHK総合ニュースほっとかんさい「幸せニュース」で放送
保育園の子どもたちに自作のおもちゃをプレゼント。

29

スライド 30

Pick Up 奏和のミリョク

ミリョクいっぱい「奏和タイム」

京都奏和高校では個を大切にしながら、集団でたのしく・主体的に学んでいける取り組み・空間として、「奏和タイム」という時間を設定しています。部活動・生徒会活動・特別活動など、１～４部の生徒がともに交流したり、それぞれの時間を過ごすことを目指しています。

部活動
体育系・文化系のクラブ合わせて14の部活が昨日活動しています。

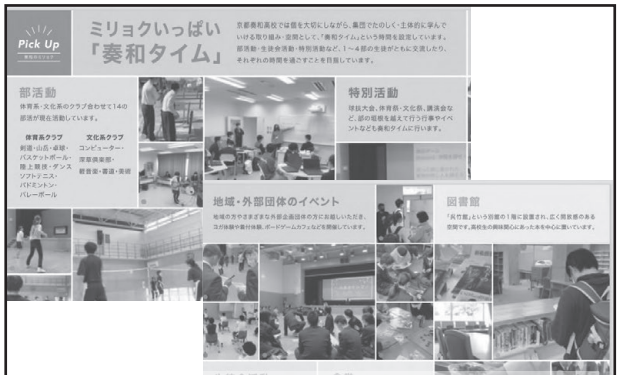
体育系クラブ
剣道・山岳・卓球・バスケットボール・陸上競技・ダンス・ソフトテニス・バドミントン・バレーボール

文化系クラブ
コンピューター・写真映画部・軽音楽・書道・美術

特別活動
球技大会、体育祭・文化祭、講演会など、部の垣根を越えて行う行事やイベントなども奏和タイムに行います。

地域・外部団体のイベント
地域の方やさまざまな外部企画団体の方にお越しいただき、コの体験や案内体験、ボードゲームカフェなどを開催しています。

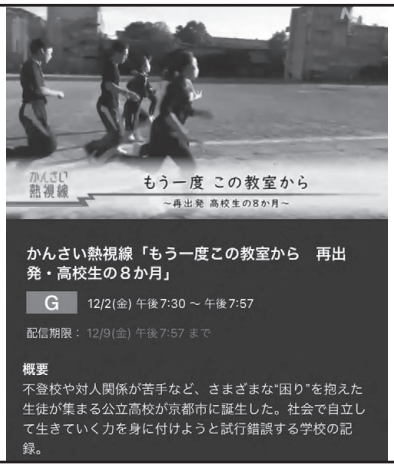
図書館
「R1号館」という１階から３階まで設置され、広く開放部のある空間です。高校生の興味関心にあった本を中心に置いています。



- １～４部の生徒がともに交流し、学校として一体感が持てる時間。
- 生徒同士や教職員だけでなく、地域の方や異年齢の方との交流により自己肯定感や社会活動スキルの向上を目指す。

30

スライド31



かんさい熱視線「もう一度この教室から　再出発・高校生の８か月」

G　12/2(金) 午後7:30 ～ 午後7:57

配信期限： 12/9(金) 午後7:57 まで

概要
不登校や対人関係が苦手など、さまざまな"困り"を抱えた生徒が集まる公立高校が京都市に誕生した。社会で自立して生きていく力を身に付けようと試行錯誤する学校の記録。

31

昨日、NHKにて放映されました。

NHK＋で配信されております。よろしければご覧ください。

スライド32

ご紹介させていただいた3校だけでなく、市立高校各校、自校の特色を生かした、持続可能な社会の担い手を育成する教育に取り組んでおります。

ご清聴、ありがとうございました。

スライド1

第20回高大連携フォーラム

「コア探究の取り組み」
～探究とキャリア教育が核となり、生徒が社会を創る～

Your Link to the World

酒井　淳平
立命館宇治中学校・高等学校
（キャリア教育部長・研究主任）
junpei@ujc.ritsumei.ac.jp

RITSUMEIKAN

スライド2

はじめに

●本校はWWL第一期指定校です！

・全国14校＋海外7校と連携（文科省の大きな指定を受けている学校も多数）
・12の企業・団体と連携

➡ ネットワークは拡大・充実し、志でつながる大切さを感じています。
ただ本日はあくまでも本校の中での地道なカリキュラム開発を報告します。

●1月20日（金）・21日（土）研究会をします！

全員の生徒による発表、とがった学校の校長によるセッション
充実した4つの分科会などがあります。

➡ 要項あります。
質問や参加希望などあれば酒井まで連絡してください。

スライド3

自己紹介

酒井淳平（さかいじゅんぺい）
立命館宇治中高　キャリア教育部長・研究主任

（略歴など）**京都市立の小・中→京都府立高校（北稜）→京都教育大→私学**

1997年4月～1999年3月　京都食品衛生専門学校　非常勤講師
（小学校からつまずいた生徒たちに高校の単位として数学Ⅰを教える）
1999年4月～2008年3月　立命館中学校･高等学校　教諭
（9年間ずっと担任、中１～中３、中１～高３）
2008年4月～現在　立命館宇治中学校・高等学校　教諭
（2008年～2013年3月　初代キャリア教育部長）
2013年度～2015年度　文部科学省　研究指定　責任者
「高等学校普通科におけるキャリア教育の実践に関する調査研究」**（全国５校）**
2018年度~2020年度　文部科学省指定（探究）研究主任＋高校学年主任
（研究開発学校、WWＬ指定）
2021年度　キャリア教育部長＋研究主任

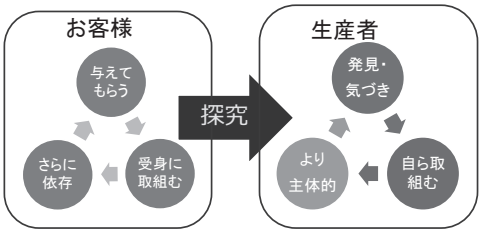
・科研費研究協力者　・キャリアコンサルタント(国家資格)
・啓林館、新編教科書著者　・文科省系の仕事（各種委員など）

RITSUMEIKAN

スライド4

本校の
今の結論

なぜ探究なのか？

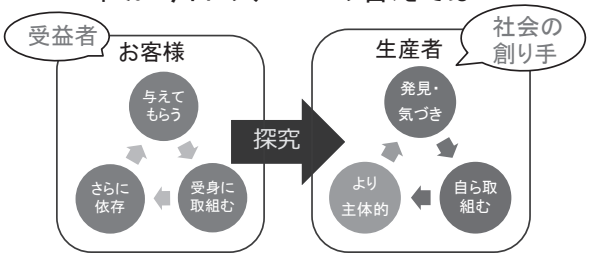


生徒を生産者に育てるということが重要！
これは探究もキャリア教育もまったく同じ！
（教師が生産者であるかを問われている点も？）

RITSUMEIKAN

スライド5

これが今日のテーマの答えでは？



もしかしたら今の社会の風潮も、高校での教員の努力も、結果的に生徒をよりお客様にしているのかもしれない。

RITSUMEIKAN

スライド6

コア探究実施までの流れ

1994年度　学校法人立命館と合併
→学校大改革、先進的な取組多数

①2013年度　ＣＳＬ（キャリア教育授業）開始
（文科省研究指定を受けての取り組み）
⇒生徒の成長＋多くの学校に広がるという予想外の成果あり！

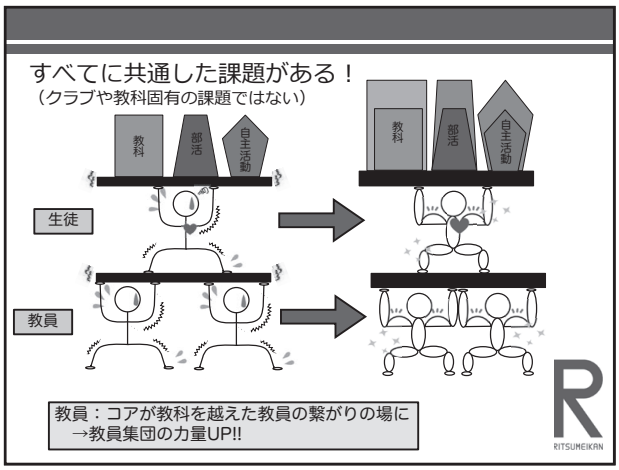
②2017年1月　カリキュラム委員会スタート
（若手～中堅教員がチームとなって次の学校作りを考える）
⇒似たような問題意識！コアの必要性が共通認識になる！

探究だけをしたいのではない

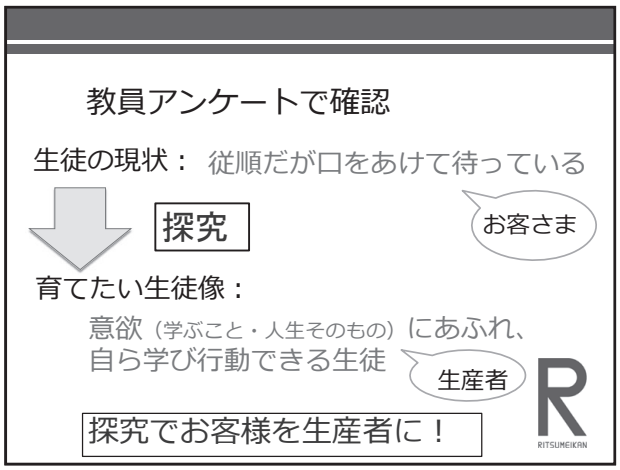
③2018年度　新カリキュラムスタート
（文科省の研究開発指定校として総合的な探究の時間のモデル作り）

RITSUMEIKAN

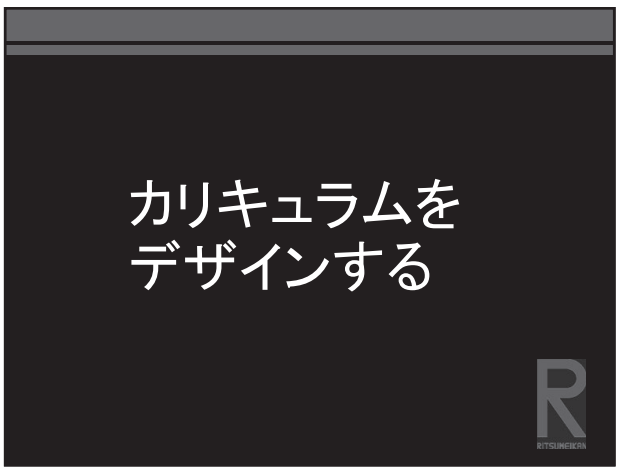
スライド7



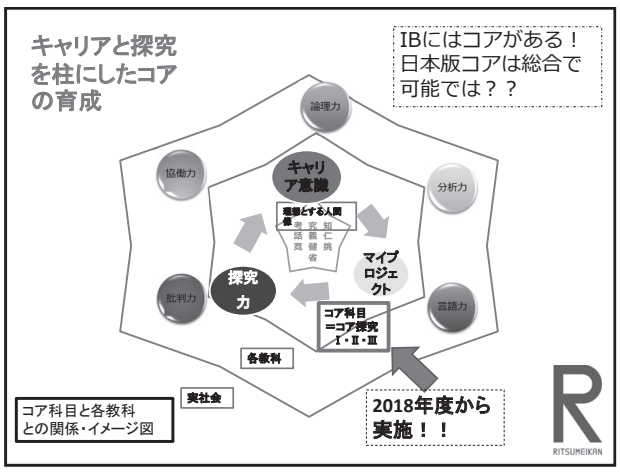
スライド8



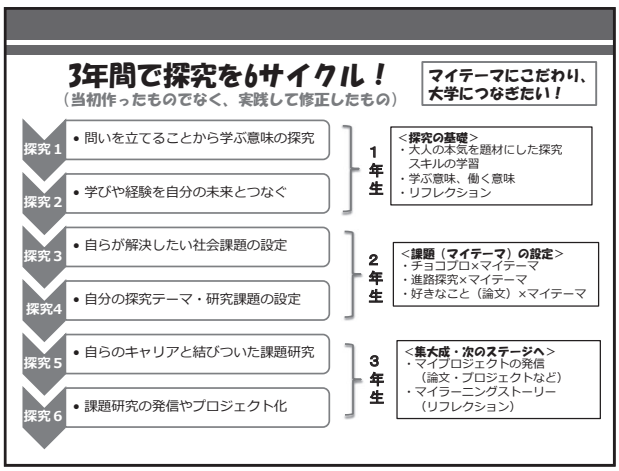
スライド9



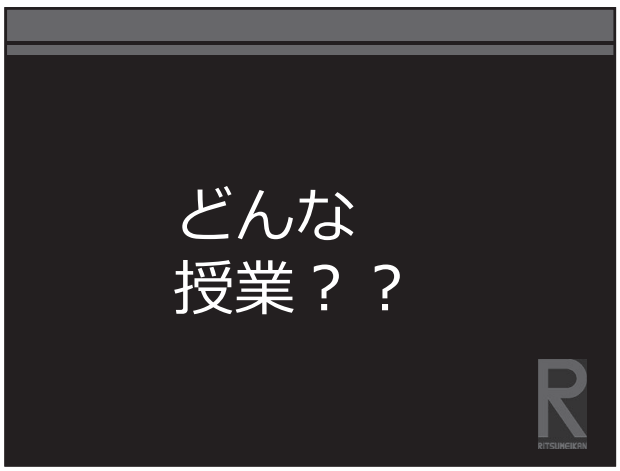
スライド10



スライド11



スライド12



スライド 13

（高1・授業スライドから）

問いを立てる授業の大まかな流れ

～先生は毎回変わります！～

①担当の先生から今日の授業の質問作りの目標、教科を学ぶ意味について（1）（12分程度）

②先生の話に対して質問を作る（10分）
＜質問作り・前半＞

③質問にも答えながら担当の先生から教科を学ぶ意味について（2）（10分）

④先生の話に対して質問を作り、それに答えながら話をまとめる（13分）
＜質問作り・後半＞

⑤まとめ、今日の気づき記入（5分）

情報収集 → 整理・分析 → まとめ → 課題設定

RITSUMEIKAN

スライド 14

（2021年度）高２コア探究

STAGE1 • 興味関心→テーマ設定（知識：論文の書き方）　コンクールに出してみよう！

STAGE2 • 希望進路→テーマ設定（知識：進路について）　志望理由書も書きます！

STAGE3 • プロジェクト→テーマ設定（知識：プロジェクトのPDCA）　プロジェクトを実行します！

ゴール！ → 3つのSTAGEの学びを元に、高3で自分が取り組む研究課題を設定！

RITSUMEIKAN

スライド 15

＜コア3・1年間の予定＞

卒業！

＜今年度作成する成果物＞
・研究論文（8000文字以上）
　or　PJ＋報告書
　or　実験レポートなど
・ポスター
・マイラーニングストーリー

大学以降の学び方！

研究論文（完成！）
PJ等報告書

発表！

ポスター
マイラーニングストーリー
PJ等中間報告
いろいろな発信！
論文仮完成！
PJ等実行
研究論文（8000字？）
PJ作り
アウトライン

＜必須！＞
・1月末の発表
・PJ等は何らかの学外発信

4月　9月　1月　3月

スライド 16

高3コア探究

「マイ・ラーニングストーリー」作成

・高校の自分の成長をポスター（パワポ）で表現
・必ず入れる項目は以下の通り
　①自分の成長の軌跡（学年ごと）
　②①から選ぶ自分の成長ベスト５
　③残った課題＝大学でつけたい力　ベスト３
　④高校のエピソードや感想、写真などを適宜入れる
　⑤大学での生活や将来への抱負
　　（こんなことを頑張る！こういう経験をする！）
　⑥将来こんな人になる、こんな仕事につく
　　→⑥は自分マニフェストを見ればベースがあります！

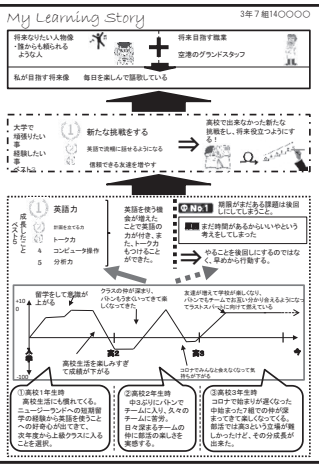
RITSUMEIKAN

スライド 17

生徒の作品例

振り返ることで成長の実感と将来への目標を立てるように

キャリアパスポートになると思っています！

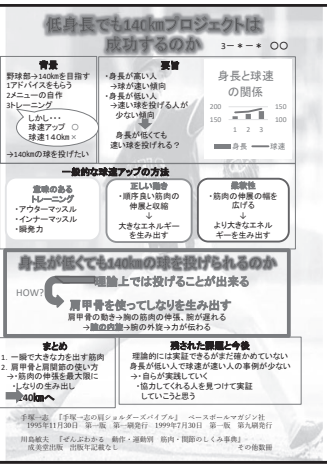


スライド 18

生徒の作品例

キャリアと結びついたマイテーマ

この生徒は立命館大のスポーツ健康科学部へ

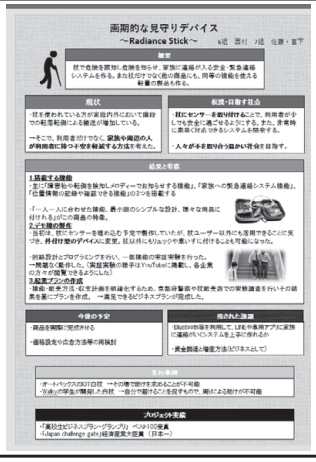


スライド19

生徒の作品例

マイテーマを
起業プランに！
＋報告書

Japan Chalenge
Gate 2022
経済産業大臣賞
受賞！！



スライド20

生徒の変化は？

（本当は教員の変化が大きいように
思うのですが、、）

スライド21

（2020年一斉休校期間）コロナ過で動いた生徒たち！

＜生徒の行動例＞

＊自分で計画を立て、授業以外で毎日5時間勉強

＊2か月で376時間と猛烈に勉強

＊毎朝ランニングを20～30分続けました。早寝早起きを続けられました。

＊毎日夜まで母が仕事であるため、家事全般を自分が担当。
少しでも夜まで仕事の母を楽にさせてあげられるように動いた

＊美味しいラーメン作り企画。動物の骨や乾物、香味野菜などから
スープを取り自分でタレも具材も作った。

＊中高吹奏楽部の部員を募りテレワーク演奏実施

＊GCが募集したオンライン模擬裁判への参加。検察チームの
リーダーとなり初めて人をまとめる経験

＊京丹後の活性化プロジェクトに向けた、ミーティング主催の準備

＊ガウンを50着作り、病院に寄付。日常を崩さない。

＊ISN国際会議開催のための会議参加と準備

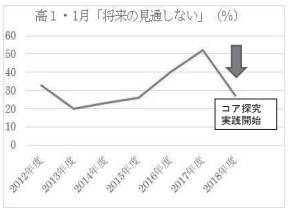
＊時間の使い方コンテストから（HPにもあり）

スライド22

将来の見通しがない生徒が激減！

入学時

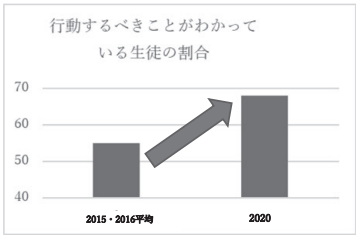
高1・1月



「将来の見通しがない」
入学時48%（昨年度36%）→ 1月27%（昨年度52%）

スライド23

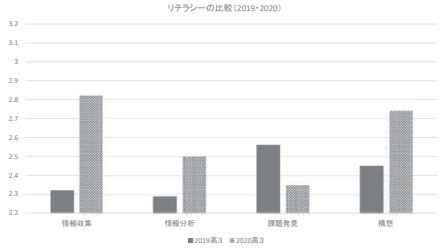
コア探究の実施で
キャリア教育は確実に前進した！



高３・卒業時の数字

スライド24

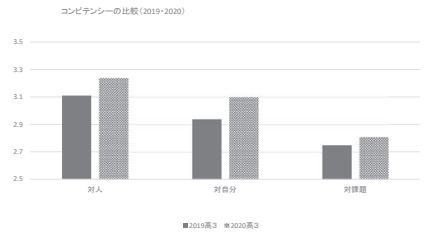
コア探究実施前の学年と
比べても力がついている！①



学びみらいPASS リテラシーの比較
（左が実施前、右が実施学年、卒業直前の比較）

スライド 25

コア探究実施前の学年と比べても力がついている！②



学びみらいPASS コンピテンシーの比較
（左が実施前、右が実施学年、卒業直前の比較）

RITSUMEIKAN

スライド 26

重要な成果　探究がつなぐ学びのストーリー

Aさん（女子・中学校から立命館宇治、内部進学希望、文系）

高１現代社会「SDGsアイデア報告会とリフレクション」

グループごとに考えたアイデアを報告

RITSUMEIKAN

スライド 27

Aさん作成のスライド（1枚目）

マイクロプラスチック
のない海に

Aさん、Bさん

スライド 28

Aさん作成のスライド（ラスト）

提案

コラボさせた商品を

日本でブランド化されている資生堂で
physicians formulaの
技術

を広める

京都の高校生からSDGsを広げる！

・これが売れると他の化粧品会社も
環境にいいものを作らざるを得なくなる
・"高校生のアイデアから作られた"という
キャッチコピーで同世代にSDGsを広められる

スライド 29

2年後　Aさんは3年生になりました

（探究テーマ）
「うじラボプロジェクト」

企業とコラボし、オーガニックな
マスクスプレーを開発
→文化祭で限定販売

"高校生のアイデアから作られた"という
キャッチコピーで同世代にSDGsを
広めてるのでは？

スライド 30

Aさんのプロジェクト報告書

「私は高校一年生の時の現代社会の課題で、オーガニックな会社とコラボして環境や人体に良い化粧品や日用品を作る」ということを考えましたが、その時は行動に移すことができませんでした。

しかし、今年（高3）のコア探究で、そのプロジェクトを進めることができました。一年生の時はただ頭に思い描いていただけのプロジェクトを実際に形にするということがすごく大きなモチベーションになりました。

総合的な探究の時間があることで、Aさんの
課題意識はより具体的なアクションにつながる！！

RITSUMEIKAN

スライド 31

各教科の学びも重要

「（プロジェクトを進めるにあたって）現代社会の授業で詳しく調べていたため知識も多く、このプロジェクトの大きな力になれたと思います。また、私はSDGs（本校の学校設定科目）の授業で環境について学んでいるので、そこで学んだこともこのプロジェクトで生かすことができました」。

学びが将来につながる

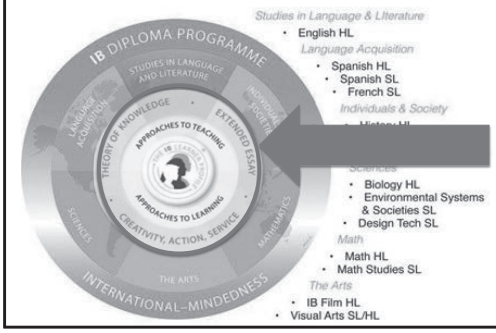
「私は大学で経営学を学ぶので、すごくためになる経験をさせていただけたなと思います」

総合的な探究の時間は、学びをつなぎ、生徒の学びを豊かにする！（本校がようやく気づけたこと）

RITSUMEIKAN

スライド 32

IB教育にはコアがある



コア
・TOK
・CAS
・EE

RITSUMEIKAN

スライド 33

日本型コアを形にしたい！

（仮説）
1、コアは必要。
総合と特活が要

2、日本型コアは
おそらくチーム
（IBコアは専門家が担当）

RITSUMEIKAN

スライド 34

教員が教育の創り手であることが重要では？

教員の最も大事な仕事は何？ ➡ 生徒を育てる

<お客さまの例>～してもらう～
・教えてもらうことが当然と思う。
・生徒が育つための方法を自分で考えようとしない。評論はできる。
・与えられたことはできる。
（自分からはしない）
・何のために取り組んでいるのかわかっていない。

<生産者の例> ～何かをする～
・自分で学ぶのが当然と考える。
・生徒が育つための方法を自分で考える。
自分から学び、実践できる。
・自分から取り組む。
・取り組むことの意味を分かっている。
・誰かのためになる価値を産み出す。

自分はお客さま？生産者？
生産者が教育の創り手。
（評論家は誰も育てることができない！）

RITSUMEIKAN

第１分科会

高大連携を継続・発展させる意義と工夫
～夏期実習「地球環境と海の生態系」を通して～

［報告者］　鈴木　啓太（京都大学 フィールド科学教育研究センター 助教）
［報告者］　本藤　聡仁（京都府立西舞鶴高等学校 理数探究科 教諭）
［コーディネーター］　井上　　実（京都府教育委員会 高校教育課 指導主事）

京都府立西舞鶴高等学校理数探究科は 2006 年の設置以来、京都大学フィールド科学教育研究センターの協力を得て、生徒が地域の環境と生物を調査することを通した探究プログラム（夏期実習「地球環境と海の生態系」）を実施している。その活動報告を行うことで、理科の探究活動を通じて地域に根差した持続可能な社会の創り手を育てることについて協議する。また、高大連携を継続・発展させる意義と工夫についても報告し、協議したい。

概　略

本分科会では、京都大学フィールド科学教育研究センターと京都府立西舞鶴高等学校との夏期実習における取り組みと成果を紹介するとともに、その内容から「高大連携を継続・発展させる意義と工夫」について参加者からの質問に答える形式で協議した。西舞鶴高校は、2006 年に理数探究科が設置されて以来、京都大学フィールド科学教育研究センターと連携して夏期実習を毎年実施している。この実習の大きな特徴は、生徒が暮らす地域の自然環境を対象とし、森と川と海の連続性を意識しつつ、事前学習から調査・分析、成果発表までの一連の探究過程を行うことである。

＜内容＞

1　報告者紹介
2　導入動画（５分）：西舞鶴高校の生徒の視点で夏期実習の内容をまとめたもの
3　報告①（30 分）
　京都大学の鈴木氏より、大学の立場から主に実習の意義について報告いただいた。
　・舞鶴水産実験所について
　・実習を継続させるために必要な条件
　・実習を通して培ってほしいこと
　・西舞鶴高校の夏期実習の特徴と成果
4　質疑応答（10 分）
5　報告②（30 分）
　西舞鶴高校の本藤氏より、主に実習の内容について報告いただいた。
　・西舞鶴高校理数探究科の探究活動の概要
　・夏期実習の趣旨と概要

・生徒の活動の流れ
・探究活動のテーマ設定と個別最適化について
・活動の持続可能性について

6　質疑応答（全体を通して）

全体討論の内容

質疑応答において、コロナ禍で実習を行うことの難しさや工夫だけでなく、実体験によって生徒が成長していく様子についても報告があり、体験活動の重要性について参加者全体で改めて実感する機会となった。また、連携を継続することで、調査データが蓄積し、データペーパーとして発表するまでに至ったことは、継続した取り組みの大きな成果であると感じられた。

質疑応答の内容は、主に次のようなものであった。

・１年次の夏期実習が２年次の課題研究のテーマにつながるのか。
→それぞれ独立した取り組みであるので無理につなげようとはしていないが、夏期実習で興味を持ったことを課題研究で取り組むことになれば、継続した活動となり望ましい。

・アフタースクールの活動の校内体制はどうか。
→理数探究科の活動であるため学科長（本藤）が指導（伴走）をするのが基本だが、放課後の活動は基本的に生徒の自主性に任せている。

・テーマ設定の段階から大学の先生とやり取りしているのか。
→テーマ設定の段階からはあまりない。活動が進めば大学の先生に助言を求める。

・バーチャルとリアルの体験で何が違うのか。また、最近の生徒は自然と触れ合う経験が少ないと言われるが、それは事実だろうか。
→バーチャルにはその場の温度や匂いなど、さまざまな感覚を用いて感じる要素がないため実感に乏しくなる。自然と触れ合う経験については、舞鶴には自然の豊かさという地の利があるので、生徒の経験は豊富なのではないかと感じる。ただ、その体験を科学的な事象と結び付けるなど、生徒の認識を高める点については、教員の補助が必要ではないかと思う。

到達点と今後の課題

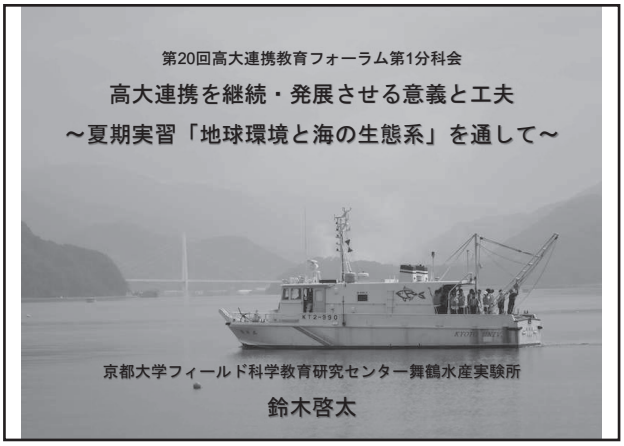
本報告の取り組みは、単発的な高大連携の取り組みではなく、高校・大学が一つの実習を通して、一連の探究の過程を生徒に体験させ、教科等横断的な思考力の土台をつくり、研究に必要な資質・能力の育成へとつなげることを目的とした継続的取り組みである。また、身近な自然を対象に、森と川と海の連続性を生徒に意識させながら実習を行うことで、体験から出発する疑問（問いや仮説）を生じさせ、生徒の主体的な活動を促してもいる。ＳＳＨ校ではない学校が継続して大学と連携している本事例は、同様の取り組みを進めようとしている全国の高校にとって、大変

参考になるものではないか。今回の報告で資金面や日程等の工夫、継続することで得られるデータの重要性等に加え、とりわけ取り組みに関わる高校・大学双方の教員の熱意等を報告いただけたことは、全国の高校が探究活動を実施する上でのヒントともなり激励ともなった。

地理的に近いことも連携を継続させる要因ではあるが、リアルとオンラインをうまく活用することで地理的制限を克服し、今後はこのような連携が多くの学校で実施されることになればと思う。

鈴木　啓太（京都大学 フィールド科学教育研究センター 助教）

スライド1

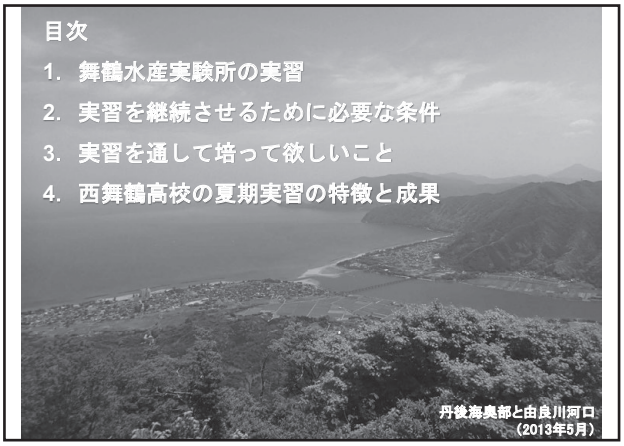


スライド2

スライド3

スライド4

スライド5



スライド6

スライド 7

実習の種類と件数（2022年度，予定を含む）

1. 大学生（11件）
   - 1-1. 京大生（7件）
     - ➡全学共通科目（4件），農学部専門科目（3件）
   - 1-2. 他大生（9件）
     - 1-2-1. 全国公開実習（6件）←実験所が主催
       - ➡京大科目を公開（5件），他大生のみ（1件）
     - 1-2-2. 共同利用実習（3件）←他大学が主催
       - ➡近畿大学，関西学院大学，岐阜大学
2. 高校生（2件）
   - ➡西舞鶴高校，京都教育大学附属高校

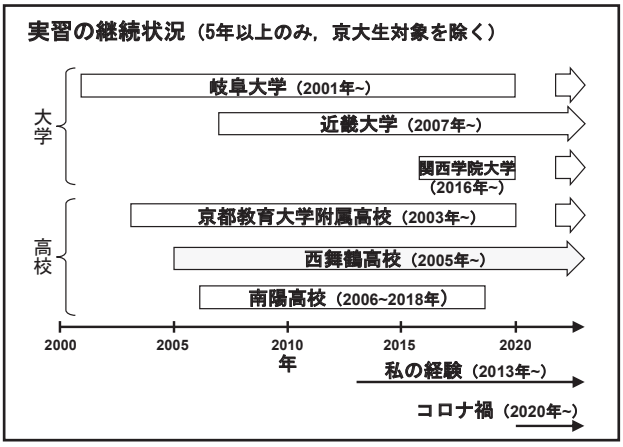
スライド 8

スライド 9

スライド 10

スライド 11

スライド 12



スライド 13

実習継続の必要条件

1. 熱意
   - ・学校の方針と担当者の意思の両方が重要
   - ・苦労（事前準備やリスク管理）を厭わない

2. 予算
   - ・公的助成金（SSHやSPP）ばかりでなく，民間助成金も利用
   - ・予算規模に応じ，実施方法を見直す

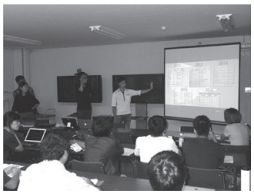
3. 距離
   - ・近いほど，交通費や滞在費を節約できる
   - ・コロナ禍でも，感染対策をとりながら実施できる

スライド 14

スライド 15

スライド 16

最近の大学生に思うこと



1. 発表・レポート
   - ・情報の収集・発信能力が高い
     - △画像・映像の活用
     - △Web情報への依存
     - ×コピペ・フェイクの危険性
     - ➡情報の選択・分析の必要性
2. 研究
   - ・専門性が高い，費用がかかる
     - △結果・結論を出すのが早い
     - △効率性・経済性を優先する
     - ×独創性・客観性・発展性に欠ける
     - ➡目標・動機の再認識，環境整備の必要性

スライド 17

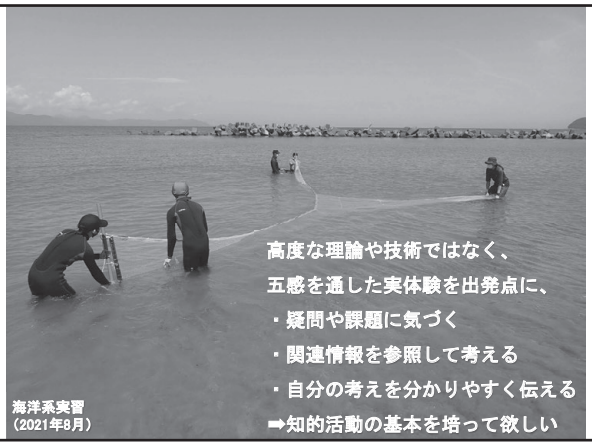
環境DNA手法ー「バケツ1杯の水から…」ー

環境（水，土壌など）に存在する生物由来のDNAから
生態学的情報（在不在，生息密度，繁殖時期など）を得る手法

- ○時空間的に高頻度な調査が可能
- ○環境・生物を破壊・侵襲しない
- ○分析手順の標準化により結果が安定
- △DNAの放出・移動・分解過程が複雑
- ×DNAから得られない情報が欠落
- ×分析費用が高額

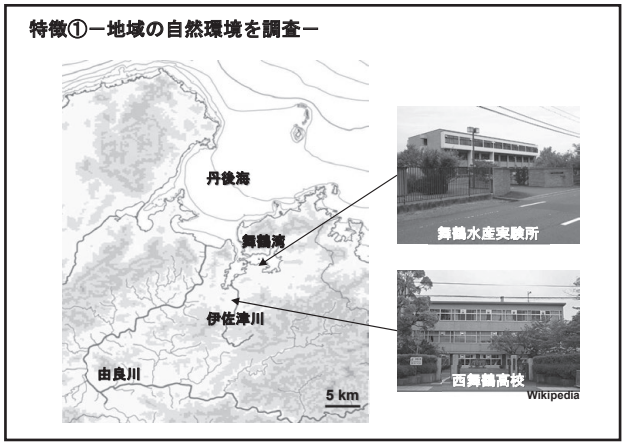
・飼育実験や数値実験による検証
・従来手法との組み合わせ
・研究対象の選択
➡手法のみならず、環境と生物を知る必要性

スライド 18



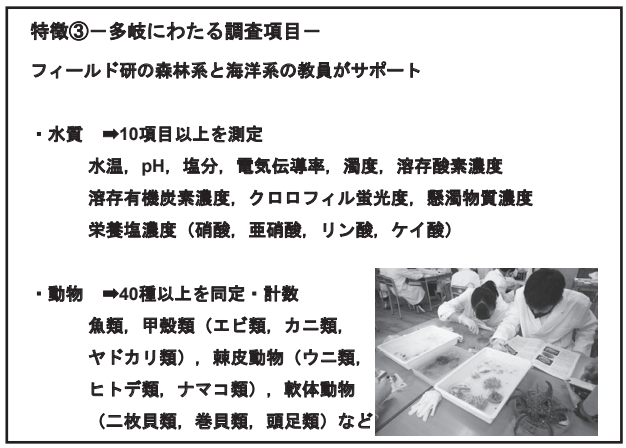
スライド 19

スライド 20

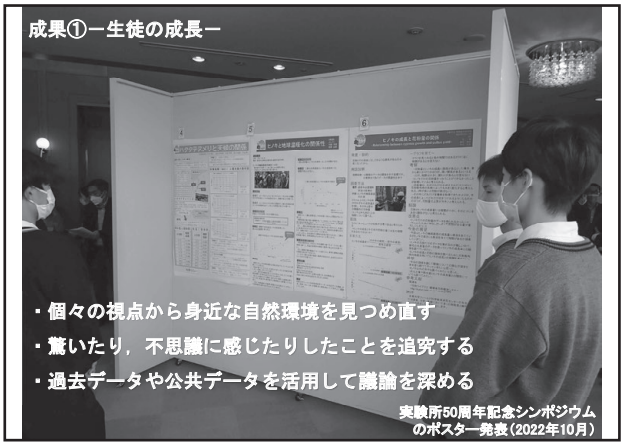


スライド 21

スライド 22

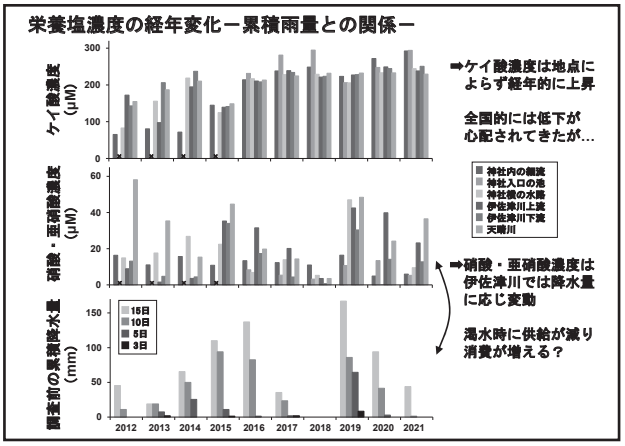


スライド 23

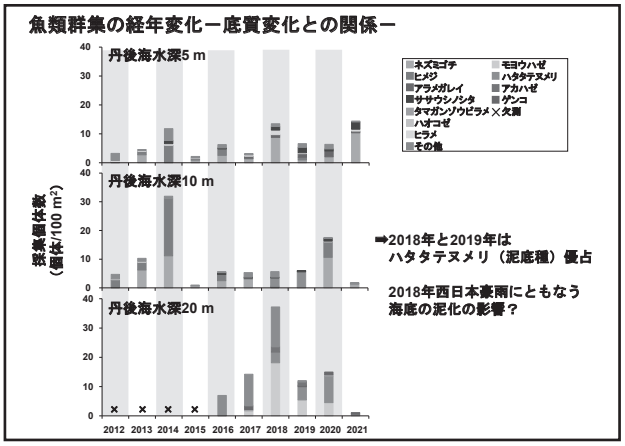


スライド 24

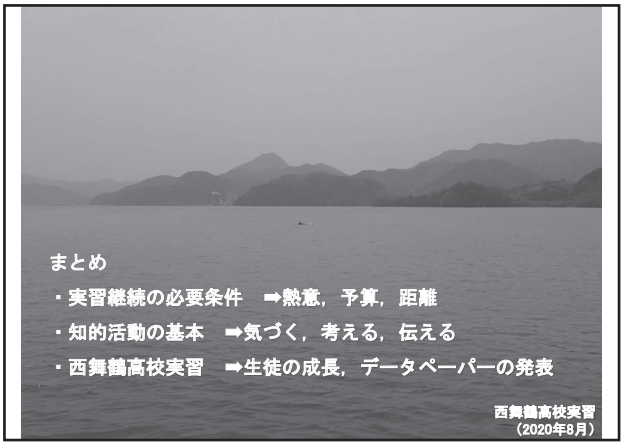
スライド 25



スライド 26



スライド 27



スライド 28

スライド１

R4.12.03　高大連携フォーラム
第２部第１分科会

高大連携を継続・発展させる意義と工夫
～夏期実習「地球環境と海の生態系」を通して～

京都府立西舞鶴高等学校
理数探究科
教諭　本藤　聡仁

スライド２

本報告：高大連携を継続・発展させる意義と工夫
西舞鶴高校と京都大学フィールド科学教育研究センター舞鶴水産実験所の高大連携による夏期実習

- 学校紹介（学科紹介）
- 夏期実習：高校側の趣旨と概要
- 高大連携の意義と工夫
- まとめ（展望）

スライド３

学校紹介

- 2022年は本校の前身である「旧制舞鶴中学校」から創立100周年目
- 全校生徒約600人
  普通科４クラス
  理数探究科１クラス
- 「勉強も部活も全部」
- 「夢をかなえる場所がここにある」

自己紹介

- 本藤　聡仁
  （ほんどう　あきひろ）
- 西舞鶴高校　勤務５年目
- 教諭　理科（生物）
- 理数探究科　学科長
- スマートスクール推進部　部長

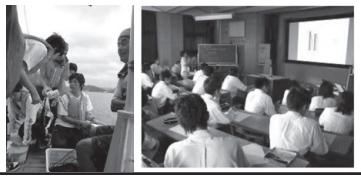
※本校（京都府）のICT環境
R4年度から京都府立高校でBYOD（BYAD）による一人一台学習用端末（iPad）

スライド４

平成23年高大連携フォーラム
理科分科会資料

発表体験を通して得られるもの
~高校段階における学会形式での研究発表体験~

京都府立西舞鶴高等学校 教諭 須貝 義和
同志社大学生命医科学部 教授 太田 哲男



平成23年（2011年）
本フォーラムにて
本校理数探究科の発表

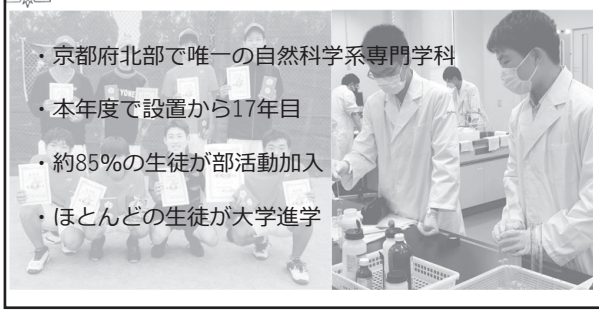
スライド５

11年前の発表より

- 高校側の視点
  Active Learning すなわち「生徒自ら積極的に参加する授業」として発表会を位置づけ、**日頃の受動的受講態度からの脱却**を図りたい。
- 大学側の視点
  議論の仕方、論理的思考力の育成、統計の知識、データ分析力や自ら研究する能力の育成にもなろう。実験や発表にグループで取り組む場合は、「**他者との協同**」によって成果を出していく道筋についても学ぶに違いない。

スライド６

西舞鶴高等学校　理数探究科について



- 京都府北部で唯一の自然科学系専門学科
- 本年度で設置から17年目
- 約85%の生徒が部活動加入
- ほとんどの生徒が大学進学

スライド７

本校理数探究科の探究活動の概要

1年生	2年生	
夏期実習	サイエンスキャンプ	課題研究
京都大学と連携	けいはんな学研都市など（１泊２日）	校内　週２時間
森林・河川・舞鶴湾の環境調査・分析	企業・大学・研究所を訪問	班ごとにテーマ設定 探究（高大・地域連携）

スライド８

サイエンスキャンプ

けいはんな学研都市の企業・大学で科学体験（1泊2日）

スライド９

課題研究

２年生で毎週２時間自分たちの決めたテーマで研究

探究活動の成果を推薦入試等でも発揮

スライド１０

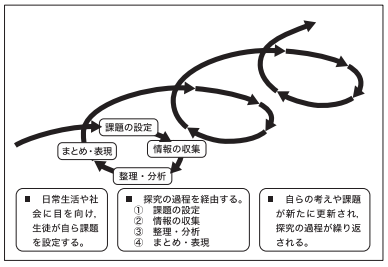
夏期実習：高校側の趣旨と概要

- 理数探究科生徒(40名程度)が１年次（６～１０月）に実施
  →**探究活動の基礎を習得**する
- **地域の自然やSDGs**の概念を学ぶ
- **教科・科目横断**的な視点で思考する土台を作る

スライド１１

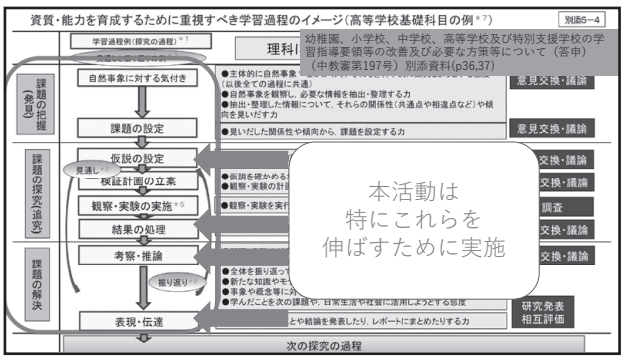
新学習指導要領のキーワードの１つ　「探究」

探究における生徒の学習の姿



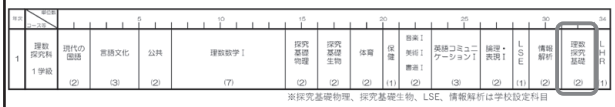
【総合的な探究の時間編】高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説

スライド１２



スライド 13

活動は主に理数探究基礎



・教科横断型の取り組みを目指し、
　数学、情報解析、物理基礎、生物基礎の授業とも連携

意義

工夫

数学：データの分析（相関係数など）　情報：ExcelやPower Point
生物：生物の多様性と生態系　物理：グラフの読み取り

スライド 14

活動の流れ

対象：本校理数探究科　１年生

６月	事前学習（講師の先生方による講義）
７月下旬	２日間の実習（夏季休業中）
８月下旬	データ分析　発表準備
～９月	
１０月頃	口頭発表会（平日２時間）
	中学対象行事でのポスター発表

スライド 15

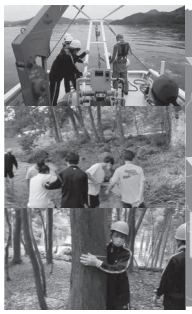
調査地点

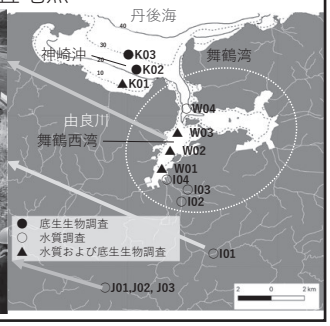
水質調査
12地点

底生生物調査
６地点

魚類採取
２地点

ヒノキ胸高直径測定
１地点(16本)





スライド 16

調査・分析実習内容

森班
- ヒノキの胸高直径の測定
- 水質調査・採水
  →２日目にろ過し各種分析
- 河川の魚類採取（タモ網、刺し網）
  →２日目に胃内容物の観察

海班
- 底生生物調査（桁網）
  →２日目に種の同定
- 水質調査・採水
- 緑洋丸の操舵室見学

水質調査項目
水温(℃)、pH、塩分(PSU)、電気伝導率(EC)(mS/m)、濁度(FTU)、溶存酸素(mg/L)、溶存有機炭素(DOC)(mg/L)、クロロフィル蛍光度、懸濁物質(SS)(mg/L)、亜硝酸(μM)、硝酸(μM)、硝酸・亜硝酸(μM)、ケイ酸(μM)、リン酸(μM)

スライド 17

データ分析と考察・発表のテーマについて

- テーマ設定（興味を持ったテーマごとに3～5人のグループを作成）
- 例年の大テーマ
  「舞鶴湾と丹後海での水質の比較」
  「舞鶴湾と丹後海での底生生物の比較」
  「舞鶴湾における環境と植物プランクトンの経年変化」
  「陸からの栄養塩供給と植物プランクトンの生産」
  「陸と海の食物網構造」
  「土地利用と河川水質との関係」

過去の生徒の発表テーマ
ヒノキの成長と雪との関係
西日本豪雨による水質の変化
クロロフィル蛍光度と降水量の関係
海と川の栄養塩類
人間活動と水質の関係
クモヒトデとヒメカノコアサリの関わり
二枚貝の増減の関係性

スライド 18

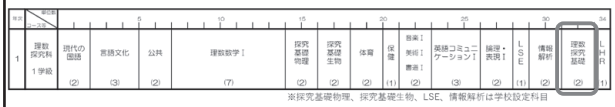
教科書の順番を変更して学習
生物基礎「生物の多様性と生態系」を１学期に履修

工夫

通常（教科書の順番）		本校	
1学期	・生物の特徴 ・遺伝子とそのはたらき	1学期	・生物の特徴 ・生物の多様性と生態系
2学期	・ヒトの体内環境の維持	2学期	・遺伝子とそのはたらき
3学期	・生物の多様性と生態系	3学期	・ヒトの体内環境の維持

スライド 19

理数探究基礎をベースに他教科と横断した活動が目標



※探究基礎物理、探究基礎生物、LSE、情報解析は学校設定科目

意義 工夫

・教科横断型の取り組みを目指し、
数学、情報解析、物理基礎、生物基礎の授業とも連携

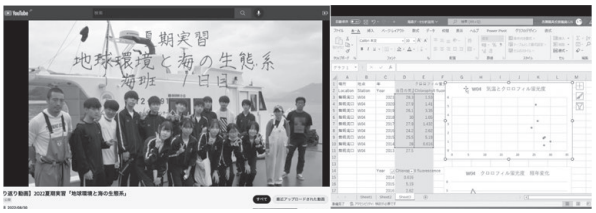
数学：データの分析（相関係数など）　情報：ExcelやPower Point
生物：生物の多様性と生態系　物理：グラフの読み取り

スライド 20

探究活動の個別最適化について

工夫

8月22日～8月26日　班ごとの活動



振り返り動画　EXCEL分析方法

スライド 21

動画学習と個別対応

工夫

【基本操作】（動画学習）
ファイル操作
エクセルの基本操作
データの構成の説明
散布図作成
相関係数算出

【発展】（個別対応）
ピボットテーブル集計
順位相関係数
相関行列
有意差検定

スライド 22

ICT活用により様々な活用が可能

工夫

生徒自身の振り返り

発表会・実習の動画作成
（YouTube再生リスト）

コメントを集め生徒へ
フィードバック
（アンケートフォーム利用）

保護者参観

次年度の生徒

スライド 23

活動の継続について（資金面）

工夫

文部科学省（平成18～26年）
「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト（SPP）」

科学技術振興機構（平成27～30年）
「中高生の科学研究実践活動推進プログラム」

笹川平和財団海洋政策研究所・日本財団（平成31年～令和3年）
「海洋教育パイオニアスクールプログラム単元開発部門」

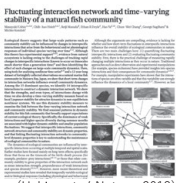
公益財団法人中谷医工計測技術振興財団（令和4年）
「科学教育振興助成」

スライド 24

地元地域を対象にした探究活動から得られるもの

意義

地域の研究施設を知る



(Ushio, *et al*.,Nature. 2018)

地域を対象とした研究があることを知る(研究する)

地域からSDGsを意識する

スライド 25

探究の発表の場→主体的な学びの絶好の場

意義

校内

クラス内発表会（口頭発表）

中３生対象オープンスクール（ポスター発表）

校外

全国海洋教育サミット（東京大学）
京大森里海シンポジウム（京都大学）
水産海洋学会日本海研究集会
豊高アカデミア（豊岡高校SSH発表会）
若狭高校環境フォーラム（若狭高校SSH発表会）

スライド 26

これまでの蓄積データを論文（データペーパー）として発表
論文化するにあたり感じたこと、高校生に伝えたいこと

意義

野生生物と社会　データペーパー
2006~2021年夏季の京都府舞鶴湾・丹後海の底生動物群集と流入河川の水質
本藤聡仁・鈴木啓太・中西麻美・山下　洋　　2022年11月 受理 印刷中

論文としてまとめるまで

2021年10月～ データ統合・各種確認 → 12月～ データ整理・整形 → 2022年２月 論文本文・地図の作成 → 5月～ データ活用例グラフ作成 → 7月 修正・投稿準備 → 8月 投稿 9月 修正 11月 受理

○全教科で培われるであろう資質・能力をフル活用
・理科の知識量と考察力、数学的な解析力（物理・化学・生物・地学・数学）
・関連論文を読む力、的確かつ興味を惹く表現で本文を作成する力（英語・国語）
・地理的な環境の把握（地理・歴史）
・見やすい地図やグラフをデザインする力（芸術・情報）
・ﾌｨｰﾙﾄﾞ調査やﾊｰﾄﾞﾜｰｸをこなせるだけの体力と自己ﾒﾝﾃﾅﾝｽ力（保健体育・家庭科）
○京都大学の先生方と協働して行うという一連の活動
→大学の先生方の妥協せずに論文としてまとめ上げられる姿勢と勢い
→科学的知見を公開することの使命感と責任感

スライド 27

継続した活動を行うことの利点

- データが蓄積される
  過年度の調査結果と比較可能
- (教育的な)手法が確立される
  過去の発表データを参考にして
  テーマを模索（指導）
  教員のスキルが向上

スライド 28

展望

- 夏期実習の教育的効果・継続の重要性の発信
- 高大連携、地域連携による探究学習により
  「社会に開かれた教育課程」を実践
- 舞鶴の自然や環境に愛着を持ち、持続可能な
  社会に貢献できる人材の育成

スライド 29

最後に：高大連携を継続・発展させる意義と工夫

高校生
自分で
・気づく
・発見する
・伝える

高校教員
・多くの教員が携わる
・生徒と一緒に悩む
・蓄積されたデータの価値を大切にする

大学の先生
・高校生や高校教員と議論してくださる。
・時には「研究者にもわからないことがある」ことを伝えてもらえる。

スライド 30

謝辞

・京都大学フィールド科学教育研究センター
鈴木啓太先生、中西麻美先生、山下洋先生、舞鶴水産実験所の皆様
・調査地区にお住まいの皆様
・過去の本校理数探究科の関係者・卒業生の皆様
・文部科学省「サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト（SPP）」
・科学技術振興機構「中高生の科学研究実践活動推進プログラム」
・笹川平和財団海洋政策研究所・日本財団「海洋教育パイオニアスクールプログラム単元開発部門」
・公益財団法人中谷医工計測技術振興財団「科学教育振興助成」

第２分科会

高校の探究学習は、キャリア発達にどのように影響しているのか

［報告者］　古田　悠馬（京都大学大学院 理学研究科 博士後期課程 １年）
［報告者］　三添　りん（大阪教育大学 教育学部 １年）
［報告者］　岩間　智哉（京都府立大学 文学部 １年）
［コーディネーター］　乾　　明紀（京都橘大学 経済学部 准教授）
［コーディネーター］　加藤　　健（京都市教育委員会 学校指導課 指導主事）

今年度より実施されている新学習指導要領では「探究」の語を含む科目などが７つ新設された。そのうちのひとつ「総合的な探究の時間」では、課題の発見・解決に関する資質・能力の習得のみならず、卒業後のキャリア形成に向け「自己の在り方生き方」を考える機会となることが期待されている。本分科会では、探究活動がキャリア発達にどのように影響を与えていたかについて、現役の大学生・大学院生の報告をもとに考える。

概　略

総合的な学習の時間と総合的な探究の時間との違いや、現在の高校生を取り巻く社会環境の変化に触れつつ「高校教育の中で、キャリア発達支援と探究活動をどうデザインするのか？」という問いを分科会全体に関わるものとして提示した。コーディネーターが報告者の出身校２校の探究活動の概要を紹介した後、３名の報告者それぞれから自身が高校時代に取り組んだ探究活動の内容と、それが自身のキャリア展望やキャリア発達にどのような影響を与えたと捉えているかについて報告を行った。

（古田氏）もともと中学生の頃から研究というものに関心や憧れを持っていたが、高校の探究活動を通じて具体的な課題設定の仕方を学び、自身の目指す研究者というものの像が明確になっていった。大学進学後は高校時代の探究テーマとは大きく異なる分野の研究をしているが、高校時代に学んだ探究プロセスは現在の研究活動にも通じる部分があると感じている。

（三添氏）グループ探究をしていく中で外部コンテストへの出場等で活動の幅が広がっていく経験をしたり、グループ内のメンバーや他のグループからの刺激を受けたりしたことが、コロナ禍で縮小を余儀なくされた音楽活動（自身のキャリアの一部となっている課外活動）のモチベーション低下を補ってくれたり、探究にとどまらず生活全体の中で視野を広げることにつながっていった。活動の結果だけではなく過程を重視することの大切さにも気付いた。

（岩間氏）自身の学習観が教科教育を重視するものであったり、グループ活動の不得意さ等もあ

ったりして探究活動に取り組んでいた当時は前向きになれず楽しいとは思えていなかった。しかし、その後、大学進学のために自分の考えを述べる小論文を作成したことなどが契機となり、１、２年次に取り組んだ探究活動との関連に気付き、探究での学びを自身のキャリアといわば結合させ、今後も役立つものとして新たに価値づけることができるようになった。

全体討論の内容

【質疑】

・探究活動で他者から受けた刺激について

→（古田氏）個人探究とは言え、同じゼミのメンバーとの対話やゼミの担当教員・ＴＡからの助言等で受けた刺激は大きかったと感じている。特にＴＡの大学院生の方が所属しておられた大学の研究室を実際に訪問させていただき、最先端の研究に触れさせてもらえたことは現在の自分のキャリア形成に大きな影響を与えてくれたと捉えている。

・将来のビジョンについて

→（三添氏）将来的には音楽に関わる仕事に就くのだろうという思いはあるが、今の自分は「あらゆるところにセンサーが向いている」状態にあると捉えている。音楽関連のこと以外も、とにかくいろいろなことに手を伸ばしたいと考えている。

・探究の授業の大切さに気付くべきタイミングについて

→（三添氏）１、２年間の授業が全て終わった後に振り返ってみて改めてその大切さに気付くということももちろんあり得るが、自分はとにかく授業を「生かしきる」ということが大切だと思っており、やはり授業に参加できる間に気付けるのがよいと思う。

・（岩間氏の所属していた）クイズ研究会の取り組みと探究活動の関連について

→（岩間氏）クイズは「答えのあるもの」、探究活動は「答えのないもの」という発想もあり、両者を関連付けていくという発想はこれまであまりなかったかもしれない。質問を頂いて確かに関連する部分はあると感じた。

【グループ協議後の共有から】

・個人での探究とチームでの探究にはそれぞれメリット・デメリットがある。
・問いをどのように設定するのか、探究活動の中でどのような人と出会わせるのか、どのような経験をさせていくのかというデザインが重要である。
・探究活動における学びがキャリア形成と関わるものであることを担当教員が十分意識した上で授業設計をし、生徒にもそれを伝えていくことが必要だと考える。
・小学校、中学校での経験も含めての話になるが「失敗の経験」をもっとさせるべきではないか。「失敗しないように」行ってきた大学生が多いように感じる。

到達点と今後の課題

・今回の報告者の共通点の一つとして「自分のやりたいこと」を自分で見つけた経験を持っていることが挙げられる。自分のやりたいことを一度も見つけたことがない生徒、学生に対しても探究を通じてキャリア発達に資するアプローチをしていくのがわれわれの役割であろう。
・「やりたいこと」が見つけられないことの要因の一つには、意思決定をした経験が少ないことがあると捉えている。キャリア形成には意思決定が欠かせない。探究活動の場面に限らないが、些細なことでもよいのでさまざまな場面で意思決定をさせることを意識していくべき。
・人間はそもそも「考える」ことが好きであり、考えるようにできている。しかし、大人になるに連れて考える機会が奪われ、探究の芽が削がれていっているということはないか。そういった枠組みから解放してあげるような探究のデザインを考えていきたい。

スライド1

第20回高大連携教育フォーラム
【京都高大連携研究協議会発足20年記念】

高校の探究学習は、キャリア発達にどのように影響しているのか

2022年12月3日 15:30～17:30
第2分科会　コーディネーター
乾　明紀（京都橘大学 経済学部 准教授）
加藤　健（京都市教育委員会 学校指導課 指導主事）

1

スライド2

報告者

1. 古田　悠馬 氏（京都大学大学院 理学研究科 博士後期課程1年／京都市立堀川高校卒業生）
2. 三添　りん 氏（大阪教育大学 教育学部 1年／京都府立鳥羽高校卒業生）
3. 岩間　智哉 氏（京都府立大学 文学部 1年／京都府立鳥羽高校卒業生）

2

スライド3

本日のメニュー

1. オリエンテーション・趣旨説明（15分）
2. 京都市立堀川高等学校の探究学習紹介（10分）
3. 古田氏より事例報告（10分）
4. 京都府立鳥羽高等学校の探究学習紹介（10分）
5. 三添氏より事例報告（10分）
6. 岩間氏より事例報告（10分）

【休憩　10分】

7. 情報の整理（5分）
8. ダイアログ（40分）

3

スライド4

本日のメニュー

1. **オリエンテーション・趣旨説明（15分）**
2. 京都市立堀川高等学校の探究学習紹介（10分）
3. 古田氏より事例報告（10分）
4. 京都府立鳥羽高等学校の探究学習紹介（10分）
5. 三添氏より事例報告（10分）
6. 岩間氏より事例報告（10分）

【休憩　10分】

7. 情報の整理（5分）
8. ダイアログ（40分）

4

スライド5

変化を楽しむ人であれ 京都橘大学

コーディネーター自己紹介

京都橘大学　経済学部　経済学科　准教授　乾明紀
（鳥羽高校学校運営協議会 会長、鳥羽高校同窓会副会長）

専門は、キャリア教育、シティズンシップ教育、PBL、探究学習など

【私のキャリア】
和傘・洋傘卸商の4代目として京都市下京区で生まれる。
京町家で育ち、大学では歴史を学び、
家業を継ぐ予定が、社会の変化とご縁があって、
大学職員を経て大学教員となった。
鳥羽高校3期生、高校時代は校則を破って
アルバイトをするなど、ダメな生徒でした･･･。

5

スライド6

高校教育に関する主な委員や研究など

- 2022年3月 - 現在　大学コンソーシアム京都 京都高大連携推進室コーディネーター
- 2021年4月 - 現在　京都府立鳥羽高等学校 学校運営協議会 委員（会長）
- 2021年4月 - 現在　京都府立高校共通履修科目「スマートＡＰ」のカリキュラム開発および授業実施
- 2019年4月 - 現在　京都市市民参加推進フォーラム 委員（2021年6月から副座長）
- 2019年4月 - 現在　**日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C)「わかる」と「できる」が拡大し、キャリアが展望できる「チーム探究」に関する研究**
- 2020年7月 - 2021年3月　京都府教育委員会 新時代の学びにおける先端技術導入実証研究事業 実証研究委員会
- 2020年6月 - 2021年3月　大阪信愛高等学校 「総合的な探究の時間」アドバイザー
- 2019年8月 - 2020年3月　京都府教育委員会 「学校ICT環境整備促進実証研究事業」（遠隔教育システム実証研究事業）
- 2019年2月 - 2020年3月　文部科学省 2019年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業企画評価会議グローカル型企画評価部会協力者
- 2016年4月 - 現在　京都府立鳥羽高校の探究学習に関する助言および授業の実施
- 2009年4月 - 2021年3月　京都府立鳥羽高等学校 評議員

6

スライド7

コーディネーター自己紹介

京都市教育委員会指導部学校指導課　指導主事　加藤健

担当教科：国語
これまでの勤務校：静岡県立清水東高等学校
京都市立堀川高等学校
京都市立紫野高等学校

【私のキャリア】
静岡県内２番目に小さな町で生まれ育ちました。学生時代のすべては文化祭実行委員に捧げました。見に行くのも好きで高校・大学あわせてこれまで40校ほど行きました。コロナ禍での縮小は残念。高校教員になったのも文化祭運営に関わりたかったからです。国語という教科を選んだのは京都の地で文学に触れた経験が大きいと思っています。

7

スライド8

本分科会で設定した「問い」

高校教育の中で、キャリア発達支援と探究活動をどうデザインするのか？

事例研究とダイアログを通じて考えていきたい

8

スライド9

「総合的な探究の時間」への期待

今年度より実施されている新学習指導要領では、「探究」の語を含む科目等が7つ新設された。そのうちのひとつ「**総合的な探究の時間**」では、課題の発見・解決に関する資質・能力の習得のみならず、卒業後のキャリア形成に向け「**自己の在り方生き方**」を考える機会となることが期待されている。

9

スライド10

中央教育審議会答申(2016)

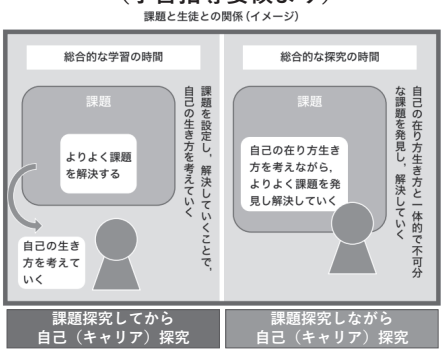
〇高等学校における総合的な学習の時間は、特定の分野を前提とせず、**実社会・実生活から自ら見いだした課題を探究することを通じて、**小・中学校における学びを基盤としながら、**より自分のキャリア形成の方向性を考えることにつなげるものであること。**言わば、生涯にわたって探究する能力を育むための、初等中等教育最後の総仕上げとなる重要な時間であること。

〇一方で、小･中学校と比較して高等学校での取組が低調であるとの指摘もあるところであり、**重要性を踏まえた位置付けを明確化するため、名称を「総合的な探究の時間」として見直す**とともに、生徒の主体的な探究を支援する教材等の作成も検討すること。

10

スライド11

総合的な学習の時間と総合的な探究の時間の違い（学習指導要領より）



11

スライド12

高校生を取り巻く環境

- 社会への出口に最も近い
- 社会の構造的変化の進展（戦後日本型青年期⇒VUCA時代、 Society 5.0 、第4次産業革命など）
- 選挙権年齢の引き下げ
- 成人年齢の引き下げ　など

⇒高校生が社会をより身近に感じ、生涯にわたって主体的に社会の在り方や人生（キャリア）を考えることの大切さを実感できる学びの重要性は一層高まっている。

12

スライド 13

高校生のキャリア意識（展望）は卒後キャリアの発達のための重要なエンジン

- 全国の高校2年生4.5万人を対象に追跡調査をした「**10年トランジション調査**」（溝上,2018）の結果

➢大学1年時の主体的な学習態度は、同じく大学1年時の二つライフ（①将来見通しと②そのためにすべきことの理解と実行）で説明される。

➢その**二つのライフは、高校2年時のキャリア意識（進学先についての展望とその準備状況、進学先卒業後の職業展望）に大きな影響を受ける。**

⇒高校2年生段階で「キャリア意識」（キャリア展望）が明確であると、その後のキャリア発達に良い影響を与えることが明らかに。

13

スライド 14

「総合的な学習の時間」における教員側の「4つのふ」

＜不安＞・＜負担＞・＜不要＞の「３つの『ふ』」
（文教総研,1999）

「生徒にどのように役立っているのか不明確だ」
（池田・村瀬・武田,2020）

⇒不安・負担・不要・不明確の「４つのふ」

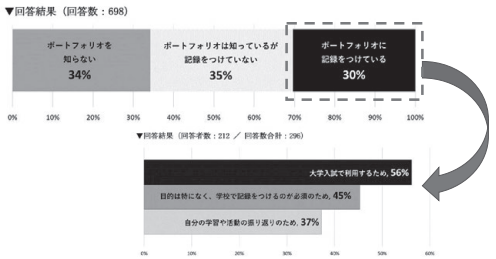
⇒ 「総合的な学習の時間」 では、教員は生徒のキャリア発達の手ごたえを感じられていなかった？

14

スライド 15

キャリア発達に関心が低い生徒？

- 2020年度キャリア・パスポート義務化
- **価値を理解せず、目的も持たないまま利用していること**が指摘されている（旺文社教育情報センター,2019 ）

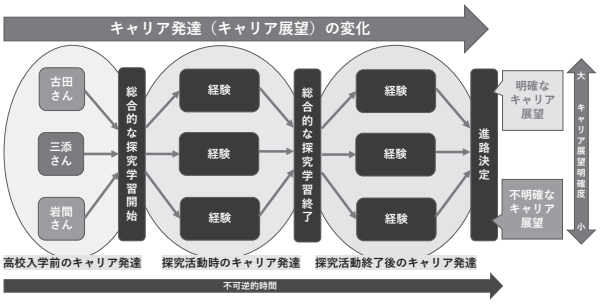


キャリア・パスポートの活用状況（旺文社教育情報センター,2019）より

15

スライド 16

3名からの事例報告



高校生は、探究活動をしながら、どのようにキャリアを発達させているのか？

16

スライド 17

本分科会で設定した「問い」

高校教育の中で、キャリア発達支援と探究活動をどうデザインするのか？

事例研究とダイアログを通じて考えていきたい

17

スライド 18

本日のメニュー

1. オリエンテーション・趣旨説明（15分）
2. **京都市立堀川高等学校の探究学習紹介（10分）**
3. 古田氏より事例報告（10分）
4. 京都府立鳥羽高等学校の探究学習紹介（10分）
5. 三添氏より事例報告（10分）
6. 岩間氏より事例報告（10分）

【休憩　10分】

7. 情報の整理（5分）
8. ダイアログ（40分）

18

スライド 19

京都市立堀川高等学校

創立
明治41年（1908年）
京都市立高等女学校として設立

昭和23年（1948年）
京都市立堀川高等学校に改称

平成11年（1999年）
人間探究科・自然探究科設置　新校舎竣工

19

スライド 20

京都市立堀川高等学校

- 課程：全日制
- 学科：普通科２クラス、人間探究科／自然探究科４クラス
- 規模：18学級、生徒728名

- 2002年～2020年　**SSH**（スーパーサイエンスハイスクール）
  計4期の研究指定
- 2014年 **SGH**（スーパーグローバルハイスクール）研究指定
- 2022年 **SSH**認定枠指定、科学人材育成重点枠指定

20

スライド 21

堀川高校の「探究基礎」

1 年		2年		3 年
探究基礎Ⅰ（2単位）HOP 問いを共有し身近な疑問を調べたり、研究者の課題意識を学んだりすることで、自分の「知りたい」を広げたり、深めたりする。	**探究基礎Ⅰ**（2単位）STEP 自分の興味に合わせた少人数講座に所属し、探究の見通しの立て方を身につける。	**探究基礎Ⅱ**（2単位）JUMP 自ら問いを立て、探究をすすめ、自分自身の在り方生き方と探究の関わりを考える。	Academic Project（2単位）・後輩指導 ・個人探究継続 ・新たな活動 ・テーマを掲げグループで探究活動のいずれかを選択し探究を実践する。	探究基礎Ⅲ（1単位）学校設定科目、選択科目。個人やグループでの活動を続ける。

理数探究基礎（1単位）
複数の理数的な探究テーマで探究をすすめることで、探究の「型」を身につける。

21

スライド 22

1年前期　HOP

- 探究の「型」を学ぶ期間
- 目標：探究の愉しさを満喫しつつ
  探究という営みが様々な場面で
  役立つことを実感する

クラス単位での授業
自分や他者の問題意識を知り、
それを広げたり深めたりする
課題設定・調査・発表の実践

22

スライド 23

1年後期　STEP

- 探究の「術」を身につける期間
- 目標：分野固有の研究手法を
  身につける

分野毎の少人数講座（ゼミ）に配属
実験技能・データ分析
文献収集・文献講読
レポート作成方法

23

スライド 24

STEP・JUMPゼミ（探究科）

文系ゼミ
①言語・文学（国語科）
②人文社会（地歴公民科）
③国際文化（英語科）

※探究科4クラスを2クラスずつに分けて授業を展開（全ゼミ2集団）

理系ゼミ
④物理
⑤化学
⑥生物学
⑦地学
⑧情報科学
⑨数学

24

スライド 25

2年前期　JUMP

- 探究の「道」を知る期間
- 目標：探究活動を実践する
  個人で研究課題を決定
  研究計画の立案
  必要な知識・技法も自分で習得

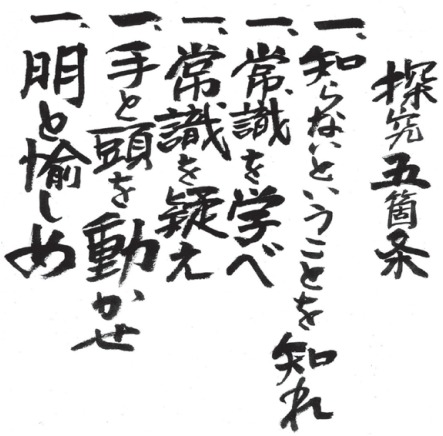
25

スライド 26

２年生　探究基礎研究発表会の様子

26

スライド 27



27

スライド 28

本日のメニュー

1. オリエンテーション・趣旨説明（15分）
2. 京都市立堀川高等学校の探究学習紹介（10分）
3. **古田氏より事例報告（10分）**
4. 京都府立鳥羽高等学校の探究学習紹介（10分）
5. 三添氏より事例報告（10分）
6. 岩間氏より事例報告（10分）

【休憩　10分】

7. 情報の整理（5分）
8. ダイアログ（40分）

28

スライド 29

報告１

古田　悠馬 氏
（京都大学大学院 理学研究科 博士後期課程1年
／京都市立堀川高校卒業生）

29

スライド 30

本日のメニュー

1. オリエンテーション・趣旨説明（15分）
2. 京都市立堀川高等学校の探究学習紹介（10分）
3. 古田氏より事例報告（10分）
4. **京都府立鳥羽高等学校の探究学習紹介（10分）**
5. 三添氏より事例報告（10分）
6. 岩間氏より事例報告（10分）

【休憩　10分】

7. 情報の整理（5分）
8. ダイアログ（40分）

30

スライド 31

京都府立鳥羽高等学校

創立
明治33年（1900年）
京都府第二中学校の歴史を引き継ぐ
第１回全国中等学校優勝野球大会優勝

昭和59年（1984年）
京都府立鳥羽高等学校としてのスタート

31

スライド 32

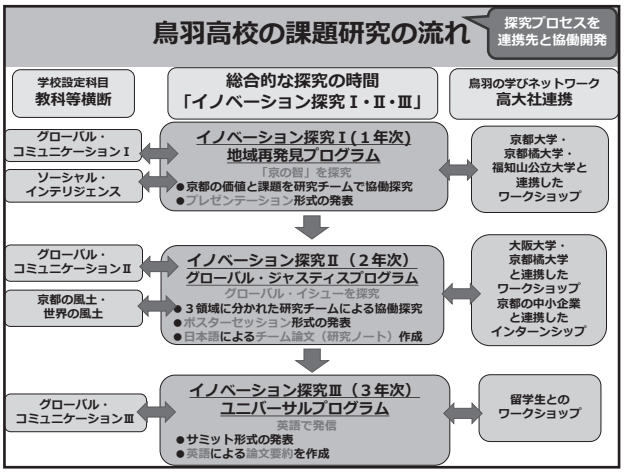
京都府立鳥羽高等学校

- 課程：全日制、定時制
- 学科（全日制）：普通科、**グローバル科**
- 規模（全日制）：21学級、生徒825名
  （内グローバル科229名／2022年5月1日現在）

- 2015年　**SGH**（スーパーグローバルハイスクール）指定
- 2020年　**WWL**（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業　カリキュラム開発拠点校指定

32

スライド 33



スライド 34

イノベーション探究Ⅱの概要

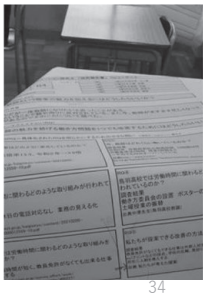
国家の枠を超えた世界規模のグローバル・イシューに関するチーム探究活動を行うプログラム

【探究活動のねらい（教育目標）】

①オリジナル様式で「作法」＝研究手法を学ぶ。

②インタビュー調査やフィールドワークにより研究テーマを自分事化する。

③発表の機会を設けフィードバックにより研究の質を高める。

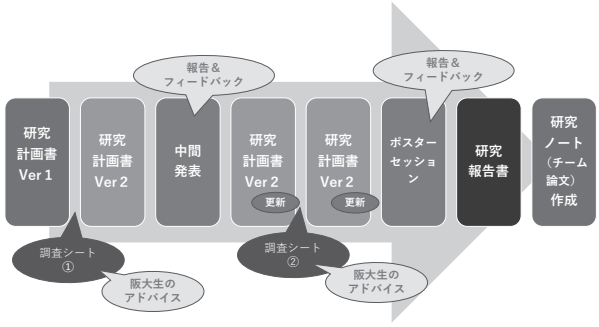


なお、イノベーション探究Ⅱの最終成果物は、「研究ノート」と呼ぶ研究チームにて作成する論文であるが、2020年度については、新型コロナウイルス感染症の拡大（コロナ禍）による臨時休業期間があったため、3年次に行うこととした。また、コロナ禍により活動の制約も多く、生徒間の対面でのコミュニケーションは不足し、従来のようなインタビュー調査やフィールドワークの実施が困難であった。

34

スライド 35

研究計画書・報告書作成の流れ



35

スライド 36

生徒の研究（探究）テーマ設定プロセス

グローバル・イシューに関する研究（探究）テーマを設定するにあたっては、**教員が生徒の興味・関心の共通点をもとに「研究グループを編成する過程」**と、

グループ内での議論や対話によって、生徒たちが**「研究テーマを定め、『研究チーム』を結成（形成）する過程」**がある。

36

スライド 37

①研究グループを編成する過程

- 生徒は、まずSDGs の17の目標について学習する。次に、高校生の先行研究ともいえる「WWL・SGH×探究甲子園」に出場した各校のプレゼンテーション概要を確認する。
- その上で生徒は、どのような課題をテーマに研究したいかを調査票に記入し、担当教員に提出する。
- 担当教員は調査票を確認し、同じような関心のある生徒をまとめ、**4 人前後のグループを編成**する。

37

スライド 38

②研究テーマを定め、「研究チーム」を結成（形成）する過程

- 教員によって編成された研究グループは、顔合わせの後、それぞれの関心を紹介しながら**仮研究テーマを設定する（第6 回授業）**。
- 次に生徒は、乾が担当する講義とワークショップを受講する（第7 回授業）。ここでは、イノベーション探究 II の探究プロセスと各様式の使用方法も交えて解説する。また、**リサーチクエスチョンの立て方、グループとチームの違い、チームでの探究活動に必要なチームワーク行動などについても解説**する。これらの解説の後、生徒は研究計画書の作成に取り掛かる。
- この**研究計画書の作成を通じて、課題研究のテーマ（研究テーマ）が決定され、研究目標を共有する「研究チーム」が結成されていく。**なお、研究テーマは、研究計画を更新する過程で変更される場合もある。

38

スライド 39

ポスターセッションの様子

39

スライド 40

本日のメニュー

1. オリエンテーション・趣旨説明（15分）
2. 京都市立堀川高等学校の探究学習紹介（10分）
3. 古田氏より事例報告（10分）
4. 京都府立鳥羽高等学校の探究学習紹介（10分）
5. **三添氏より事例報告（10分）**
6. 岩間氏より事例報告（10分）

【休憩　10分】

7. 情報の整理（5分）
8. ダイアログ（40分）

40

スライド 41

報告 2

三添　りん 氏

（大阪教育大学 教育学部 1年／京都府立鳥羽高校卒業生）

41

スライド 42

本日のメニュー

1. オリエンテーション・趣旨説明（15分）
2. 京都市立堀川高等学校の探究学習紹介（10分）
3. 古田氏より事例報告（10分）
4. 京都府立鳥羽高等学校の探究学習紹介（10分）
5. 三添氏より事例報告（10分）
6. **岩間氏より事例報告（10分）**

【休憩　10分】

7. 情報の整理（5分）
8. ダイアログ（40分）

42

スライド 43

報告 3

岩間　智哉 氏
（京都府立大学 文学部 1年／京都府立鳥羽高校 卒業生）

43

スライド 44

本日のメニュー

1. オリエンテーション・趣旨説明（15分）
2. 京都市立堀川高等学校の探究学習紹介（10分）
3. 古田氏より事例報告（10分）
4. 京都府立鳥羽高等学校の探究学習紹介（10分）
5. 三添氏より事例報告（10分）
6. 岩間氏より事例報告（10分）

【休憩　10分】

7. 情報の整理（5分）
8. ダイアログ（40分）

44

スライド 45

本日のメニュー

1. オリエンテーション・趣旨説明（15分）
2. 京都市立堀川高等学校の探究学習紹介（10分）
3. 古田氏より事例報告（10分）
4. 京都府立鳥羽高等学校の探究学習紹介（10分）
5. 三添氏より事例報告（10分）
6. 岩間氏より事例報告（10分）

【休憩　10分】

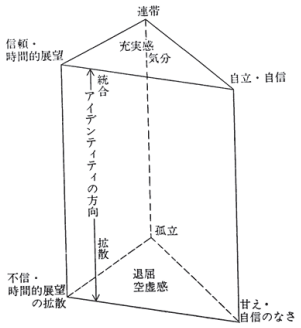
7. 情報の整理（5分）

8. ダイアログ（40分）

45

スライド 46

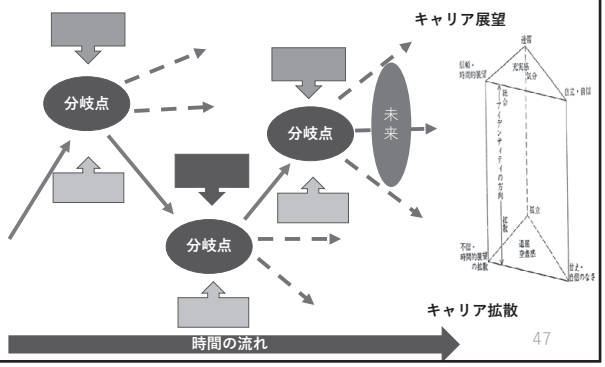
現代日本青年の心情モデル



※西平（1979）を大野（1984）が拡張したもの

スライド 47

キャリアは展望と拡散を経験しながら発達する



47

スライド 48

本日のメニュー

1. オリエンテーション・趣旨説明（15分）
2. 京都市立堀川高等学校の探究学習紹介（10分）
3. 古田氏より事例報告（10分）
4. 京都府立鳥羽高等学校の探究学習紹介（10分）
5. 三添氏より事例報告（10分）
6. 岩間氏より事例報告（10分）

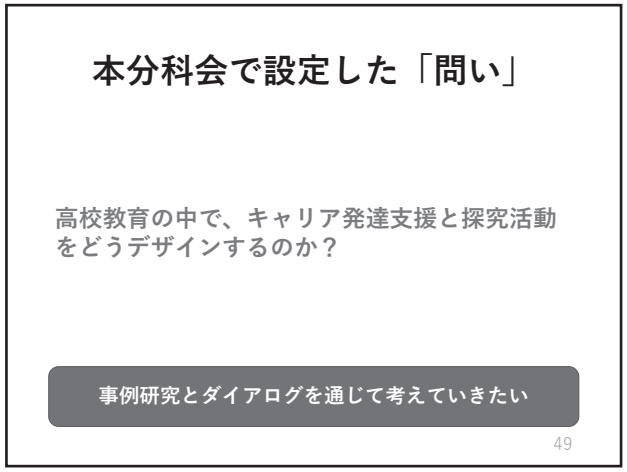
【休憩　10分】

7. 情報の整理（5分）

8. ダイアログ（40分）

48

スライド 49


本分科会で設定した「問い」
高校教育の中で、キャリア発達支援と探究活動をどうデザインするのか？
事例研究とダイアログを通じて考えていきたい
49

スライド 1

探究活動とキャリア展望

京都大学大学院　理学研究科　博士課程1年（数理解析研究所）
古田悠馬

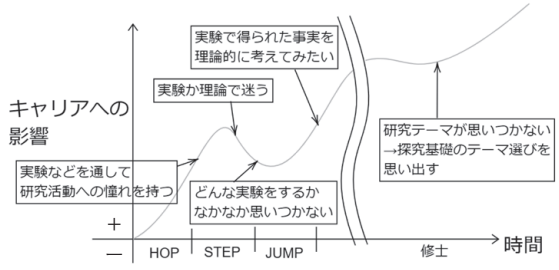
スライド 2

探究活動の概略（化学ゼミ）

- HOP
  探究の型を学ぶ。文献のリサーチや論文の書き方
- STEP
  実験を通してより専門的な実験手法を学ぶ。（分光光度計を用いた水質調査）
- JUMP
  自ら立てた課題について探究する。
  高吸水性ポリマーの水への添加量と凝固点の関係

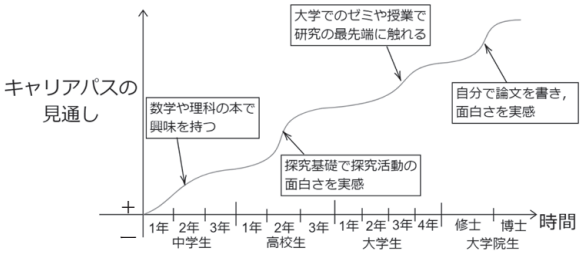
スライド 3

探究活動のキャリアへの影響曲線



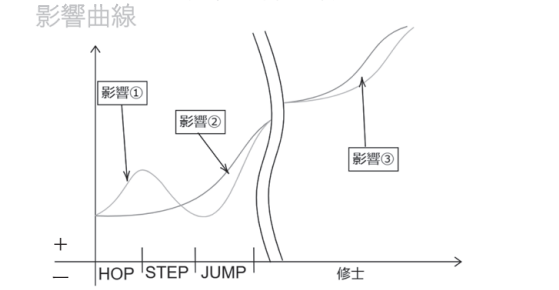
スライド 4

キャリア展望曲線



スライド 5

キャリア展望曲線と探究活動のキャリアへの影響曲線



スライド 6

考察

- 影響①
  もともと研究職志望だったが，研究の内容が具体的にどのようなものかは分かっていない，漠然とした憧れであった
  HOPでの文献調査・論文へまとめる作業やSTEPでの専門的なゼミにおける実験を通して実際の研究のプロセスへの解像度が上がった

スライド7

考察

- 影響②

JUMPの実験で得られた結論に対して，「なぜそのような結果になるのか」という理論的な説明に興味を持つ

→理論を研究する道を志望するように

- 影響③

修士論文のテーマがなかなか決まらない

→探究基礎でもテーマが全然決まらなかった経験を思い出した

「JUMPのときのように思いつく課題を書き出して整理できた」＋「JUMPを乗り越えたという自信」により修士論文のテーマも決定でき，今の研究にも繋がっている

スライド8

探究を振り返って

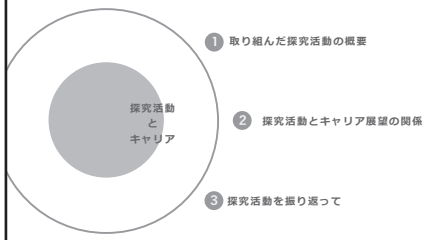
- 探究基礎では専門的な手法を学ぶだけでなく多くのことを学べ，人生の様々な部分で役に立っている。（批判的思考力，物事の課題点を整理する方法，etc...）
- 探究基礎のネガティブな経験（テーマが全然決まらなかったetc...）もその後の人生でプラスに作用することもある。
- もともとキャリア展望がはっきりあったので，その展望をよりクリアにする探究活動ができたと実感している

スライド 1

探究とキャリア

大阪教育大学　教育学部　教育協働学科
芸術表現専攻音楽表現コース1回
三添りん

スライド 2



スライド 3

①取り組んだ探究活動の概要

スライド 4

イノベーション探究Ⅰ（高校1年生）

テーマ　商店街の衰退と今後の課題

グループ人数：女子３人　男子１人

取り組み内容：栄えている商店街と衰退しつつある商店街２つを上げ、比較

結果：比較対象の理由が曖昧で、メンバーそれぞれで調べたことに関連性が無く、興味関心の方向の違いからまとまらずに終了

スライド 5

イノベーション探究Ⅱ（高校2年生）

テーマ　高校生献血＃200mlの大切さ

グループ人数：女子４人

取り組み内容：若者の献血リピーターを増やすにはどのようにすればよいかを調査（日本赤十字社へのヒアリング、学校内でのアンケート）
調査結果をもとに「献血をポジティブに」広めるための動画を作成・大会の参加

活動に参加した大会：WWL全国高校生フォーラム・SDGsQuestみらい甲子園（大日本住友製薬賞受賞）・マイプロジェクトアワード

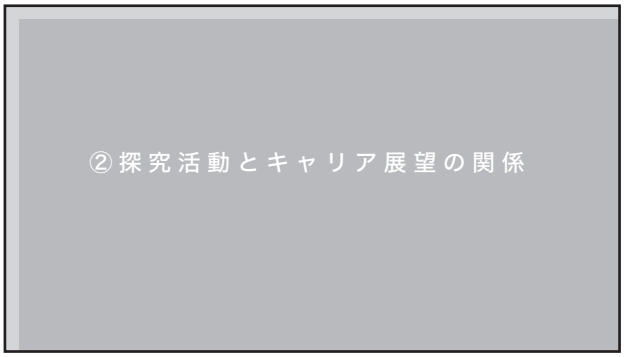
スライド 6

「献血をポジティブに」広めるためのポスター
日本赤十字社と共同で作成

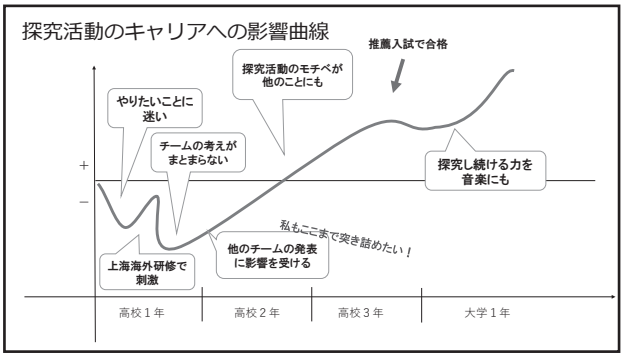
京都府の高校に配布、掲示、SNSでの広告掲載

スライド 7

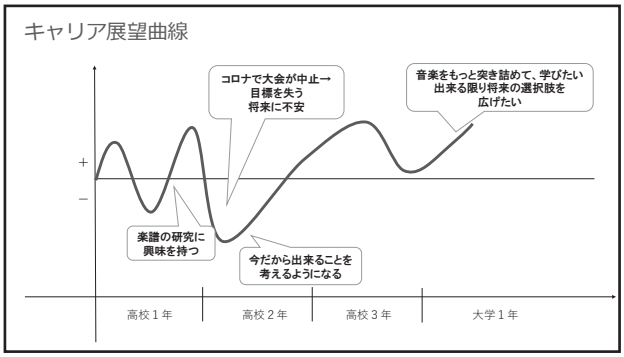
スライド 8



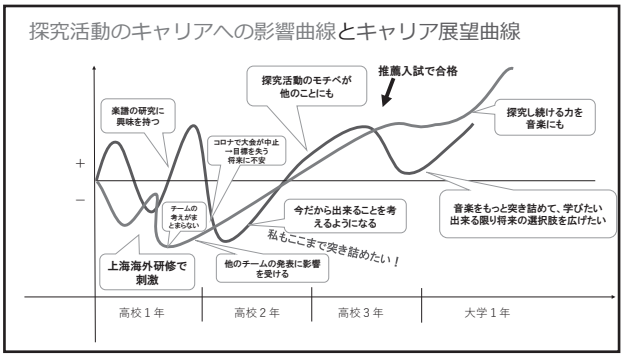
スライド 9



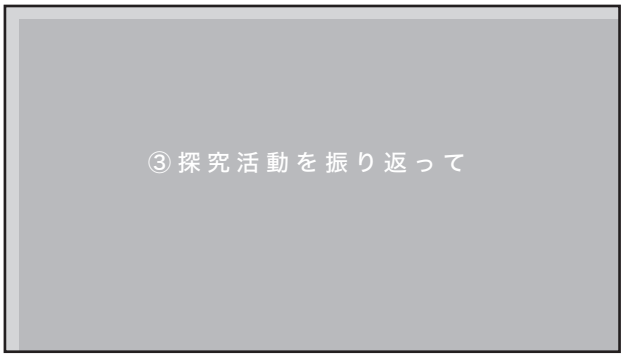
スライド 10



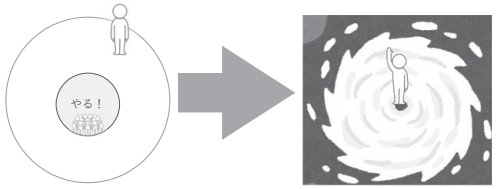
スライド 11



スライド 12



スライド 13



1年次　　2年次

上手くいかなかったからこそ、人を巻き込んでいくアイデアが必要と感じていた。

スライド 14

活動結果にこだわるのではなく
活動過程にこだわる

「活動過程がどのようにキャリアに反映するのか」

スライド 15

この授業がある意味を考え、
「あるからこそ」活かしきると決めていた。

全チームが自主的に動いたわけではなかったのは事実。
マイノリティに目を触れる機会が増え、視野が広がった人がいるのも事実。

ポイントは「授業の大切さにいつ気づくのか」

スライド 1

大学合格後にわかった探究活動の意義

京都府立大学　文学部　1年
岩間智哉

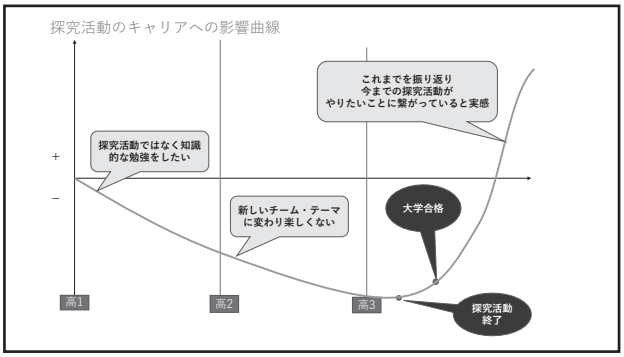
スライド 2

探究活動の概要

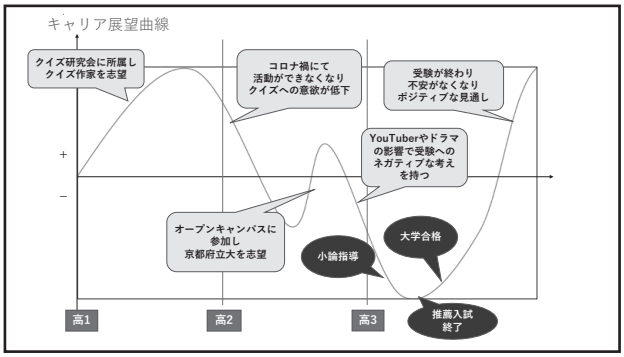
1年次　京都の観光公害問題について
4人（男子2人女子2人）
京都の観光公害について調べ問題と改善策を考えた

２年次　文化財をどのように伝えるか
5人（男子１人女子4人）
京都文化博物館の学芸員の方との交流
鳥羽高校の文化財をどのように伝えていくか考えた

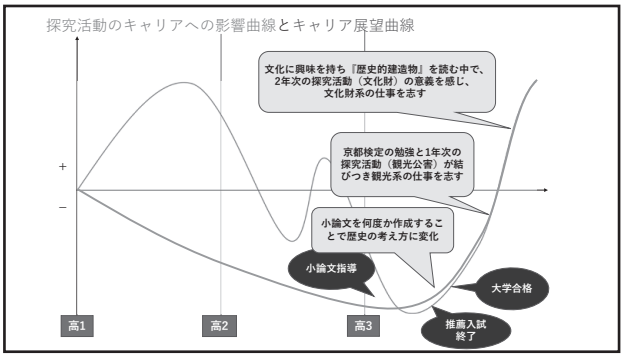
スライド 3



スライド 4



スライド 5



スライド 6

探究の経験がキャリアと結合したとき

1年次　観光公害　2年次　文化財の保存活用
小論文　歴史の捉え方、文化財の在り方

↓

京都の観光系の仕事を目指す

第３分科会

『大学の学び』を展望する高校での学びと体験
～生徒の主体的・多面的な参加～

［報告者］　大山口　暁（京都産業大学附属高等学校 探究科主任）
［報告者］　佐藤　賢一（京都産業大学 生命科学部 教授）
［コーディネーター］　塩田　明信（京都産業大学附属高等学校 副教頭）

高校からは「変化の激しい時代において、人と人の間に入り、自ら考え、課題を発見し、チームで解決できる力を身につける」ことを目指す学校設定教科目「『人間力』講座」の取り組みを報告する。大学からは、全学共通・初年次教育科目で広く高校等での実践事例もある「ハテナソンセミナー」におけるＱＦＴ（米国発の教育メソッド）を用いた学習者主体の問いづくりについて、来歴、ワーク構成や狙い、学習成果を紹介する。

概　略

報告１は、京都産業大学附属高等学校ＫＳＵ（内部進学）コース第２学年に設置されている「『人間力』講座」についての報告であった。開講から８年目となるが、担当する主体の変更があり、今年度から内容を一新している。背景として受講生徒の特徴、企業や社会から求められる資質・能力、子どもたちが持つ「夢」と実際の進路選択の理由等の話題に触れ、その後、講座の目的・狙いや実践している内容について報告された。

報告２は、京都産業大学全学共通・初年次教育科目のほか、さまざまな場で紹介･実践されている「ハテナソンセミナー」についての報告であった。「ハテナソン」誕生の経緯と概略、大学で行われているプログラム等の説明から始まり「ハテナソン」独特のルールを理解して実際にどのように進めるのかグループワークによる体験の時間が設けられた。関連書籍や「ＮＰＯ法人ハテナソン共創ラボ」による養成セミナー等も紹介された。

全体討論の内容

報告１に関して、質問「Step２での行動計画ワークシートはどのような内容か？」

回答：２週間の取り組みにおけるチェックリスト等を、例として提示した。実際の構成はできるだけ生徒に任せるようにしている。一方で何もないところから作るのは生徒にとって難しいので、例示は必要。

報告２では「ハテナソン」を体験するグループワークを、３～５名程度のグループで、２つの課題に分けて実施した。前半は「問い重ねワーク」により「ハテナソン」のルールや進め方を理解することを中心に、グループのメンバー間で質問を重ね合い自己紹介を兼ねるような形で練習した。後半は、報告者より提供されたデータ（基本スキル到達度グラフ）を題材に問いを出し合

い「ハテナソン」の方法で深める練習を行った。

到達点と今後の課題

「探究」をはじめさまざまな教科にも共通する、生徒が主体的に多面的な活動に参加して、大学や社会での学習・研究や実践につながる資質・能力を育む経験や方法に触れ、学び、交流するという面では、一定の成果を得られたと考えている。時間の制約もあり、質疑や討論が十分にできなかったのは残念だが、報告でも紹介されたセミナー等の機会も利用して、より理解を深めていただきたい。ハイブリッド形態での開催により、グループワークにおいてオンラインでの参加にはやや困難も伴い、一層の工夫が求められたと言える。

スライド1

第20回高大連携教育フォーラム　第2部　第3分科会

『大学の学び』を展望する高校での学びと体験

~生徒の主体的・多面的な参加~

京都産業大学附属高等学校
探究科主任　大山口暁

スライド2

自己紹介

2007年　京都産業大学卒業
企業に就職（営業職）

2009年　京都産業大学附属高等学校赴任

2018年　「人間力講座」担当（内部進学を扱う部署管轄）
NPO法人グローカル人材開発センターがメイン

2020年　探究科を設置
探究科主任に任命
「人間力講座」を主で扱う部署に！
探究科としての1年目はコロナとの闘いに終始

2021年　2年目もコロナとの闘いが続く・・・

2022年　今年度、初めて休校などの影響を受けていない

スライド3

京都産業大学附属高等学校の生徒特性

個人的な意見ですが・・・

真面目で良い子が多い！

スライド4

大学・社会で学んでいくために必要な力

企業が学生に求める資質・能力は？

第1位　主体性

第2位　実行力

引用：日本経済団体連合会「高等教育に関するアンケート結果」より　2018年4月17日

⇒　主体性をもって実行する力

スライド5

高校生の主体性

高校生は主体性をもって行動できているか

課題を感じる	４４％	８５％の教員が課題を感じている
課題をやや感じる	４１％	
あまり感じない	１２％	
感じない	３％	

引用：河合塾ガイドライン　対象は読者の高校教員182件　2015年7月

スライド6

高校生の主体性

主体性を育むために必要なこと

「目標設定」「振り返り」のサイクル

引用：㈱リクルートマーケティングパートナーズ
㈱リクルートマネジメントソリューションズの調査より

適切に「目標設定」「振り返り」の
サイクルを回すためには？

目標を自分の興味や関心ごとに設定する

スライド7

高校生の主体性

子どもの
興味・関心ごと
やりたいこと

≠

親（教員）の
やらせたいこと

スライド8

小学生の夢

■2021年「小学生がなりたい職業」集計結果

男子児童			
順位	（前回）	職業	票数
1	（1）	サッカー選手・監督など	123
2	（2）	野球選手・監督など	97
3	（3）	医師	78
4	（6）	ユーチューバー	72
5	（5）	ゲーム制作関連	62
6	（4）	会社員・事務員	59
7	（11）	プロゲーマー	43
7	（9）	建築士	43
9	（11）	飼育員	41
10	（7）	料理人・シェフなど	39

女子児童			
順位	（前回）	職業	票数
1	（4）	医師	104
2	（2）	看護師	91
3	（3）	保育士	90
4	（8）	イラストレーター	84
5	（7）	教師	78
6	（1）	薬剤師	71
7	（9）	美容師	64
8	（6）	パティシエール	60
9	（4）	獣医	48
10	（29）	会社員・事務員	36

第15回小学生「夢をかなえる」作文コンクール　応募作品数：3,357点（男子児童：1,565点／女子児童 1,792点）を集計

引用：日本FP協会　2022年3月1日

スライド9

中学生の夢

中学生は高校を何で選んでいる？

第1位「学力に合っているか」【親】94.7%【子】94.9%

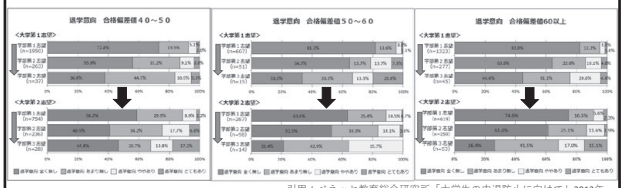
また、64.1%の生徒は
「自分が行きたいかどうかではなく、自分の学力レベルに合わせて選んだ」と回答

引用：ベネッセ教育研究開発センターが刊行した「高校データブック2013」

「興味や関心ごと、やりたいこと」＜「学力、偏差値」

スライド10

大学の中退とミスマッチの関係



引用：ベネッセ教育総合研究所「大学生の中退防止に向けて」2013年

①大学の志望度が下がると退学傾向が高くなる

②第一志望の大学でも学部の志望度がさがると退学傾向が高くなる

自分の興味・関心ごとから離れた学部・学科の学生は退学傾向が高い

スライド11

京都産業大学附属高等学校の生徒特性

改めて・・・

真面目で良い子が多い！

スライド12

人間力講座の理念

人間力講座は

自分の興味・関心を引き出し

「主体的に行動を起こす」

きっかけを与える授業

教員はどのようなサポートができる？

スライド 13

探究科マインドセット

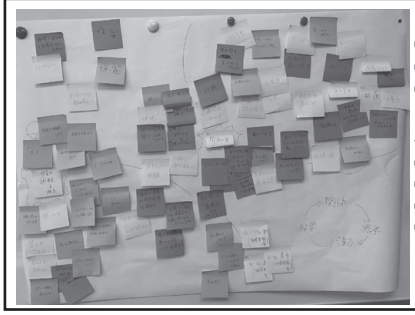
教える　→　学ぶ

	教師中心主義	学習者中心主義
授業のスタイル	一斉講義中心	グループ学習中心
学びのリソース	テキスト	お互いの違い
学習内容	正解	正解のない問い
情報の流れ	教師 → 生徒	生徒 ⇆ 生徒 ⇆ 教師
学習ペース	同期	マイペース
生徒の前提	均質に揃える	多様性を確保する
教師の役割	教えること	ファシリテーション

引用・改変：「ZOOM革命」田原真人氏の図より

スライド 14

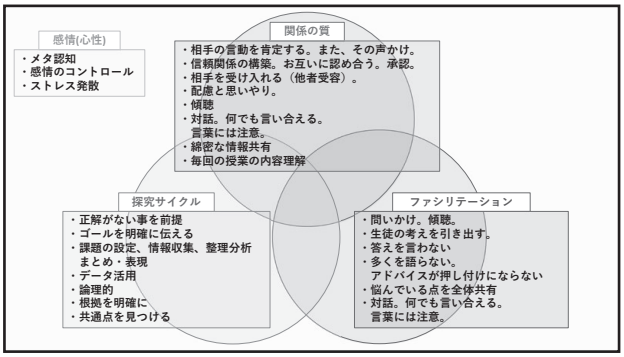
探究科マインドセット



【ブレスト】
①授業で大切にしたいこと
②生徒の対応で大切にしたいこと
③教員間で大切にしたいこと

【KJ法】
付箋を4グループに分ける
①関係の質
②ファシリテーション
③探究サイクル
④感情（心性）

スライド 15



スライド 16

人間力講座　年間カリキュラム　3STEP

【STEP1】自分を知る
自分の在り方・生き方を考える　⇒　「なりたい自分」
自分の興味・関心ごとを考える　⇒　「やりたいこと」

【STEP2】自分のために、とにかく「行動」する
「なりたい自分」×「やりたいこと」
小さくてもいいから自分らしく行動することを念頭に置く

【STEP3】他者のために、とにかく「行動」する
身近な人のために行動する
困り事の解決や、幸福感を高めるためにできることを考える

スライド 17

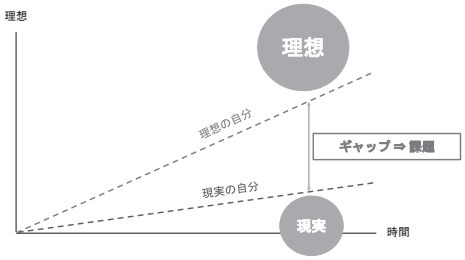
【STEP1】「主体的に行動を起こす」ために自分を知る

なりたい自分　×　興味・関心ごと
やってみたいこと

⇒ どんな「行動（Action）」をしていく？

スライド 18

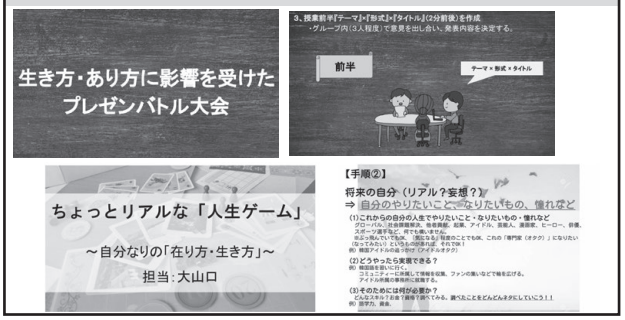
【STEP1】自分の課題設定・発見ワーク



「なりたい自分」になるために必要な力を考える

スライド 19

【STEP1】探究科教員のリレー講座



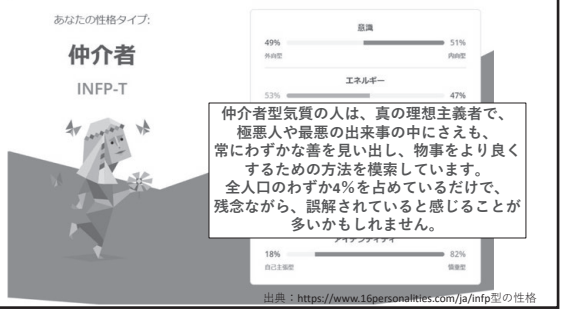
スライド 20

【STEP1】 16personalities Test（MBTI 16タイプ性格診断）

URL：https://www.16personalities.com/ja/性格診断テスト

スライド 21

【STEP1】 16personalities Test（MBTI 16タイプ性格診断）



出典：https://www.16personalities.com/ja/infp型の性格

スライド 22

【STEP1】ジョハリの窓

スライド 23

【STEP1】 「主体的に行動を起こす」ために自分を知る

なりたい自分 × 興味・関心ごと
やってみたいこと

⇒ どんな「行動（Action）」をしていく？

スライド 24

【STEP1】興味・関心、やりたいことのキーワード設定

【職業、趣味、社会】

農業、漁業、工業、サービス業、エンジニア、Web系、ネットビジネス、
起業、観光、タレント、俳優、モデル、エンターテイナー、音楽、
デザイン、アート、ゲーム、スポーツ、ダンス、トレーナー、漫画、
アニメ、コスメ、ファッション、ネイル、飲食、スイーツ、福祉、出版、
報道、金融、インテリア、旅行、医療、ものづくり、交通、動物、植物、
法律、環境、政治、教育、研究、グローバル、ＳＤＧｓ、地域、家庭、
心理、福祉、高齢化社会、少子化、ＬＧＢＴＱ　　など

※上に挙げているキーワードはあくまで一例です。
上記のキーワードから選択してもOK！自分で考えたものでもOKです。

スライド 25

【STEP1】「主体的に行動を起こす」ために自分を知る

なりたい自分 × 興味・関心ごと やってみたいこと

⇒ どんな「行動（Action）」をしていく？

スライド 26

【STEP2】行動計画を立てて実行

・行動計画書を作成
・実施期間後に行動結果を整理するワークシートを記入
・ワークシートをもとに中間報告

【実施期間】

第1回：9月27日～10月10日
※10月11日　中間報告会（振り返り・ブラッシュアップ）

第2回：10月11日～10月31日
※11月 1日　中間報告会（振り返り・ブラッシュアップ）

第3回：11月8日～11月21日
※11月22日　最終表現

スライド 27

【STEP2】注意事項

行動計画がただの「苦行」になってないか？

自分が「やろう！」と思える行動になっているか？

行動に移せないなら、その行動をやめてもいい。

うまくいかなくて失敗してもいい。 やめることも大事！ 失敗することも大事！

その場合は行動内容の再設定をして、再スタートしよう。

スライド 28

【STEP2】社会人ゲスト座談会

【目的・主旨】
社会の第一線で活躍している人がどのような『行動』をしてきたのかを知り、自分の行動を改めて考える。

【座談会内容】
・行動に移せなかったこと、やめたこと、失敗したことなどの経験談。
・また、それをどのように乗り越えたのか。

・自身の「なりたい」「やりたい」をどのように実現したのか。
・または実現しようとしているのか。
・そのためにはどのような工夫や行動をしたのか。

・今どのような行動をしているのか。

【参加ゲスト】
フォトグラファー、映画監督、コピーライター、ボードゲームクリエイター
デジタルクリエイターなど様々な職種の社会人が参加（計13名）

スライド 29

【STEP2】社会人ゲスト座談会

どのゲストの話が聴きたいか事前に調査をとる。
原則、第一希望を優先させた。
人数調整で第二希望に回った生徒も若干名いた。

⇩

選択制にすることで生徒の自己決定力を育む

スライド 30

【STEP2】社会人ゲスト座談会

今年度、生徒人気№１の取り組みになりました

スライド 31

【STEP2】行動計画を立てて実行

・行動計画書を作成
・実施期間中に発表用の成果物を作成
・成果物（スライド、ポスターなど）を用いて最終表現

【実施期間】

第1回：9月27日～10月10日
※10月11日　中間報告会（振り返り・ブラッシュアップ）

第2回：10月11日～10月31日
※11月 1日　中間報告会（振り返り・ブラッシュアップ）

第3回：11月8日～11月21日
※11月22日　最終表現

スライド 32

【STEP2】最終表現

【最終表現の形式】

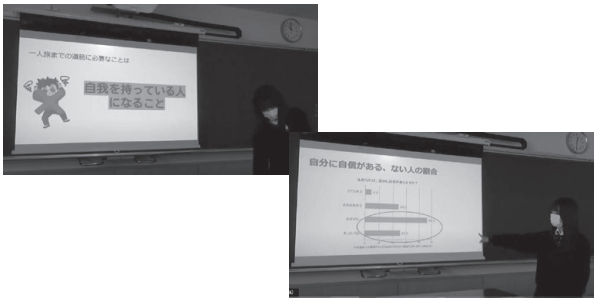
・プレゼン
・レポート
・ポスター
・動画

自分に合った表現方法を選択する

⇒　選択制にすることで生徒の自己決定力を育む

スライド 33

【STEP2】最終表現（プレゼン形式）

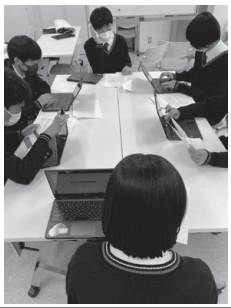


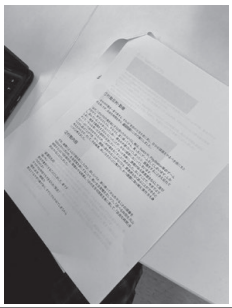
スライド 34

【STEP2】最終表現（ポスター形式）

スライド 35

【STEP2】最終表現（レポート形式）





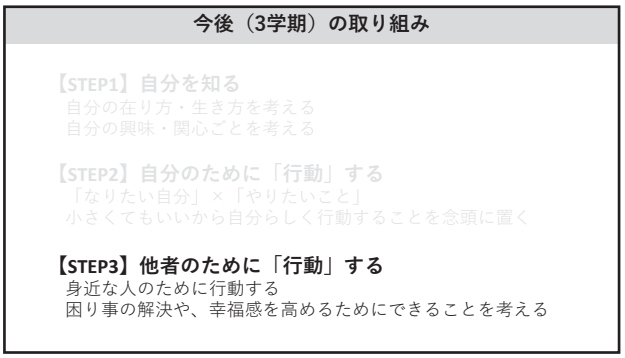
スライド 36

ここまでの課題

【生徒】
・自分のためではなく、評価のために行動をする生徒がいる
・行動が継続できていない
・教員の正解を求めている生徒がいる
・正解がないのでモチベーションにつながらない生徒がいる
・興味、関心ごと、やりたいことのはずが「苦行」になっている

【教員】
・本当の興味、関心、やりたいことを引き出せていない
・教員の「やらせたい」が出ている
・個別対応を心がけているが、授業が画一的になっている
・生徒数が多いのでファシリテーションしきれない
・振り返り回数が少なかった

スライド 37


今後（3学期）の取り組み
【STEP1】自分を知る
自分の在り方・生き方を考える
自分の興味・関心ごとを考える
【STEP2】自分のために「行動」する
「なりたい自分」×「やりたいこと」
小さくてもいいから自分らしく行動することを念頭に置く
【STEP3】他者のために「行動」する
身近な人のために行動する
困り事の解決や、幸福感を高めるためにできることを考える

スライド1

2022年度高大連携教育フォーラム　第3分科会

報告者　佐藤賢一（京都産業大学、ハテナソン共創ラボ）

テーマ

学習者自らの問いづくりを基点（起点）とする

学び場づくりとその可能性

スライド2

案内役　佐藤賢一（ケニチ）

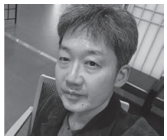
1965年　北海道 岩見沢市　生まれ

1984年　神戸大学、以降　関西在住（神戸、京都）

2007年　京都産業大学（生命科学部教授）

2017年　ハテナソン共創ラボ 設立（代表理事）

2022年　人生初の入院、そして復活途上



2022年10月吉日　京都・ホテルロビーにて

スライド3

テーマ
学習者自らの問いづくりを基点（起点）とする学び場づくりとその可能性

キーワード
QFT　ハテナソン　問いづくり　個別最適化　全体最大化

構成
1　本発表のゴールと構成についての説明
2　QFTとはなにか？ハテナソンとはなにか？（キーワードの理解）
3　問い重ねワーク（問いに答えるのではなく、さらに問いを重ねる）
4　大学初年次教育科目ハテナソンセミナー（問いづくり学習の応用展開）
5　QFTワーク（問いの焦点のもとでの問いづくり体験）
6　振り返り（何が学べたか？ゴールに到達できたか？）

1、2、4：講義形式
3、5、6：個人あるいはグループでのワーク、ディスカッション

スライド4

テーマ
学習者自らの問いづくりを基点（起点）とする学び場づくりとその可能性

キーワード
QFT　ハテナソン　問いづくり　個別最適化　全体最大化

構成
1　本発表のゴールと構成についての説明
2　QFTとはなにか？ハテナソンとはなにか？（キーワードの理解）
3　問い重ねワーク（問いに答えるのではなく、さらに問いを重ねる）
4　大学初年次教育科目ハテナソンセミナー（問いづくり学習の応用展開）
5　QFTワーク（問いの焦点のもとでの問いづくり体験）
6　振り返り（何が学べたか？ゴールに到達できたか？）

1、2、4：講義形式
3、5、6：個人あるいはグループでのワーク、ディスカッション

スライド5

テーマ
学習者自らの問いづくりを基点（起点）とする学び場づくりとその可能性

キーワード
QFT　ハテナソン　問いづくり　個別最適化　全体最大化

構成
1　本発表のゴールと構成についての説明
2　QFTとはなにか？ハテナソンとはなにか？（キーワードの理解）
3　問い重ねワーク（問いに答えるのではなく、さらに問いを重ねる）
4　大学初年次教育科目ハテナソンセミナー（問いづくり学習の応用展開）
5　QFTワーク（問いの焦点のもとでの問いづくり体験）
6　振り返り（何が学べたか？ゴールに到達できたか？）

1、2、4：講義形式
3、5、6：個人あるいはグループでのワーク、ディスカッション

スライド6

本発表のゴール

・新しい用語、概念であるQFTとハテナソンについて知る

・問いづくりメソッド2種類を体験する

・問いづくりを中核とする大学初年次教育科目の一例を知る

・学習者による問いづくりについて考え、行動に向かう

スライド7

テーマ
学習者自らの問いづくりを基点（起点）とする学び場づくりとその可能性

キーワード
QFT　ハテナソン　問いづくり　個別最適化　全体最大化

構成
1　本発表のゴールと構成についての説明
2　QFTとはなにか？ハテナソンとはなにか？（キーワードの理解）
3　問い重ねワーク（問いに答えるのではなく、さらに問いを重ねる）
4　大学初年次教育科目ハテナソンセミナー（問いづくり学習の応用展開）
5　QFTワーク（問いの焦点のもとでの問いづくり体験）
6　振り返り（何が学べたか？ゴールに到達できたか？）

1、2、4：講義形式
3、5、6：個人あるいはグループでのワーク、ディスカッション

スライド8

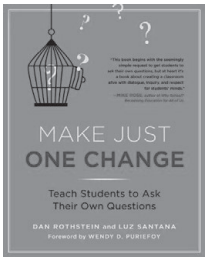
ハテナソン　QFT

ハテナソンは、QFT（**Q**uestion **F**ormulation **T**echnique）という手法を知ったことをキッカケに、？とマラソンを組み合わせて、ケニチがつくった造語です。

一人一人の発想が尊重される民主的ルールのもとで行われる問いづくりのことを意味します。類似用語にアイデアソン、ハッカソンがあります。

スライド9

+ 私たちだけではありません



世界中の100万を超える教室の教育者がこのメソッドを使っています

スライド10

「問いの焦点」の共有
↓
問いを出し合う
↓
問いを分類・変換する
↓
優先順位をつける
↓
問いを見直す／答えを探る

スライド11

テーマ
学習者自らの問いづくりを基点（起点）とする学び場づくりとその可能性

キーワード
QFT　ハテナソン　問いづくり　個別最適化　全体最大化

構成
1　本発表のゴールと構成についての説明
2　QFTとはなにか？ハテナソンとはなにか？（キーワードの理解）
3　問い重ねワーク（問いに答えるのではなく、さらに問いを重ねる）
4　大学初年次教育科目ハテナソンセミナー（問いづくり学習の応用展開）
5　QFTワーク（問いの焦点のもとでの問いづくり体験）
6　振り返り（何が学べたか？ゴールに到達できたか？）

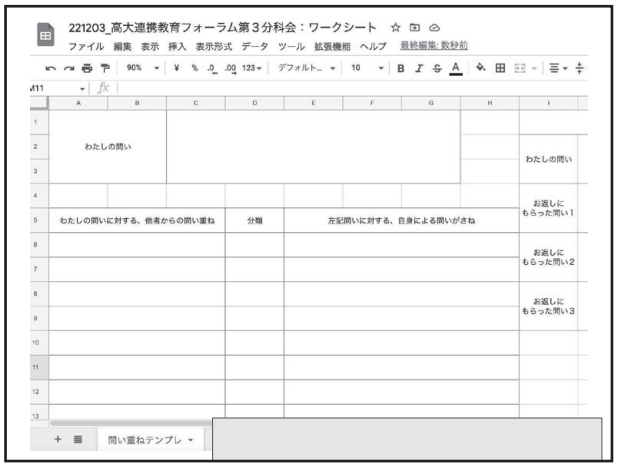
1、2、4：講義形式
3、5、6：個人あるいはグループでのワーク、ディスカッション

スライド12

問い重ねワーク

https://docs.goo[redacted]QGFOSD63tbk9QO
VZ4QmAmBKXN[redacted]

スライド 13



スライド 14

『問いがさね』練習方法

1）問いを1つ、ノートに書く。
2）メンバーに問いを聴いてもらう。
3）**問いへの問い**を言ってもらう。記録する。
4）相手の問いを聴く。
5）その**問いへの問い**を言う。記録してもらう。
6）グループ全員がやり終える。

問い：今日の晩御飯は何かな？
問いがさね：誰が作るのですか？昨日は何を食べたのですか？いつも何時に食べるんですか？

スライド 15

<u>グループメンバーの問い</u>を読み・聞き、

・掘り下げて、深く考えるために
・確認したいことを表現するために
・そもそも◯◯とは？を明らかにするために
・その問いの背景や狙いを明らかにするために

・・・といった目的のために役立ちそうな問いを考え、書いてみましょう！（1つの問いに1つ）

スライド 16

ご自身の問いのリストを読み・聞き、

・閉じた問いなら△印を
・開いた問いなら◯印を
それぞれの問いに付けましょう。

グループ内で大事な問いを1～3個選び、その理由を説明する準備をしましょう（制限時間4分）。

スライド 17

テーマ
学習者自らの問いづくりを基点（起点）とする学び場づくりとその可能性

キーワード
QFT　ハテナソン　問いづくり　個別最適化　全体最大化

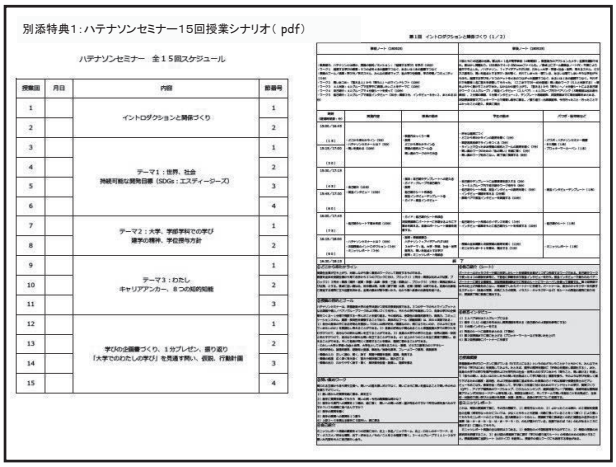
構成
1　本発表のゴールと構成についての説明
2　QFTとはなにか？ハテナソンとはなにか？（キーワードの理解）
3　問い重ねワーク（問いに答えるのではなく、さらに問いを重ねる）
4　大学初年次教育科目ハテナソンセミナー（問いづくり学習の応用展開）
5　QFTワーク（問いの焦点のもとでの問いづくり体験）
6　振り返り（何が学べたか？ゴールに到達できたか？）

1、2、4：講義形式
3、5、6：個人あるいはグループでのワーク、ディスカッション

スライド 18

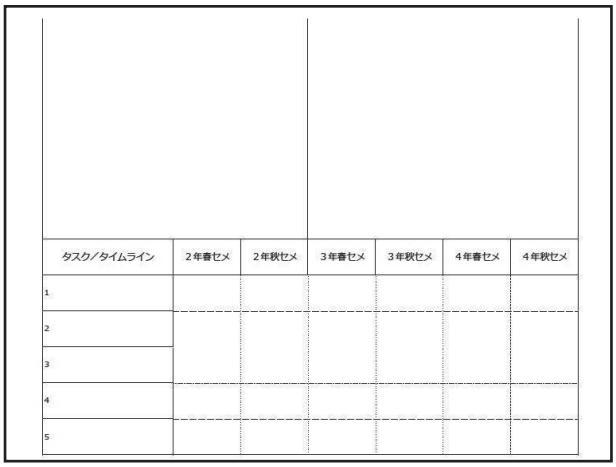
スライド 19

スライド 20



スライド 21

スライド 22



スライド 23

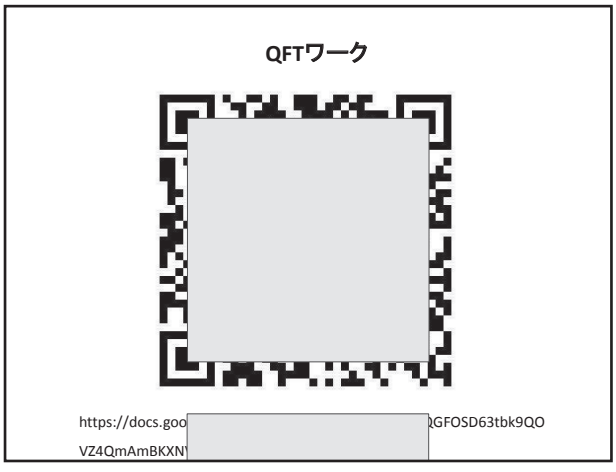
テーマ
学習者自らの問いづくりを基点（起点）とする学び場づくりとその可能性

キーワード
QFT　ハテナソン　問いづくり　個別最適化　全体最大化

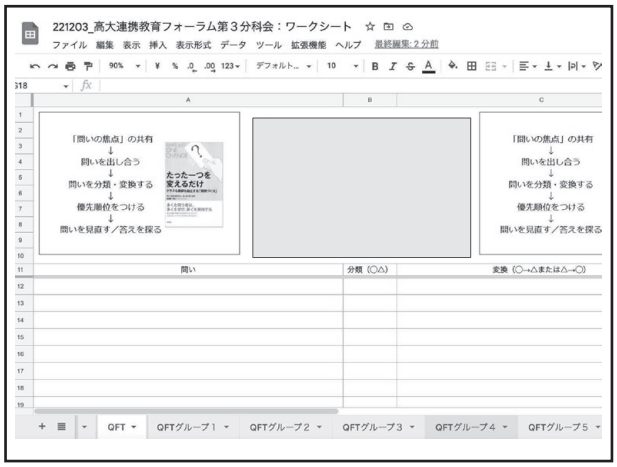
構成
1　本発表のゴールと構成についての説明
2　QFTとはなにか？ハテナソンとはなにか？（キーワードの理解）
3　問い重ねワーク（問いに答えるのではなく、さらに問いを重ねる）
4　大学初年次教育科目ハテナソンセミナー（問いづくり学習の応用展開）
5　QFTワーク（問いの焦点のもとでの問いづくり体験）
6　振り返り（何が学べたか？ゴールに到達できたか？）

1、2、4：講義形式
3、5、6：個人あるいはグループでのワーク、ディスカッション

スライド 24



スライド 25



スライド 26

「問いの焦点」の共有

↓

問いを出し合う

↓

問いを分類・変換する

↓

優先順位をつける

↓

問いを見直す／答えを探る

スライド 27

「問いの焦点」の共有

スライド 28

基本スキル到達度

スライド 29

「問いの焦点」の共有

↓

問いを出し合う

問い出しのルール

① 全員、できるだけたくさん問いを出す。

② 説明、話し合い、評価、回答等は禁止。

③ 発言者は意見や主張を疑問文に直す。

④ 記録係は問いを発言のとおりに書く。

スライド 30

「問いの焦点」の共有

↓

問いを出し合う

↓

問いを分類・変換する

① 閉じた問いに△、開いた問いに○をつける。

② 閉じた問いと開いた問いの特徴を話し合う。

③ 問いをつくり直して、開閉を変換する。

スライド 31

「問いの焦点」の共有
↓
問いを出し合う
↓
問いを分類・変換する
↓
優先順位をつける

① 大事な問いを最大3つ選び、清書する。
② その理由とともに全体共有する。

スライド 32

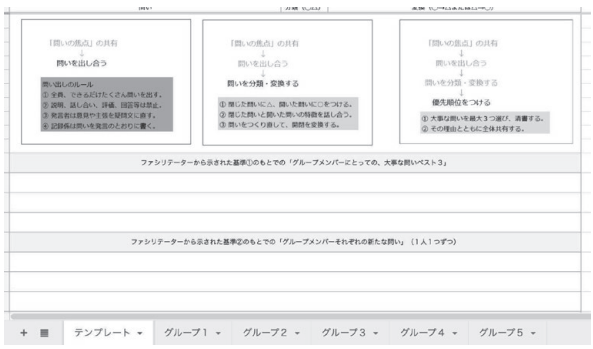
グループ1、3、5、7

Right Question Instituteに問い合わせるとしたら？　ベスト3

グループ2、4、6、8

自社あるいは自校での研修のお題とするなら？　ベスト3

スライド 33



スライド 34

グループ1、3、5、7

18歳の立場で問いを立てるとしたら？

グループ2、4、6、8

5歳の子どもが問いを立てるとしたら？

スライド 35

「問いの焦点」の共有
↓
問いを出し合う
↓
問いを分類・変換する
↓
優先順位をつける
↓
問いを見直す／答えを探る

スライド 36

テーマ
学習者自らの問いづくりを基点（起点）とする学び場づくりとその可能性

キーワード
QFT　ハテナソン　問いづくり　個別最適化　全体最大化

構成
1　本発表のゴールと構成についての説明
2　QFTとはなにか？ハテナソンとはなにか？（キーワードの理解）
3　問い重ねワーク（問いに答えるのではなく、さらに問いを重ねる）
4　大学初年次教育科目ハテナソンセミナー（問いづくり学習の応用展開）
5　QFTワーク（問いの焦点のもとでの問いづくり体験）
6　振り返り（何が学べたか？ゴールに到達できたか？）

1、2、4：講義形式
3、5、6：個人あるいはグループでのワーク、ディスカッション

スライド 37

振り返り

・どんなことを行いましたか？

・どんなことが学べましたか？

・案内役が提示したゴールにたどり着けましたか？

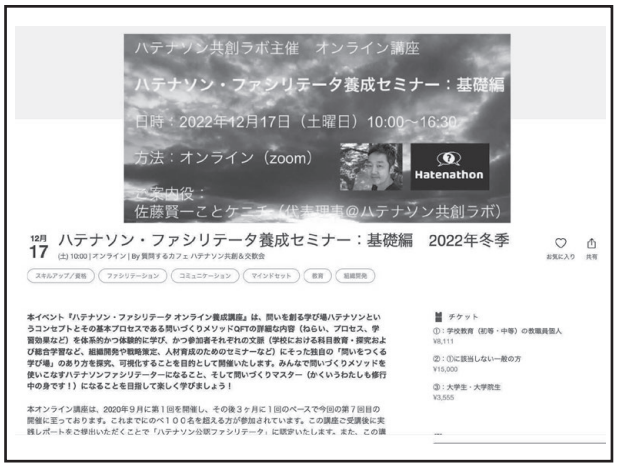
・全体的にこのプレゼンテーションの内容に満足していますか？

・これからのご活動に利活用できそうなことはありますか？

・もしあれば、それはいつから実行できそうですか？

スライド 38

スライド 39



特別分科会①【高大接続】

持続可能な社会の創り手の育成につながる高大接続
～国際比較から見える可能性～

［報告者］　花井　　渉（九州大学 人間環境学研究院 教育学部門 准教授）
［報告者］　細尾　萌子（立命館大学 文学部 准教授）
［コーディネーター］　山本　以和子（京都工芸繊維大学 工芸科学部 教授）

「令和の日本型学校教育」答申（2021）で示された「持続可能な社会の創り手」に向けて、学習者の資質・能力を高校・大学にて育むために今後の高大接続（入試や接続教育等）をどう企図すべきか。視野を拡げて英仏の場合、大学教育の準備性（レディネス）を高校までにいかに育てており、それが大学や社会に実際につながっているのかを見てみる。海外事例との比較から日本の高大接続の特徴に気付き、その理解より今後の高大接続を探る。

概　略

第１部のシンポジウムの話題の中では、急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力の方向に合わせて、教師・生徒の学びの変化や学校教育の方向性が示された。そこには、学校教育の改革だけに留まらず、グローバル化と学習の個性化が進行された社会と併行するように、大学キャンパスの多様化と、またその実現のためには、従来の受験に動機づけられ、かつ狭義な試験対策的な学力を測定する大学入試だけに固執しない選抜設計が示唆された。まさに、最近はペーパーテストに留まらないスクーリング形式テストや、ポートフォリオや探究学習が評価される入試が出現している。これまでわが国で展開していた高大接続システムが本当に妥当なのかという大きなテーマも内在しながら、このたびは視点を拡げて海外の接続システムと接続評価をプラクティスするために、本分科会では、英仏の高大接続について報告を行った。

事例報告１では、イギリスの高大接続システムにおける近年の改革動向とそこでの公平性をめぐる論議について報告された。イギリスでは多面的な評価に基づく高大接続システムを目指した改革が度々提言されてきたが「黄金のスタンダード」としてのＧＣＥ－Ａレベル優位および学力重視の制度が維持されてきたことが報告された。日本の高大接続においても、多面的・総合的評価が注目されているが、公平性の観点からは学力試験を通じた入学者選抜の実施とともに、試験の採点期間や人員を十分に確保するための制度改革が求められることが提言された。

事例報告２では、フランスにおいて、市民として育みたい力に向けた接続システムが形成されていることを報告した。大学入学資格試験のバカロレア試験で問われる、知識を構造化して表現する力は、大学や社会で必要とされる力とつながっており、小中高ではこのバカロレア試験で問われる力を段階的に育成していると述べた。日本の高大接続においても、記述式問題などの方法論だけを議論するのではなく、どのような人を育てたいか、その準備学力として入試でどのような力を問うべきかを検討した上で、それを測れる試験方法を開発すべきだと提言した。

全体討論の内容

国内では、時間をかけて聞くことができない英仏の高大接続についての報告であったので、活発な質疑応答が行われた。例えば「日本の大学入試システムは世界的に見ると、変わっていると聞くが、本当か？」「英仏の高等教育資格試験は何回受験可能か？」「高卒者だけでなく、社会人の大学受入となると接続面はどのようになっているのか？」「英仏は教育システムが構造化されて世界で認められているのか？　大学進学率は低いのでは？　英国（ブレア政権）は職業教育の政策改革をしていたようだがどうなったのか？」の質疑を時間超過して行った。その後「日本の高大接続の課題は何か？　⇒その課題が解決しそうな知見は何か？」のテーマでグループ別に討論した。

到達点と今後の課題

日本の入試の課題や英仏の職業と結び付いた高等教育への進学やキャリアに対する価値観の違い等が新たな発見としてあった。一方で、試験の公平性の問題や資格試験の作問の担当者（英国は大学教員が試験関与する割合が拡大している）、日本の高校教育の目標が曖昧化しているのではないかといった課題も見えてきた。時代や社会情勢、科学技術の発展と人々の価値観の変容など、教育現場に与える影響とその変化が求められている昨今、新たな高大接続システムを構築、展望するため、今回の英仏の高大接続事例は、そのシステムや考え方、教育的価値等で学びが多かったと考える。

試験的に対面開催を実施した。当日の欠席者が多かったが、参加者からは好反応であり、対面での意見共有や学びの深さにつながったと考えられる。

スライド1

事例報告1
イギリスの高大接続システムと
その公平性をめぐる論議

九州大学人間環境学研究院教育学部門・准教授
花井 渉

2022年12月3日（土）
大学コンソーシアム京都　高大連携教育フォーラム 【第2部】特別分科会企画

九州大学

スライド2

本報告の概要

① 高大接続の背景
　イギリスの大学入学者選抜の変遷と伝統的な学力観
　イギリスの高大接続システム（大学入学プロセス）の特質と課題

② 公平なアドミッションシステムの構築へ向けた改革動向
　シュワルツ報告による公平なアドミッションの原則
　「資格取得後のアドミッション」（PQA）システム導入の提案

③ PQAシステム導入によって期待される効果
　PQAをめぐるその後の展開
　日本の大学入試の文脈への示唆

スライド3

イギリスの高大接続システムの背景と伝統的な学力観

イギリスには大学入試は、オックスブリッジでの面接試験を除き、ほぼ存在しない

イギリスでは、後期中等教育の修了段階に受ける資格試験の成績が大学入学資格となる　⇒　後期中等教育修了資格試験が重要

イギリスの資格試験制度では、1951年にGCE-Aレベルが導入されて以降、その資格試験の修了が、大学入学のための「黄金のスタンダード」として広く認知され、社会的地位を確立

⇒現在も大学入学資格として、最も一般的な資格試験

スライド4

イギリスの高大接続システムの背景と伝統的な学力観

Aレベルに対する批判と統合的な資格の導入に向けた資格試験制度改革：Aレベルの特質

-早期の専門化（3科目に限定される学習）
-エリート偏重
-学習内容の幅（breadth）と深さ（depth）（文理のバランス）
-コア学習（教科横断的な学習）の欠如
-大学入学者選抜では、Aレベル取得者の選抜を優先的に行なっていた
-「アカデミック-職業ディバイド」

その後、資格試験制度やAレベル改革が繰り返され、階層や出身校に左右されない公平な高等教育進学機会の提供が目指されてきた

スライド5

イギリスの高大接続システムの背景と伝統的な学力観

Aレベルに対する批判と統合的な資格の導入に向けた資格試験制度改革

クラウザー報告（1959年） vs オックスフォード報告（1960年）

前者：早期の専門化を前提とする改革
後者：後にIB機構の初代代表となるピーターソンを代表とする研究チームによる国際的なシックス・フォーム構想

「論文」、「時事問題」、「一般知識」、「英語の効用」等の学際的な科目の導入を提案

2000年：デアリング報告の勧告に基づく「カリキュラム2000改革」
2003年：トムリンソン報告（14-19ディプロマ）

⇒いずれも、アカデミック/職業教育に関わらず、共通のコア学習の導入を提案：「統合的な資格」（unified qualifications）

スライド6

イギリスの高大接続システムの背景と伝統的な学力観

Aレベルに対する批判と統合的な資格の導入に向けた資格試験制度改革

⇒しかし、これまでの改革の多くが、Aレベルのステークホルダーである大学、資格付与団体や学校・カレッジからの批判や反発を受け、実現されずに廃案になったり、改革後に元の制度に戻されてきた

⇒「バカロレアは外国のものだ」という考えが根強く残っていた

⇒国際バカロレア（IB）は、改革の参考にはされるものの、その位置づけは周辺的

スライド7

イギリスの高大接続システムの背景と伝統的な学力観

Aレベルに対する批判と統合的な資格の導入に向けた資格試験制度改革

2002年：Aレベル・スキャンダルや成績インフレ問題
Aレベルの質の低下批判が社会全体に広がることになる

2006年：ブレア労働党政権（当時）によるIB拡大政策

IBは、周辺的な資格からイギリスのアカデミックな資格の新たな選択肢となり、Aレベルの代替資格として中心的な資格へと変化

Aレベルが長年抱えてきた課題を解決し、統合的な資格試験制度構築のモデルとして期待されるようになった

スライド8

イギリスの高大接続システムの背景と伝統的な学力観

Aレベルに対する批判と統合的な資格の導入に向けた資格試験制度改革

しかし、IBはその後批判を受け、減少することになる

2010年：キャメロン保守党政権（当時）による財政緊縮策

要因の一つ：
資格・カリキュラムの「柔軟性」（flexibility）の捉え方の違い
➡イギリスでは、資格によって科目数や学習の範囲が異なっており、科目選択の自由がある点で柔軟性が高いと認識されている

イギリスの文脈では、IBの「6科目3要件」という固定化された資格の取得要件は、柔軟性が低い資格として認識された

スライド9

イギリスの高大接続システムの背景と伝統的な学力観

イギリス国内におけるIB認定校の減少の一方で、イギリス独自の「バカロレア型資格」の開発導入が一時急増

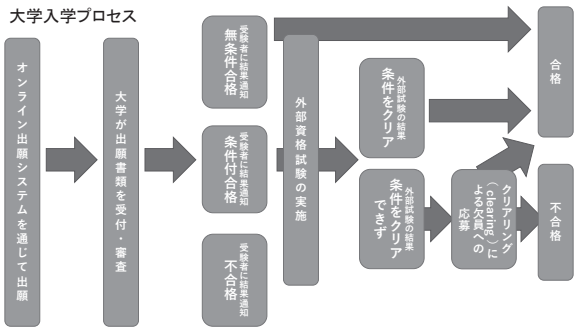
例：アドバンスト・バカロレア（ABacc）：Aレベルの3科目＋IBの「課題論文」と「社会奉仕活動」を組み込んだ資格

バカロレア型資格の特徴
「既存の伝統的な資格」（AレベルやBTEC等）+「共通のコア学習」（問題発見型学習、社会奉仕活動、課題論文等）
➡伝統的な資格を変えることなく、コア学習を追加することで、新たな能力・スキルの育成が図られている

こうして、イギリスの高大接続システムでは、Aレベル優位のシステム（ソフトスキルよりも学力を重視するシステム）が維持され続けてきた

スライド10

イギリスの高大接続システム（大学入学プロセス）の特質と課題



スライド11

イギリスの高大接続システム（大学入学プロセス）の特質と課題

・大学入学資格の「黄金のスタンダード」（the gold standard）としてのGCE-Aレベル：
1951年に開発・導入されて以降、大学進学を目指すほとんどの生徒が受験する後期中等教育修了資格試験
・多くの生徒は、大学側から提示される入学要件（entry requirement）に合わせた3科目を受験する
・Aレベルの成績は、A*、A、B、C、D及びEの6段階評価

・Aレベルは、主に3つの資格付与団体（民間やチャリティー団体）によって実施されている（Pearson Edexcel 、AQA、OCR）
・外部の第三者による後期中等教育修了資格試験
⇒公平性の担保

・Aレベルは、3科目に絞った、学力重視の試験
⇒公平な試験制度

スライド12

イギリスの高大接続システム（大学入学プロセス）の特質と課題

GCE-Aレベル：学力重視の試験
ただし、資格の組み合わせには自由度があり、柔軟なシステム

Aレベルは、外部の第三者による後期中等教育修了資格試験

外部資格試験の前に、「予測される成績」（predicted grade）に基づいて出願

実際の資格試験を受験する6～9ヶ月前に、高校教員による評価を基に「予測される成績」が出される（カリキュラムの半分ほどしか終わっていない段階）

UCAS（2019）の分析によれば、「予測される成績」は正確に生徒の学力を示すものではなく、その妥当性の問題が指摘されている
生徒は、実際の成績が出る前に、不確実かつ限られた情報を基に進路選択をしなければならず、入学後のミスマッチや中退へとつながる要因となっている

スライド 13

イギリスの高大接続システム（大学入学プロセス）の特質と課題

社会的に不利な生徒が本来の成績よりも低い入学要件の大学に進学しており、卒業後の進路（就職先）や社会移動の制限にもつながっている（Nuffield Foundation Report (2019)）

「無条件合格」や「条件付き合格」の悪用や「疑わしいインセンティブに基づく売り込みや誘導」
⇒別のコースであれば「無条件合格」にする等の提案
⇒奨学金を提示する（財政的な誘導）

学生局（Office for Students）によって大学への警告が出されている
（BBC News: 11/29/2018, The Guardian, BBC News: 9/19/2019）

ウィリアムソン教育大臣（当時）は、改革を通じて「不公平感を取り除く」と述べている
現行のpredicted gradeによる選抜で不利益を被っている生徒を救済する
⇒大学入学者選抜における公平性・公正性のあり方が注目された

スライド 14

シュワルツ報告による公平なアドミッションの原則

2004年9月：「高等教育への公平なアドミッション：グッド・プラクティスのすすめ」（‘Fair admission to higher education: recommendations for good practice’, 通称: シュワルツ報告）

原則1：公平なアドミッション・システムは，透明性が確保される必要がある
原則2：公平なアドミッション・システムは，各高等教育機関が志願者の学業成績と潜在能力の評価を通じて選抜される必要がある
原則3：公平なアドミッション・システムは，信頼性と妥当性の高い評価方法を開発する必要がある
原則4：公平なアドミッション・システムは，志願者にとっての障壁を最小限にする必要がある
原則5：公平なアドミッション・システムは，すべて専門家によって行なわれる必要があり，適切な組織構造とプロセスを基盤とするものでなければならない

シュワルツ報告が公表されて以降、イギリスの多くの大学では、中央アドミッション・オフィスが設置され、大学全体のアドミッション業務の統合がなされた

スライド 15

シュワルツ報告による公平なアドミッションの原則

2020年：イギリス大学協会（Universities UK）は、2004年に公表されたシュワルツ報告の再検討を目的として、「公平なアドミッション・レビュー報告」（Fair Admissions Review）を公表

大学アドミッションにおける「公平性」と「透明性」を確保するための8つの提言

1. シュワルツ報告における公平性や透明性に関する一連の提言から今回のレビューを通じて更新されたアドミッションの原則を遵守すること
2. 志願者の進学意欲を制限したり、コースの選択に悪影響を与えたりすることなく、アドミッションとオファーが学生の最善の利益のために行われるようにすること
3. 「社会・経済的等背景を考慮したアドミッション」（contextual admission）を推進する上での透明性の向上を含め、アドミッションの実践が、高等教育へのアクセスと参加の不平等に確実に対処すること
4. 志願者のアスピレーションを高める支援のための情報とガイダンスの透明性のレベルを改善すること

スライド 16

シュワルツ報告による公平なアドミッションの原則

2020年：イギリス大学協会（Universities UK）は、2004年に公表されたシュワルツ報告の再検討を目的として、「公平なアドミッション・レビュー報告」（Fair Admissions Review）を公表

大学アドミッションにおける「公平性」と「透明性」を確保するための8つの提言

5. 大学・カレッジ入学サービス機構（UCAS）は、アドミッションの公平性と透明性を向上させるために、一連の計画された改革を進める必要がある
6. 政府は、アドミッションの公平性と透明性をサポートしなければならない。
7. 高等教育セクターは、アドミッションに関わる主要課題と批判を特定し、対処するために、より積極的なアプローチをとる必要がある
8. 志願者は、試験/評価の結果が分かるまでオファーを受け取らない、「資格取得後のアドミッション」（PQA）モデルに基づく改革された大学入学システムをさらに検討する必要がある

スライド 17

「資格取得後のアドミッション」（PQA）システム導入の提案

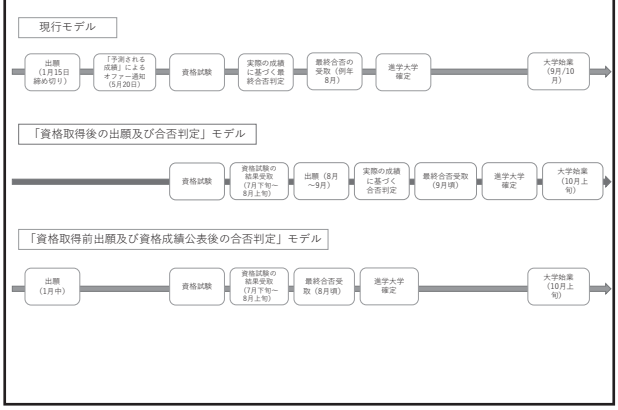
こうした現行の出願システムの課題を背景にPQA導入に向けた全国規模のコンサルテーションが実施された
コンサルテーション期間：2021年1月21日～5月13日
2つのPQAモデルの提案がなされた

モデル①：「資格取得後の出願及び合否判定」（post-qualification applications and offers）

モデル②：「資格取得前出願及び資格成績公表後の合否判定」（pre-qualification application with post-qualification offers and decisions）

どちらのモデルも資格試験の結果に基づく最終合否判定が行われる

スライド 18



スライド 19

PQAシステム導入によって期待される効果

高等教育へのアクセス拡大

社会的に不利な状況にある生徒が過小評価されることなく、実際の成績に基づいて出願することができ、アスピレーションや社会移動の向上へとつながることが期待される

進路選択の在り方

実際の成績によって自分の学力レベルに見合った大学へ出願することができる⇒ミスマッチの低減

一方で、モデル①では成績が出てから出願までの期間が短く、適切な情報収集ができるのかは、進路指導やガイダンスに頼らざるを得ない

スライド 20

PQAシステム導入によって期待される効果

大学入学者選抜の多様化への対応

モデル①:「資格取得後の出願及び合否判定」
⇒受験生＝実際の成績による出願と合否判定
⇒大学＝合否判定の時間が短く、事前にどの程度の入学希望者がいるのかが確認できない

モデル②:「資格取得前出願及び資格成績公表後の合否判定」
⇒資格試験以前に出願するため、どの程度の入学希望者がいるのかを早めに知ることができ、
最終合否判定が早く出せる(8月頃)
⇒資格試験の成績公表まで、他の出願書類の検討が可能(学力以外の学習成果の多面的・総
合的な評価＝多様な学生の受け入れ)

スライド 21

PQAをめぐるその後の展開

2022年2月24日:PQAのコンサルテーションの結果公表

その結果、今回の諮問の結果、教育省(DfE)は、PQAシステムの導入を断念することを決定

今回のレスポンスで示された主な理由や懸念
・資格試験の結果を従来よりも早く出さねければならなくなり、試験の評価に十分な時間を確保することができない(時間の確保)
・入学許可の決定プロセスの透明性を高める必要がある(透明性の向上)
・制度全体への影響が大きいため、慎重な検討が必要(制度改革の影響への懸念)

⇒制度改革よりも、今は「教育の立て直し」(educational recovery)及び「試験の立て直し」(exam recovery)が必要

スライド 22

PQAをめぐるその後の展開

引き続き、大学・カレッジ入学サービス機構(UCAS)とともに、
①システム全体の透明性の向上
②「無条件合格」(unconditional offer)の利用を制限
③多様な背景をもつ志願者のための公平性を確保するために、「志望理由書」(Personal Statement)の改善・見直しを進めていく

PQAシステムの導入は断念＝現行の「予測される成績」(Predicted Grade)による出願システムを維持することになった
⇒資格試験の日程や出願手続きの改善は、現時点では行なわれないことになった

スライド 23

まとめ:日本の大学入試の文脈への示唆

・採点期間について
イギリスでは、PQAシステムの導入の論議の中で、最低1ヶ月(最大3ヶ月)の採点期間が確保されている(現行のシステムで2ヶ月)

一方、日本では大学共通テストの採点期間は1週間程度、各大学での一般選抜においても約1週間と、非常に短期間での採点と合否判定が求められている

調査書や小論文を始めとする記述式問題の採点を含む、多面的・総合的な評価には、一定の採点期間の確保が必要

・シュワルツ報告の公平なアドミッションの原則5:
「公平なアドミッション・システムは,すべて専門家によって行なわれる必要があり,適切な組織構造とプロセスを基盤とするものでなければならない」

専門的な知識をもったアドミッション・オフィサーの育成と調査書や記述式問題の評価基準や評価方法の開発が求められる

スライド 24

ご清聴ありがとうございました。

九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門・准教授
花井渉
hanai.wataru.098@m.kyushu-u.ac.jp

九州大学

スライド1

第20回高大連携教育フォーラム　第二部特別分科会
2022年12月3日

フランスの高大接続システムと接続評価

細尾萌子（立命館大学）
hosoo@fc.ritsumei.ac.jp

1

スライド2

○問題意識（高校生時代）

・なぜ大学入試のための「受験勉強」をしないといけないの？

・ふだんの勉強をがんばるだけではなぜだめなの？

・「受験勉強」って意味あるの？

2

スライド3

○同志社高校：教科書をなぞるだけではない構造化された学び

・年号だけではなくて時代の特徴を全体的に捉える歴史の授業

⇔当時の大学入試（とくにセンター試験）では評価されない

→授業中に内職して受験勉強。教科書全頁丸覚え

3

スライド4

○受験勉強の報われなさ

・大学のレポートや発表は、受験勉強で覚えた知識だけではできない（むしろ、ほとんど使えなかった）

社会で必要とされる力
大学で必要とされる力
↕ つながりがわからない
入試で問われる力
↑
勉強 ― 意味あるの？　徒労感

4

スライド5

○日本の入試は妥当なのか？

・大学入試は高校で学ぶべきことを評価しているのか

・バラバラの知識を問うだけではなくて、知識をつなげる力も問うべきなのでは

⇒妥当性の問題：評価すべきことを評価しているか

5

スライド6

○知識をつなげる力をなぜ入試で問えない？

・信頼性（誰がいつ評価しても同じ結果になるか）を重視
公平性のために、100%の信頼性を求める文化。

・知識をつないで歴史の全体像を描けるかを問う試験では、信頼性は担保できない。評価のばらつきは不可避。それは不公平！

→客観テスト（選択肢問題など）
　細かな知識の習得度を問う試験

6

スライド 7

〇フランスの高校生は塾に行かない

・各大学の入試はない（志願者の振分はある）。

・高校終了時のバカロレア試験に合格すれば、基本的にどの大学にも入学できる。試験は論述中心。

・高校の授業をまじめに受けていれば合格できるので塾はない

7

スライド 8

・ふだんの勉強＝受験勉強なら、日本よりも安心して勉強できるのでは？　（妥当性の問題を解決？）

・論述試験で評価できるの？　（信頼性は？）

・なんでこんな制度が成り立っているの？

⇒フランスのバカロレア試験への関心
（国際バカロレアIBとは無関係なので注意）

8

スライド 9

（1）バカロレア試験制度

・6歳で就学する5年制の小学校、4年制の中学校、3年制の高校

・高校は、普通教育中心の普通科、職業教育中心の職業科、その中間的性格の技術科の三つ

・バカロレア試験は、高校の各科の教育内容に対応して実施
（普通科→普通バカロレア試験、技術科→技術バカロレア試験、職業科→職業バカロレア試験）

・どのバカロレアを取得しても無選抜で大学に入学できるが、入学者の多くは普通バカロレア取得者
（比率は普通：技術：職業が約5：2：3）

9

スライド 10

・大学はすべて国立。高等教育の学生の約5割。学士課程は3年

・バカロレア試験に合格しないと入れないので大学生は最低限の学力を身につけている。ただ、2021年の合格率は93.7%

・大学間に細かい序列はない（すべての職業に資格が必要な資格社会で、どの大学で取得した学位も価値は同じだから）

10

スライド 11

・バカロレア試験の評点の60%は全国一斉の試験（フランス語・筆記と口述、哲学・筆記、高校で履修した専門科目2科目・筆記と口述（一部科目は実技もあり））

・残りの40%は高校2年・3年での平常点評価（試験で受験した科目を除く必修教科と専門科目と選択科目の平均点）

←継続的な学習を促すため

11

スライド 12

（2）評価の妥当性をどう確保しているか

・多様なレベルの高校の教員を中心に、大学教員と協力して作問。
→平均的な生徒に期待できるレベルの、高校で学習した内容の習得度を評価する問題をつくるため

・1808年の試験創設当初は大学教員が作問していたが、高校の教育内容の範囲を超える知識を問う問題

・徐々に高校教員が作問に参加するように

12

スライド 13

バカロレア試験問題の例（2015年）

歴史・地理：月面着陸の写真とベトナム戦争反戦歌の歌詞という「二つの資料を分析し、1960年代末にアメリカが世界規模の大国になったことを示せ。この大国は、二つの資料ではどのように描かれているか」

→導入（問題提起）・展開1（アメリカの強さ：軍事・経済のハード・パワー）・展開2（強さ：科学技術のソフト・パワー）・展開3（弱さ：カウンター・カルチャーなど異議）・結論

13

スライド 14

バカロレア試験問題の例

英語：（都市化の影響を懸念するエディとベック二人の対話文について）「エディは結局、ベックと話すことに決めた。マンハッタンの未来に関する彼らの会話文を書きなさい」

数学：すべての自然数 n について、なぜ$u_{n+1}=0.75u_n+3000$になるかを説明せよ。

物理・化学：この加水分解で使われた酸の役割について仮説を立てよ。そして、この仮説を検証するための簡単な実験を提案せよ。

14

スライド 15

（2）評価の妥当性をどう確保しているか

・バカロレア試験では、資料を分析して問いや仮説を立てる力、資料からとりだした情報を比較・関連づけてまとめる力、それを既習の知識と結びつける力、それらを論理構成が一貫した文章で書く力が問われている。

15

スライド 16

・バカロレア試験における論述の型は大学の学習の基礎。

・実際、バカロレア試験の成績が高いほど、大学での学業成功の割合は高くなる。

・2016年大学入学者が規定の3年で修了する割合
バカロレア試験の点数が20点満点中10点以上12点未満・追試合格者だと8.3%だが、16点以上だと67.7%

16

スライド 17

○市民として育みたい力に向けた高大接続

社会で必要とされる力
大学で必要とされる力
（試験みたいに論述・議論できる大人が評価される）
⬆（つながってる）
バカロレア試験で問われる力
⬆
小中高の勉強（バカロレア試験で問われる力を段階的に育成）

17

スライド 18

（3）論述試験で接続ができる前提（信頼性の問題をどう解決？）

①作問・採点を行う高校教員の専門性への社会的信頼
・中等教員採用試験は論述中心
・高校教員は日々の実践でも論述の添削

②採点の観点・水準を調整するモデレーション
・採点規準の共有（答案に期待する要素、加点・減点する項目）
・採点結果の統計的調整

③バカロレア試験は資格試験で、点数が入学者選抜に使われることは基本的にないので、一点の違いにやきもきしない。

→100%の信頼性はなく、完全な公平ではないけど、測られるべきものが測られているし、結果は正当として受入れ（採点へのクレームは多くない。論述試験がなくなったこともなし）

18

スライド 19

（4）日本への示唆

・論述試験の採点者（高校教員の位置づけ）、高大接続の試験の性格、公平性についての考え方は日仏で大きく違う

→その議論抜きに単に論述試験だけ入試に導入しても無理

19

スライド 20

・そもそも、論述試験＝思考力を問える試験というわけではない
例）バカロレア試験の歴史・地理の「作文」は、知識の暗記を問う面が強い。
・作文の型は中学校から6年間練習しているので難しくない。
・出題される作文は、指導要領の章タイトルと同じか似た題のもの
→作文の型のなかに、授業で習った知識をはめこむだけで合格点

「作文を書くには思考しなくてもよい」（イレー・ド・シャルドネ高校のルサージュ教員、2018年2月7日に同高校でインタビュー）

20

スライド 21

国レベル・各大学でこれからやるべきこと

①将来の日本社会に向けてどういう人を育てたいかの議論

②①の準備学力として、大学新入生にどんな知識や思考力・表現力を求めるべきか、の議論

③ある程度の信頼性を担保しつつ、②を測れる試験方法の開発

＊入試に論述を導入する方法論だけ考えてもだめでは

21

スライド 22

〇出典

・細尾萌子・夏目達也・大場淳編著『フランスのバカロレアにみる論述型大学入試に向けた思考力・表現力の育成』ミネルヴァ書房、2020年。

・Ministère de l'Éducation nationale(2022), *Repères et références statistiques sur les enseignements, la formation et la recherche*.
（統計の出典はすべてこの文書）

22

特別分科会②【高大社連携キャリア教育】

高大社連携フューチャーセッション成果報告
～生徒・学生実行委員会によるサードステージを振り返る～

［報告者］　2022 年度高大社連携フューチャーセッション実行委員
［コーディネーター］　杉岡　秀紀（福知山公立大学 地域経営学部 准教授）
［コーディネーター］　乾　　明紀（京都橘大学 経済学部 准教授）
［オブザーバー］　滋野　哲秀（元 龍谷大学 文学部 教授）

2020 年以降、新型コロナウイルス感染症の拡大防止策として、教育現場ではオンライン授業の導入が進められてきた。この先の見えない時代の中で、今年度の高大社連携フューチャーセッション※（以下「ＦＳ」）も引き続き次代を担っていく高校生・大学生から構成される実行委員会形式を採用し、オンラインと対面を両方活用しながら当日までの企画づくりを行った。本分科会ではこの高大社連携ＦＳの生徒・学生実行委員会サードステージの成果を報告する。

※「高大社連携フューチャーセッション」とは、高校生・大学生のキャリア発達を目的とし、世代や学校の違いを超えて、未来志向で対話・交流する高大社連携キャリア教育プログラム。

概　略

当日はまずコーディネーターの杉岡氏より、生徒・学生実行委員会によるサードステージとなった 2022 年度の高大社連携ＦＳの概要紹介、動画や写真紹介、アンケート（参加者・実行委員会・所属高校教員）結果報告があった。とりわけ 2022 年度初めて取り組んだこととして、①対面によるオリエンテーションの実施、②模擬ＦＳの実施、③Ｔシャツの導入の３点が紹介された。

次に実行委員の４名（副実行委員長・私立大学３年、広報部長・公立大学２年、広報委員・公立高校１年、広報委員・私立高校１年）の登壇のもと「学生実行委員をやってみて身についた力はどんな力？」「企画から実行までやってみてぶつかった壁とは？　またそれをどう乗り越えた？」「ＦＳに参加してみて、結果としての自分（今の自分）と理想としての自分（未来の自分）に変化（ギャップ）はあった？」「来年度に向けて提案」の４項目について、パネラー間で活発な意見交換（パネルディスカッション）があった。

その後、会場参加者（フロア）との質疑応答があった後、最後にコーディネーターの乾氏、杉岡氏、オブザーバーの滋野氏の３名から講評があり、閉会した。

全体討論の内容

会場参加者の高校教員から１問だけ質問が寄せられた。質問内容は「今年の本ＦＳや企画・広報の意図（ミッション）を改めて説明してください」というものであり、副実行委員長の大学生

から回答を行った。

全体の総括としては、コーディネーターおよびオブザーバー教員からあった当日の講評の紹介に代えたい。

・実行委員として関わることで「自分はこうなんだと思う自分（結果としての自分)」と「こうなりたいと思う自分（未来としての自分)」という２つの自分ができたと思う。この２つの自分を創りながら歩むことがキャリア発達である。葛藤もあるだろうが、今後もこの２つの自分を創り続けていくことが大切。
・現代はＶＵＣＡ時代。そのような先が読めない難しい時代に生きているがゆえに、成長をしようと思うのであれば異質な人との交流が重要になる。ＦＳとはそのような交流機会の１つになっているのではないか。
・これからの学びは「越境」「楽習」「共感（エンパシー)」がキーワードであり、これは学校の中だけでは学べない。ＦＳの実行委員の経験を通して、この重要性や必要性を実感できたのではないか。

到達点と今後の課題

アンケートによれば、会場・オンライン共に 100％の満足度（満足・やや満足の合計）であった。また参加者からは「学生の皆さんの取り組みがよく分かった」「企画概要から見えない苦労や達成感などが感じられた」「実際に体験した高校生、大学生の声が聞けた」「大学生・高校生それぞれが、チーム内で起きていたことやその意味を、客観的かつ冷静に分析しながら振り返っておられるのが印象的だった。また、成果報告・リフレクションの場の進行方法も、大変勉強になった」とのコメント（定性評価）も頂いた。したがって、分科会に参加いただいた方の満足度は高かったと言える。

他方で、申し込みそのものは 40 名強あったにもかかわらず、当日参加者が 10 名弱であったことを考えると、ハイブリット開催とはいえ、キャリア教育企画の成果報告会を特別分科会とする企画そのもののニーズがどこまであるのか、いま一度検証が必要であることも事実である。この点については今後の課題としたい。

杉岡　秀紀（福知山公立大学 地域経営学部 准教授）

スライド1

2022年高大社連携
フューチャーセッション実行委員会
成果報告会

2022年12月10日
キャンパスプラザ京都

進行：杉岡　秀紀

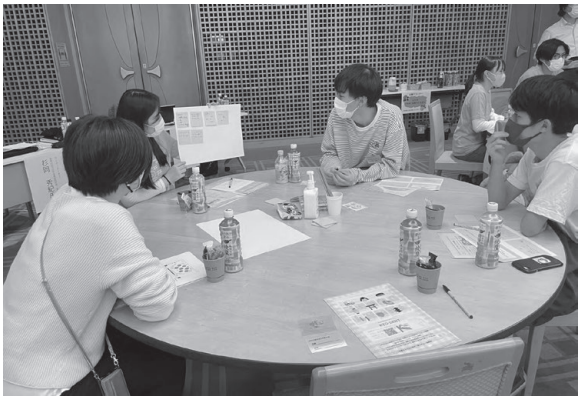
スライド2

当日のふりかえり
（写真・動画）

スライド3

スライド4

スライド5



スライド6

スライド 7

スライド 8

スライド 9

【今年初めて取り組んだこと】
①対面オリエンテーション
②模擬フューチャーセッション
③Tシャツの導入

※ ZoomやSlack活用、リサーチクエスチョンは昨年度より導入。

スライド 10

アンケート報告

スライド 11

参加者編

スライド 12

満足度

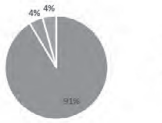
満足度	回答数	割合
満足	22	96%
やや満足	1	4%
どちらでもない	0	0%
やや不満	0	0%
不満	0	0%
合計	23	100%

満足度は「100%」

スライド 13

他者への推奨度

推奨度	回答数	割合
勧めたい	21	91%
やや勧めたい	1	4%
どちらでもない	1	4%
あまり勧めたくない	0	0%
勧めたくない	0	0%
未記入	0	0%
合計	23	100%



「96%が勧めたい」と回答

スライド 14

満足度理由

■満足

高校1年	普段考えることのない話題について様々な年代の方と意見交換をすることができて、とても有意義な時間でした。
高校2年	初参加してどういったイベントなのか全く分からない状況の中、かたくるしいものなのだろうかなど緊張と不安があったが、とても楽しい対話をすることができたから。
高校2年	・意見交換の仕方がよかった。 ・とても勉強になった。
大学1年	学べるものが多かった。
大学2年	ヤングケアラー当事者の方のお話を直接聞くことができたとともに、それに基づいて現実的な視点から他大学の学生や高校生と対話することで、思考としての経験を出すことができたから。
大学2年	ふうせんの会の方々のお話や講演など貴重なお話が聞けた。
大学2年	ヤングケアラーというなじみの無い題材に対して活動されているふうせんの会のみなさんの話を含め、考えを深められたから。
大学2年	ヤングケアラーについて深く学べたとともに、いろんな学生と意見交換ができ、様々な視点で考えることができてよかった。
大学2年	講演内容(テーマ)が今まで聞いたことのない話でそのテーマで色んな人と討話できたのでよかった。
大学2年	実行委員の方が上手く緊張をほぐし、有意義な話し合いができた。
大学2年	企画から運営まで、フューチャーセッションのすべてが経験となった。様々な意見を聞いて、幅広い視点と理解で社会問題について考えることができた。
大学2年	ヤングケアラーについて支援者の方々の視点から知ることができたため、日本人の心理作用、文化から見ても孤立しがちな今の家族に納得ができ、とても身近な問題に思えたから。そして、どこに問題があるのか、解決へのアプローチ方法を私なりに考えることができたから。
大学3年	様々な大学生と高校生と意見や考えを交わし、ヤングケアラーについての理解が深まり、充実したから。
大学3年	普段考えることのないヤングケアラー問題に触れ、考えを深めることができた。
大学3年	グループの人たちと映像(ないながら、社会問題について考えることができたから。
大学3年	同世代の人と共通の話題について話し合うことで、様々な考え方、ものの見方を知ることができた。
大学3年	実際にゲストの方がグループワークに参加してくださったことで、より理解が深まり、自身の疑問点を解消できた。
大学3年	ヤングケアラーについて知る大きなきっかけとなったから、世代を超えて話し合いができたから。
大学3年	他大学、高校生とヤングケアラーについて話し合うことができ、充実していたため、ふうせんの会の方の実体験を聞くことで具体的なケアラーの悩みが想像できたため、様々な立場の方どうなぎとることができ、とても勉強になったから。
大学3年	ヤングケアラーに対する理解を参加前より格段に深められたから。
大学3年	ゲスト講演の時間がたっぷりとあり、その後もグループワークに入る前に自分自身で考える時間があったので、ゆっくりと考えを整理することができました。休憩の回数も丁度良かったと思います。

多様なメンバーで対話ができたことが最大のポイント。

スライド 15

その他、感想や要望(次回取り上げて欲しい「テーマ」や「ゲスト」の希望、改善して欲しい点)など

高校1年	「ヤングケアラーが生きやすくするために」というテーマを希望します。これは実際何をしたらいいのか良く分からないのでもっと深めるためにやって欲しいです！
高校1年	改善点:テーマに関する提案のスケールをそろえるように指示してほしいです。(個人でできることなのか社会で変容させるべき点なのか) 次回希望するテーマ:LGBTQについて！
高校2年	つかう責任・つくる責任 大企業さんをゲストに 利益あるものがもっと主体的に社会を引っ張っていく必要があるのではないか。
高校2年	周りの大学生の方々、先生方、ふうせんの会さんのみなさんが抑っていることが本当に自分にとってとても良い刺激になりました。今後、自分もんに良い影響を与えられるような意見や考えをもてたらなーっと思います。ありがとうございました。
大学2年	ふうせんの会の方やヤングケアラーの方などに話し合いに参加してほしいと思った。
大学2年	スタッフの皆様、お疲れ様でした。ありがとうございました。
大学2年	文化についてのテーマ、京都の文化、地域住民の不満など
大学2年	様々な経験が得られた。今回の反省を含め、今後に活かしていきたい。
大学2年	高校授業で取り扱う知識上での政治経済と、実際に18歳になってから必要となる実践的な政治参加の乖離。(歴史を教わっても、今私たちが必要なのはどんな政党がどんな思想のもと、政策を上げていて、それが今の社会ではどのように働く可能性があるのか、教育基本法5条で特定の党派等の政治教育を禁止し、教育の政治的中立を確保している、これが起因して、多くの教師は政治・思想を深く取り扱うことが少ないと考えられるが、実用的な知識理解を持たずして選挙に参加してもどの政党に入れたらいいのか判断がつかない、責任ある選挙の全てが"自主性"に任されている。)しっかりした選択理由のある投票率を上げる理想と、そこまで至れない現実の予盾をどのように解決するか、検討したい。
大学3年	テーマ:「2世代」の特徴と価値観～現代の若者現状について知る～ ゲスト:大学の教授方など
大学3年	スタッフの方、先生方、ふうせんの会の方々、このような会を開いてくださり、ありがとうございました。今日参加してよかったです。
大学3年	椅子の位置的に、メモを取りながら発表者の方を向いて話を聞くことがしづらかったので、バインダーを貸してほしい。
大学3年	学生企業家について
大学3年	とても楽しかったです！
大学3年	テーマ:「シングルマザー・シングルファザー」
大学3年	実行委員みんな頑張りました！

スライド 16

参加して得た・気づき・学び

高校1年	ヤングケアラーという存在自体が知れ渡っていない、本当にこの会に参加するまで知らなかった。それにゲストの方の話を聞いてすごく新しいことを知れた気がした。
高校1年	今までのヤングケアラーというご認識が変わりました！特に、家庭内のサポートをケアラー、認定になるのですね。
高校2年	多く関わり、人間への対話がくらべられる機会と機能になる考えを深めるのは良いものだと思いました。1つのテーマに1人が1つ意見を出す(定義)ではなく、1つのテーマに対する考えを出して、理解、広い視野にて、そもなど人間というものが浮かび上がりました。
高校2年	私はヤングケアラーという言葉自体、学校やイディア、ポスターなどで知っていたのですが、実際どういう意味なのか、我ははどうなっているのか、ヤングケアラーについて本当にもんな知識を理解もありませんでした。だから今回学んだことは自分にとって新しいことばかりで、とても新鮮でした。問題になっているのかってまた周辺への方向を考えるけでも難しくて自分なんかに何かできるのか、変わるわけないるのに応えなければできるのか、なぜいろいろ考えなければならないことがあったけど、何が正しくて、何が間違っているのかはわからないと思いますが、私はヤングケアラーの人なにどのように対応するのが正解なのかはっきり知りたいと思います。でもの方々と同じ様に自分ができる身近なところからコツコツやるだけでも社会を変えられる一員となれるに変えて参加・参加していけたらいなと思います。
大学1年	グループを経験、たまに、新たな視点が得られた、話し合いて異なる意見があったので意義ある回と思はた。
大学1年	家庭内における負担の問題について、意見を出し合う場がありませんでした。
大学2年	ヤングケアラーという言葉は知っていましたが、どのような状況にある子どもがヤングケアラーと呼ばれるのかなどについて知ることができました。
大学2年	自分1人だけの狭い視野に考えがあるということがわかった。ヤングケアラーの定義の意味や今後に関する話し合いと意見のバランスなど知ることができました。ありがとうございました。
大学2年	ヤングケアラーというテーマでも様々な視点があるとわかった。将来が決まっていない分、可能性が多くあります。ヤングケアラーという言葉は知っていましたが、どのような状況にある子どもがヤングケアラーと呼ばれるのかなどについて知ることができました。
大学2年	ヤングケアラーの現状について具体的に知れたのがとても良かったです。今日まさかに初めてヤングケアラーについて聞くだけ、当事者の人に情報が深くような機会がいましょうと思いました。現実的なグループワークの経ぶれも感じることって各人なりの意見を聞くだけです。皆さんに考えに触れたのでよかったです。
大学2年	ヤングケアラーについてこれまで知らなかったが、身近な子に多い話しが複雑的に思い浮べなど、また、言葉だけで定義いたまうと、問題、本質を見つけていきようなと難しい問題だった。言葉を定義する一方と、個に合せるアプローチなど各角的な視点から見るところができた。また、広い範囲を定めることはです。実践的な話しがいとてもです。
大学2年	行政を動かすにはまだたくさん重要であるなければ、それだけの、支援団体や問題人の動きもまだなかなる。自分の周囲、自分のことを考える時間をとることができないヤングケアラーの方々を支援する為で自分を考えずのではなく、自分を成りすれ、また、ヤングケアラーの方々を支援する為で自分を考えずのではなく、自分を成りすれ、また、選択肢の幅を持める、ありすのではなく、相談しやすい環境や対策にしていって選択の幅をだける、見つけることができられるよう考えた。 将来自分がその立場に立つ、または身近な存在、立場になる可能性を十分に理解して、自分事に考える必要がある。
大学2年	教師は福祉のスペシャリストではないから、多くを求めて欲しくない →一番私しが行き着くのではと、現に実際の人とケアラーが、人と話による専門分野の方たちが学校問題への介入を望め、子どもたちに専門性を持った学校一手をして行ったり、ケアが必要なのではないか、(知識人を1家に使っていく必要がある) 親が原因でヤングケアラーの人ができる →しかしそこは、学習時間を入れていたのもあり、24時間学習の機会を保証するのもなる、それも福祉のある機やケアの方が生きるのコミュニケーション法(引き出し)を一度ご自に習ないて、まずはこと、学習にも集中できる、最も支援できるわけでもなく子どもの権利に配慮を保護のために子どもの権利を擁護できるのではないか、(権利には義務の点をアプローチなる可能性もある) 定義における教育的な問い →答えは出ない 「個人的ではないコミュニケーションが楽しい」で支援の場を設けられたくないという(ポジティブな感情が無下者(自分)の介入に配慮されてまうかでは？ →もしヤングケアラーの当事者などケアの状態が重度なら「個との(コミュニケーション)が楽しい」で支援の場を設けられたくないというポジティブな感情などと、ただただ楽しいというネガティブな感情になる、結果的のケアの人なら介入者をポケアにとられなく、だからいや、そのケアラーの精神状態や家庭状況、フォース変わる見ていきながら最小なのに入るまでやチーム全体で必要とあるだろう。
大学3年	ヤングケアラーについて、介護や家族者の方への自分なりの行なで、アルコール依存症やうつ病などの身体的な問題が行なくて、精神的なものまで、様々な問題があることを知り、理解が深まりました。
大学3年	・ヤングケアラーは全員が悪しくないわけではない →人ひとりの思い理解が必要 ・人任せではなく自分もしても配慮することが必要

スライド 17

大学3年	ヤングケアラーに当てはまる人が自分が考えているより多くて驚きました。事前にヤングケアラーの方をマンガにした「私だけ？年を取っているみたい」というのを読みましたが、本当にそういう状況があると助け深刻な問題でした。将来ヤングケアラーの子どもサポートできるような活動に関わりたいと思いました。
大学3年	ヤングケアラーを定義すべきか、という議論については、私は定義が必要だと思う。ヤングケアラーに限らず「困っている人を助ける」という文化はのすごいべきだと思うが、思い当代特有の「発達」「将来に向けての準備」「アイデンティティの確立」などの課題に、ケアをしながら向き合っていたためには、やはりその世代ごとの区分をして、対応していくことは大切だと思った。
大学3年	みんなで1つの問題について討論したさき、様々な意見を知ることができ、考えの幅が広がる。ヤングケアラーの認知をを回参加した私たちで広めていくことで、1人でもヤングケアラーのことが救われる機会の創出につながると思った。
大学3年	本日のフューチャーセッションに参加し、幾つこの大切さを改めて感じました。話し合いの中でしっかりと他の人の意見を聞くことで、新たな視点や考え方を得ることができました。また、"ヤングケアラーという1つの社会問題に同世代でこと、他の様々な問題に対して関心をもつきっかけになるのではないかと感じました。
大学3年	近年ヤングケアラーという言葉がメディアで取り上げられているが、子どもたちはなかなか自分がケアラーだと自覚することが難しい。小中高の先生がヤングケアラーに対してどれだけ理解できているのか気になった。ケアラーが相談できる場所の認知度を向上させることは、大学の使命の1つだと思う。制度面での支援だけでなく、周りの人が気付いあげることが第一だ。施設を行ったり自分にできることは何かを考えさせられた。介護施設の内部を開きのではなく、地域にもっと知ってもらうためにオープンにする。ヤングケアラーがかわいそうというイメージを持たないために定義を明確にすべきか否かが問題となった。教師の仕事の幅が大きくなってきたため、スクールソーシャルアーカーに依頼する。 義務教育の中でヤングケアラーの理解を深める必要あり。友達がケアラーの場合、授業のノートどりや課題を教えるといった些細なことから支えていく。 今回ふうせんの会の方とお話して、私の大学で行われるシンポジウムに都合が合えば参加していただけるとのことです。龍谷大学のモットーである「建一人取り残さない」を実現するには、大学がヤングケアラーについて認知を広めるべきだと思う。相談力が要えた。 日本人は助けてほしいと言うのが苦手。自立とは依存先(選択肢)を増やすこと。
大学3年	ヤングケアラーという言葉は最近よく聞くが、ヤングケアラーの存在自体は昔からいたということは知らなかった。このように私たちが知らない(分けて)間に悩み苦打ち明けられない問題を抱えている人たちが多くおそだたくさんいっらゃるかもしれないので、そういった人たちがSOSを出しやすい社会をつくっていく必要があると思った。
大学3年	まず、ふうせんの会の方々の講演の中での学びとしては、ヤングケアラーの約4割が、支援して欲しいことについて「特になし」と答えていたことです。また、これについて、グループワークの中でふうせんの会の山中さんにお話を伺うと、やはりヤングケアラー本人は支援を必要としていない場合でも、支援者から見たら、そのほとんどが支援が必要なケースなんだそうです。だからこそ、本人が「自分は支援を求めて良いヤングケアラーなんだと認識してもらえることが大事で、そのためには、ヤングケアラーの定義付けは急ぐべきなのかもしれません。しかし、私たちのグループでは、その定義を決める人は、当事者ではない周の偉い人であり、本当は支援を必要とする人々の中に、その定義から漏れてしまう人が出てくる可能性があるという指摘が挙りました。そして、むしろ定義付けしない方が、幅広く支援が届くのではという視点もあり、こうした意見は、グループワークをしたからこそ得られたものだったと思います。

スライド 18

ゲストの講評

西川ゆかり様、森田香陽様、山中業月様(特定非営利活動法人ふうせんの会 事務局)

運営の方たちの環境整備、運営があったからこその成果だと思います。参加者のほとんどが初対面のなか血気盛んなやり取りになるう、事前、当日、事後の準備お疲れ様でした。みなさんのお陰で、ヤングケアラーのこと、当会のことを聴いていただきやすかったのだと思います。本当にありがとうございました。

「ヤングケアラーを知る」とはどういうことなのか、みなさんと対話を重ねながら再確認したことや新たな発見がありました。

ヤングケアラーにとって、つらく苦しいと感じる環境でも、ポジティブ、ネガティブな気持ちはあるということ、ヤングケアラー自身の誇りについて知っていただけたのが有難かったです。

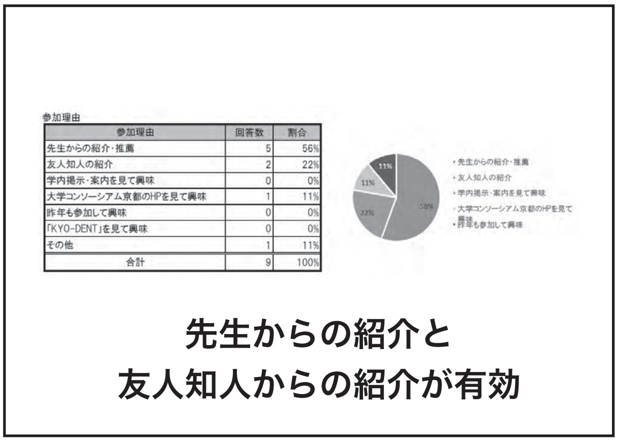
今後、皆さんがそれぞれの道に進まれる中で、制度・政策に関わることや、行政職員や現場で働く様々な立ちとの想いに触れると思います。そのような触れ合いのなかで、変えていてもらいたいことの一つに、「子どもたちの声を聞くということです。支援者からみて制度が必要だと判断しても、本人は「支援」を必要としていないことは多く、特に、対子どもに関しては、本人の意に反する支援をしたことで信頼関係が大きく変わり、その後の関係に影響することは多いと感じています。

ただ、緊急性、重大性の高い子どもの状況は常にそこにあります。法令に基づきどの様な支援が可能か？現在の法令に不備はないか？そのその本当の思いはどこにあるか、繰り返しにはなりますが、子どもたちの声をききながら、子どもの最善の利益を子どもたちと一緒に追求してほしいと思いました。

「子どもたちの声を聞く」ことの重要性

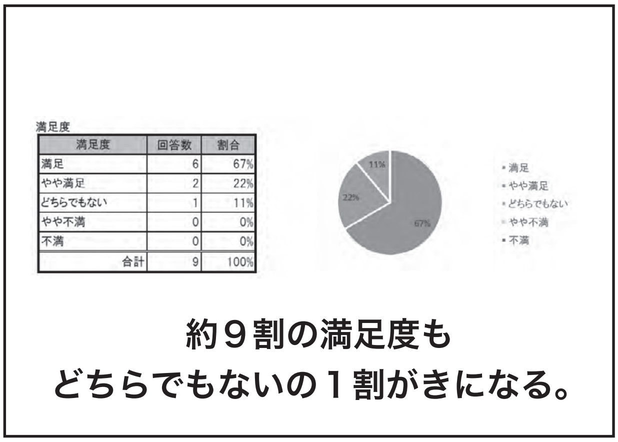
スライド 19

スライド 20



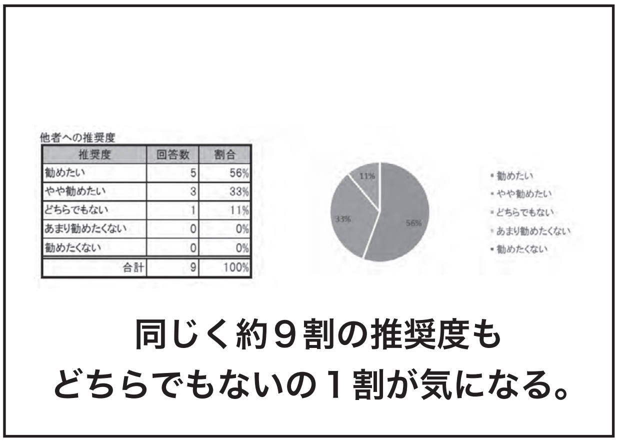
参加理由	回答数	割合
先生からの紹介・推薦	5	56%
友人知人の紹介	2	22%
学内掲示・案内を見て興味	0	0%
大学コンソーシアム京都のHPを見て興味	1	11%
昨年も参加して興味	0	0%
「KYO-DENT」を見て興味	0	0%
その他	1	11%
合計	9	100%

スライド 21



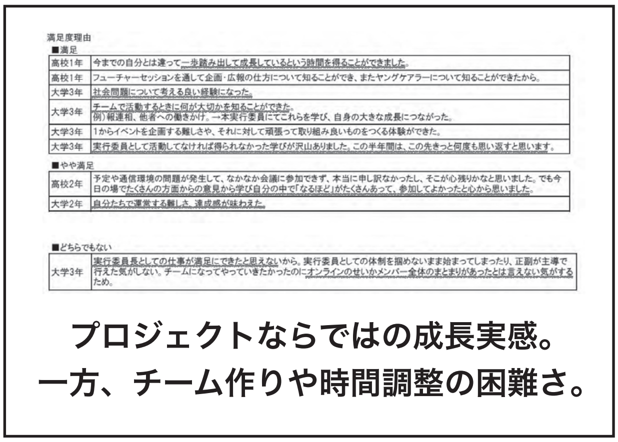
満足度	回答数	割合
満足	6	67%
やや満足	2	22%
どちらでもない	1	11%
やや不満	0	0%
不満	0	0%
合計	9	100%

スライド 22



推奨度	回答数	割合
勧めたい	5	56%
やや勧めたい	3	33%
どちらでもない	1	11%
あまり勧めたくない	0	0%
勧めたくない	0	0%
合計	9	100%

スライド 23

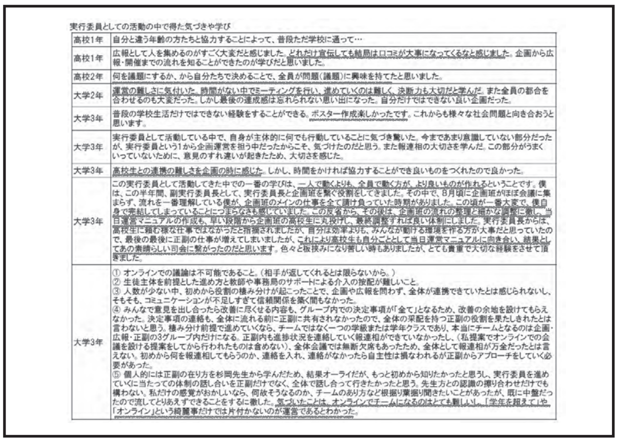


高校1年	今までの自分とは違って一歩踏み出して成長しているという時間を得ることができました。
高校1年	フューチャーセッションを通して企画・広報の仕方について知ることができ、またヤングケアラーについて知ることができたから。
大学3年	社会問題について考える良い経験になった。
大学3年	チームで活動するときに何が大切かを知ることができた。 例）報連相、他者への働きかけ。→本実行委員にてこれらを学び、自身の大きな成長につながった。
大学3年	1からイベントを企画する難しさや、それに対して頑張って取り組み良いものをつくる体験ができた。
大学3年	実行委員として活動してなければ得られなかった学びが沢山ありました。この半年間は、この先きっと何度も思い返すと思います。

高校2年	予定や通信環境の問題が発生して、なかなか会議に参加できず、本当に申し訳なかったし、そこが心残りかなと思いました。でも今日の場でたくさんの方面からの意見から学び自分の中で「なるほど」がたくさんあって、参加してよかったと心から思いました。
大学2年	自分たちで運営する難しさ、達成感が味わえた。

大学3年	実行委員長としての仕事が満足にできたと思えないから。実行委員としての体制を掴めないまま始まってしまったり、正副が主導で行えた気がしない。チームになってやっていきたかったのにオンラインのせいかメンバー全体のまとまりがあったとは言えない気がするため。

スライド 24



高校1年	自分と違う年齢の方たちと協力することによって、普段ただ学校に通って…
高校1年	広報として人を集めるのがすごく大変だと感じました。どれだけ宣伝しても結局は口コミが大事になってくるなと感じました。企画から広報・開催までの流れを知ることができたのが学びだと思いました。
高校2年	何を議題にするか、から自分たちで決めることで、全員が問題（議題）に興味を持てたと思いました。
大学2年	運営の難しさに気付いた。時間がない中でミーティングを行い、進めていくのは難しく、決断力も大切だと学んだ。また全員の都合を合わせるのも大変だった。しかし最後の達成感は忘れられない思い出になった。自分だけではできない良い企画だった。
大学3年	普段の学校生活だけではできない経験をすることができる。ポスター作成楽しかったです。これからも様々な社会問題と向き合おうと思います。
大学3年	実行委員として活動している中で、自身が主体的に何でも行動していることに気づき驚いた。今まであまり意識していない部分だったが、実行委員という1から企画運営を担う中だったからこそ、気づけたのだと思う。また報連相の大切さを学んだ。この部分がうまくいっていないために、意見のすれ違いが起きたため、大切さを感じた。
大学3年	高校生との連携の難しさを企画の時に感じた。しかし、時間をかければ協力することができ良いものをつくれたので良かった。
大学3年	この実行委員として活動してきた中での一番の学びは、一人で動くよりも、全員で動く方が、より良いものが作れるということです。僕は、この半年間、副実行委員長として、実行委員長と企画班を繋ぐ役割をしてきました。その中で、8月頃に企画班がほぼ会議に集まらず、流れを一番理解している僕が、企画班のメインの仕事を全て請け負っていた時期がありました。この頃が一番大変で、僕自身で完結してしまっていることにつまらなさも感じていました。この反省から、その後は、企画班の流れの整理と細かな調整に徹し、当日運営マニュアルの作成も、早い段階から企画班の高校生に丸投げし、最終調整すれば良い体制にしました。実行委員長からは、高校生に頼む様な仕事ではなかったと指摘されましたが、自分は効率よりも、みんなが動ける環境を作る方が大事だと思っていたので、最後の最後に正副の仕事が増えてしまいましたが、これにより高校生も自分ごととして当日運営マニュアルに向き合い、結果としてあの素晴らしい司会に繋がったのだと思います。色々と板挟みになり苦しい時もありましたが、とても貴重で大切な経験をさせて頂きました。
大学3年	① オンラインでの議論は不可能であること。（相手が返してくれるとは限らないから。） ② 生徒主体を前提とした進め方と教師や事務局のサポートによる介入の按配が難しいこと。 ③ 人数が少ない中、初めから役割の棲み分けが起こったことで、企画や広報を問わず、全体が連携できていたとは感じられないし、そもそも、コミュニケーションが不足しすぎて信頼関係を築く間もなかった。 ④ みんなで意見を出し合ったら改善に尽くせる内容も、グループ内での決定事項が「全て」となるため、改善の余地を設けてもらえなかった。決定事項の連絡も、全体に流れる前に正副に共有されなかったので、全体の采配を持つ正副の役割を果たしきれたとは言わないと思う。棲み分け前提で進めていくなら、チームではなく一つの学級または学年クラスであり、本当にチームとなるのは企画・広報・正副の3グループ内だけになる。正副内も進捗状況を連絡していく報連相ができていなかったし、（私提案でオンラインでの会議を設ける提案をしてから行われたものは含めない）、全体会議では無断欠席もあったため、全体として報連相が万全だったとは言えない。初めから何を報連相してもらうのか、連絡を入れ、連絡がなかったら自主性は損なわれるが正副からアプローチをしていく必要があった。 ⑤ 個人的には正副の在り方を杉岡先生から学んだため、結果オーライだが、もっと初めから知りたかったと思うし、実行委員を進めていくに当たっての体制の話し合いを正副だけでなく、全体で話し合って行きたかったと思う。先生方との認識の擦り合わせだけでも構わない。私だけの感覚がおかしいなら、何故そうなるのか、チームのあり方など根掘り葉掘り聞きたいことがあったが、既に中盤だったので流してとりあえずできることをするに徹した。気づいたことは、オンラインでチームになるのはとても難しいし、「学年を超えて」や「オンライン」という綺麗事だけでは片付かないのが運営であるとわかった。

スライド 25

（参考）
所属高校（教員）編

スライド 26

満足度

満足度	回答数	割合
満足	2	100%
やや満足	0	0%
どちらでもない	0	0%
やや不満	0	0%
不満	0	0%
合計	2	100%

スライド 27

他者への推奨度

推奨度	回答数	割合
勧めたい	2	100%
やや勧めたい	0	0%
どちらでもない	0	0%
あまり勧めたくない	0	0%
勧めたくない	0	0%
合計	2	100%

スライド 28

満足度理由

プロジェクト参加を通じ、生徒の主体性・積極性が増したため。

参加者が司会やグループをファシリデートする様子が、しっかりしていて驚きました。コンテンツを考えたり、世代を超えて交流できることに貴事業の尊さを感じます。

実行委員会参加時の生徒への期待

外部の方々と関わることでコミュニケーション力を高め、視野を広げてほしい

主体生、協働する力が育まれる。いろんな世代、人と出会い自分の世界を広げる。ということを期待しました。

参加当初と比較した生徒の変化や成長

プロジェクト参加を通じ、生徒の主体性・積極性が増した。10/4の授業で、クラス全員の前で講演内容や自分の分担について発表してもらったが、勉強じゃず前に立ち、自分の言葉でしっかり話すことができた。

授業でクラスメイトと協議する場面では、存在感を感じるようになりました。

今後の改善点・要望など

今年も大変お世話になりました。途中経過等も丁寧にメールで知らせてくださり、有り難かったです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

来年度も是非お声がけいただければと存じます。

その他、感想など

Tシャツを揃えるのがいいなと思いました。コミュニティへの当事者意識が生まれるのかなぁと推察します。オレンジにも意味を込めたのでしょうか。来年も参加できることを楽しみにしています。ありがとうございました。

スライド 29

パネルディスカッション

スライド 30

Q1.学生実行委員を
やってみて身についた
力はどんな力？

スライド 31

行動力

スライド 32

対応力

スライド 33

リーダーシップ
ファシリ力

スライド 34

自分を信じる力
根拠ない自信も大事

スライド 35

Q2.企画から実行までやって
みてぶつかった壁とは？
またそれをどう乗り越えた？

スライド 36

初めてリーダーシップ
を発揮したこと。
親の助言・伴走

スライド 37

高校生との時間調整

スライド 38

組織のあり方の役割分担
任せるリーダーシップ

スライド 39

集客の難しさ

スライド 40

Q3.FSに参加してみて、結果としての自分（今の自分）と理想としての自分（未来の自分）に変化（ギャップ）はありましたか？

スライド 41

フラットな立場で参加したかった。上下関係をどう乗り越えるか。

スライド 42

聴くことの重要性を知れた

スライド 43

発言できる人間に
なりたい

スライド 44

脱はずかり屋

スライド 45

Q４.来年度に向けた提案
があればお願いします。

スライド 46

集客をしっかりと

スライド 47

口コミの力
情報共有
リアルな関係づくり

スライド 48

良い雰囲気づくりの工夫
参加の場づくりの工夫

スライド 49

はじめの一歩を大切に。
MVPが重要。

スライド 50

質疑応答

スライド 51

Q.本フューチャーセッションや企画・広報の意図を改めて説明してください。

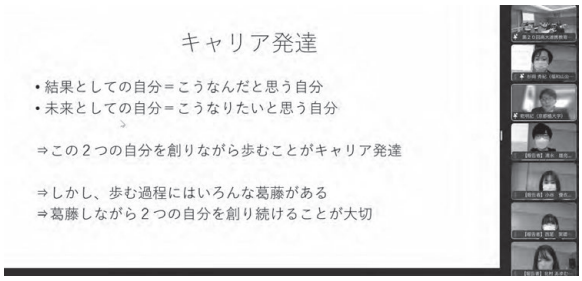
スライド 52

講評

スライド 53

乾先生

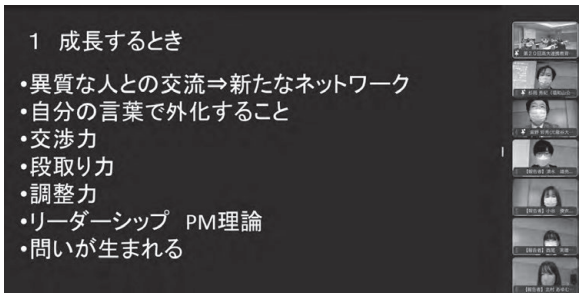
スライド 54



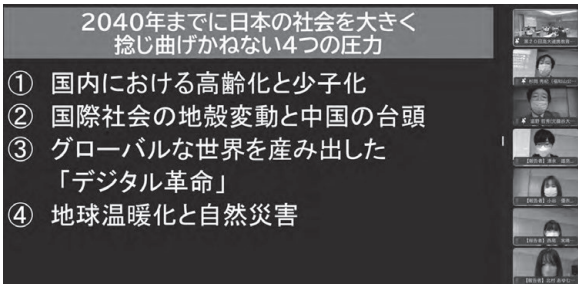
スライド 55

滋野先生

スライド 56



スライド 57



スライド 58

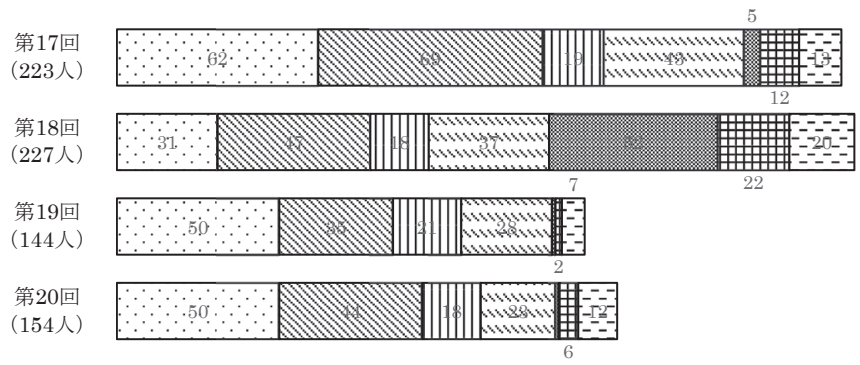
杉岡より

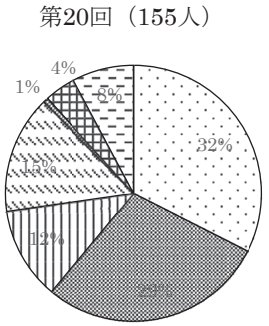
スライド 59

不確実な時代を生き抜くために
必要なスキルを越境から学ぶ
「楽」習機会
＋
思わず参加したくなる
エンパシー（共感）の仕掛け

第 20 回高大連携教育フォーラム　参加者アンケート結果

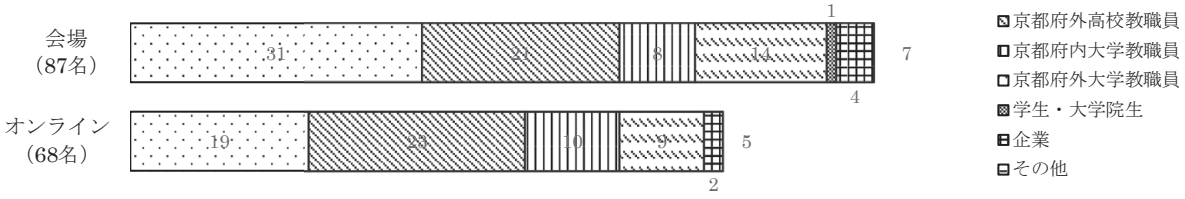
（1）参加者数及び内訳





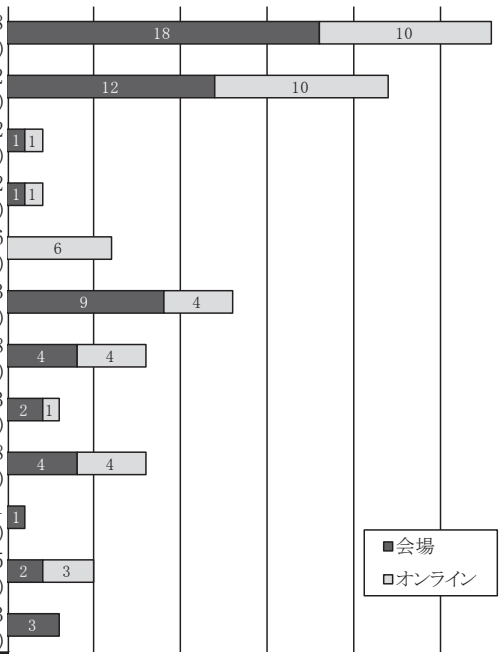
※第 18 回・第 19 回はオンライン開催、第 20 回はハイブリッド開催

◆第20回参加方法別



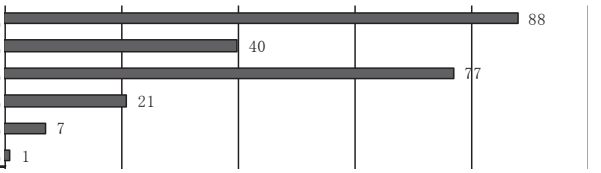
（2）回答数及び内訳

	参加方法別 会場	参加方法別 オンライン	全体
1.高校教員（京都）	18 (31.6%)	10 (22.7%)	28 (27.7%)
2.高校教員（京都府外）	12 (21.1%)	10 (22.7%)	22 (21.8%)
3.高校職員（京都）	1 (1.8%)	1 (2.3%)	2 (2.0%)
4.高校職員（京都府外）	1 (1.8%)	1 (2.3%)	2 (2.0%)
5.大学教員（京都）	0 (0.0%)	6 (13.6%)	6 (5.9%)
6.大学教員（京都府外）	9 (15.8%)	4 (9.1%)	13 (12.9%)
7.大学職員（京都）	4 (7.0%)	4 (9.1%)	8 (7.9%)
8.大学職員（京都府外）	2 (3.5%)	1 (2.3%)	3 (3.0%)
9.その他教育機関	4 (7.0%)	4 (9.1%)	8 (7.9%)
10.学生	1 (1.8%)	0 (0.0%)	1 (1.0%)
11.企業	2 (3.5%)	3 (6.8%)	5 (5.0%)
12.その他	3 (5.3%)	0 (0.0%)	3 (3.0%)
合計	57 (100.0%)	44 (100.0%)	101 (100.0%)



(3) 参加理由（複数回答可）

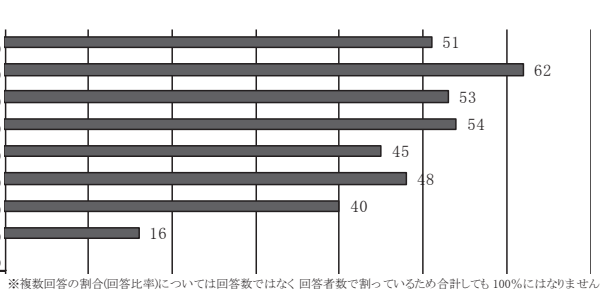
	回答数	比率
1.フォーラムの内容に興味があったから	88	87.1%
2.過去に参加したことがあったから	40	39.6%
3.高大連携・接続の情報を収集したいから	77	76.2%
4.スキルアップしたいから	21	20.8%
5.所属組織からの推薦があったから	7	6.9%
6.その他	1	1.0%
合計回答数	234	
合計回答者数	101	



※複数回答の割合(回答比率)については回答数ではなく 回答者数で割っているため 合計しても 100%にはなりません

(4) 興味があった内容の内訳（複数回答可）

	回答数	比率
a.メインテーマ	51	58.0%
b.記念講演1テーマ	62	70.5%
c.記念講演1登壇者	53	60.2%
d.記念講演2テーマ	54	61.4%
e.記念講演2登壇者	45	51.1%
f.パネルディスカッション	48	54.5%
g.分科会テーマ	40	45.5%
h.分科会 登壇者	16	18.2%
その他	0	0.0%
合計回答数	369	
合計回答者数	88	

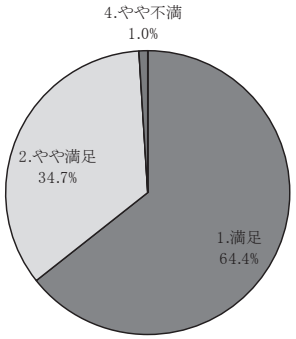


※複数回答の割合(回答比率)については回答数ではなく 回答者数で割っているため 合計しても 100%にはなりません

(5) 満足度

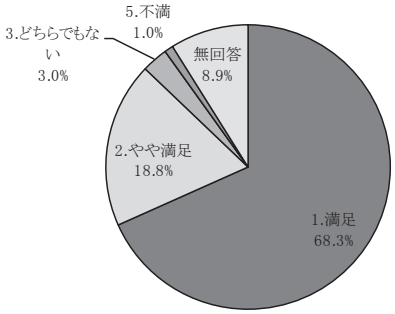
◆フォーラム全体

	参加方法別		全体
	会場	オンライン	
1.満足	43 (75.4%)	22 (50.0%)	65 (64.4%)
2.やや満足	13 (22.8%)	22 (50.0%)	35 (34.7%)
3.どちらでもない	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
4.やや不満	1 (1.8%)	0 (0.0%)	1 (1.0%)
5.不満	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
無回答	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計	57 (100.0%)	44 (100.0%)	101 (100.0%)



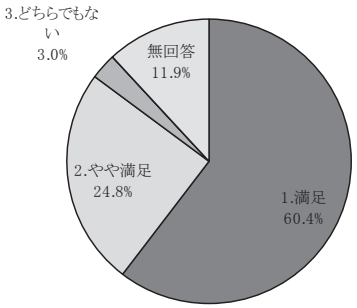
◆記念講演１

	参加方法別		全体
	会場	オンライン	
1.満足	47 (82.5%)	22 (50.0%)	69 (68.3%)
2.やや満足	5 (8.8%)	14 (31.8%)	19 (18.8%)
3.どちらでもない	2 (3.5%)	1 (2.3%)	3 (3.0%)
4.やや不満	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
5.不満	0 (0.0%)	1 (2.3%)	1 (1.0%)
無回答	3 (5.3%)	6 (13.6%)	9 (8.9%)
合計	57 (100.0%)	44 (100.0%)	101 (100.0%)



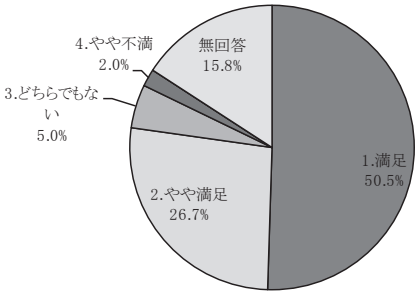
◆記念講演２

	参加方法別		全体
	会場	オンライン	
1.満足	39 (68.4%)	22 (50.0%)	61 (60.4%)
2.やや満足	13 (22.8%)	12 (27.3%)	25 (24.8%)
3.どちらでもない	2 (3.5%)	1 (2.3%)	3 (3.0%)
4.やや不満	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
5.不満	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
無回答	3 (5.3%)	9 (20.5%)	12 (11.9%)
合計	57 (100.0%)	44 (100.0%)	101 (100.0%)



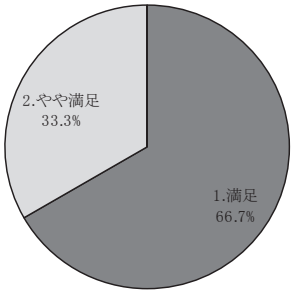
◆パネルディスカッション

	参加方法別		全体
	会場	オンライン	
1.満足	37 (64.9%)	14 (31.8%)	51 (50.5%)
2.やや満足	13 (22.8%)	14 (31.8%)	27 (26.7%)
3.どちらでもない	2 (3.5%)	3 (6.8%)	5 (5.0%)
4.やや不満	2 (3.5%)	0 (0.0%)	2 (2.0%)
5.不満	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
無回答	3 (5.3%)	13 (29.5%)	16 (15.8%)
合計	57 (100.0%)	44 (100.0%)	101 (100.0%)



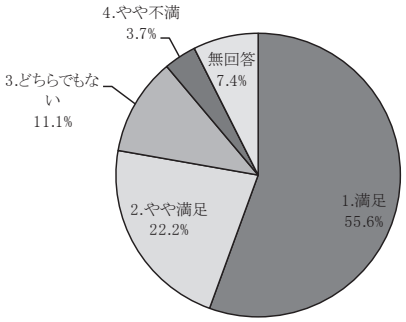
◆第１分科会

	参加方法別 会場	参加方法別 オンライン	全体
1.満足	3 (75.0%)	3 (60.0%)	6 (66.7%)
2.やや満足	1 (25.0%)	2 (40.0%)	3 (33.3%)
3.どちらでもない	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
4.やや不満	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
5.不満	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
無回答	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計	4 (100.0%)	5 (100.0%)	9 (100.0%)



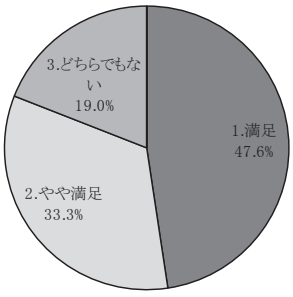
◆第２分科会

	参加方法別 会場	参加方法別 オンライン	全体
1.満足	11 (68.8%)	4 (36.4%)	15 (55.6%)
2.やや満足	2 (12.5%)	4 (36.4%)	6 (22.2%)
3.どちらでもない	2 (12.5%)	1 (9.1%)	3 (11.1%)
4.やや不満	1 (6.3%)	0 (0.0%)	1 (3.7%)
5.不満	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
無回答	0 (0.0%)	2 (18.2%)	2 (7.4%)
合計	16 (100.0%)	11 (100.0%)	27 (100.0%)



◆第３分科会

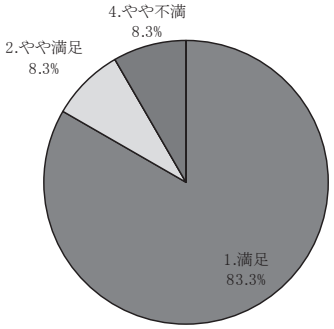
	参加方法別 会場	参加方法別 オンライン	全体
1.満足	6 (60.0%)	4 (36.4%)	10 (47.6%)
2.やや満足	2 (20.0%)	5 (45.5%)	7 (33.3%)
3.どちらでもない	2 (20.0%)	2 (18.2%)	4 (19.0%)
4.やや不満	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
5.不満	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
無回答	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計	10 (100.0%)	11 (100.0%)	21 (100.0%)



◆特別分科会①【高大接続】

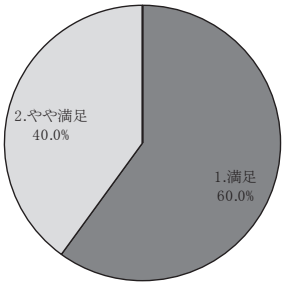
	参加方法別		全体
	会場	オンライン	
1.満足	10 (83.3%)	0 (−)	10 (83.3%)
2.やや満足	1 (8.3%)	0 (−)	1 (8.3%)
3.どちらでもない	0 (0.0%)	0 (−)	0 (0.0%)
4.やや不満	1 (8.3%)	0 (−)	1 (8.3%)
5.不満	0 (0.0%)	0 (−)	0 (0.0%)
無回答	0 (0.0%)	0 (−)	0 (0.0%)
合計	12 (100.0%)	0 (−)	12 (100.0%)

※会場参加のみの実施



◆特別分科会②【高大社連携キャリア教育】

	参加方法別		全体
	会場	オンライン	
1.満足	1 (50.0%)	2 (60.7%)	3 (60.0%)
2.やや満足	1 (50.0%)	1 (30.3%)	2 (40.0%)
3.どちらでもない	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
4.やや不満	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
5.不満	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計	2 (100.0%)	3 (100.0%)	5 (100.0%)



（６）ご感想やご希望、その他ご意見（抜粋）

フォーラム全体

・高大接続について、複数の現場の実践を踏まえた報告を聴くことができてよかった。それぞれの良し悪しについても今までの個人での情報収集より踏み込んだ話が聴けたと感じる。

・今後の教育活動に向けて大変モチベーションが上がった。

・府、市、私学を含め、京都の現状と課題が理解できました。それに留まらず、荒瀬先生、溝上先生のご講演やコメント、杉岡先生のファシリテートなどにより、全国や世界全体の中での京都を意識した、立体的な学びがありました。

・今回のフォーラムを通して高大連携の成果と課題、これから目指すべき姿を少し明確にすることができた。

・全体として教育行政と現場での取り組みとの「行き違い」や将来の可能性など、多様な論点を見出すことができた。

・学びが深かった。いろいろなワードが散りばめられており、さらに深めたいと思った。

・さまざまな事情がありつつ、前進する姿勢に刺激をいただきました。

・子どもたちが自分らしく生きるために、どのような条件整備が必要か、大変勉強になった。

・日頃の取り組みを客観的に見つめ直す機会になった。

記念講演１

・求められる観点について改めて整理できた。

・学習指導要領と令和答申の主旨が良く理解できた。特になぜキャリア教育がその実現のために必要なのかが、中央教育審議会での協議の文脈から興味深く聞かせてもらいました。

・自律した学習者に育てるべきだという言葉が重かったです。

・令和の日本型学校教育の答申について、基本的な内容は理解していたつもりでしたが、荒瀬先生の力強いメッセージに、たくさんの刺激をいただきました。

・キャリア教育、キャリア発達、個別最適な学び、自己調整能力、自己肯定感などご説明される中で、教育に期待されることの本質的な意味を教えていただきました。

・令和答申について分かりやすく解説していただけた。「小さな大人」など、日頃の学生への向き合い方を考えさせられた。

・中央教育審議会の答申をしっかり読み込んだことがなく、勉強になったこと、またこれからの討論の土台となる提起を多くいただいた。

記念講演２

・データの面でも、実感の面でもよく分かる、すぐに生徒たちに還元したい内容だった。

・どのような能力が社会に必要かよく分かった。

・経年的な研究の成果をデータとして示していただき、高校での学びをいかに進めていくべきか、またすべきでないかについて新たな知見を得ることができました。経験的、直感的にそうではないかと感じて来たこと、実証的に示していただき、明日から使える考えを示唆していただきました。

・高校時代までの教育が非常に大切である、ということだと思いました。そのことを科学的にデータで説明されたのが、難しくもあり興味深くもあり、あっという間の講演でした。

・資質・能力の育成を時空間の拡張と結び付けて考えるなど、新たな視点をいただきました。さまざまな情報提供も役立てたいと思います。

・データに基づいていて、説得力のあるお話だった。高校教員としては大学進学者のみだったので、もっと幅広い層のデータを知りたいです。

・広い視野と豊富な知見からなる話が聞けました。

パネルディスカッション

・府立、市立、私立の高大連携のそれぞれのアプローチを聞くことができどのように考えているのかよく分かった。専門家の視点からの指摘もあり、これからの高校教育の在り方を問い直す良い機会となった。

・公立、市立、私立それぞれの取り組みを知ることができた。登壇者の話は分かりやすく、なるほどと思うことばかりでした。

・三校の取り組みはいずれも興味深く、高校における改革が相当進んでいることに驚いた。「総合的な探究の時間」について、大学も知らないといけないと感じた。荒瀬先生の選択の壁や単位数を減らすアイデアに共感できた。

・多様な立場からの意見や思い、考えを、登壇者の言葉で話を聞く機会となった。

・三者三様のご発表でしたが、荒瀬先生もおっしゃっていたとおり、これぞ京都ならではと思いました。大学も含めて、高大の連携に向けて、対話を重ね続けていくことは本当に大切だと思いました。

・京都からの発信という提言と本音も窺える内容で良かったです。

・これからの教育活動に向けて、ヒントになるお話がたくさんあった。

第 1 分科会

・ただの実践報告に終始せず、継続・発展の意義と工夫について、大学側・高校側双方の視点からご報告いただけた点。お二方とも、率直なお話しぶりで、この実践について良く報告しようという飾り気を感じさせなかった点が非常によかった。大変参考になった。

・西舞鶴高校と舞鶴水産実験所の連携について聞き、実体験の大切さ、探究の進め方、他教科との連携など、学ぶことが多くあった。

・同じ地域の高校の実践を聞くことができて刺激を受けた。管理職や校務担当者が変わる中、学校として揺らがずに大事に継続してきた高大連携には価値があるなと感じた。

第 2 分科会

・学生による発表が良かった。特に高校時代の探究に対してのコメントが参考になりました。

・受験のある学校の探究活動について初めて知ることができた。またデータだけでなく生の学生の声を聞くことができた。

・発表した大学生の中に「探究が嫌いだった」という学生がいたことで、探究の意味を考えるよいきっかけをいただけたように思います。

・探究がドはまりした生徒とそうでもない生徒の両方のお話が聞けて楽しかったです。

第 3 分科会

・問いの立て方について一定の理解を得られた。

・探究の課題内容や運営の参考になった。

・問い重ねのイメージを持てました。さらに知りたいと思いました。

・新しい知識が得られて満足。

特別分科会①【高大接続】

・高大の問題が、社会全体の問題として、捉えるかを考えさせられました。

・多くを勉強させていただきました。

・諸用があり、少し様子を見させていただいただけになりましたが、資料の内容だけでも満足できるものでした。

特別分科会②【高大社連携キャリア教育】

・実際に体験した高校生、大学生の声が聞けた。

・大学生・高校生それぞれが、チーム内で起きていたことやその意味を、客観的かつ冷静に分析しながら振り返っておられるのが印象的でした。また、成果報告・リフレクションの場の進行方法も、大変勉強になりました。

・企画概要から見えない苦労や達成感などが感じられた。

・生徒・学生の皆さんの取り組みがよく分かった。

２０２２年度　京都高大連携研究協議会　役員・委員一覧

■役員会

会長	黒　坂　　光	（大学コンソーシアム京都 理事長/京都産業大学 学長）
副会長	前　川　明　範	（京都府教育委員会 教育長）
副会長	稲　田　新　吾	（京都市教育委員会 教育長）
	佐々井　宏　平	（京都府私立中学高等学校連合会 会長/京都先端科学大学附属中学校高等学校 校長 ）
	増　田　　恒	（京都府立高等学校長会 会長/京都府立桃山高等学校 校長）
	本　谷　　一	（京都市立高等学校長会 会長/京都市立日吉ケ丘高等学校 校長）
	初　田　泰　宏	（京都府私立中学高等学校連合会 副会長/京都文教中学校・高等学校 校長）
	鈴　鹿　且　久	（京都商工会議所 常議員/株式会社聖護院八ツ橋總本店 代表取締役社長）
	森　井　秀　樹	（京都文教短期大学 学長）

■運営委員会

委員長	林　　信　康	（京都府私立中学高等学校連合会 理事/京都女子中学校・高等学校 校長）
	水　口　博　史	（京都府教育庁 指導部 高校教育課 首席総括指導主事）
	小　野　恭　裕	（京都市教育委員会 指導部 学校指導課 首席指導主事）
	牛　田　豊　嗣	（高等学校コンソーシアム京都 事務局長）
	福　家　崇　明	（京都府私立中学高等学校連合会 理事/京都産業大学附属中学校・高等学校 校長 ）
	長谷川　　豊	（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長/京都府立大学 公共政策学部 准教授）
	廣　川　智　貴	（大学コンソーシアム京都 教育開発事業部長/大谷大学 教育推進室 副室長）
	伊勢戸　　康	（大学コンソーシアム京都 事務局長）

■事務局

井　上　　実	（京都府教育庁 指導部 高校教育課 指導主事）
加　藤　　健	（京都市教育委員会 指導部 学校指導課 指導主事）
滝　本　順　之	（京都市教育委員会 指導部 学校指導課 指導主事）
室　　保　次	（京都府私立中学高等学校連合会 事務局長）
荻　野　達　也	（京都商工会議所 事務局長）
公益財団法人大学コンソーシアム京都 教育開発事業部	

※2022 年度の京都高大連携研究協議会事業の企画・検討は、以下に付託する。

◇高大連携推進室

室長	長 谷 川　　豊	（京都府立大学 公共政策学部 准教授）
	乾　　明　紀	（京都橘大学 経済学部 准教授）
	滋　野　哲　秀	（元 龍谷大学 文学部 教授）
	杉　岡　秀　紀	（福知山公立大学 地域経営学部 准教授）
	細　尾　萌　子	（立命館大学 文学部 准教授）
	山　本　以和子	（京都工芸繊維大学 工芸科学部 教授）

第 20 回高大連携教育フォーラム

2020 年代を通じて実現すべき高大連携
―生徒・学生が『持続可能な社会の創り手』となるために―

報告集

2023 年 3 月発行

京都高大連携研究協議会

京都府教育委員会／京都市教育委員会／京都府私立中学高等学校連合会
京都商工会議所／公益財団法人 大学コンソーシアム京都

第20回 高大連携教育フォーラム